

图196 中島A遺跡K・L地区VI層出土遺物実測図・拓影1 (66、70~72、82、83 1:4、他1:3)

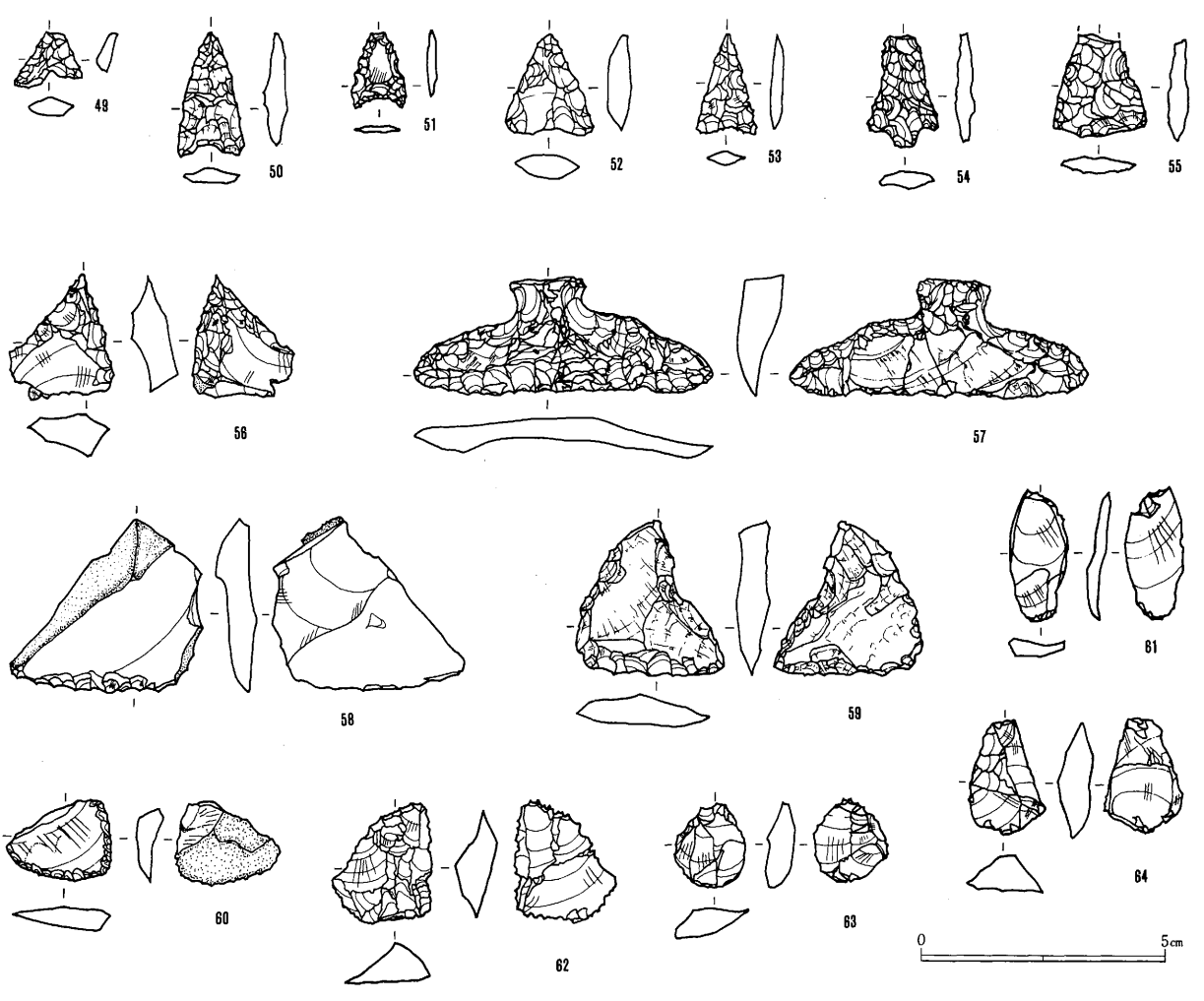
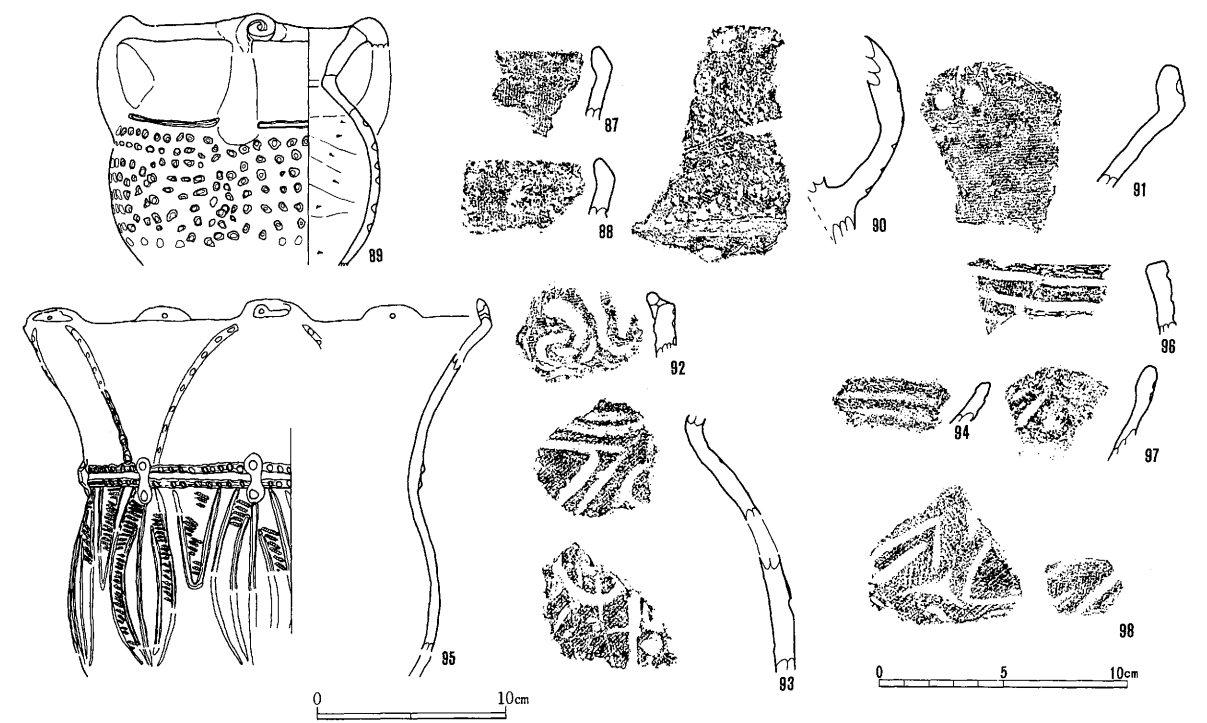


图197 中島A遺跡K・L地区VI層出土遺物実測図・拓影2

(89、95 1 : 4、87~98 1 : 3、49~64 2 : 3)

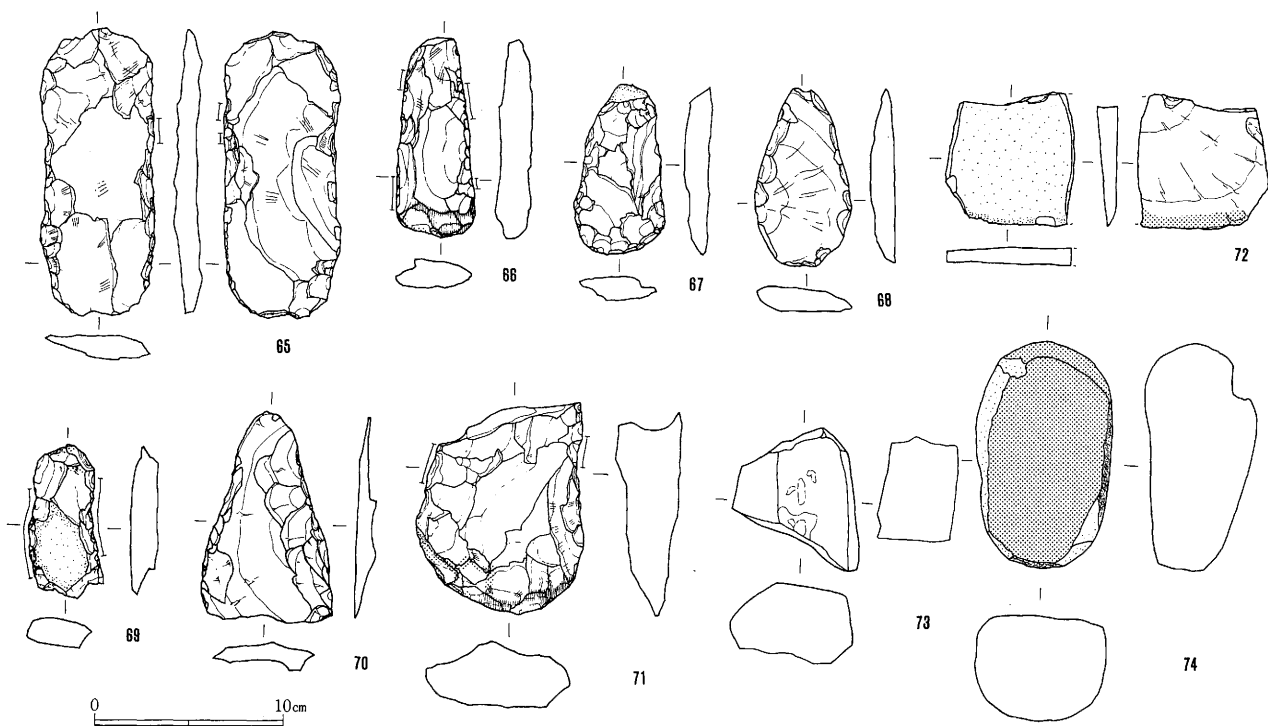


图198 中島A遺跡K・L地区VI層出土遺物実測図3 (1:4)

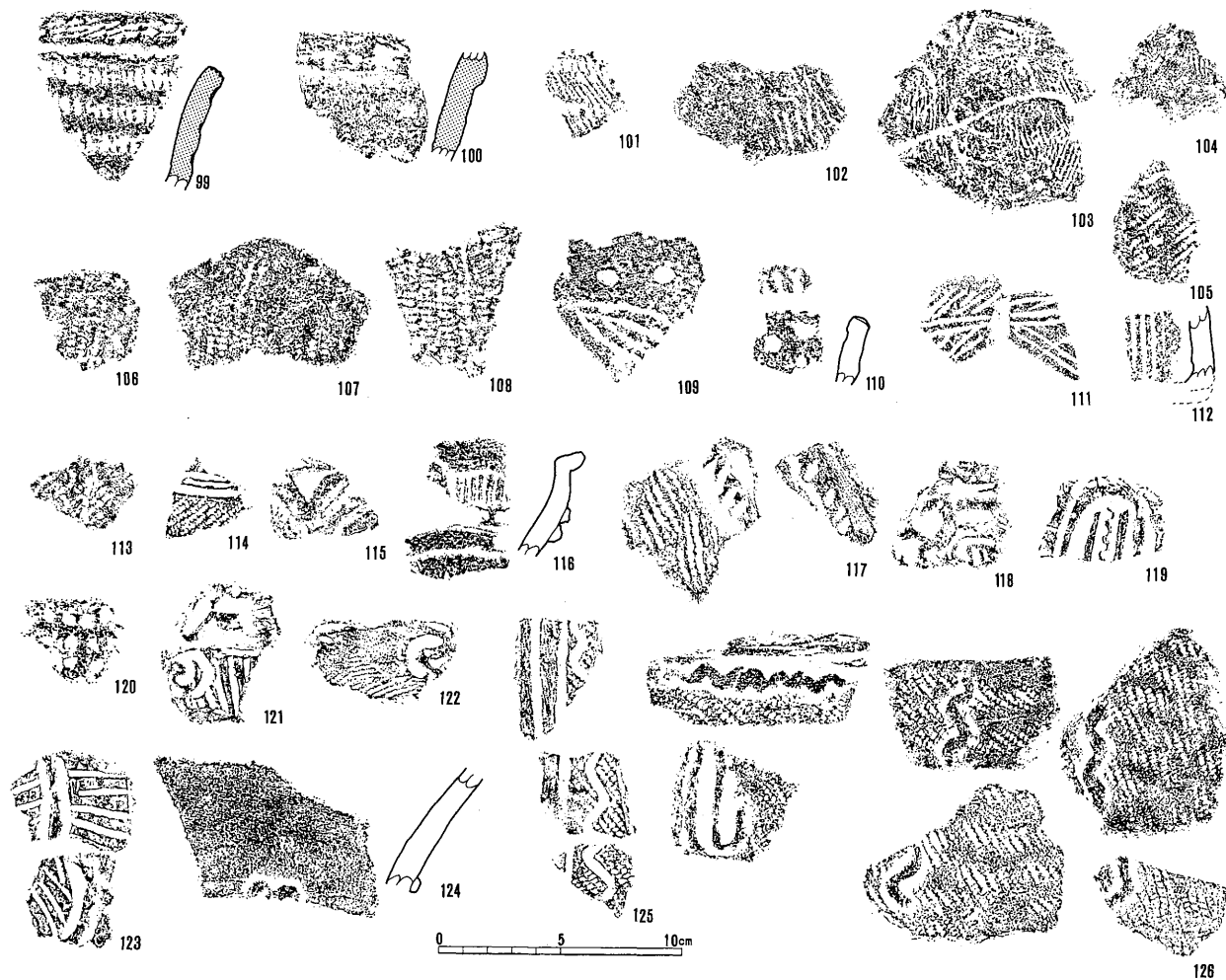


图199 中島A遺跡K・L地区I~IV層出土遺物拓影1 (1:3)

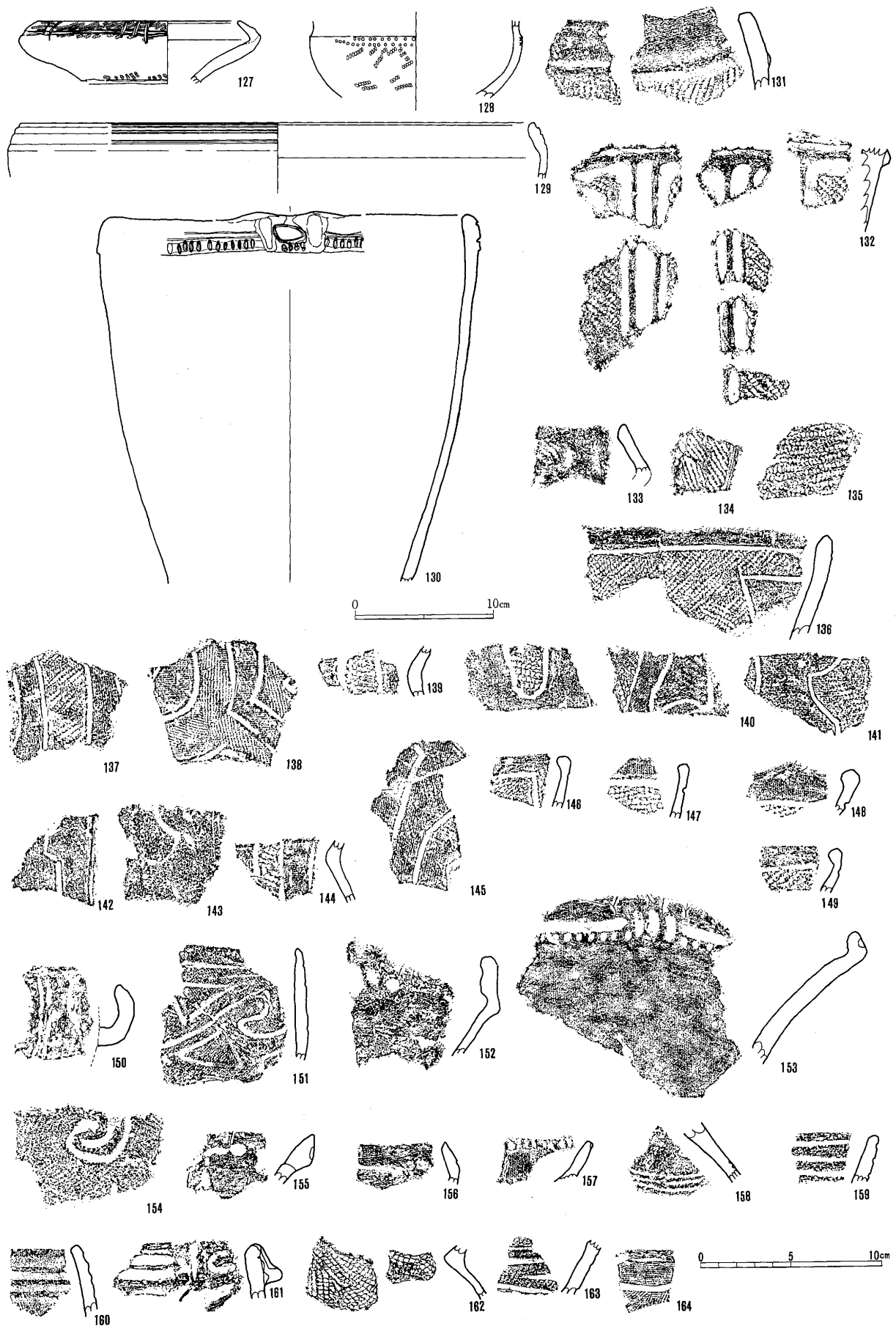


图200 中島A遺跡K・L地区I~IV層出土遺物実測図・拓影2 (127~130 1:4、131~164 1:3)

(6) K・L地区 縄文時代晩期末葉前後の遺構と遺物

① 遺物出土状況(図202~204)

断層崖下に堆積したV層中位以上からは、縄文時代晩期末葉前後の遺物が大量に出土した。V層及び遺物の分布は、比高差のある断層崖斜面を中心にしており、低湿地東南側縁辺のゆるい斜面にも広がるが、低湿地の北西～西～南側縁辺には全くない。断層崖上のP地区は一定の広さをもつ、安定した平坦面だが、土壌化が進んでおらず現耕土以外に遺物を含む層がない。恐らくは縄文時代末期においてもわずかな表土層が存在しただけであろう。居住域として必ずしも不適当だったとは言いきれないが、断層崖下出土遺物が本来は断層崖上にあつて何らかの理由で崖下にまとめて転落したということは、考えられない。遺物は当初より断層崖斜面に残されていたと考えるべきで、V層中位以上の成立と併行して断層崖斜面に置かれたか投棄されたと解せられる。遺物のうち土器には完形品が1点もない。発掘時に完形に近い個体が1点も発見されなかったことからみて、破損品だけが残されていたと思われる。少量ながら発見された大形破片も、特別な出土状況を示さない。出土量の多い石器のうち、小形の石鏃やピエス・エスキューには完形品は少なくないが、打製石斧には少なく、打製石斧の加工途中に生じた小剥片が多量に残される。これらの遺物のあり方や包含層のあり方からみて、この場に廃棄されたものと解するのが自然であろう。

V層出土遺物の分布をグリッド単位にまとめたのが図202である。IV層に流出した遺物の一部が含まれている可能性があるものの、土器、石器ともいくつかグルーピングできるので、そのまとまりをブロックと呼びたい。ブロックは5ヶ所に分かれており、1号～5号ブロックとする。1号～3号ブロックはVa層の範囲に従って遺物が分布しており、4号ブロックはVa・Vb層の広がりに従っている。5号ブロックはV層の分布域外だが、VI層上面に遺物が集中しているので同じ性格を有するブロックの1つと解した。各ブロックの広がり末端は重なりあっている。

包含層出土遺物の接合例は少なくないが、その多くは同一ブロック内での接合である。ブロックを越えた接合資料を中心に動きの大きな例を図203に示した。ブロック以外との接合例は、ブロックからの流出遺物との接合である可能性が高い。またわずかながら、低湿地反対斜面との接合例があるが、その解釈は難しい。ブロック間の接合例は、ブロックが一列に並んでいるため一直線を描くことになるが、さほど多くはない。一単位の廃棄物の一部が異なるブロックに分かれる場合が稀にあったものと解されるが、一方でブロックの同時性の証明にもなるだろう。

ブロックが遺物廃棄の結果生じたとし、廃棄行為は特に祭祀等に伴うのではなく日常生活の中で行われたとするなら、ブロックは継続的な廃棄行為の所産であると考えられる。1回の廃棄行為の単位とその繰り返しとを捉えた例は貝塚に

ある〔岡村道雄1983〕が、本遺跡のブロックでは、そのような1回の廃棄行為の単位を捉えることはできなかった。ブロック出土遺物の一括性は、最小単位が捉えきれない以上、一定の時間幅をもつとせざるを得ない上、早期～晩期前葉の土器が若干ながらも混入するため、一定の時間幅の中でも純粹性を保証しきれな

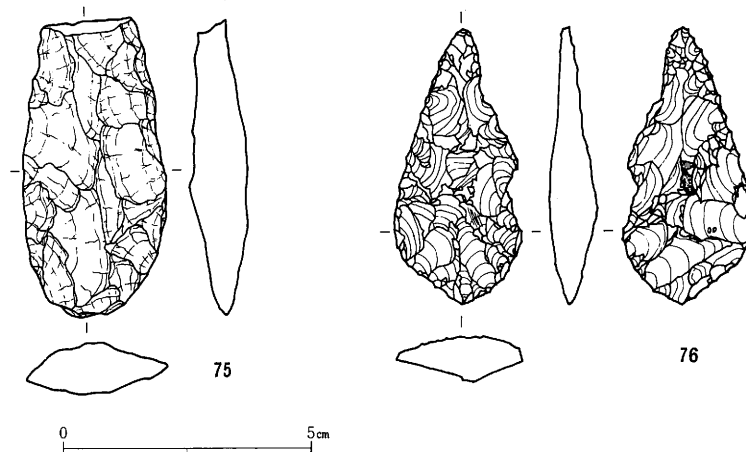


図201 中島A遺跡縄文時代草創期の遺物実測図(2:3)

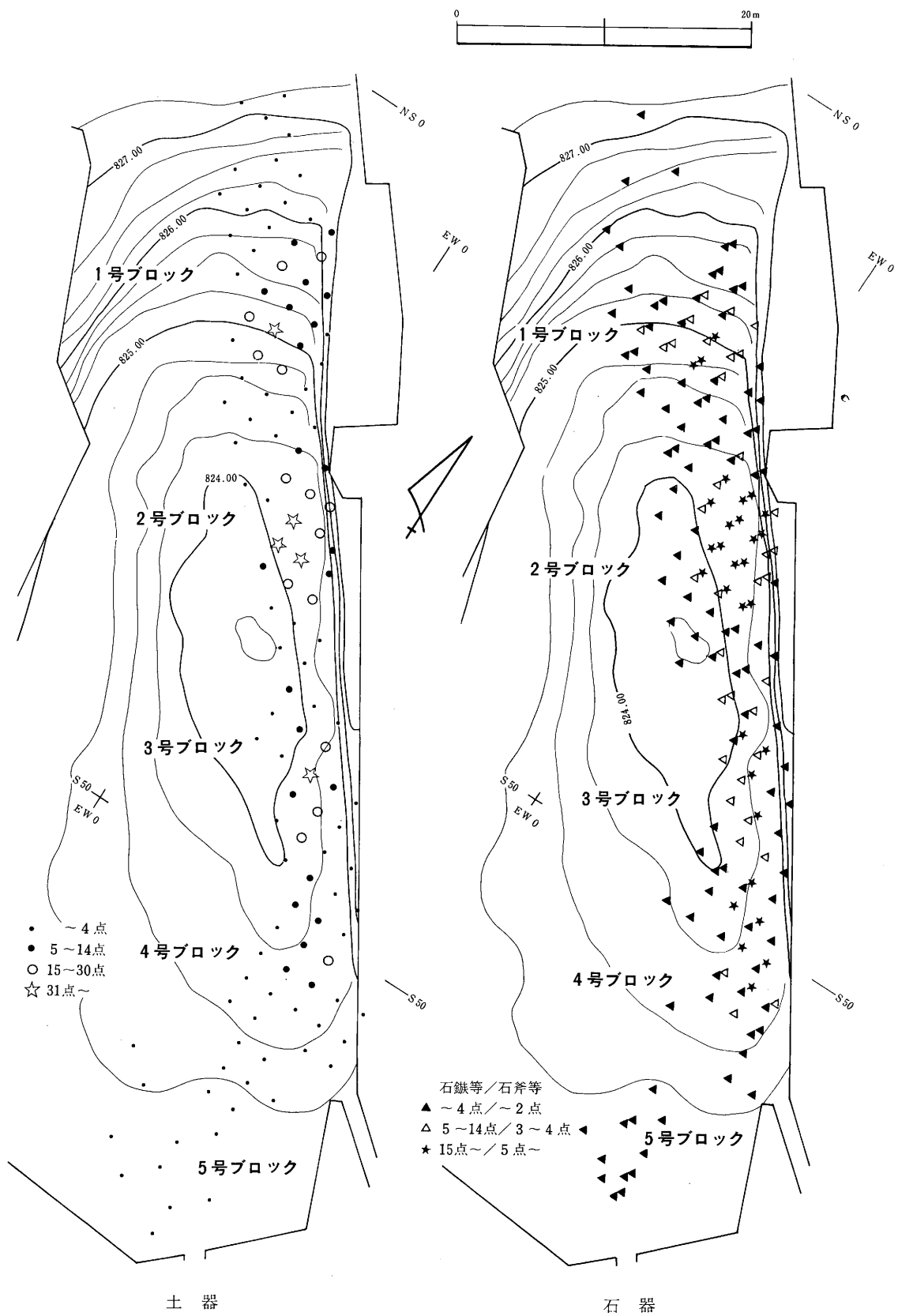


図202 中島A遺跡K・L地区V層遺物分布図 (1:400)

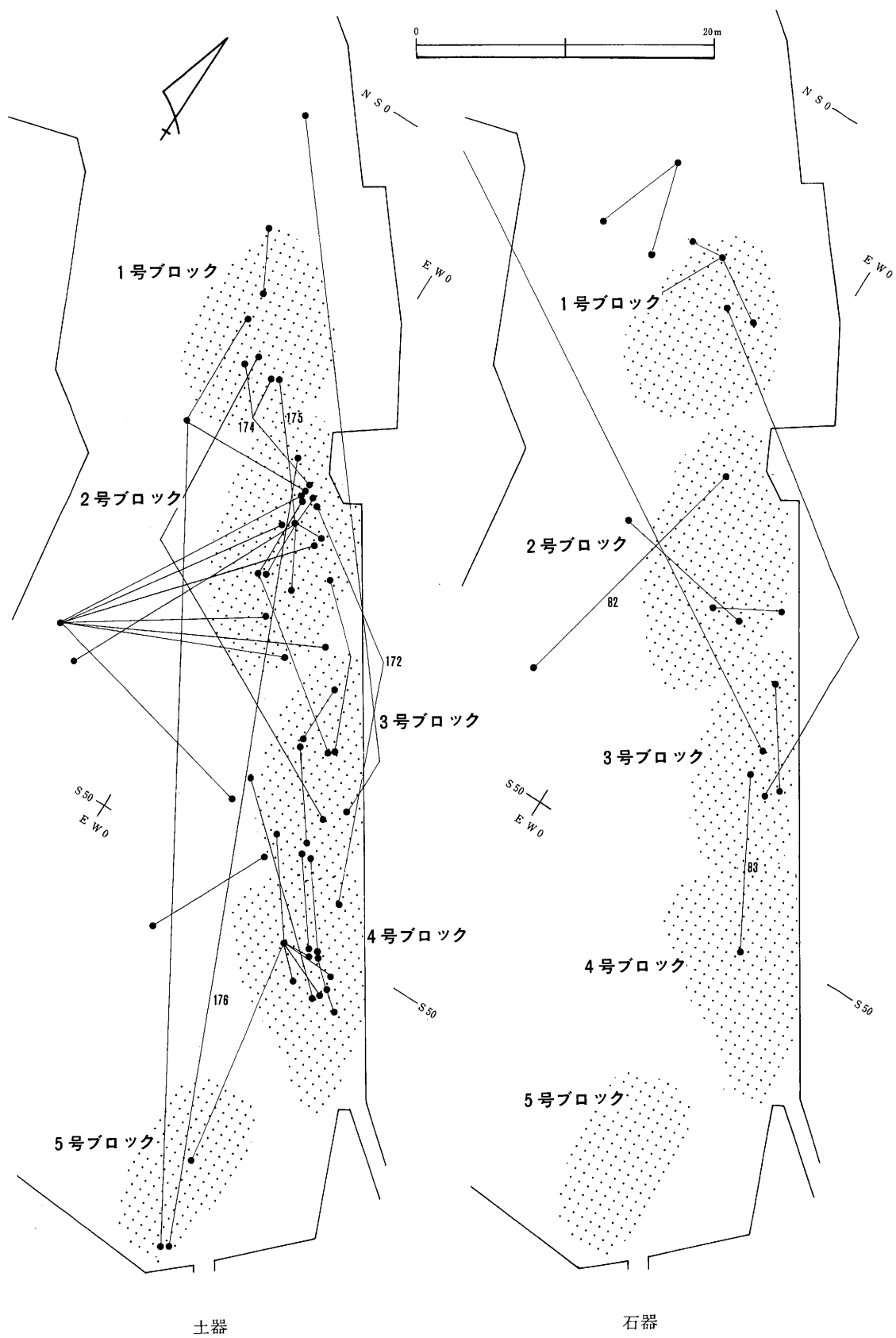


図203 中島A遺跡K・L地区V層遺物接合図 (1 : 400)

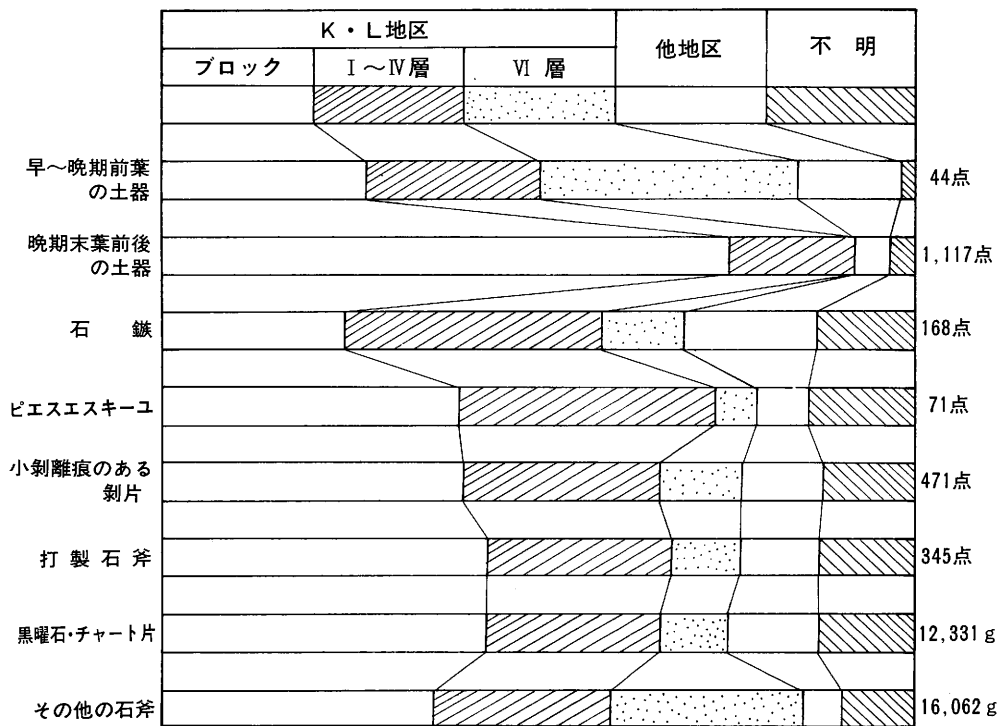


図204 中島A遺跡地区・層別にみた遺物出土量

い。ブロックの時間幅については、後述する土器の検討により、土器2型式分程度の幅であることが想定される(P323参照)。土器は形式的検討によりほぼ純粋な資料を抽出できるが、石器については既述した石槍の一部が除外できるだけである。ブロック内から出土した早期～晩期前半の土器の口縁部破片は12点で、ブロック出土土器の1.4%に当たり、明らかな混入資料として除外し、既に記述した。石器にも同程度の割合で混入資料が含まれていることが推定されるので、98.6%程度の純粋性があると理解したい。ところで本遺跡出土遺物全体の中に占めるブロック出土遺物の割合を、主要な種類について比較してみる(図204)と、土器はブロック出土品の割合が高く、石器はほぼ一様だが石鏃のみブロック出土品が少ない傾向が知られる。

石器・石片の多くも本来は土器に近い割合でブロックに帰属していたものと考えられる。ただ、石鏃についてはK・L地区I～IV層及び他地区出土品の割合がずいぶん高い。大久保B遺跡や柳海途遺跡では遊離資料として石鏃が多数発見されたが、本遺跡でも同様ではなかろうか。その存在理由を特定することはできないが、ブロック出土の石鏃中にも他の種類の遺物以上に遊離資料が混入している可能性を考えておきたい。

土器・石器の組成は、どのブロックでも近似しているが、1号及び5号ブロックはやや様相を異にする部分がある。

ブロックが廃棄場ならば有機質の道具や容器、食糧残滓等と一緒に廃棄されている可能性が高い。それらの発見が期待され、また注意もしたのだが全く検出できなかった。遺存条件が不十分であったのだろうか。

② 遺物のブロック

ア. 1号ブロック(図206～209)

断層崖の北端にあたり、断層崖斜面から低湿地北西縁辺の急斜面にかけて分布するブロックである。北西側斜面からの土砂の押し出しが強いためか低湿地北西寄りには幅が狭く、傾斜も強い。ブロックは厚さが

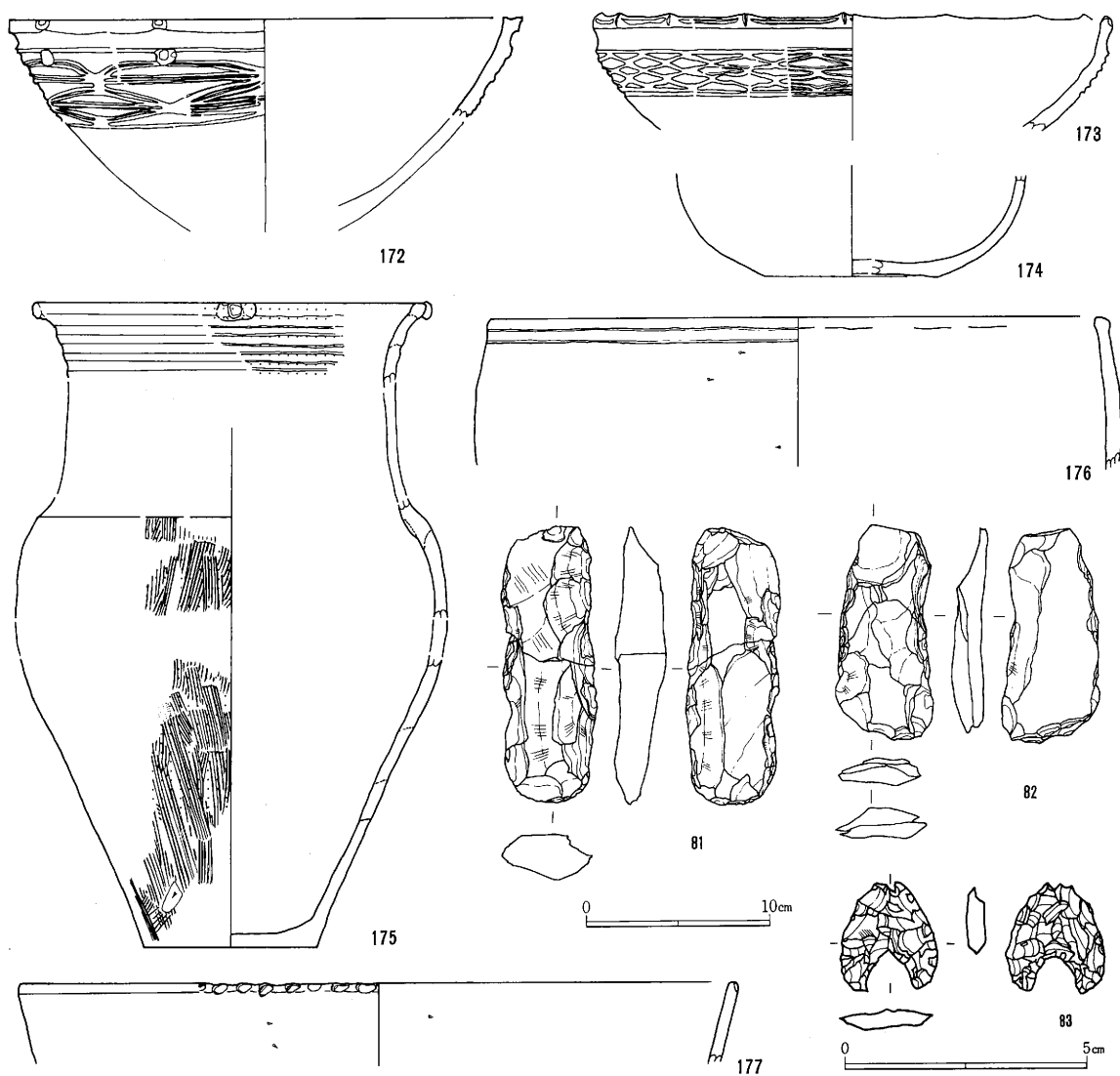


図205 中島A遺跡K・L地区ブロック間の接合遺物実測図 (172~177, 81, 82 1:4、83 2:3)

40cm程度あり、低湿地の中央付近にまで広がっている。出土遺物量は2号ブロックに次いで多い。

遺物には土器・石器・土製品（土偶）・石製品（玉）がある。土偶や玉は本遺跡ではわずかしか出土していないが、大半がこのブロックで得られた。土器は非在地的なグループを漏れなく含んでいる。石器の組成では、黒曜石・チャートを用いる器種やそれらの剥片・石核・原石などが全般的に少なく、その代わり打製石斧やそれと同石質の剥片が多い。

イ. 2号ブロック (図210~215)

断層崖の中央、断層の比高差が最も大きい場所に位置する。ブロックの厚みは30~40cm程度あり、広がりは他のブロックと差はないが、出土遺物量は最も多い。密度が濃いといえるだろう。1号及び3号ブロックとの境界は比較的明瞭に指摘できる。

遺物には土器・石器・土製品（土偶）がある。土器には非在地的なグループがすべて含まれており、在地的土器の中でも特異な器種（舟形土器）が入っている。石器は各器種がそろっているが、特殊磨石1点は混入品であろう。土器・石器とも組成は、ブロック出土遺物を総合した組成にほぼ一致しており、本遺跡のあり方を代表するようなブロックである。

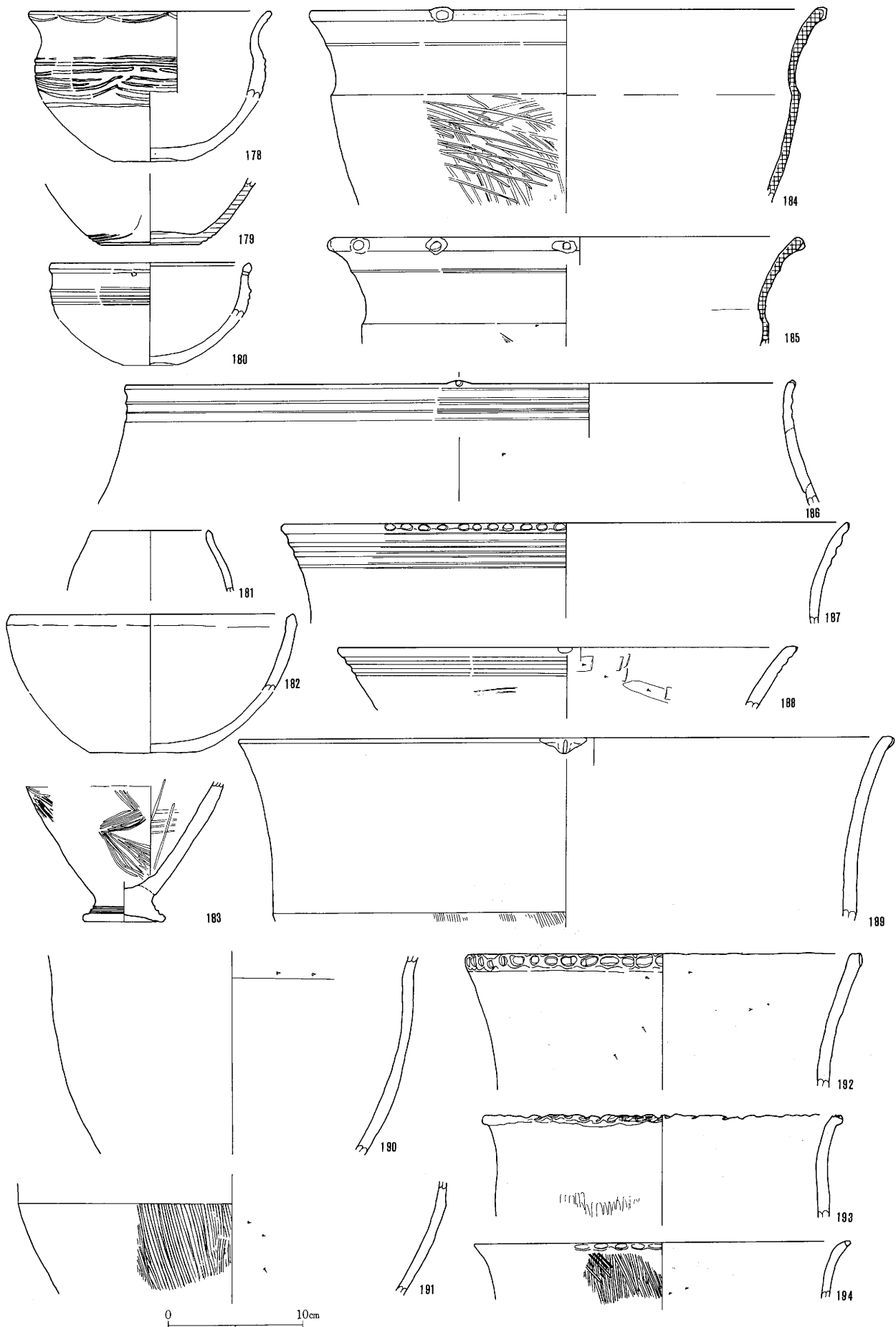


図206 中島A遺跡1号ブロック出土遺物実測図1 (1:4)

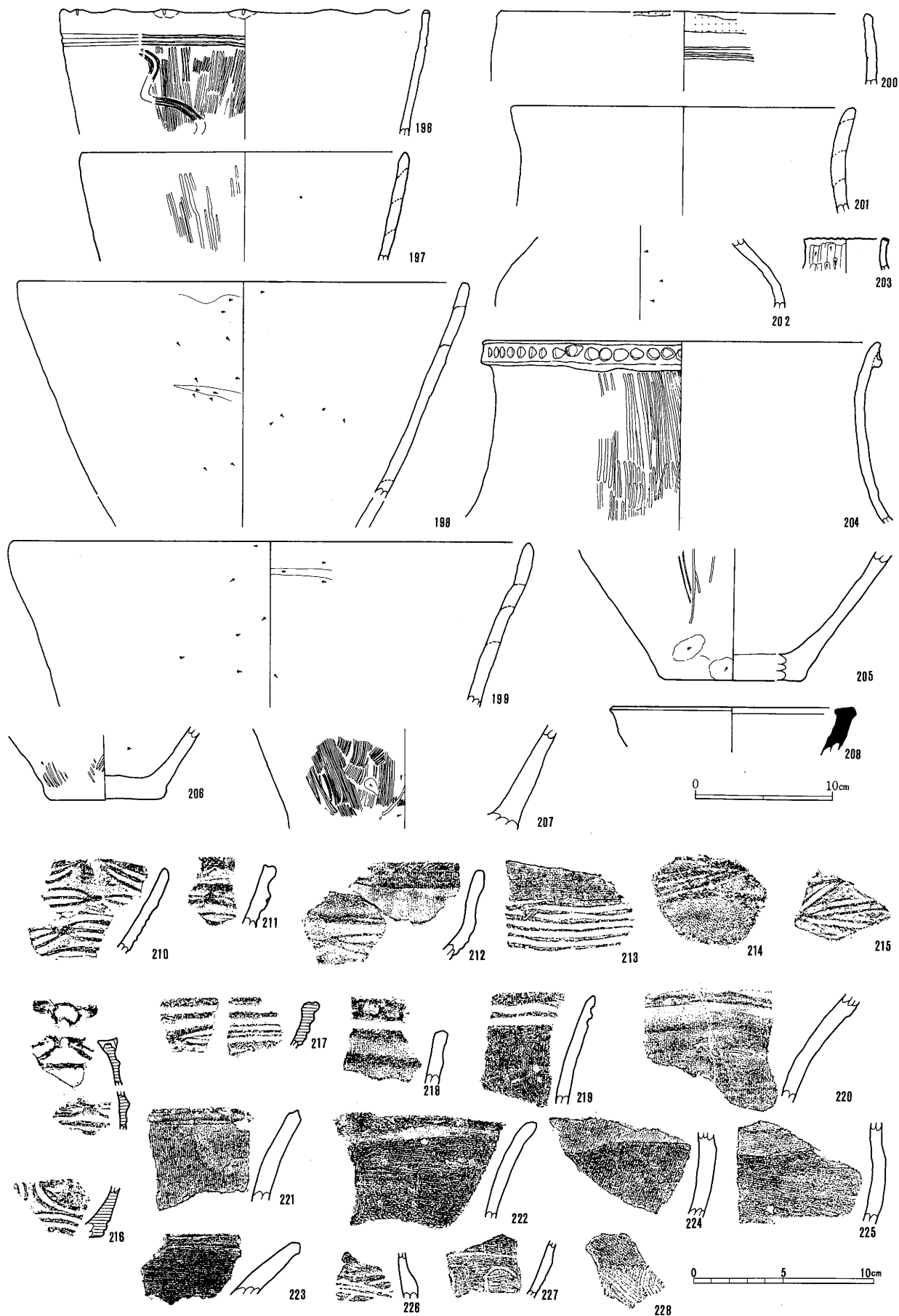


図207 中島A遺跡1号ブロック出土遺物実測図・拓影2 (196~208、1 : 4、210~228、1 : 3)

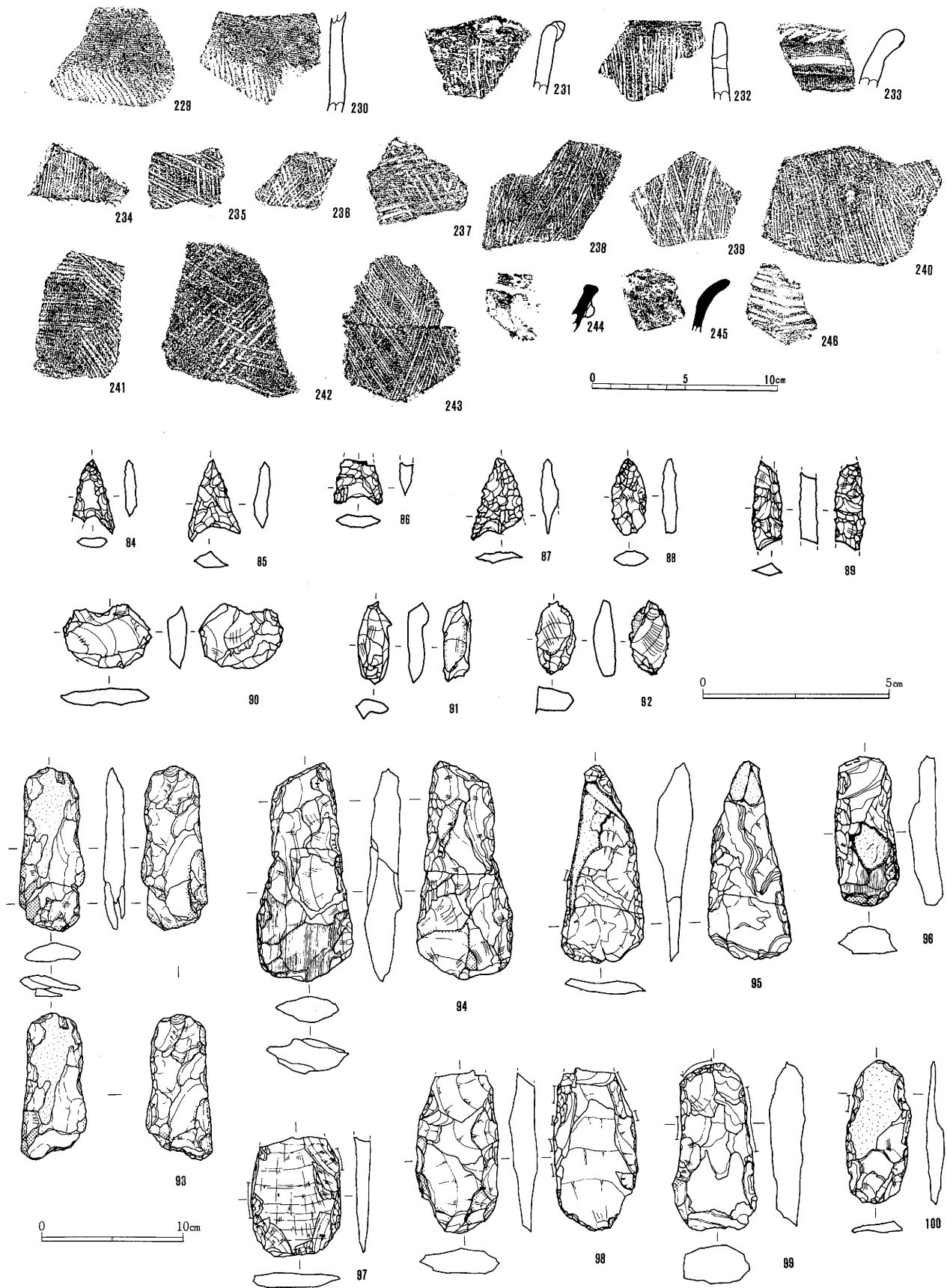


図208 中島A遺跡1号ブロック出土遺物実測図・拓影3

(229~246、1 : 3、84~92 2 : 3 93~100 1 : 4)

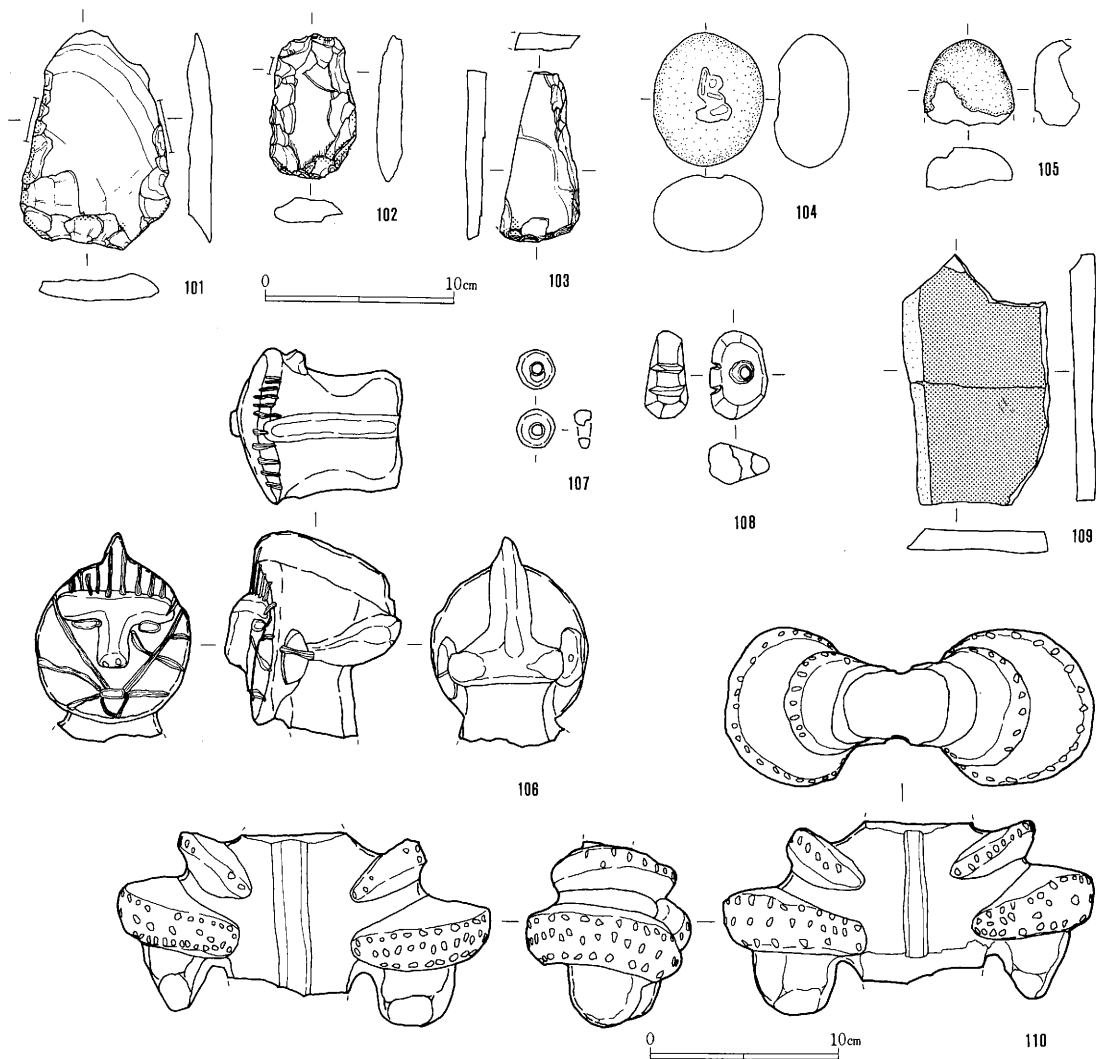


図209 中島A遺跡1号ブロック出土遺物実測図4 (101~105,109 1:4、106~108,110 1:2)

ウ. 3号ブロック (図216・217)

断層崖の中央南寄りに位置しており、やはり断層の比高差の大きい場所にある。ブロックの厚さは30cm程で、広がりとはと大差ない。4号ブロックとの境界は不鮮明で、両者の末端がある程度重なり合っているようだ。両者の中間を便宜的に境界とし、一部の遺物は両方のブロックに帰属させて組成表をつくっている。遺物量は4号ブロックとほぼ等しく、1・2号ブロックよりはかなり少ない。

遺物には土器と石器があるが、土製品・石製品は欠落する。非在地的土器の一部や石器の一部器種にも欠落がみとめられる。

エ. 4号ブロック (図218・219)

断層崖の南端、低湿地の南東縁辺に当たる場所に位置している。VI層が高まって断層との比高差は小さくなり包含層の傾斜も緩い。断層崖寄りにはV a層が分布し、低湿地中央寄りにはここだけに分布するV b層が薄く広がるが、その由来は不明である。その範囲は他と比べても広い方だが、厚さは20~25cm程とやや薄く、遺物量もやや少ない。

遺物は土器と石器で、土製品・石製品を欠く。非在地的な土器の一部や石器の一部器種も欠落するが、磨製石斧はこのブロックにしかない。

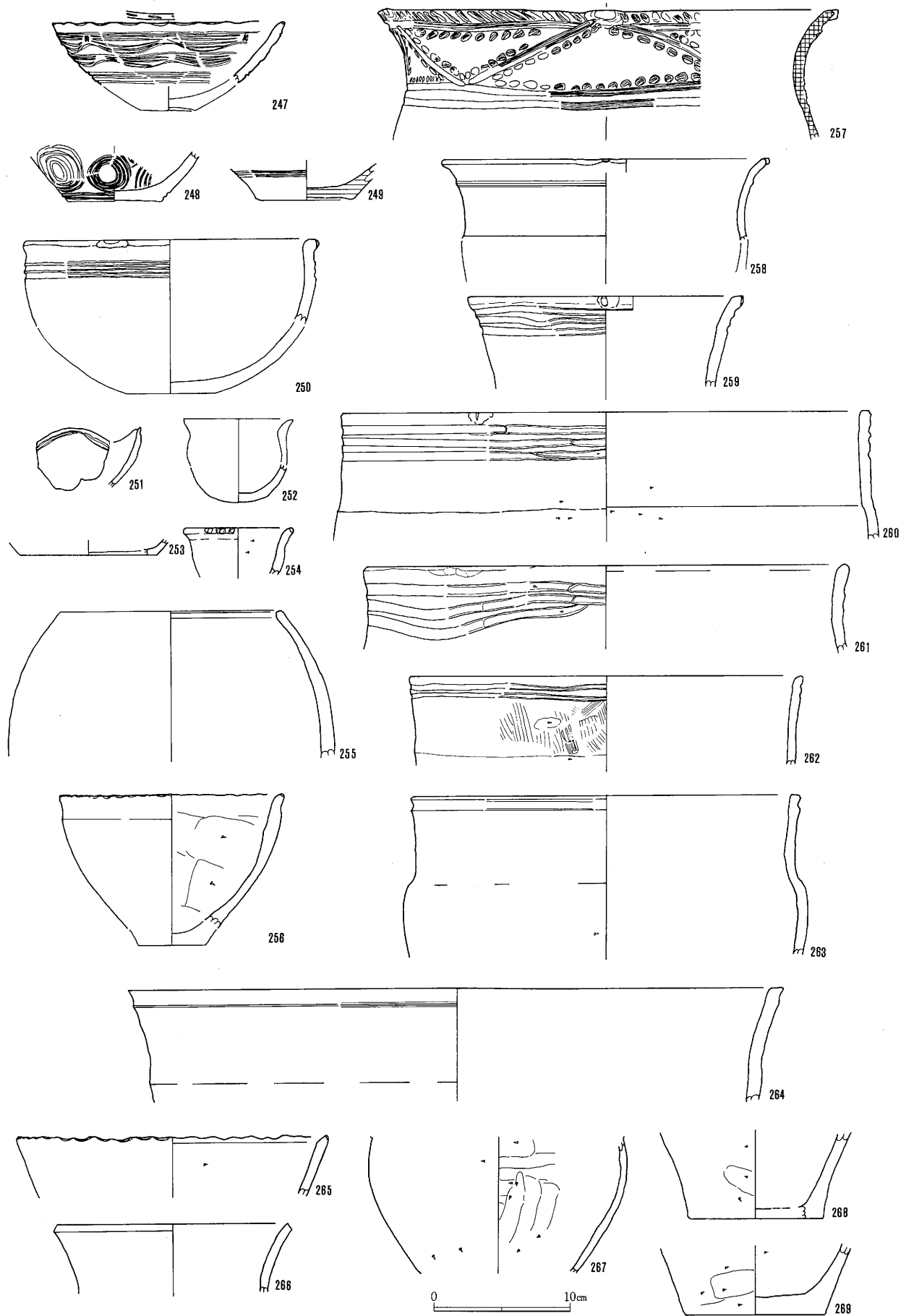


図210 中島A遺跡2号ブロック出土遺物実測図1 (1:4)

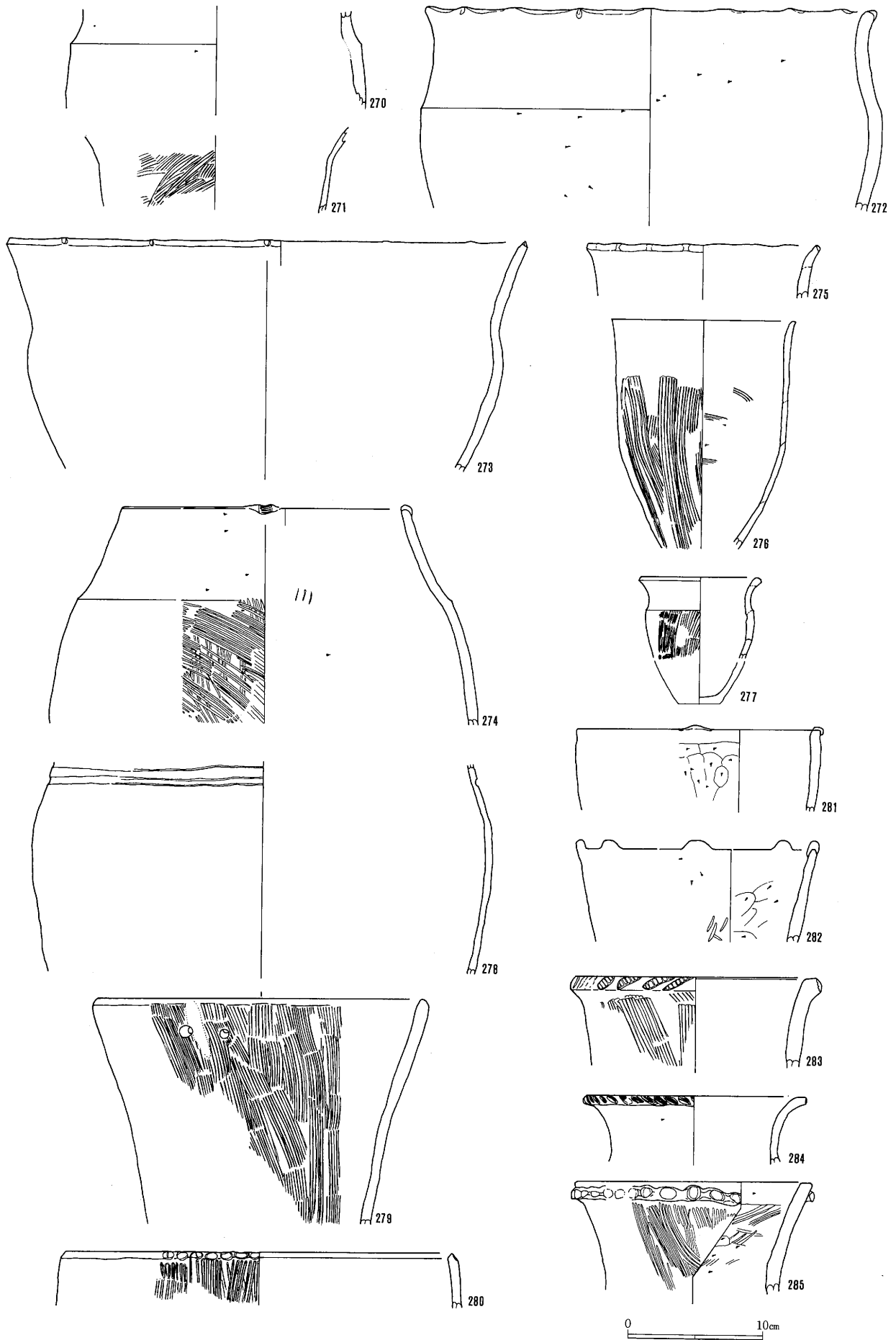


図211 中島A遺跡2号ブロック出土遺物実測図2 (1:4)

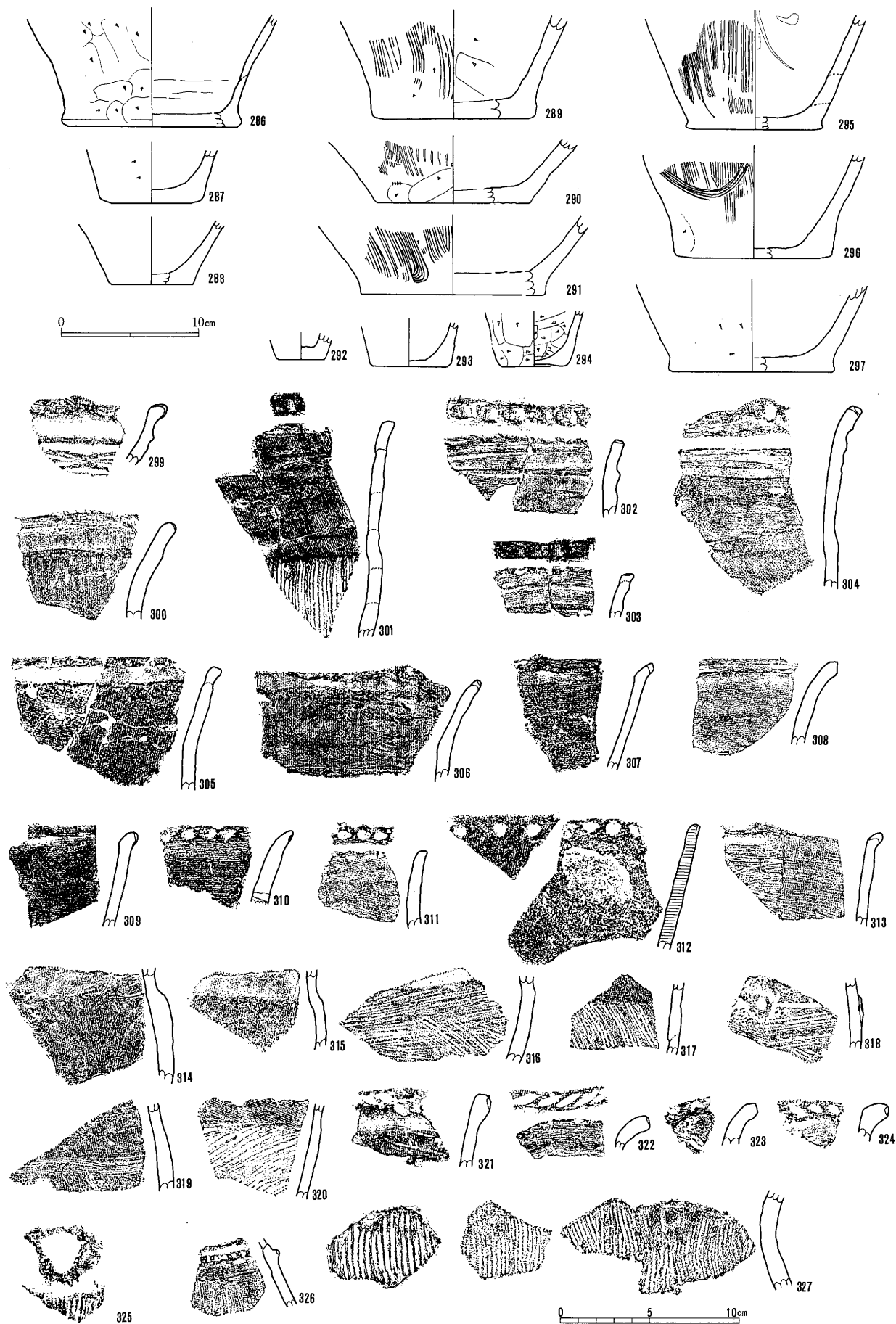


図212 中島A遺跡2号ブロック出土遺物実測図・拓影3 (286~297 1 : 4、299~327 1 : 3)

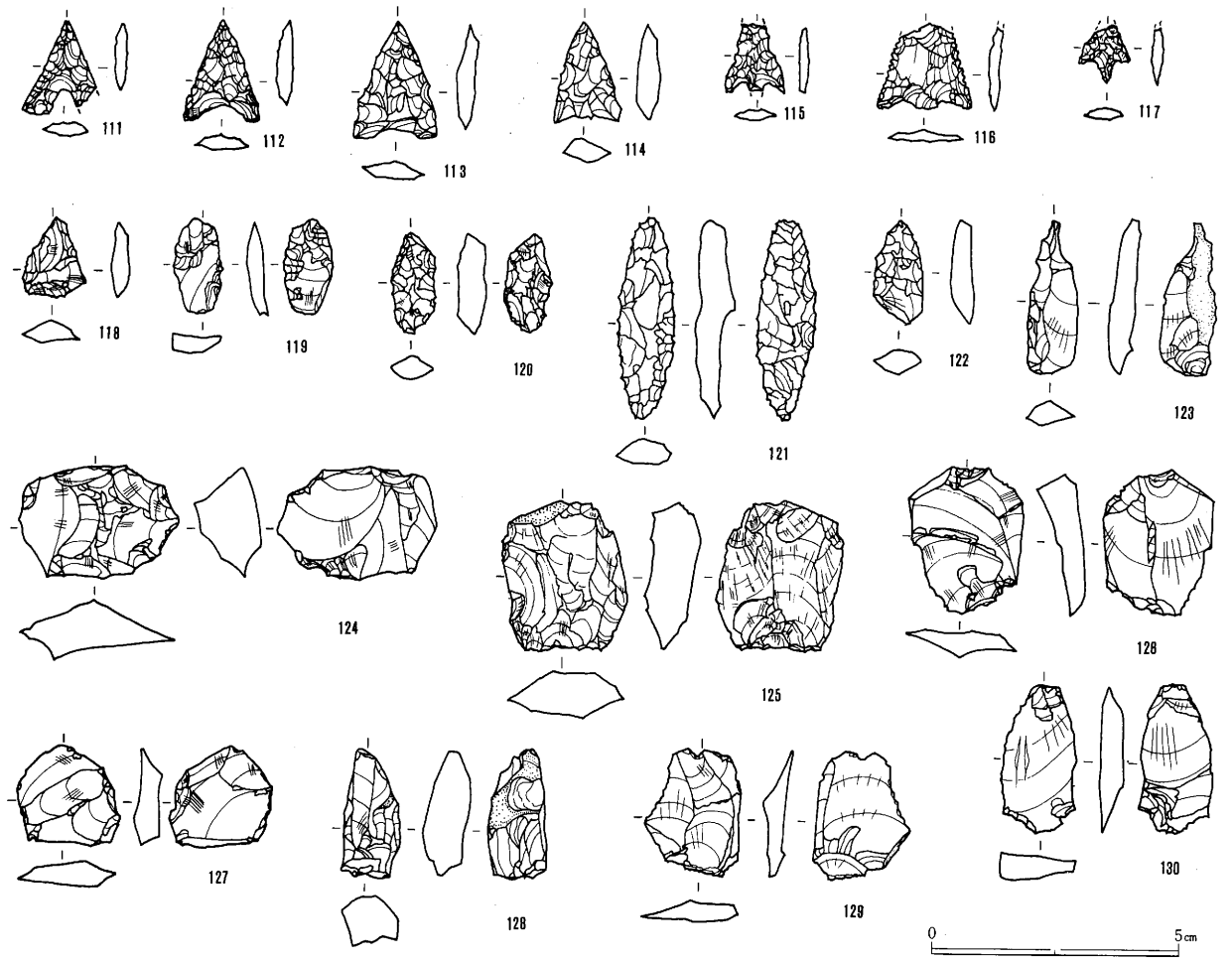
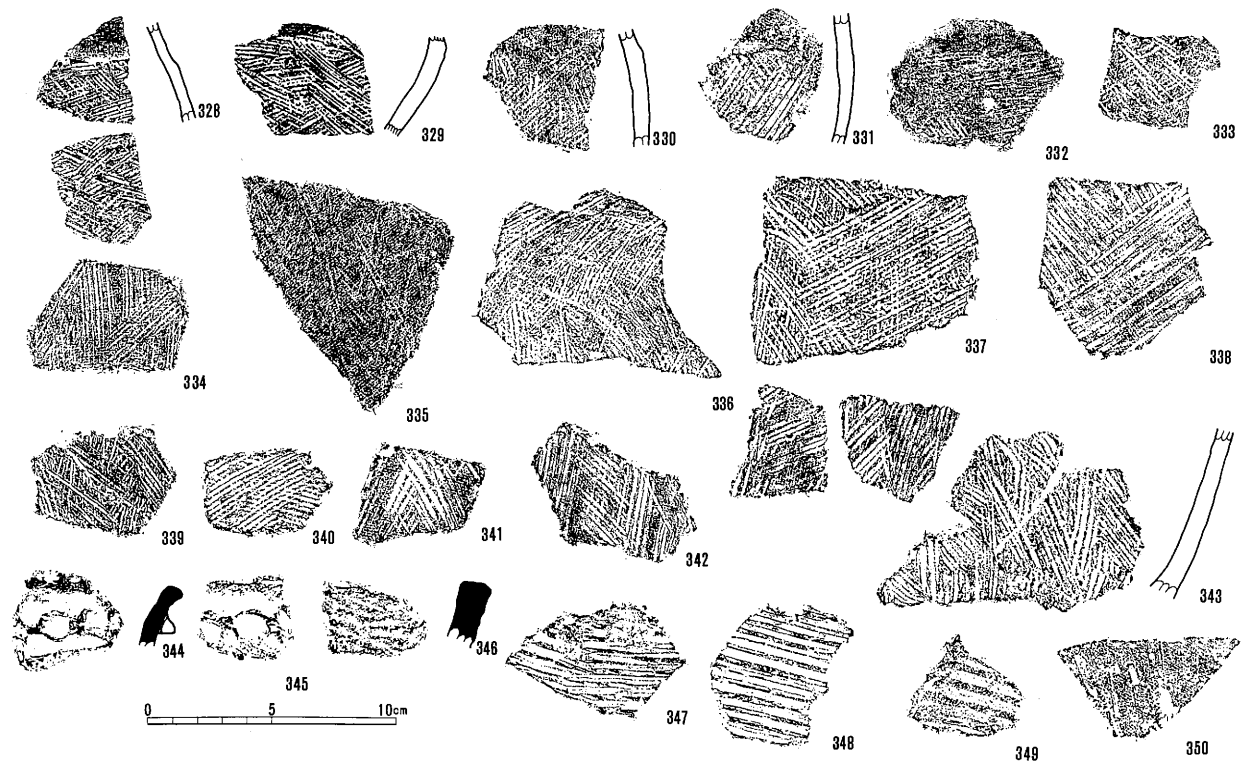


図213 中島A遺跡2号ブロック出土遺物実測図・拓影4 (328~350 1:3、111~130 2:3)

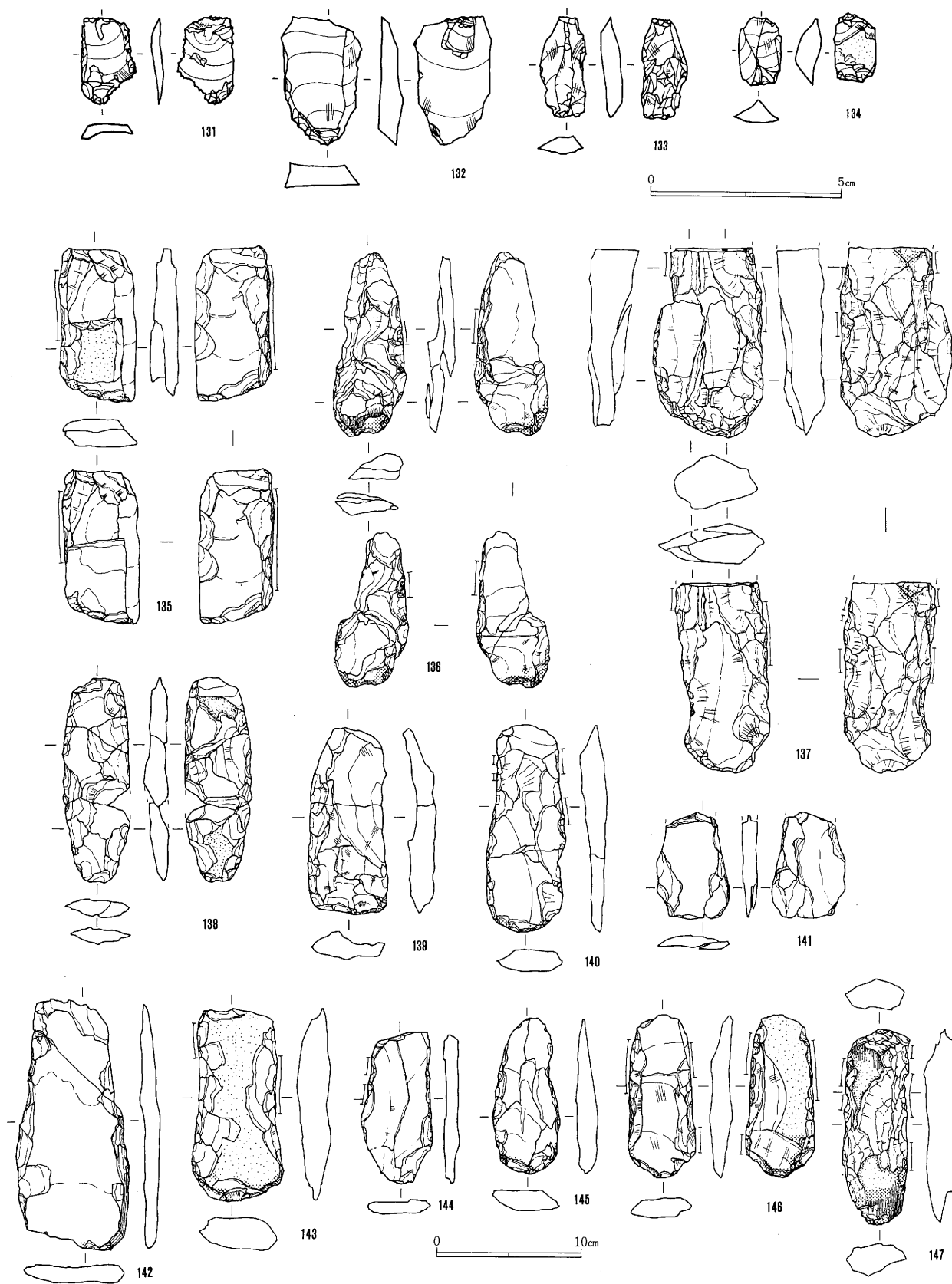


図214 中島A遺跡2号ブロック出土遺物実測図5 (131~134 2 : 3、135~147 1 : 4)



図215 中島A遺跡2号ブロック出土遺物実測図6 (148~164 1:4、165 1:2)

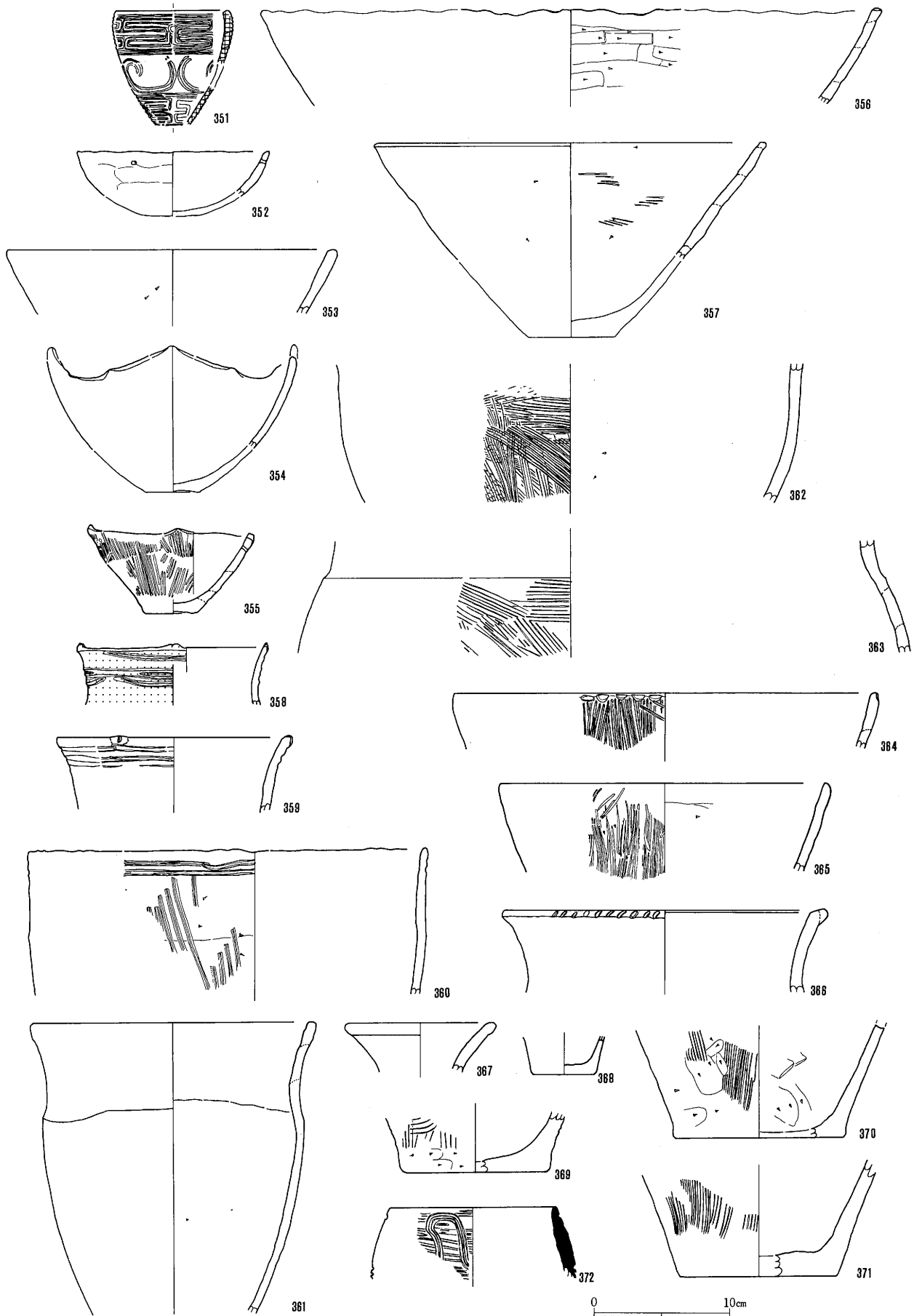


図216 中島A遺跡3号ブロック出土遺物実測図1 (1:4)

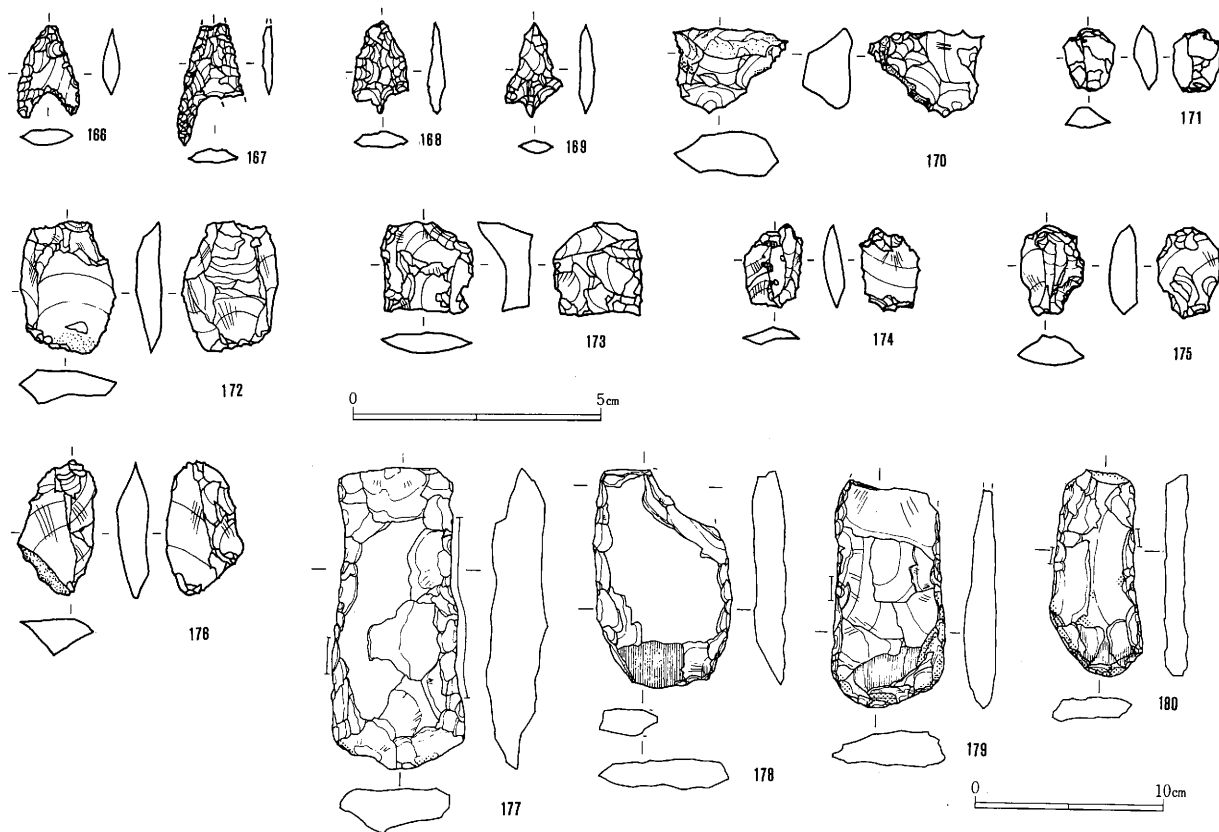
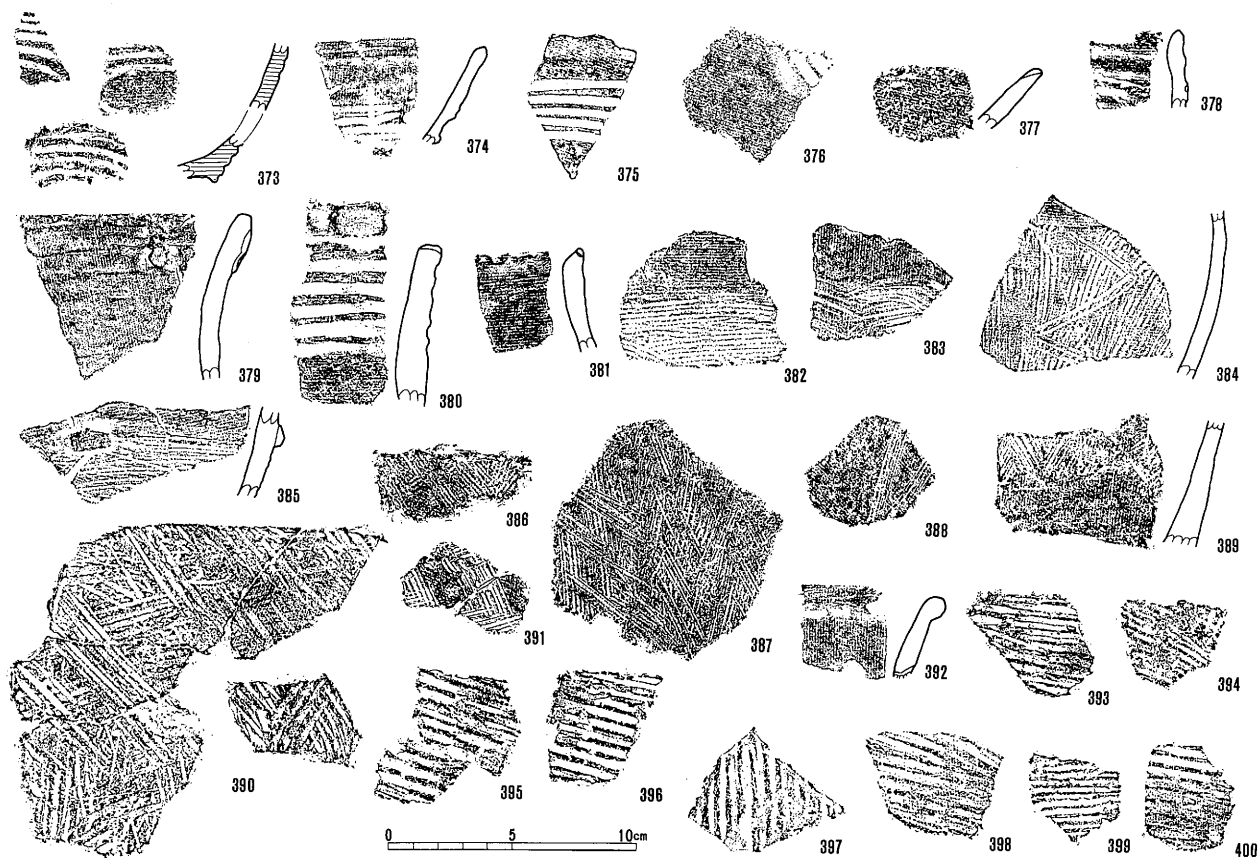


図217 中島A遺跡3号ブロック出土遺物実測図・拓影2

(373~400 1 : 3、166~176 2 : 3、177~180 1 : 4)

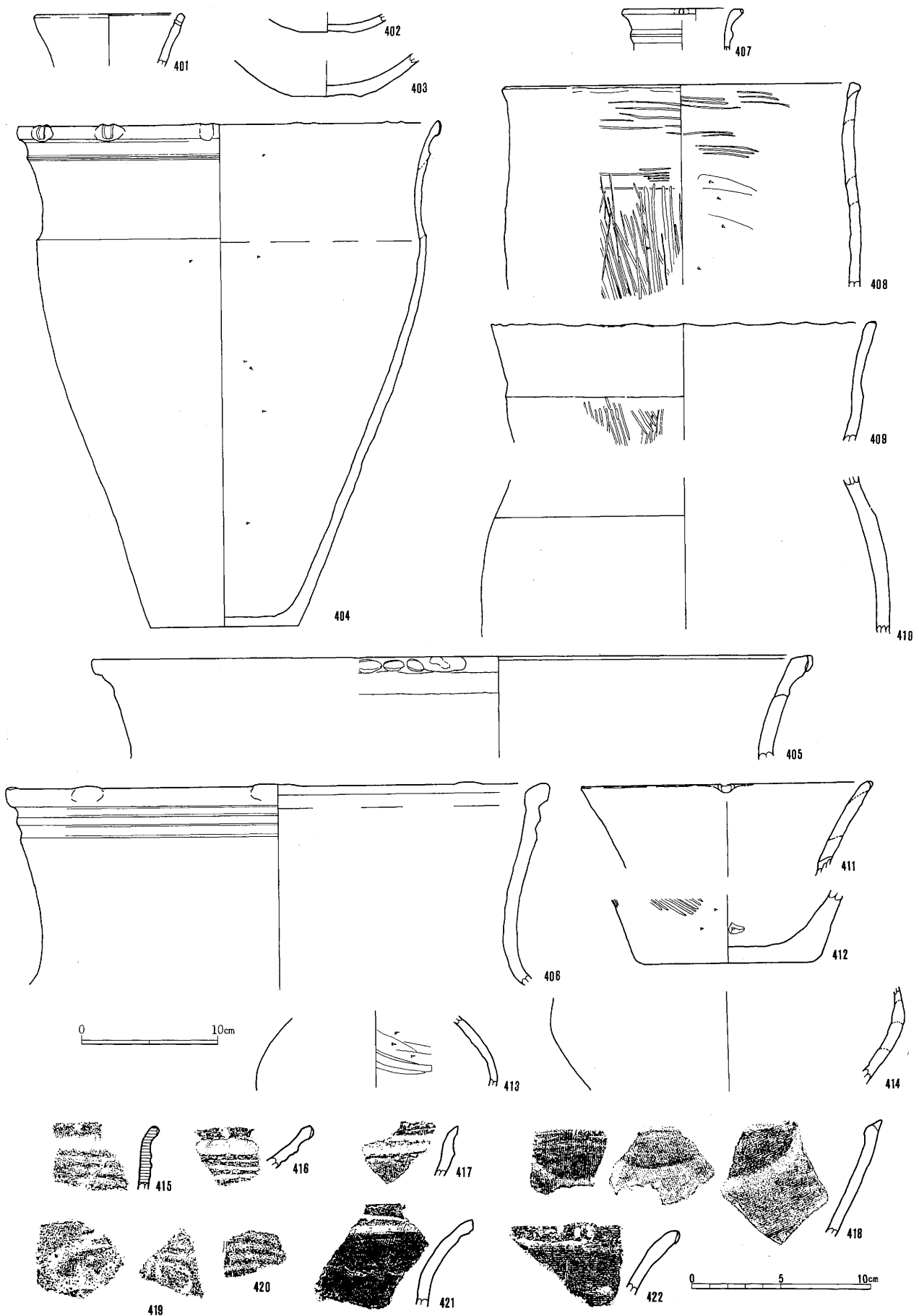


図218 中島A遺跡4号ブロック出土遺物実測図・拓影1 (401~414 1:4、415~422 1:3)

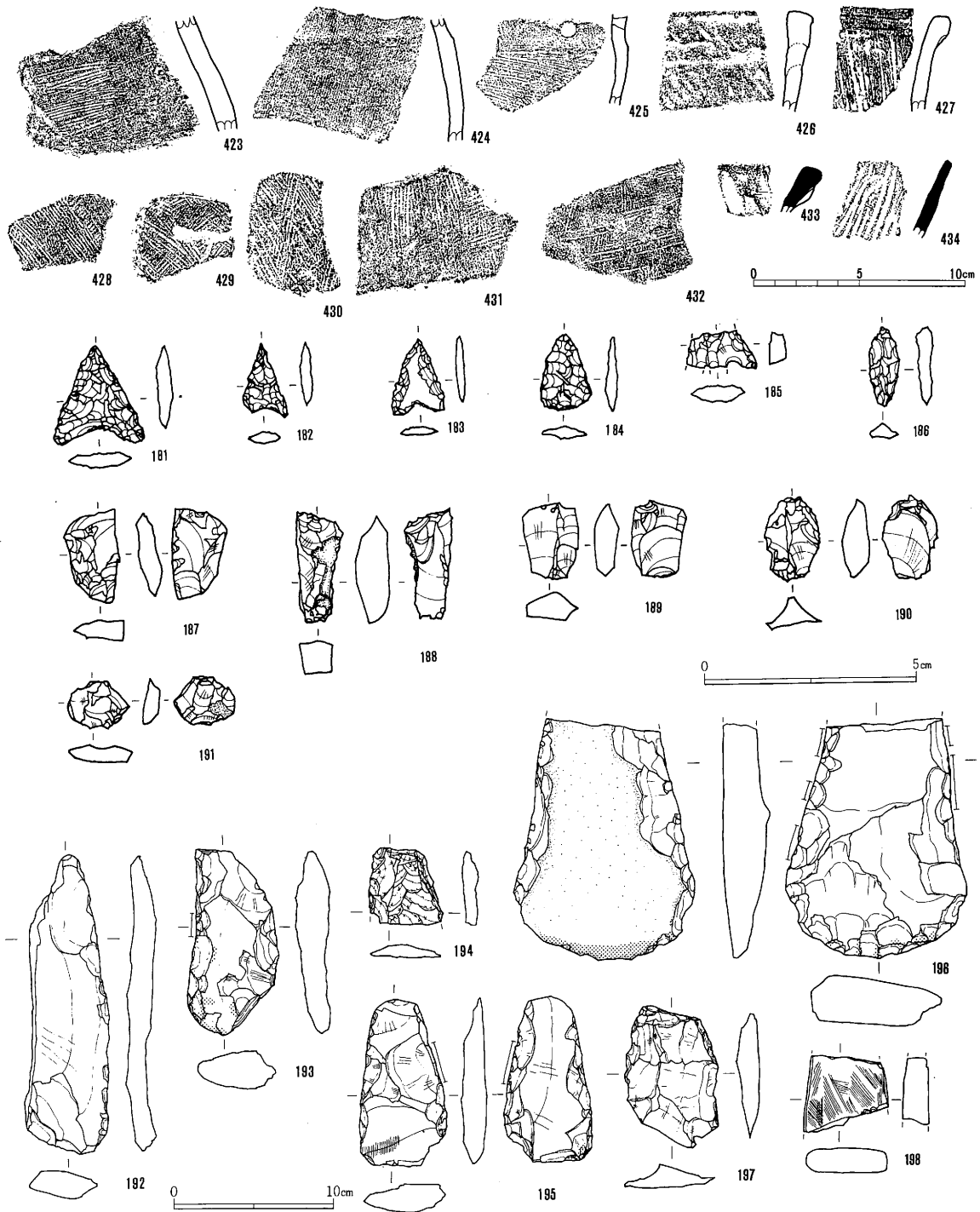


図219 中島A遺跡4号ブロック出土遺物実測図・拓影2

(423~434 1 : 3、 181~191 2 : 3、 192~198 1 : 4)

オ. 5号ブロック (図220)

断層崖から離れた低湿地南東縁辺に位置する。既述の通りVI層上面に遺物が集中しており、V層はみられずIV層もわずかしかない。VI層上面の傾斜はゆるく、平坦といってもよい。VI層上面には人頭大程の礫が点在するが、5号ブロックのほぼ中央、S16・E18付近には8点の礫が集中している。礫は重ならず、掘り方をもつわけでもない。配石の可能性がないこともないが、断定しかねる。ブロックの広がりは大いだが、厚みがほとんどないため、遺物量は他のブロックに比べごく少ない。

遺物は土器・石器・石製品(玉)があるが、種類によって量にばらつきがある。

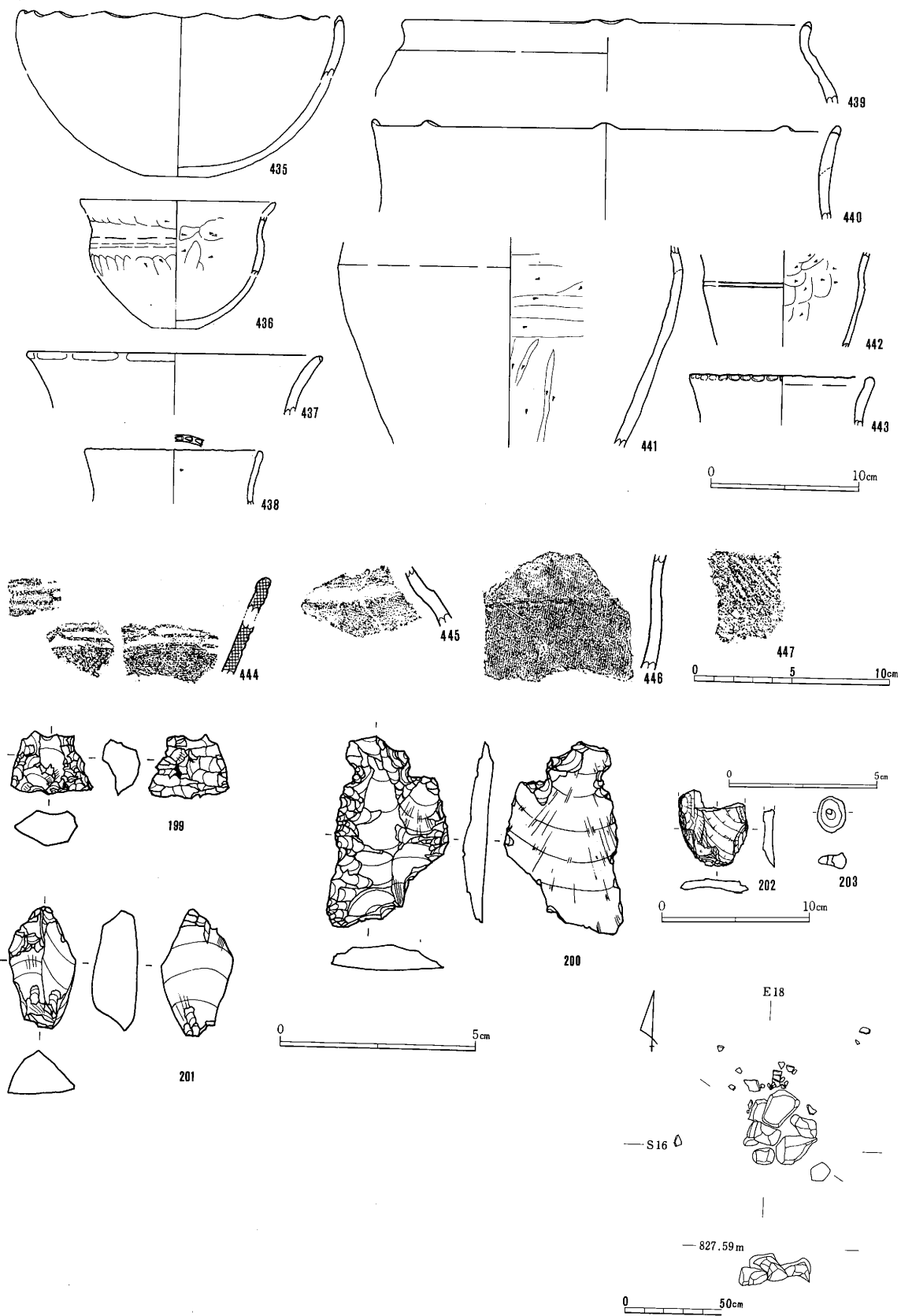


図220 中島A遺跡5号ブロック実測図 (1:30)

及び出土遺物実測図 (435~443、202 1:4、

444~447 1:3、199~201 2:3、203 1:2)

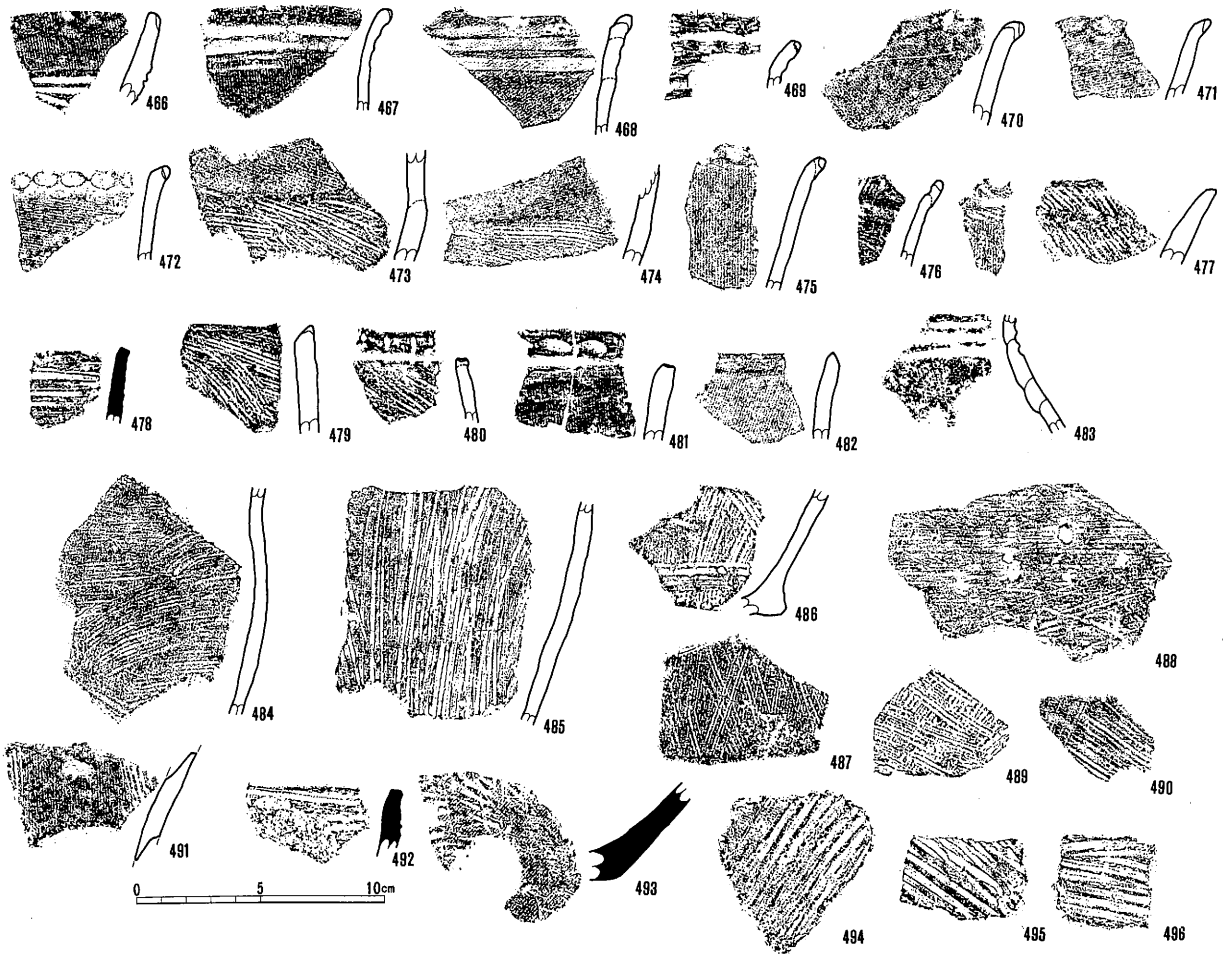
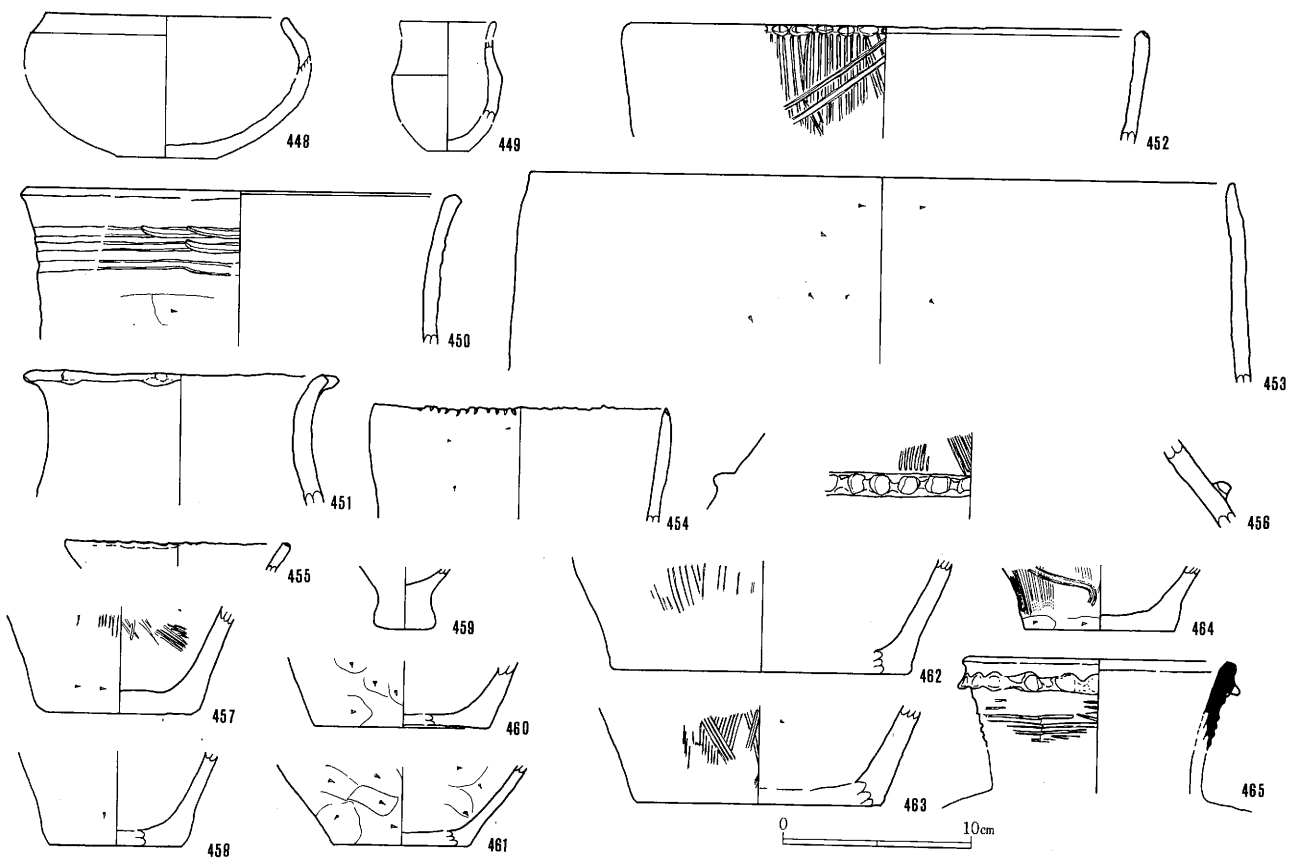


図221 中島A遺跡K・L地区ブロック外出土遺物実測図・拓影1 (448~465 1:4, 466~496 1:3)



図222 中島A遺跡K・L地区ブロック外出土遺物実測図2 (2:3)

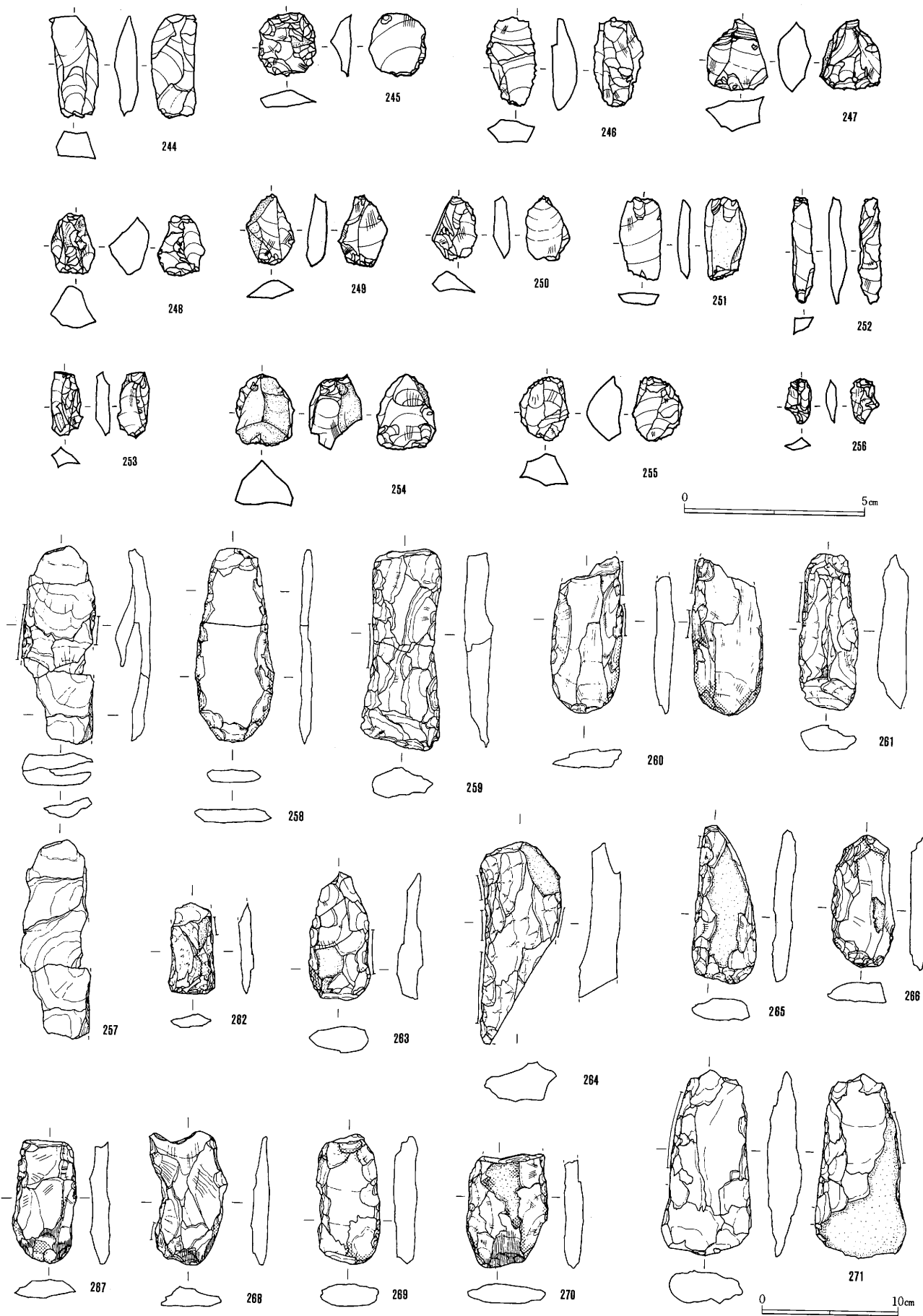


図223 中島A遺跡K・L地区ブロック外出土遺物実測図3 (244~256 2 : 3、257~271 1 : 4)

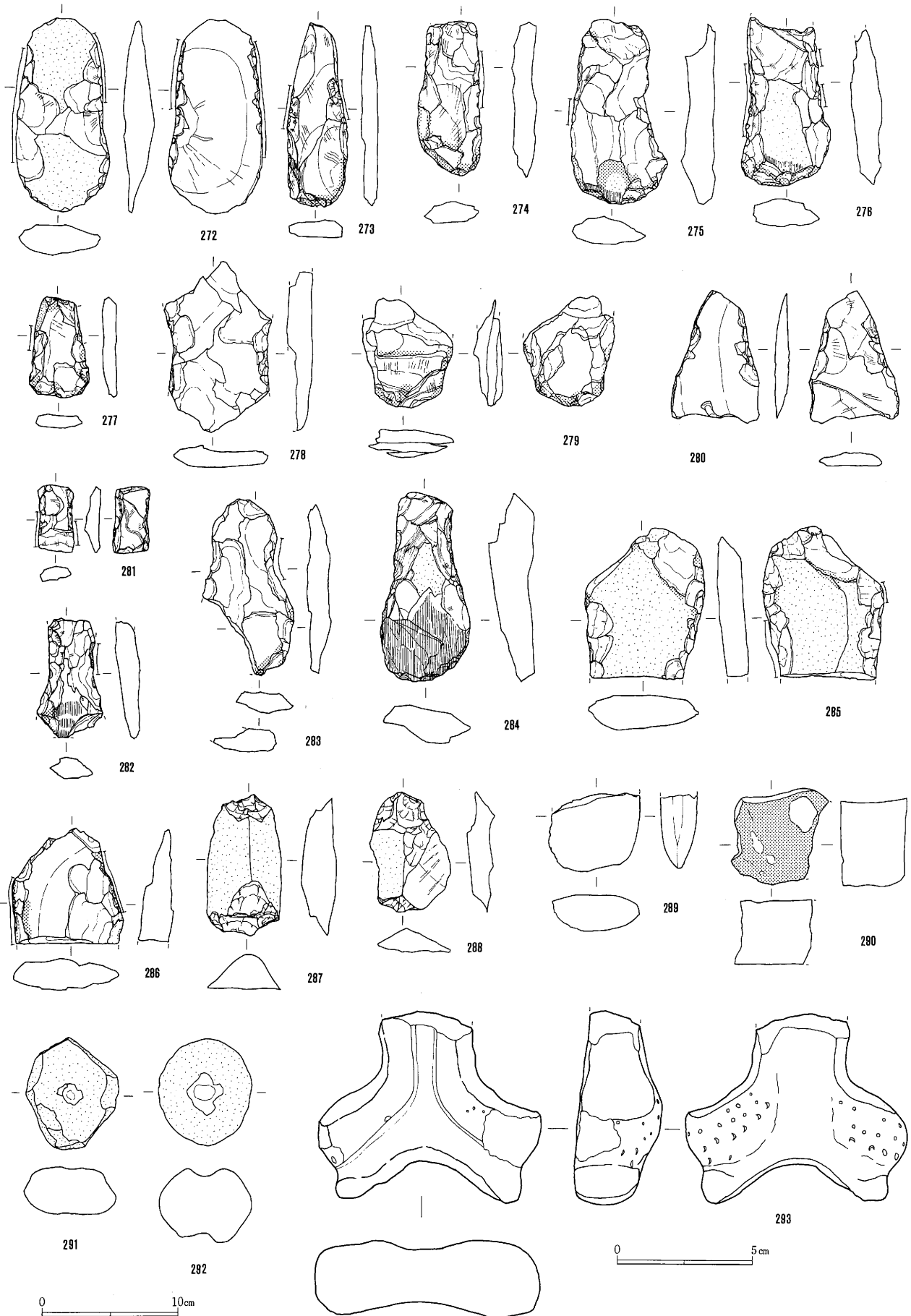


図224 中島A遺跡K・L地区ブロック外出土遺物実測図4 (272~292 1 : 4、293 1 : 2)

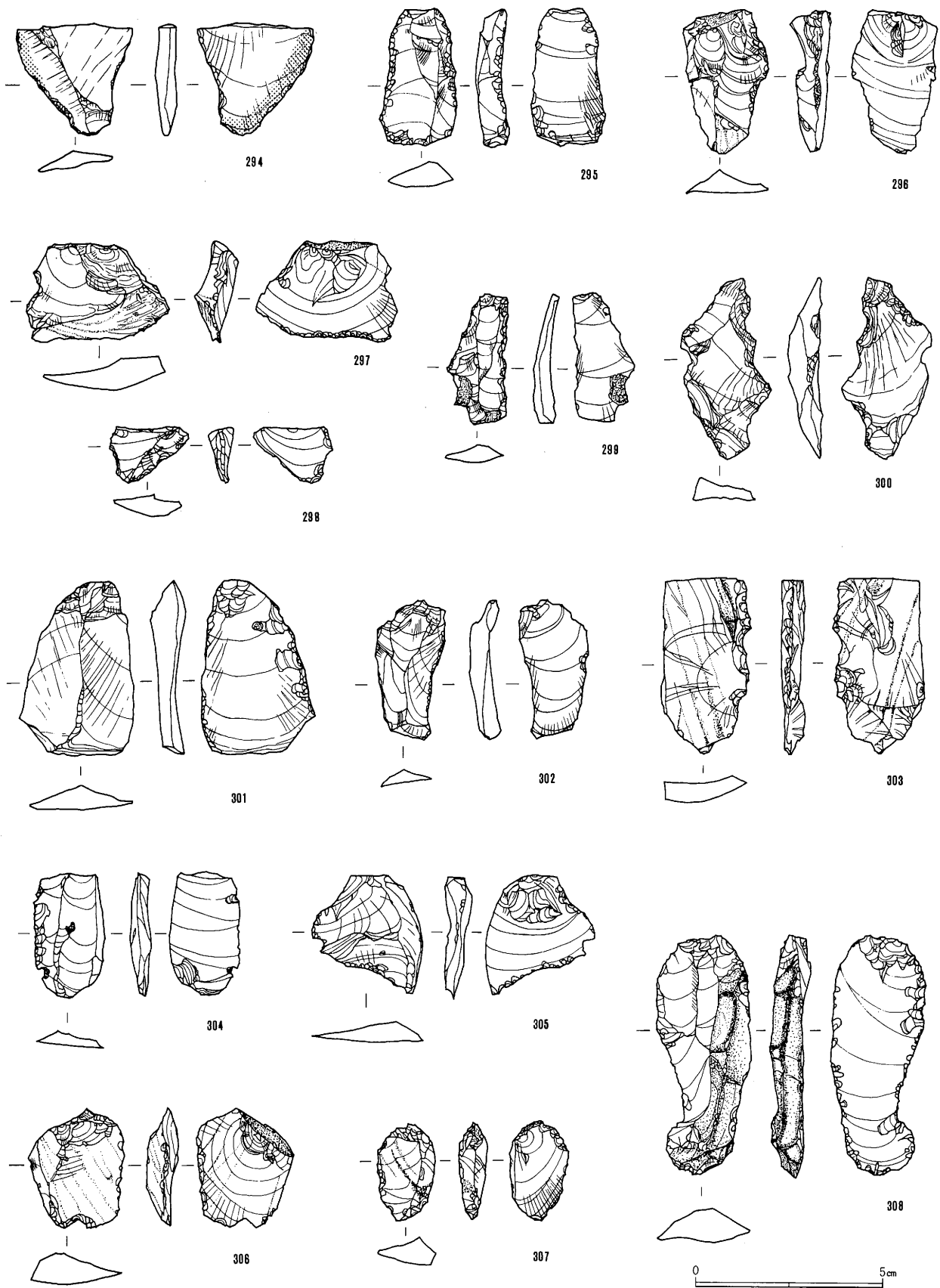


図225 中島A遺跡K・L地区出土小剥離痕のある剥片実測図(2:3)

(294, 295 1号ブロック、301, 302 2号ブロック、298, 303, 305, 306 4号ブロック、296, 304

VI層、他はブロック外出土)

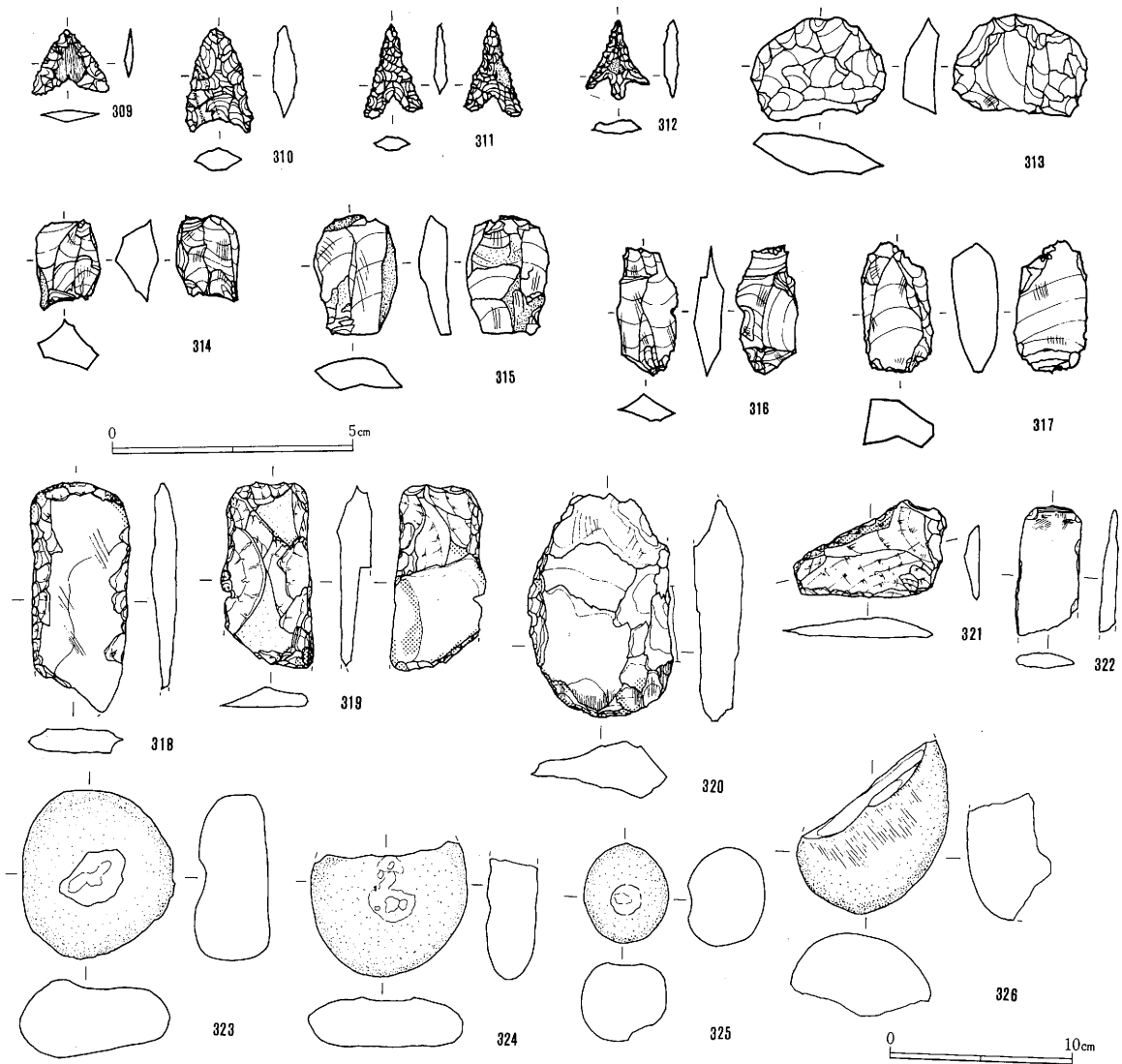


図226 中島A遺跡出土地区・層不明遺物実測図 (309~317 2 : 3、318~326 1 : 4)

③ ブロック外出土遺物、出土地点不明の遺物 (図221~224・226)

ブロック外出土の遺物(図221~224)の一部は、ブロックからはずれたV層の出土である。残りの大半は、I~IV層出土で、その多くは各ブロックからの流出であろうが、既に記した早期~晩期前葉の土器やそれと同時期の石器もわずかに含まれよう。一括性はないがブロック出土資料全体の組成を反映しているはずで、補充的な資料になろう。出土地点不明の遺物も参考資料として図示した。

④ 遺物

ア. 土器 (図227・228、表23~25)

(ア) 土器の分析方法

長野県内では縄文時代晩期末葉前後の遺跡が単純な姿で発見されることが多い。土器もかなり明瞭に捉えられ、強固な一貫性・系統性が指摘されている。近年研究が深められている弥生時代の開始期は、長野県内ではこの土器群のうちのどこか一点に求められる可能性が高い。まずは土器群の変遷を確立させようとする最近の研究動向に従って、土器群の構成をも把握できるような分析を試みたい。なお次項で述べる弥生時代中期初頭の土器は、本項で述べる土器群と深く関連しており、一括して研究対象とされてきた。しかし、当遺跡は両時期に於いて遺跡の性格が異なっており、報告の便宜上両者を別々に扱うことにした

い。

土器の分析には、第1章第4節で規定した群・類・種といった概念を用いるが、独自の使い方をする場合もある。まずこれらの述語の規定から始めよう。

土器の系統の大別である群には、I群とII群がある。I群は浮線文系土器、II群は条痕文系土器である。各群とも胎土・整形・文様モチーフの差から細分することができ、IA群・IB群・IC群・IIA群・IIB群とする。IA群は在地の浮線文土器で圧倒的多数を占める。IB群・IC群は他地域からの搬入品または模倣品で、IB群(断面横線)は岐阜県阿弥陀堂遺跡出土土器に、IC群(断面格子)は新潟県の各遺跡等出土土器に、それぞれ共通する要素をもつが、それぞれの地域との関係を特定するのは今のところ難しい。IIA群(断面塗潰し)はいわゆる条痕文土器であり、IIB群(断面塗潰し)はそれに近似した胎土・技法をもつが、条痕を施さない土器である。

各群の中での時間的まとまりである「類」は、これまでの研究の結果明確にされたものに限って用いる。IA群以外は単純で類を捉えることができないが、IA群は2つの類に分けられる。1類は浮線文系土器の最古相を示す女鳥羽川段階と呼ばれる土器だが1点のみしかない。2類は水I式及びその直後の土器を含み時間幅をもつが、その時間的細分案は確立しているとは言い難いので、まずは一括して検討する。

年代観は類の概念で説明できる部分もあるが、必要に応じて「期」を用いたい。条痕文系土器の年代観に基づく4期区分(市沢英利1985)に従い、I期は樫王式、II期是水神平式、III期は岩滑式、IV期は瓜郷式にそれぞれ併行する時期とする。本項では主としてI期とII期が問題となる。

「種」の前に「器種」という概念を置く。器種の区分は厳密に問えば、肩の張る深鉢を甕とすることは是非等問題を含むが、これまで一般的に用いられてきた区分に従う。I群土器には浅鉢・甕・深鉢・壺・舟形土器が用いられてきたが、これに鉢を追加したい。

「種」は器種の細分の意味で用いたい。I群土器は文様のあり方から共通の基準を設け、各器種をA～Cの三つの種に区分し、さらに器種ごとに基準を設けてD以下の種を設定する。各器種ともAは網状文や工字文といった文様モチーフをもつ土器である。但し、いわゆる口外帯や甕・深鉢の体部にみられる稻妻状のモチーフは文様から除外して考える。Bは隆線帯・沈線帯をもつ土器である。Cは無文の土器である。浅鉢のDは無文のうちで平面形が楕円であったり、大きな波状口縁や明白な片口をもつものとする。甕のDは、一般的な甕と違って肩部の張りが強調されず、口縁端部が外反して、全面に条痕文または細密条痕をもつ。壺のDは口縁部に貼付突帯文をもつ。II群土器は壺のみ種が設定され、Aは貼付突帯文をもちBはもたない。

それぞれの種の時間的変遷と種の組み合わせの時間的変遷とを捉えるのが編年研究の課題と思われるが、「種の中に認められるまとまり」はこの課題を解決する手がかりとなる。次に各群の概要を説明するが、その中で種の中に認めらるまとまりを種の細分として摘出し、分析したい。

なお、土器群の群・類・器種・種別の構成比は、土器群の様式を知る上で重要であろう。その基礎たる分類別の個体数は土器の分類を活かすため口縁部の破片数をもって代える。個体数は点、破片数は片として表24に示す。

(イ) IA群土器

IA群1類は浅鉢Aが1点のみある。図示しないが、口縁部が内湾し肥厚した口唇部に沈線を加え、全面を研磨して赤色塗彩する。

IA群2類は本遺跡出土土器の大半を占める(以下単にIA群と記した場合、IA群2類を指す)。IA群は、浅鉢A～D、鉢C、甕A～D、深鉢B・C、壺B～D、舟形土器から成る。その胎土は、黄色味の強い暗色の色調をもつ。混入物の粒子は全体的に小さく、紫蘇輝石が特徴である。このほか火山岩の破片、

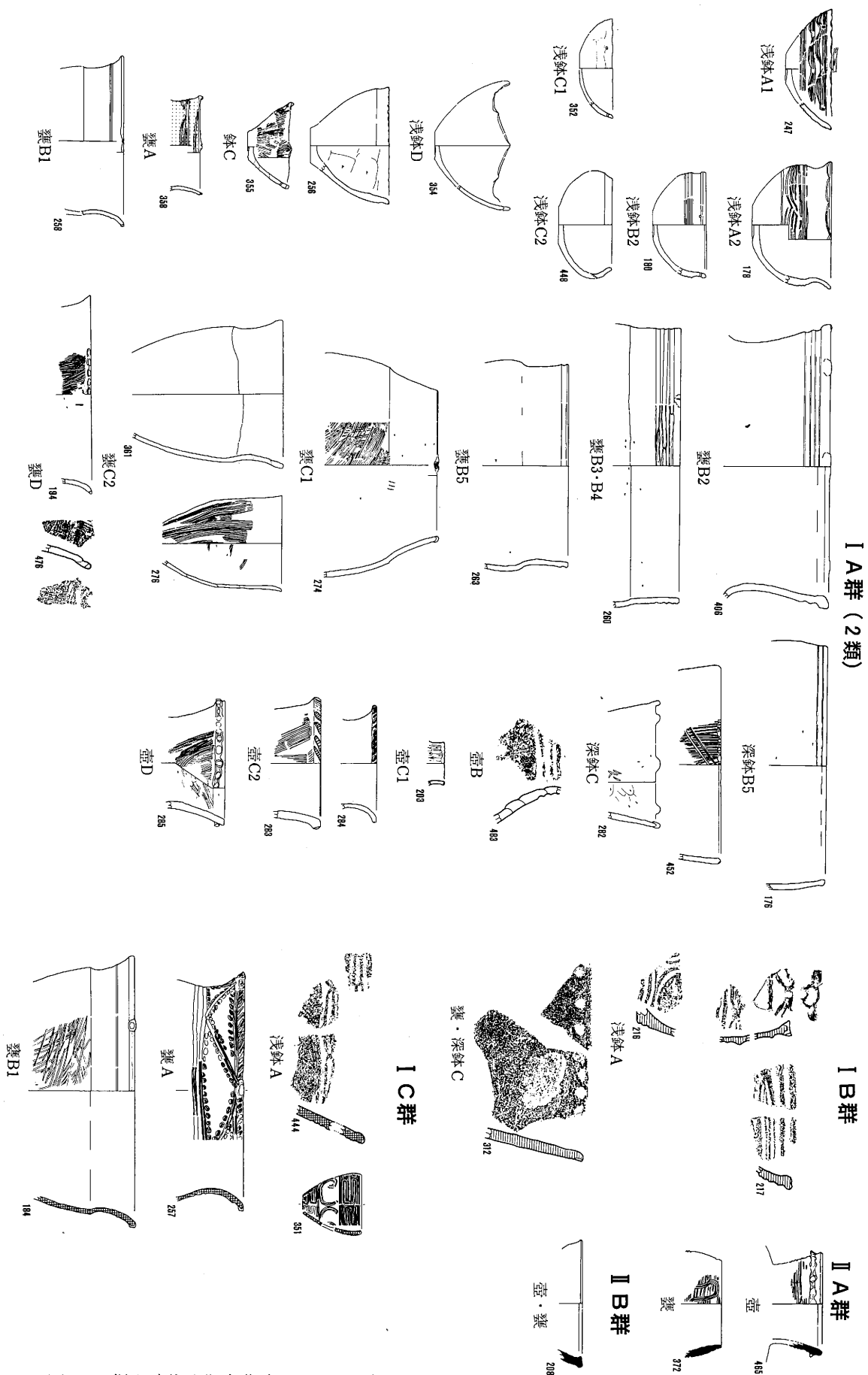


図227 縄文時代晩期末葉前後の土器分類図

パミス、スコリア、角閃石、雲母等が多い。いずれも火山起源の岩石・鉱物で、火山灰を母材とした粘土が用いられていることを示す。ローリングを受けた砂は稀である。

浅鉢A・Bは文様帯のあり方から細分できる。いわゆる口外帯を除いて口縁部文様帯をもつ浅鉢A1・B1と体部文様帯をもつ浅鉢A2・B2である。浅鉢A1・B1は平底で体部～口縁部は単純に外傾する。浅鉢A2・B2は、A1・B1と同器形か、あるいは、丸く作った底部を削って小さな平底か上げ底にし、体部は丸く、屈曲をもたせて肩を張らせるようだ。文様は浅鉢A1・A2とも共通しており、楕円形の網状文が多いようで、細隆線で描いている。浅鉢B1は沈線、B2は細隆線を用いている。

浅鉢Cは器形から2分できる。浅鉢C1は浅鉢A1・B1と同様か丸い体部をもち、口縁部は内湾気味となる。どちらにしても肩部が張らないのが特徴である。浅鉢C2は体部が丸く肩が張って稜をなす。

浅鉢類は内外面ともケズリを用いて器表を平坦にするが、口縁部付近だけはそれを省略することがある。施文後、施文部分も含めてミガキを加えるが、ミガキの下にはナデがみられる例もあるので、ケズリ→ナデ→ミガキという工程があるのだろう。上げ底の土器は底部外面までミガキを加えており、体部の丸いタイプほどミガキは入念である。ミガキは装飾的な整形といえるが、赤色塗彩や装飾目的の穿孔等も頻繁に用いられている。

鉢は細分しない。甕・深鉢同様に平底らしく、単純に外反して開く。整形も甕・深鉢と同じで、外面はナデか細密条痕が施される。甕・深鉢の変形にすぎないと思われ、量も少なく主要な器種ではない。

甕A・Dは細分するに足る資料はないが、甕Bは文様表出技法から細分する。甕BはB1～B5に区分する。原則的に1条の細隆線を用いるB1、隆線を用いるB2、6mm以上の幅広い工具による沈線を用いるB3、4mm以下の幅の狭い工具による沈線を用いるB4、1条の沈線をもつのみで隆線・沈線の区分が難しいB5である。隆線は剥去部分と残された隆起部分の幅がほぼ等しくミガキが加えられるが、沈線はその間隔が沈線幅より広く、ミガキも加えられない。また甕Cは最大径が口縁部にあるC1と肩部以下にあるC2に細分する。

甕類は平底で、いったん単純に開くが、体部上半を張らせて肩部をつくり出す。口縁部は外傾するものが多い。器面はケズリを用いて平坦にされるが、口縁部ではケズリが省略されることがある。肩部以上は横位のナデ、局部的ミガキなどで整形する。肩部以下はナデか細密条痕で整形するが、後者の方がはるかに多く特徴的である。細密条痕の方向は縦位(「タテ」と略す)のみか、上位から横位～斜位～縦位と変化(「ヨコ」と略す)する。さらに肩部～体部破片に限ってであるが、縦位羽状や格子状の細密条痕が一定量存在し、細密条痕の間隔があいたり、方向に乱れのある例も存在しており、それらはできるだけ多く拓本等で示しておいた。細密条痕の工具についての新知見はない。なお甕の肩部を張らせず、肩部相当部位を境にナデと細密条痕を使いわけることによって肩部を示す例が少なくない。「整形上の張り」として器形上の張りとは区別したい。また、甕に丁寧なミガキを加える例は全くない。

甕の口縁部～口唇部には突起や連続圧痕が付され、口外帯をもつものは少ない。突起は口外帯の変形または影響によるものとみられ、小さく山形に貼付される。突起頂部や外面側に縦位のヘラ圧痕を付すことが多い。連続圧痕には二者がある。ヘラまたはユビを器壁と併行においた圧痕(「ヨコ」と略称)は、楕円形を呈しており、特にユビを用いた場合中央は爪の痕跡が残る。一方ヘラ等の工具を器体に直交するようおいた圧痕(「タテ」と略称)は、角ばって鋭くキザミのように見える。例外的だが赤色塗彩される例もある(175)。

深鉢Bは甕と同一基準でB1～B5に細分し、深鉢Cは細分を行わない。深鉢は甕の体部によく似た器形で、平底から単純に開き口縁部は内湾気味となる場合もある。整形はナデか細密条痕のいずれかが用いられる。細密圧痕はタテが主でヨコはわずかしかない。口縁端部に小突起をもつ例はわずかで、口唇部に

連続圧痕をもつ例が多い。こうした加飾のあり方は甕と共通する。

壺B・Dは細分するだけの資料はないが、壺Cは口端部のあり方から細分し、単純なC1と肥厚または外屈するC2を設定する。ともに突帯文に似せた手法であろう。

IA群の種及び種の細分毎の特徴のうち、ここまでで触れきれなかった事柄については、以下の観察表(表23)で補充する。

(7) IB群・IC群土器

いずれも単純で類別はできない。

IB群はネズミ色か白色の胎土をもち、表面はにぶいピンクに変色する。混入鉱物には石英・長石・頁岩片が多く、河川による淘汰を受けた粘土を用いる。角閃石、スコリア、輝石も含むが、パミスは有る例

種	器形・成形	整形	文様
浅鉢A1	体部は丸いか単純に開き、肩部は張らない。	ていねいなミガキを用いる。	口外帯をもつ例が少なくない。
浅鉢A2	体部は丸く、上半は単純に開くか肩部が張る。	特にていねいなミガキを用いる。	口外帯は必ずもつ。
浅鉢B1	不明。	ミガキは甘い。	口外帯はない。
浅鉢B2	体部は丸いか単純に開き、前者には肩部が張る例もある。	ていねいなミガキを用いる。	口外帯または圧痕付小突起が多い。
浅鉢C1	体部は丸いものが大半を占める。	ミガキはやや甘い。	特異な口外帯をもつ1点(418)以外は小突起をもつ例が多い。
浅鉢C2	体部は丸く、肩部の張りはシャープさを欠く。	ていねいなミガキを用いる。	口外帯をもつ例もある。口唇部の連続圧痕が例外的にある(254)。
浅鉢D	波状口縁、片口、平面楕円形の三者を含む。	ミガキは全体に甘い。楕円形の土器はミガキがない。	
鉢C	単純に外傾して開く。		口唇部にヨコの連続圧痕や小突起あり。
甕A	不明	ミガキを用いたらしい。	細隆線を用いるがモチーフ不明。口唇部に圧痕付小突起貼付。赤色塗彩あり。
甕B1	肩部の張りが整形によることはない。	隆線にはミガキを加える。	細隆線は1条が圧倒的に多い。
甕B2	接合例がなく体部は不明。		隆線は2~3条。口端部には圧痕付小突起を多用し、連続圧痕は微量。外面赤色塗彩1点(175)。
甕B3	肩部の張りは整形による。		沈線は2~3条で、口端部には圧痕付小突起貼付。
甕B4	肩部の張りが整形による例あり。	かすかな細密条痕が肩部を越えて沈線帯に達する例有。	沈線は2~3条で、口端・口唇部に圧痕付小突起多用。
甕B5			口端・口唇部に圧痕付小突起有。
甕C1	肩部の張りは器形上も強いが、整形によってよりシャープになる。	肩部付近のケズリ著。体部はヨコの細密条痕かナデ。	口端部に圧痕付小突起または小突起有。
甕C2	肩部の張りは甘く、整形による例も有る。	肩部以上のナデが甘い。細密条痕の上限が肩部となる例もある。	口端部に圧痕付小突起または小突起有。口唇部の連続圧痕や細密条痕例も少数あり。
甕D	口端部は尖り気味で、器厚は5~6mmとやや薄い。	口端部以下にタテ・ヨコの細密条痕かナデ。内面にも細密条痕あり。	口唇部にヘラまたはユビの連続ヨコ圧痕。
深鉢B4			沈線は2条で、口端部に圧痕付小突起有。
深鉢B5			口端部の加飾例なし。
深鉢C		細密条痕は基本的にタテ。	口端部にヨコの連続圧痕多用。タテの連続圧痕や小突起も若干有。
壺B		内面のナデが甘く粘土紐の積上痕が残る。	隆線2条
壺C		外面はわずかなミガキ。	口唇部にヨコ~斜位の連続圧痕多用。
壺D		タテの細密条痕使用。	口縁部・肩部に突帯。突帯上は連続圧痕または弧状の粘土紐貼付。
舟形土器	器厚は4~5mmと薄い。	ナデとていねいなミガキ。	

表23 中島A遺跡縄文時代晩期末葉前後I-A群土器観察表

と無い例がある。成形は粘土紐積み上げによるだろう。器種は浅鉢A (216、217) と甕または深鉢C (312) がある。浅鉢Aは体部に最大径をもつ樽形の器形で、口縁部は単調に内傾し端部は小さく外屈するかその痕跡を残す。底部は平底でわずかに上げ底になる。ケズリははっきりしないがミガキは用いられる。文様は独特で、文様帯は、口縁部、体部、底部の三帯に分かれ、口唇部や口端部も沈線や突起で飾られる。口縁部文様帯は浮線網状文を用いており、貼付手法や楕円モチーフをもたない。体部文様帯は沈線により円または半円モチーフを描き、底部文様帯は2条程度の隆線帯となる。甕または深鉢は口縁部が外傾するが、器形は不明である。全体に風化が進み、整形が看取しにくい。軽いケズリがあるようで、口端部にヨコの連続圧痕をもつ。

I C群は黄色味の強い胎土をもつ。混入鉱物にはチャート質の磨耗した砂が顕著で、長石・石英・頁岩・ホルンフェルス・ローム系鉱物も含み、中生～古生層を母材とする粘土を用いている可能性が高い。成形は粘土紐積み上げによるだろう。器種は浅鉢A (351、444) と甕A (257)、甕B 1 (184、185) が確認できた。浅鉢Aは単純に開く器形らしく、肩の張りはもたない。口縁部文様帯には、隆線または細隆線による工文字が描かれ、444には縄文が施される。甕は成形によって肩を大きく張らせており、器厚が4～5mmと薄いのも特徴である。最大径は口縁部にあるだろう。整形はケズリがはっきりせず、内面はていねいなナデとわずかなミガキがみられる。外面はヨコのナデが確認でき、体部はヨコの細密条痕を用いるが、板状の工具ではなくヘラや目の細かい工具による。甕Aは口縁部文様帯をもち、先端の割れた太い工具による沈線で大きな三角形をつなげたモチーフを描き、沈線に平行して列点を付す。口端部には連続圧痕または短線を加え、独自の突起を貼付する。甕B 1は1条の細隆線帯をもち、口端部には圧痕付き小突起を付すが、これは口外帯といってもよいくらいである。

(エ) II A・II B群土器

いずれも少数かつ一様のため、類別はできない。

II A群の胎土は黄白色または赤みのある白色である。石英・長石が多く、輝石やスコリア等火山灰由来の鉱物類は少ない。しかし頁岩やチャートの磨耗した砂はごくわずかしがなく、花崗岩地帯以外ならば河川の下流域で採土されたとはいえそうもない。こうした胎土は東海胎土〔笹沢浩1975〕と呼ばれている。II群土器はI群土器と器種構成が異なり、本来壺と甕から成る。本遺跡出土資料も同様に、II A群では壺A、甕が確認できる。成形は粘土紐積み上げによるらしい。底部は小さな平底としっかりした平底があるが、前者が甕、後者が壺かもしれない。器形がわかる個体はないが、壺の口縁部は直立し、甕はやや内傾して砲弾形になりそうだ。整形をみると内面はケズリを用いず、器表が平坦でないままていねいにナデを加える。外面は竹管や貝殻類似の工具でヨコの条痕を密に加える。甕の口唇部はナデで丸くつくる。文様は壺Aの突帯文に限られる。口縁部からわずかに下に1条の突帯を貼付し、ユビでタテの圧痕を加える。突帯剥落下には条痕は観察されない。

II B群の胎土も黄白色か赤みのある白色である。花崗岩細片やスコリア、磨滅した砂を含み、火山灰由来の鉱物は少ない。II A群の混入鉱物の組成と似るが、砂の多い点異なる。器種は壺Bと甕がある。小片で成形は不明であるが、ケズリを用いず内外面ともナデのみで整形する。壺は口縁部が外傾し、端部は内側に折り返して肥厚する。甕は口端部がわずかに外反する。条痕はみられず装飾もない。

(オ) 土器群の位置づけ

群の細分は各群の系統的な位置づけ、ひいては地域的位置づけについてある程度の見通しをもって行った。次に各群の時間的位置づけを考えたい。

本遺跡の主体たるI A群土器の時間的細分は、浅鉢Aの変化を指標としている。頸部無文帯の変遷に着目した4段階区分〔石川日出志1985〕や、女鳥羽川段階設定とそれに続く3段階の区分〔設楽博己1983〕等は

一定の有効性をもつ考え方であろう。特に後者の考えに従えば、I A群1類の浅鉢AはI期以前に、同2類のそれはI期に位置づけられる。そしてそのI期は、古・中・新の3小期に区別され、古段階には肩の張らない（頸部無文帯が未発達な）浅鉢A1が、新段階には肩が張る（頸部無文帯が発達した）浅鉢A2がそれぞれ用いられ、中段階には両者が併用されることになる。本遺跡の浅鉢はA2が主体的なので浅鉢A全体がほぼ中～新段階に位置づけられると仮定した上で、他の種・器種を見てみよう。

浅鉢B1は肩が張ることはなく、口縁部に沈線帯をもつ。佐野II式からの系譜を引くことは明らかであろう。一方浅鉢B2は頸部無文帯が確立し、体部文様帯は隆線が用いられる。これは、浅鉢A2の影響下ではじめて成立し得る特徴で、浅鉢A2の網状文等のモチーフを省略したものといえないこともない。従って浅鉢B1は古段階以前、B2は中～新段階という位置づけができる。両者の構成比1：6は浅鉢A1：A2の量比と対応しよう。浅鉢C1には明らかに二者がある。体部が丸く底部を削り出した浅鉢C1と、平底で単純に外傾して開く形態の浅鉢C1である。前者は浅鉢A2の体部と形態や成・整形が共通しており、その影響なしには成立しない。体部の丸い浅鉢C1と浅鉢C2は中～新段階に位置づくことになる。浅鉢C1の二者は小破片からは識別できないため分類上は示せなかった。

甕は浅鉢Aと異なり、I期の中での時間的変化が捉えられていない。むしろII期以降も主要器種としてI期の系譜を引く甕が用いられることが指摘され、甕B2をI期に、甕B3・B4・CをII期以降に置くという仮説〔百瀬長秀1986a〕もある。さて、本遺跡出土の甕B1は1条の細隆線をもつが、細隆線は、本来浅鉢Aの文様表出技法であり、それからの転用と思われる。しかも細隆線1条は口縁部をやや下がった位置に施されており、口縁部直下に文様帯をもつ甕B2に対して文様帯の位置にも変化が生じている。そして、細隆線上のミガキが省略されれば、容易に無文の甕Cに転化しうることになる。ここに隆線1条の甕B2→甕B1→甕Cという系列的变化が想定される。甕B2は多量に存在することからみて、甕B1成立後も存続したであろう。甕B2をI期古～新段階と幅をもたせ、B1をI期新段階、CをII期とそれぞれ位置づけることができよう。また、甕B1の成立にはI C群土器が関与している可能性もあろう。一方、甕B3・B4は隆線が沈線に退化しており、梨久保遺跡出土資料〔百瀬1986b〕からみてもII期以降に位置づけられることが予想される。故に、甕B2（I期）→B3・B4（II期）というもう一つの系列的变化が想定される。

また、甕の体部破片の中に、格子状の細密条痕が一定量捉えられており、工具の間隔があいたり方向が乱れたりする例を含めて、II期の甕の体部に似た様相を示しているものとする。甕Dは器形が浮線文系土器の甕からは導けない。条痕文系土器のII期の甕との関係が問われよう。

深鉢B・CはI期以前からの系譜をもつ深鉢に細密条痕等の要素が取り込まれて成立したと思われる。

器種 種	I A群 (2類)																	II群									
	浅鉢						甕						深鉢					壺			壺	甕					
	A1	A2	B1	B2	C1	C2	A1	B1	B2	B3	B4	B5	C1	C2	D	B1	B2	B3	B4	B5			C	B	C	D	
I期以前																											
I期中																											
I期新																											
II期																											

図228 縄文時代晩期末葉前後の土器の消長

群 器種 地区 種 ブロック	I 群																			II群				合 計																	
	I A 群															IB群		IC群		IIA群		IIB群																			
	浅鉢					鉢 C	甕					深鉢		壺		舟形 土器	甕 or 深鉢					?	浅鉢 A		深鉢 C	浅鉢 A	甕 A	壺 A	甕 B	壺 B	甕 B										
	A	A	B	B	C		A	B	B	B	B	C	C	C	D		B	B	C	B	C											D	A	B	B	B	B	B	C	A	B
1	2	1	2	1	2	1	2	3	4	5	1	2	1	2	4	5	4	5	4	5	4	5	4	5	4	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5						
K ・ L 地 区	1	3	1		1	9	2	2	1		2	1		3	2	9	4	1	1	7	2	1		5	2	3	1	4	6	17	7	9	2		2	2	1	1	213		
	2	2	2		4	11	6	3	2	4	4	5	2	1	3	2	6	4	2		1	16	5	4	(2)	1	7	3	0	2	8	9	29	11	0	1	1	2	1	328	
	3	1	1		4	1	1	1	1	4	1	2	2	2	1	2	19	1		4	2		2	5	8	1	3	4	11	7	1	1				1		156			
	4	4	1	1	8	2				2		1	2		1	3	3	15		1	3	2	1			1	1	0	1	1	7	5	2				1		123		
	5				1	1								1	1	1	10			3						4				1	15			1				1	39		
小計	6	8	1	6	3	3	9	6			7	1	1	2	4	5	5	13	14		2	2			18	7	5	1	5	20											
	14	7		48					7		1		29		132		5	4		32		11	6	3		18	7	5	1	5	20										
	75					9	167					36	17		(2)	201					325	3	1	1	4	4	3	1	1	1	1	1	1	849							
I~IV層	1		1	8	3					1	1			1	3	1	3		9	1					10	18	1	5	4	21	75						1	1	196		
J地区																																								1	
P地区	1																			1					1															8	
O地区																					1																				2
I地区																											1														2
?		1			3									4												1	2		1	6	39						1	1	1		60
合計	6	11	1	7	44	12	6				8	12	2	4	5	5	14	149		2	2					29	9	7	6	20	25										
	17	8			62		7			1		31		168		8	4		42	1	12	6	3			29	9	7	6	20	25										
	94					9	208					46	19		(2)	273					446	3	1	1	5	6	5	1	1	1	1	1	1	1118							

I A群1類は除外 ()内は破片数

接合資料等2つのブロックにまたがる土器は、両方のブロックに加え、合計数を調整してある。

表24 中島A遺跡縄文時代晩期末葉前後の土器組成表

群 器種 時期	I A 群																			IB・IC群	II群						
	浅鉢					鉢 C	甕					深鉢		壺		舟形 土器											
	A	A	B	B	C		A	B	B	B	B	C	C	D	B		B	C	B			C	D				
1	2	1	2	1	2	1	2	3	4	5	1	2	4	5	4	5											
I期	古					(+)	1				(3)	(7)	(1)	(1)		(5)				(2)			(2)	(9)	(9)		
	中~新					(6)	8	6	9		(9)	7								(3)	(1)	(6)					
II期																2	4	5	13	5	2						

ブロック出土土器の時期別個体数(種不確定の個体は除く)

表25 中島A遺跡縄文時代晩期末葉前後の土器の時期別組成表

深鉢Bは晩期中葉以来の伝統的器種だが、甕Bの成立以後は主要器種から後退してゆくらしい。その変化も甕Bに追随するだけのようである。深鉢Cは主要器種の1つで、本来装飾要素に乏しいが、本遺跡では大半が口端部に連続圧痕をもつという特徴がある。I A群は口端部に口外帯→圧痕付小突起という変化をたどる装飾要素を持つのが伝統なので、連続圧痕はむしろII群の条痕文系土器のII期の装飾要素に端を発

してはいないだろうか。しかし、深鉢Cは梨久保遺跡等にみられなかったため、II期まで存続するかどうか疑問な点もある。現状では連続圧痕が施された深鉢Cは、I期新段階～II期の間に幅をもたせて位置づけておきたい。

I B・I C群については、時間的には単一相を示すと思われ、I期に位置づけてよいだろう。II A群は、I期の条痕文土器の特徴をよく示しているが、I期の中での新旧については言及し得ない。II B群については、この資料だけでは時間的位置は不明である。

以上の検討から、I A群1類はI期以前に、I A群2類は3区分されてI期古段階とI期中～新段階及びII期に、I B・I C・II A群はI期に位置づけられる可能性が示された。このうち、II A群にII期の資料が皆無な点は、I A群2類の位置づけに整合的でない。最後に各群・各種の位置づけ試案を図化して示しておこう(図228)。

(カ) 器種構成

器種構成は各ブロック間で大きな差がないことが示される(表24)。種の片寄りや時間的片寄りのない等質的ブロックであるため、K・L地区の総出土数でみた種別構成比をもって、全体の代表とさせてよいだろう。K・L地区での時期別の各種の構成は、I期とII期の間で大きく異なっている。すなわち、浅鉢の衰退がII期の特徴だがこうした変動は先学が既に指摘する所である。一方II期はII群土器の欠失により、壺がほとんどないという独自の様相も示している。この時期は遺跡毎に土器の様相が異なる可能性もあり、いまだ資料の蓄積を待って組成を論じたい。なお、稲粃を含めた種子圧痕のついた土器は、近年各地で発見されている。本遺跡の資料も注意してみたが1点も発見できなかった。

以上断定的な表現で土器を分析してきたが、その位置づけ等については1つの試案にすぎない。検証作業を課題としたい。

イ. 石器(図229～233、表26～35)

既に述べたように、ブロック出土の石器はほぼ一括資料と理解してよく、I～IV層出土石器は混入品を含むものの該期の石器のあり方を反映してくれる資料だと考える。ブロック出土の石器を中心に、その概要を説明したい。

(ア) 石鏃

98点出土したが、ブロック出土資料は41点にとどまり決して多いとはいえない。ブロック出土の石鏃は、チャート製の無茎凹基石鏃2点を除き黒曜石製である。ブロック外出土の57点も、チャート製4点(214・220)と頁岩製1点を除いて黒曜石製である。とりわけ有茎石鏃は18点のうち頁岩製の1点以外は黒曜石が用いられていた。こうした石材の選択はVI層出土資料と際立った違いを見せている(表27)。黒曜石は概ね良質で挟雑物は少ない。

該期の石鏃の形態上の特徴として、まず有茎石鏃の多さが指摘されている。ブロック出土資料の有茎対無茎の量比は10対28、ブロック外出土資料では8対38で、有茎石鏃は少なくないが、該期には有茎石鏃が過半を占める遺跡も知られており、それに比べれば特別に多いわけではない。次に側縁部に張りをもたせて稜をつくる飛行機鏃(有茎)や五角形鏃(無茎)の存在が知られている。本遺跡でも出土しているが、典型的なものはない。全体が不整形で稜が目立たなかったり(168・227)、先端近くが張り出すが稜というには甘かったり(228)、かえり部分付近が張り出すに留まったり(115、169、216、229)しており、シャープさに欠けるものばかりである。これらを含めて飛行機鏃は9点、五角形鏃は1点あり、その内ブロック出土資料は飛行機鏃4点である。有茎石鏃の半数は一応飛行機鏃となるわけで、特徴的であることは確かだ。また石鏃の側縁部が鋸歯状に加工されるという特徴も知られている。本遺跡の資料中には、側縁全体が鋸歯状に加工される例はないが、部分的に鋸歯状を示すものは有茎石鏃の約半数を占め、無茎石鏃にも若干

種類	石器					器										石					
	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃	石鏃
無差	有差	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
地区 プロジェクト	1	3	1	1																	
	2	6	5																		
地区 プロジェクト	3	9	2																		
	4	8	1	2																	
	5	6	1																		
	6	28	10	3																	
	7	41																			
合計	18	168	11	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
地区 プロジェクト	8	38	8	11																	
	9	38	8	11																	
地区 プロジェクト	10	18																			
	11	41																			
地区 プロジェクト	12	18																			
	13	41																			
地区 プロジェクト	14	18																			
	15	41																			
地区 プロジェクト	16	18																			
	17	41																			
地区 プロジェクト	18	18																			
	19	41																			
地区 プロジェクト	20	18																			
	21	41																			
地区 プロジェクト	22	18																			
	23	41																			
地区 プロジェクト	24	18																			
	25	41																			
地区 プロジェクト	26	18																			
	27	41																			
地区 プロジェクト	28	18																			
	29	41																			
地区 プロジェクト	30	18																			
	31	41																			
地区 プロジェクト	32	18																			
	33	41																			
地区 プロジェクト	34	18																			
	35	41																			
地区 プロジェクト	36	18																			
	37	41																			
地区 プロジェクト	38	18																			
	39	41																			
地区 プロジェクト	40	18																			
	41	41																			
地区 プロジェクト	42	18																			
	43	41																			
地区 プロジェクト	44	18																			
	45	41																			

() 現存量(8) 接合資料等2つのプロジェクトにまたがる遺物は、両方のプロジェクトに加え、合計数を調整してある。

表26 中島A遺跡石器組成表

存在する。

石鏃は、素材段階の剝離面や自然面をあまり残さない石器だが、本遺跡には加工不十分な石鏃が少なくない。素材の反りをそのまま残したり(235)、断面形を扁平にできなかつたり(222)、左右非対称だつたり、特に小形で加工が不十分なもの(117)を含め、不安定な素材を用いている石鏃は28点にのぼる(表28)。これらの中には未成品も含まれているが、すべて黒曜石製であつた。

石鏃の大きさを図229に示した。全資料を通じてチャート製の無茎石鏃が相対的に大きいことが知られている。

石鏃の欠損について、その部位よりも欠損面の観察を重視すると、表29のようにいくつかのタイプがあることがわかる。特に名称を与えないが、欠損を大きく縦方向と横～斜方向に区分し、欠損面で知られる力のかかり方を、上下面側からと縁辺側からとに分けてみた。縁辺側から加わつた力で縦方向に欠損したものは使用による欠損の可能性が高く、他はアクシデントや廃棄・埋没後の欠損の可能性の方が高いと思われるが、前者は、わずかしか存在しない。欠損した資料の中に接合例が1点あつた。83がそれで、3号・4号ブロックに分かれて12m程離れて出土した。縁辺側から加わつた力で縦方向に欠損しており、先端部は未加工で古い節理面が残っているが、使用できないことはないだろう。使用によって欠損した可能性は高いとみてよい。

(イ) 石槍

4点出土し、うち2点が5号ブロックに属している。この2点(199)はVI層最上位出土の可能性もある。199は黒曜石製で先端を欠き、他1点はチャート製で基部は若干抉られて凹基になる。232はブロック外出土品でチャート製である。

(ウ) 石錐

13点あり、ブロック出土は6点(88、89、120～122、186)である。つまみの付くタイプは5点、つまみがなく棒状のタイプは8点だが、ブロック出土資料はすべて後者である。棒状タイプの多さは時期的な特徴であろう。つまみの付くタイプはチャート製が2点、棒状タイプは1点(121)で、他は黒曜石製である。棒状タイプのうち121は例外的だが他は概ね長さ2～3cm、径7～12mm程で、錐部先端はさほど尖らずむしろ丸いが、磨耗が認められる例が多い。錐部の断面形は三角形、または菱形となるようだ。

区分 ブロック・層	無茎		有茎		?	計
	凹基	平基	凹基	平基		
I～IV層	29:3	6:	4:	4:	10:	53:3
ブロック	22:2	4:	8:	2:	3:	39:2
VI層	10:6	:2	:	:	:	10:8

表27 中島A遺跡石鏃の石質表 黒曜石：黒曜石以外

区分 ブロック・層	無茎		有茎		?	計
	凹基	平基	凹基	平基		
I～IV層	9/32	2/6	1/4	1/4	4/10	17/56
ブロック	5/24	1/4	2/8	2/2	1/3	11/41
VI層	0/16	0/2				0/18

表28 中島A遺跡不安定な素材を用いた石鏃の比率 $\frac{\text{不安定な素材数}}{\text{総数}}$





層 ブロック	欠損					
					(完)	
I～IV層	24	3		2	3	24
ブロック	18	3	1	1	1	17
VI層	3				2	13

表29 中島A遺跡石鏃の欠損表

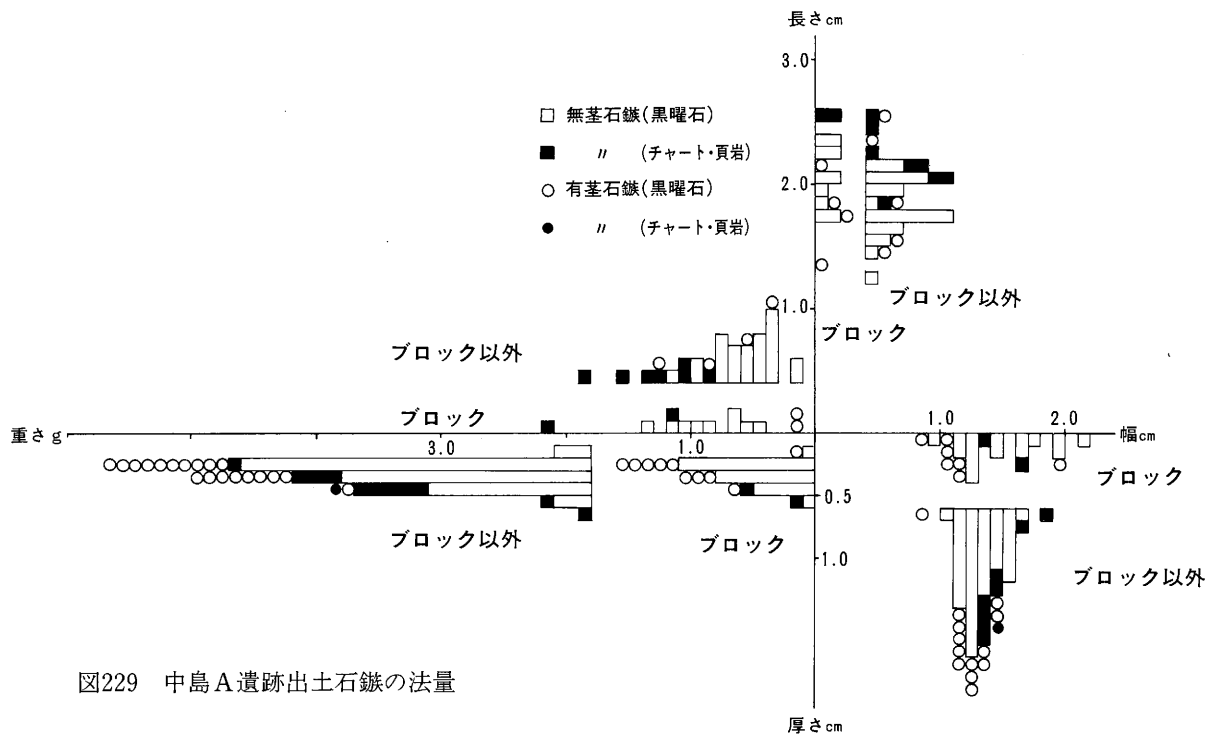


図229 中島A遺跡出土石鏃の法量

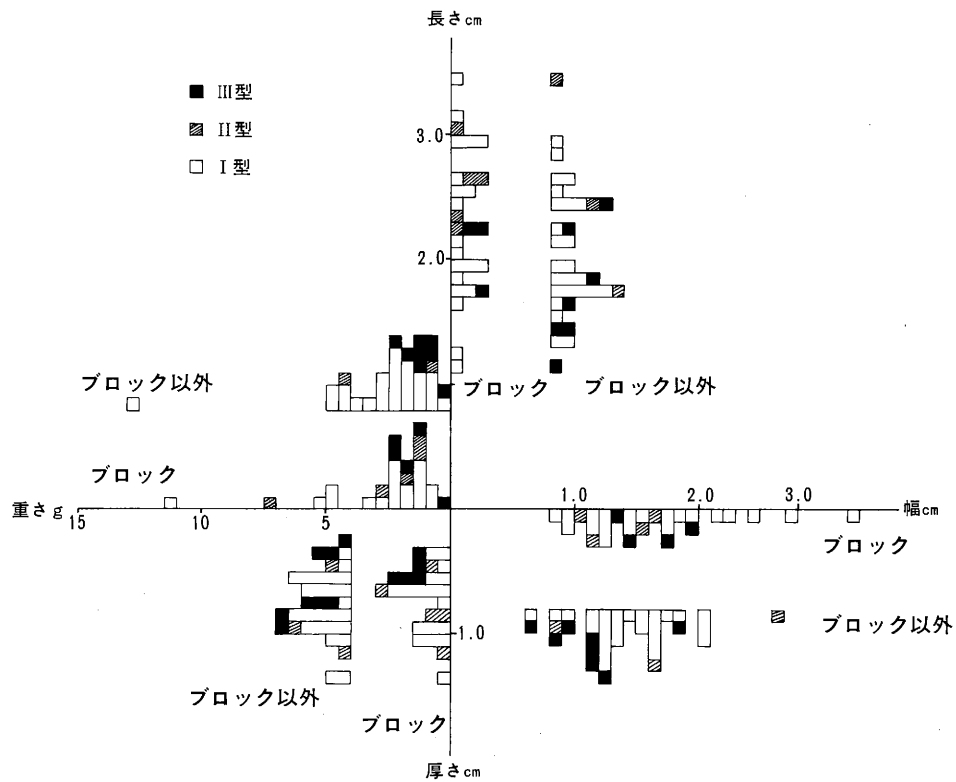


図230 中島A遺跡出土ピエス・エスキューの法量

(五) 石匙

3点のうちブロックから出土したのは1点(200)である。200は縦形で黒曜石製、片面加工だが刃部に厚みがない。つまみ部のみ両面加工される。238は横形でチャート製、200と同様の製作方法で、つまみ～背部は両面加工される。2点とも素材のバルブをつまみに利用している。

(オ) スクレイパー

21点のうちブロックからは11点(170、187)出土し、特に3号ブロックには6点(170)とややまとまっている。片面加工と両面加工の比は13対8、黒曜石製とチャート製の比も13対8である。ブロック出土資料は片面加工、両面加工半々で、石質も半分ずつとなる。245は完形品で、同様な小形の完形品が若干ある。長径3cm程度の小さな剥片を素材としているが、243などのように偏平で大きな剥片を素材とする例もあり、刃部も角度のある厚いものから小剥離痕に近いものまでバラエティーに富む。形態、大きさ、刃部の状況等からみていくつかのタイプがありそうだが、欠損品が多く全体像が判明しにくかった。

(カ) ピエス・エスキュー

52点中28点がブロックから出土した。北海道聖山遺跡の資料で示された3分類〔阿部朝衛1979〕に従えば、I類(2ヶ1対の刃部をもち、素材の面を大きく残す。)が60%で、残りはII類(I・III類の両側縁を刃部とする。)とIII類(2ヶ1対の刃部からの剥離面が全面をおおう。)が半々、碎片も4点ある。石質は大半が黒曜石を用いており、チャート製は244ほか2点しかない。タイプ別に法量を示したが(図230)、II類はばらつきが多く、III類は小さめである。ブロック資料で分類を示すと、I類は91、92、125～127、130、132～134、172～175、188～191、201、II類は124、128、176、III類は90、129、131で、123はII類の碎片であろう。

(キ) 小剥離痕のある剥片

310点あり、ブロックからは187点出土した。第4節大洞遺跡で示された分類に従うと、1類(一定の大きさの小剥離が連続する。)は123点(294～300)、2類(大きさが一定しない不連続な小剥離をもつ。)は159点(301～308)、その他28点、このうちブロック出土資料は、それぞれ70点、104点、13点となる。その他の28点にはドリルやスクレイパーに近いものが含まれている。すべて黒曜石製で、剥片の形状、大きさは不定である。量は多いものの分析視点が確立できていない。課題の多い石器といえる。

(ク) 打製石斧

234点あり、うちブロック出土は149点である。これは小剥離痕のある剥片を除いた定形的石器の約半分に当たる数である。また、打製石斧の製作や再加工時に生じた、表面に規則的剥離面があったり磨耗がみられる小さな剥片(以下小剥片と略称)が116点(うちブロック出土資料76点)ある。数量が多いだけに統計的にも有意な資料であろう。打製石斧は後述する横刃形石器や局部磨製石斧との判別が難しい場合がある。そのため、これらの他器種を定義する刃部や研磨が確認できない個体は、打製石斧に加えた。従って打製石斧の数は実数を若干上回っている可能性がある。

打製石斧は様々な観点から分類が試みられてきたが、記述の便を図る分類にはなっても、型式学的検討には必ずしも有効な基準をつくれていないようだ〔斉藤基生1985〕。本遺跡の資料も有意な基準を示せるわけではないので、独自の分類は避け、分銅形、撥形、短冊形の一般的形態分類を用いることにする。しかし、この分類も撥形と短冊形の境界を截然と画するのが難しい。視覚的だが刃部付近の両側縁が明らかに広がるものだけを撥形としたので短冊形が多数となった。また分銅形は1点も発見されなかった。

次に法量を形態別にグラフ化した。欠損品が多く重量や長さのわかる資料は少ないが、幅や厚さは比較的データが得やすかった。もっとも接合資料や小剥片にみられる再加工品の存在は、こうした数値が絶対的なものではなく、特に長さや重量については、廃棄時の長さ・重量でしかないことを示していると思われる。さて、図231の4種の数値の分布からみて、大形品が1つにまとまる可能性が見い出される。具体的には160～163、196、285、286、320などがそれぞれ長さ120cm、幅7.0cm、厚さ2.4cm、重さ200g付近を境にして、こうした大形品が存在しているが、これらは法量分布の曲線からはみ出した位置にある。また4種の数値には相関があり、長い個体は幅広で厚く、重いようである。そして、これら大形品の中には撥形の割合が高いことも注意される。ところで、下伊那地方を中心に知られる弥生時代の石鋏は、飯田市石行遺

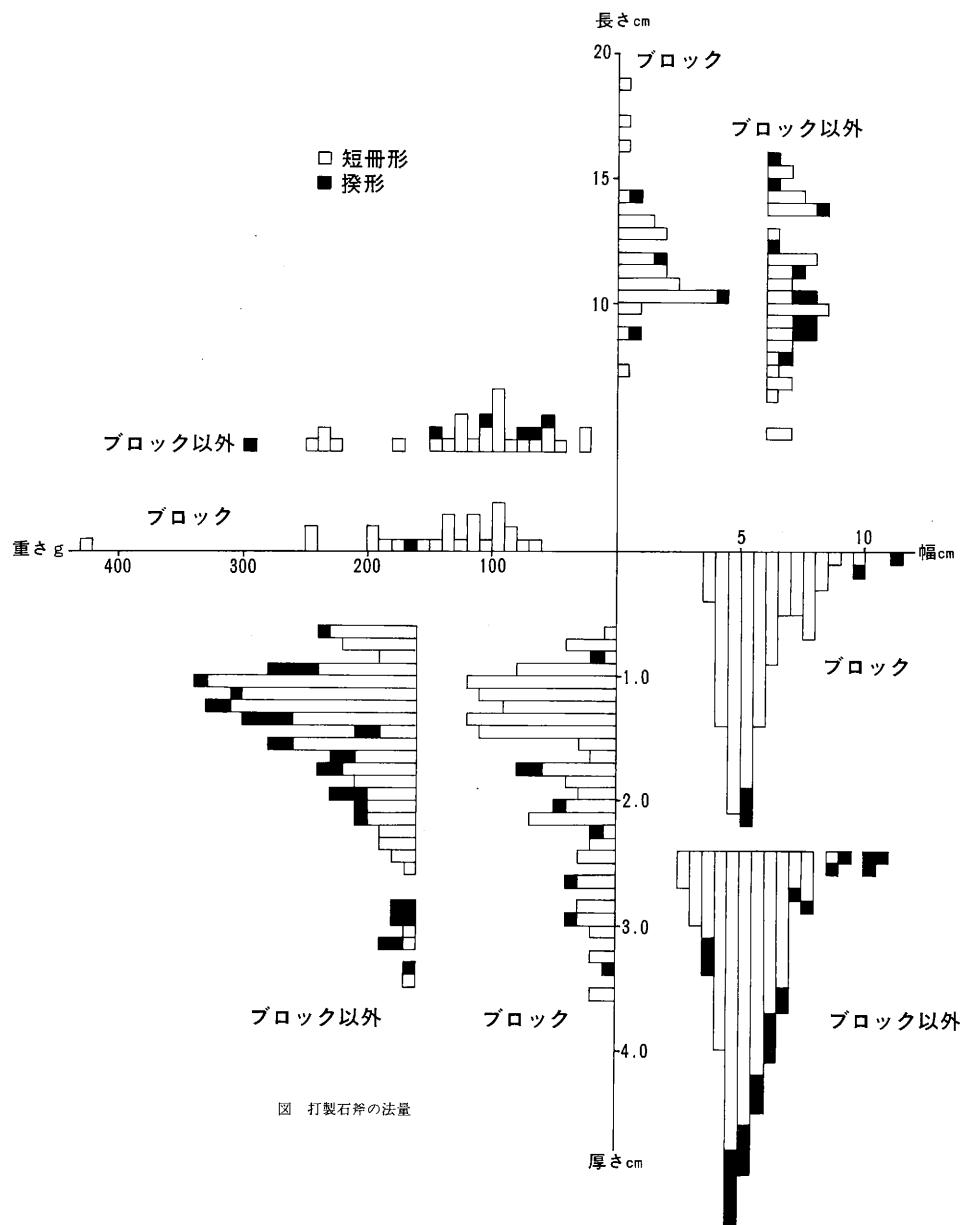


図231 中島A遺跡出土打製石斧の法量

跡の資料等からその起源が縄文時代晩期末葉まで遡る可能性が出てきている（小林正春氏教示）が、それらは本遺跡の大形打製石斧とあまり違いがない。大形打製石斧の性格を考える上で示唆的な事実であろう。

石質は8種類に区分できたが、いずれも岡谷市周辺で入手可能である。在地の石材を使用しているといえよう。素材を円礫・石核と剥片とに分け、石質との相関を示したのが表30である。石質による素材の差は認められないが、緑色片岩だけは円礫・石核が用いられていない。黒色泥岩製が約半数を占めるが、安山岩等一般にあまり用いられない石材も存在する。

素材を円礫・石核と剥片とに分け、自然面、剥離面、節理面等の有り方を見たのが表31である。円礫・石核を素材とするものの中では、両面に自然面を残し、縁辺だけ加工する例が目立った。剥片を素材とするものには縦長剥片が多いが、節理に沿って割れて縦・横の判断ができない例も少なくないし、主要剥離面の反対面（表面）も同様の節理にそった剥離面である例もある。後述する欠損の特徴ともども、黒色泥岩や片岩類を主体とする石材の質に規定された剥片のあり方といえるだろう。

次に製作上の特徴を刃部・基部・側縁部について観察した。刃部の形状は外湾、内湾、斜と多様だが、

石質	打製石斧			小剥片
	円礫・石核	剥片	?	
珪質・砂質片岩		3 (6)	(1)	1 (4)
緑色片岩		9 (37)	1 (3)	2 (11)
泥質片岩	1 (1)	20 (52)	2 (5)	4 (14)
砂岩	(3)	6 (17)	2 (5)	4 (5)
黒色泥岩	2 (7)	56 (232)	9 (42)	48 (105)
凝灰質シルト	(1)	7 (33)	2 (6)	8 (20)
変質安山岩	2 (3)	12 (40)	(8)	7 (14)
安山岩	3 (3)	5 (14)	(2)	2 (8)

表30 中島A遺跡打製石斧の石質表

面	剥片			面	円礫・石核
	縦長	横長	節理		
自然面	13(43)	10(21)	10(20)	両面自然面	3 (7)
節理面	5(12)	3 (5)	11(25)	両面剥離面	2 (4)
剥離面	10(25)	3(10)	8(14)	自然面+剥離面	1 (3)
				節理面+剥離面	2 (4)

表31 中島A遺跡打製石斧の素材表

刃部	基部						
	加工			未加工		?	
	両面	片面	刃つぶし	折り	他		
加工	両面	2 (9)	6 (8)	(1)	(4)	19 (34)	34 (77)
	片面		(2)		(1)	6 (11)	7 (20)
	未加工	(1)				2 (11)	3 (8)
	?	8 (14)	6 (15)	(2)	1 (3)	35 (74)	14 (52)

表32 中島A遺跡打製石斧の加工表

あり方位置	両縁		片縁	なし
	対	対ならず		
基部寄	17 (36)	3 (5)	16 (33)	14 (39)
刃部寄	1 (3)	1 (1)	(5)	

欠損品を除く（おおむね完形品のみ）

表33 中島A遺跡打製石斧の側縁加工表

7割までが両面より調整されて両刃となり、片面調整の例にしており、片面調整の例にしても刃角や厚さは両面調整のそれと違くない。また、刃部・基部には縁辺加工を施さないものも少なからずある。刃部未加工品は剥片または円礫の一縁辺がそのまま刃部とされ、磨耗痕が残されるものもある。基部は折り取ったままのものも含めて未加工例が多く、7割近くなる。基部の加工は着柄に特別有利ではないのだろう（表32）。

さて、側縁部は両面加工が基本だが、小さなノッチや縁辺の刃つぶし、敲打等が残される場合が多く、実測図中にも示した。着柄の便を図った加工と思われる、両側縁の状態がわかる個体についてこのような加工のあり方を集計した（表33）。必ずしも両側縁の対応する位置にノッチや刃つぶしが存在するわけではないが、着柄時の緊縛には左右対称のノッチや刃つぶしは必ずしも必要ではないだろう。しかし、ノッチや刃つぶしが、刃部近く残されていたり、あまりに左右非対称の位置にある場合は、性格づけが難しい。以上の観察から製作技法には、とり立てて変わった点を認めることはできない。伝統的な方法を踏襲しているといつてよいだろう。

欠損の仕方についての観察結果は表34に示した。平面的には、大まかに、刃部の小欠損、刃部以外の欠損、縦方向の欠損に分け、断面からみれば縦位の欠損と横位の欠損とに分け、組み合わせた。刃部の小欠損、縦方向の欠損、刃部以外の欠損のうち断面からみて縦位の欠損は使用に伴って生じた可能性がある。これらは欠損品の半数近くにはのぼるが、節理に沿って割れやすいという石材の質からみれば、使用に伴う欠損の可能性が高いとは言い切れない。欠損品残存部分の刃部、基部の割合は60対57であった。

接合例は26点あり、そのうちブロック出土資料が19点を占めた。接合の仕方を見ると、打製石斧本体と

断面	平面	完形	刃部欠損	刃部以外欠損	縦方向の欠損
		23 (52)			
			6 (20) 5 (9)	14 (36) 12 (29)	
			5 (8) 3 (6)	30 (78) 35 (77)	2 (5) 5 (9)

上段 基部側が残る打製石斧
 下段 刃部側が残る打製石斧
 () は遺跡出土総数

表34 中島A遺跡打製石斧の欠損表

両面磨耗		片面磨耗	縁辺磨耗				基部
均等	不均等		刃部+側縁	刃部	両側縁	片側縁	
28(65)	8(21)	6(11)	6(15)	10(14)	(1)	(1)	3(4)

() は全出土点数

表35 中島A遺跡打製石斧の使用痕表

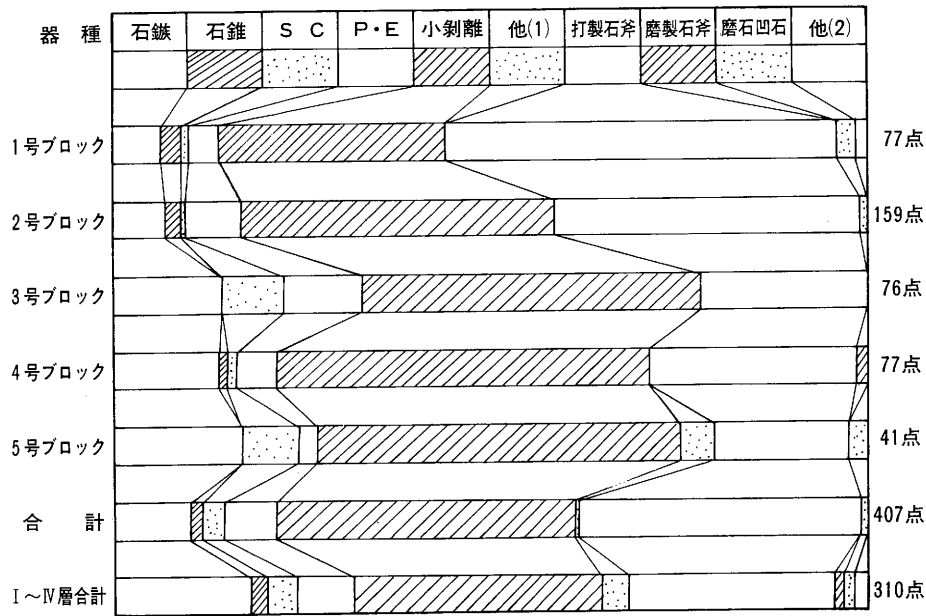
るか埋没後の欠損の可能性が高いが、刃部に打撃が加わるような使用方法や、着柄してねじったりこじたりする使用方法があれば、このような欠損も生じうる。節理に沿って剥落した本体どうしの接合は、それぞれの剥片が小さく、完形に近い形に復元できた例がないため、粉々に砕け散った状態で棄てられたものとみられる。石質に規定された破損のあり方と思われ、力の加わった方向は全く読み取れない。

顕著な磨耗については実体顕微鏡で観察し、実測図中に示すとともに、表35に集計した。磨耗のうち微細な線状痕はすべて刃縁と直交方向(縦方向)に観察された。面的な磨耗は刃部寄りの稜線上等の突出部で著しく、両面に認められる例が多かったが、その範囲や程度にはある程度片寄りがみられた。その程度差を示す方法がないが、着柄方法によって片寄りや生じるのであろう。一面が前主面、他が後主面といった用いられ方ならば面によって顕著な差が生じてよいが、本遺跡の資料からは、両面の差はむしろ小さいことが看取された。刃部の縁辺は磨耗が最も顕著で、基部や側縁部にも若干の磨耗がみられた。

小剥片は、加工または再加工の際に生じたか、欠損の結果と考えられるが、使用して欠けた小剥片をいちいち廃棄場へ運ぶとも思われないので、加工、再加工によって生じたものが大半ではなかろうか。磨耗をもつものが23点もあり、ノッチや刃つぶしも観察できることから、再加工に関係した小剥片や、ある程度使用したのち欠損した小剥片が多かったとみてよい。接合資料からは、刃部、側縁部の欠損・再加工が確認できる。

打製石斧について観察した結果、その量の多さ、大形品の存在、在地的石材選択、伝統的製作方法、再加工のあり方等が指摘できた。なお、接合資料や小剥片には今後特に注意を払うべきであろう。

小剥片との接合が9例(82、93、94、135~137、159、257)、折れた本体同士の接合が12例(81、94、95、138~140、142、258、259)、節理に沿って剥落した本体同士の接合が7例(136、141、257、279)となるが、1個体で2種類の接合の仕方がみられるものもあるため、数が合わなくなっている。小剥片と本体との接合は、確実に加工または再加工の結果だとみてよく、小剥片に磨耗が残る93、94、137はまちがいがなく再加工であろう。こうした接合部位は刃部も側縁部もある。本体どうしの接合は、断面からみて横位の欠損ばかりで、欠損は表(裏)面と直角に折れている例がほとんどであるが、94や142は斜めに角度をもって折れている。力の加わった方向はわかりにくいですが、刃部側か、表・裏両面側からが多いようだ。アクシデントによ



S・Cは石匙とスクレイパーの合計、P・Eはピエス・エスキュー、小剥離は小剥離痕のある剥片、他(1)は石槍・その他の石器の合計、他(2)は横刃形石器・礫器・砥石の合計

図232 中島A遺跡ブロック別石器組成図

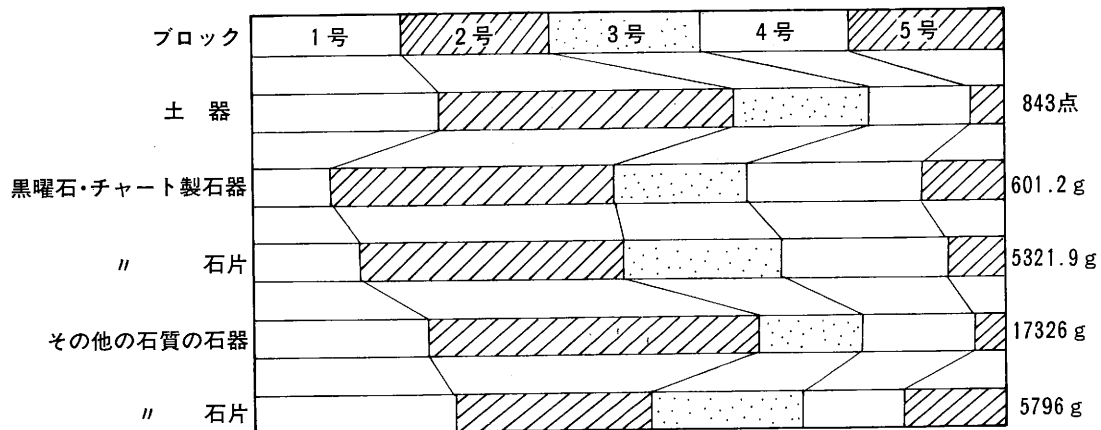


図233 中島A遺跡ブロック別遺物出土量

(ケ) 横刃形石器

2点あるがブロックからは出土していない。他地区出土品を参照すれば、石質は打製石斧と共通する。横長の剥片を素材とすることが多いようで、長辺の一方が加工の有無を問わず鋭い刃部となり、他の長辺や側縁は素材自体が面をもつか刃潰しをし、背部・側縁部とする。刃部に磨耗が残る例は少ないようだ。

(コ) 磨製石斧

5点のうちブロック出土資料は黒色泥岩製の定角式磨製石斧1点(198)だけである。他は緑色片岩製だが、小破片ばかりのため、内容を問えない。

(カ) 礫器

縦長で厚い剥片の両端を打ち欠いた石器1点(287)を礫器としたが、ブロック外出土である。変質安山岩製で、片面は自然面のままである。

(シ) 磨石・凹石

10点あり、半数がブロックから出土している。安山岩・砂岩・花崗岩の円礫を素材にしている。欠損品

が多く、特に説明を要するものは見当たらない。2号ブロックから出土した特殊磨石の破片は、混入品の可能性がある。

(ス) 砥石

1号ブロック出土の1点(109)のみであるが、包含層の上位から出土しており、後世の混入品の可能性もある。砂岩製で偏平な円礫の両面を砥面としている。いわゆる石庖丁様石器とは異なる。

(セ) その他の石器

黒曜石製で器種判別のできない石器が9点あるが、ブロックからは出土していない。小剥離痕のある剥片とも異なる。

(ソ) 剥片・石核・原石

多量に出土しているが、剥片については石器の素材になりそうな小形品を除いてある。観察が十分でないため、全体量を示すだけに留めるが、1号ブロックでの出土量の少なさが特徴的である。

(タ) 石器群の組成

組成比を問うには絶対数が不足する器種が多いので、大まかな傾向をつかむ程度に留めねばなるまい。

ブロック別に石器組成を見ると(図232)、それぞれ特徴はあるものの有意差があるとは言いきれない。ただ1号ブロックは土器に比べ黒曜石・チャート製の石器がかなり少ない。石鏃、ピエス・エスキュー、小剥離痕のある剥片等まとまった量のある器種すべてが相対的に少なく、同材質の石片も少ないことが指摘できる。

全体として該期の石器組成を見るならば、伝統的な打製石斧が卓越すること、石鏃の比率が低下すること、石鏃、ピエス・エスキュー、スクレイパー類、小剥離痕のある剥片が安定して存在すること、横刃形石器、磨製石斧、磨石・凹石、石皿等はほとんど消滅に近いこと、大陸系磨製石器はまだ組成に加わらないこと、等があげられる。石鏃の減少と横刃形石器以下の欠落以外の事実は、該期に一般的な事柄であろう。

ウ. 土製品・石製品

土製品は土偶4点(ブロック出土3点)、石製品は玉3点(ブロック出土3点)である。いずれも該期に属するとみてよいが、特徴的なのは土製円板と石剣、石棒の類が皆無なことで、土器の検討の結果得られた遺跡の時間的位置づけからみて、興味深い事実である。土偶、玉は分類するに足る資料ではないので個別に記述したい。

土偶の胎土はIA群土器にほぼ一致する。成形は土器の擬口縁に似た接合部分が観察されることから「分割塊製作法」(小野正文1984)によるのかもしれない。表面は部分的に軽いケズリを用い、ナデで整形する。

106は1号ブロック出土で頭部が完全に残っている。顔面を平坦にし、頭部は円錐形に後にのぼし、頭頂部、後頭部、耳部に別途粘土塊を貼付して成形する。顔面には眉と鼻を「T」字状に粘土紐を貼付して一気に表現する。目は浅く横位に削ってくぼめ、鼻孔2つは細い工具で刺突する。口は目と同様横位に削ってくぼめ、貼付した耳朶中央には顔面側から後頭部方向に鼻孔と同一の細い工具で孔を貫通させる。眉から頭部にかけて縦位の細い沈線を連続して加えて頭髪を示し、両頬に数条の細い沈線を加えて入墨を表わす。顔面全体は赤色塗彩される。頭頂部から後頭部の粘土貼付は髪形の表現だろうか。以上のような頭部表現は浮線文系土器や条痕文系土器に伴う土偶では一般的であると言えよう。

110も1号ブロックから出土した。体部上半で、両腕が完全に残る。体部から両腕を弧状に垂下させ、肩と肘付近とに粘土紐を巻きつけて成形する。正面と背面の区別は全くつかない。体部は中央に縦位の浅い沈線を引くだけで他には何も表現しない。腕は先端が丸く指の表現はない。肩よりも肘に巻きつけた粘土の方が大きい。ともに1及び3列の列点を加える。列点という手法は293とも共通し、この時期にはよく

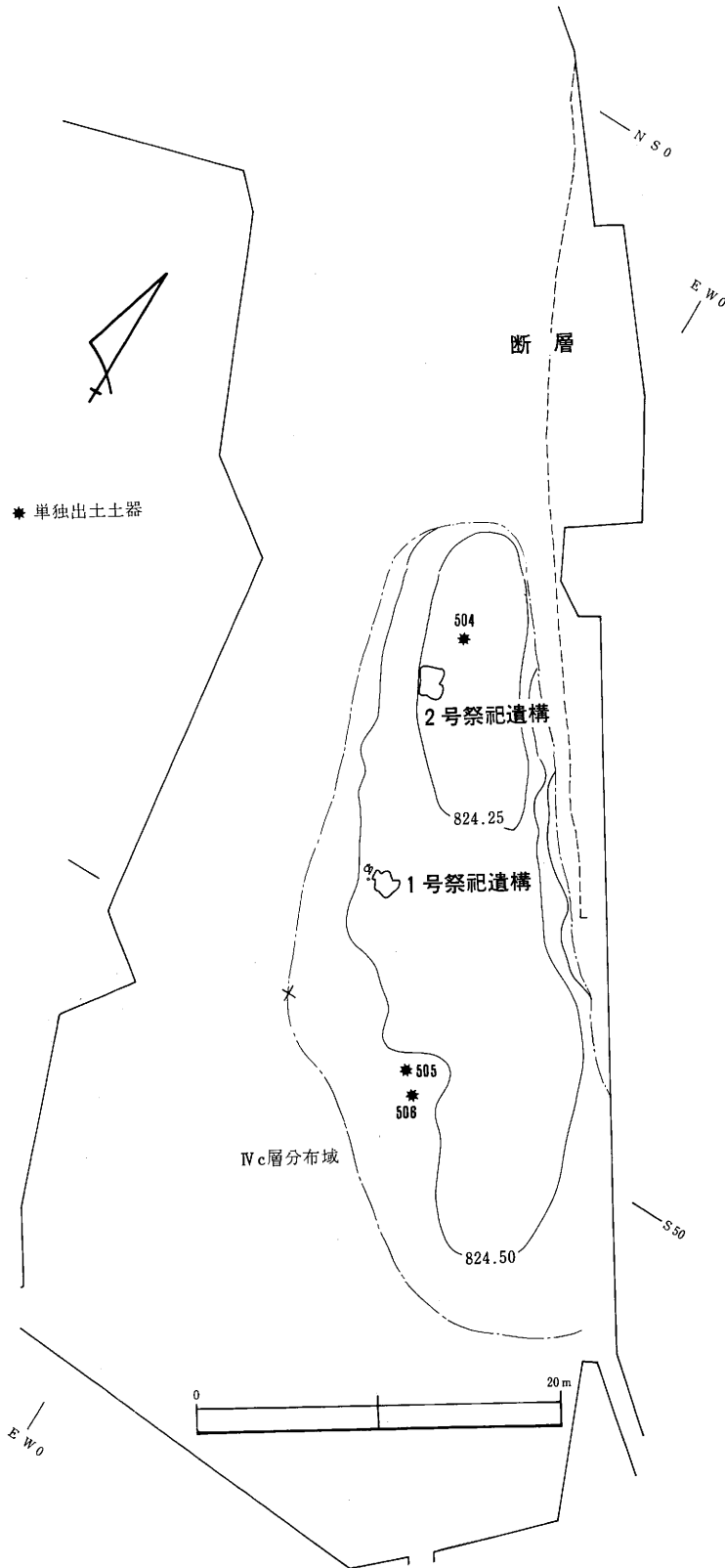


図234 中島A遺跡K・L地区弥生時代の遺構配置図(1:400)

(7) K, L地区 弥生時代の遺構と遺物

① 低湿地の状況(図234)

低湿地中央に堆積したIVc層上面から上位にかけて、弥生時代中期初頭の祭祀遺構2基と単独出土完形

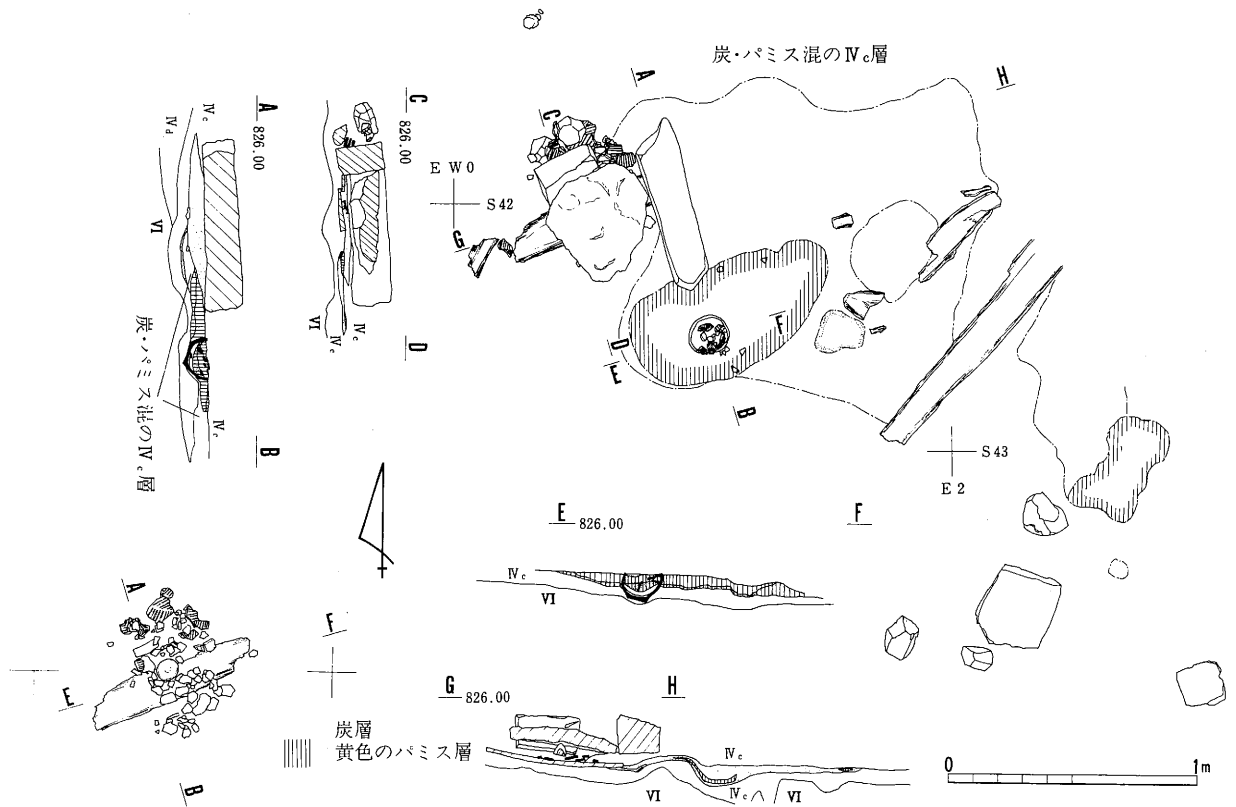
みられる。

165は2号ブロック出土で、頭部を欠失するが他は完形である。板状の体に手、足、頭を貼付したとみられる。体部中央に110と同様の浅い縦位の沈線を加える。脚の付根でこの沈線が広がるのが正面、体部下端で終るのが背面だろう。他に装飾要素はない。

293はブロック外出土で、体部上半を欠き、脚部先端も剥落するが下半身には大きな欠損はない。板状の体部に大きく張りだした腰及び腰からわずかに垂下させた脚を付している。体部中央には正面のみ縦位の浅い沈線を加え、その下端は脚に沿って広がっていて、165の表現方法と共通する。張り出した腰部には細い円形の工具で3列の列点を加える。

玉の石材はいずれも蛇紋岩に似ているが特定できない。横断面が三角形を呈しており、左右で厚みが極端に異なっている。中央には2.6~3.3mmとほぼ同大の孔が両面から穿孔されて貫通する。平面形は不整円または楕円である。三点ともおおむね相似形といってよいだろう。全面研磨をうけている。

108は一番大きく、4.2gある。最も太い部分に2条の溝が刻まれる。他の2点はほぼ同大で107が0.5g、203が0.8gある。特別な装飾はない。107、108が1号ブロック、203が5号ブロックから出土している。



下部構造

上部構造と断面

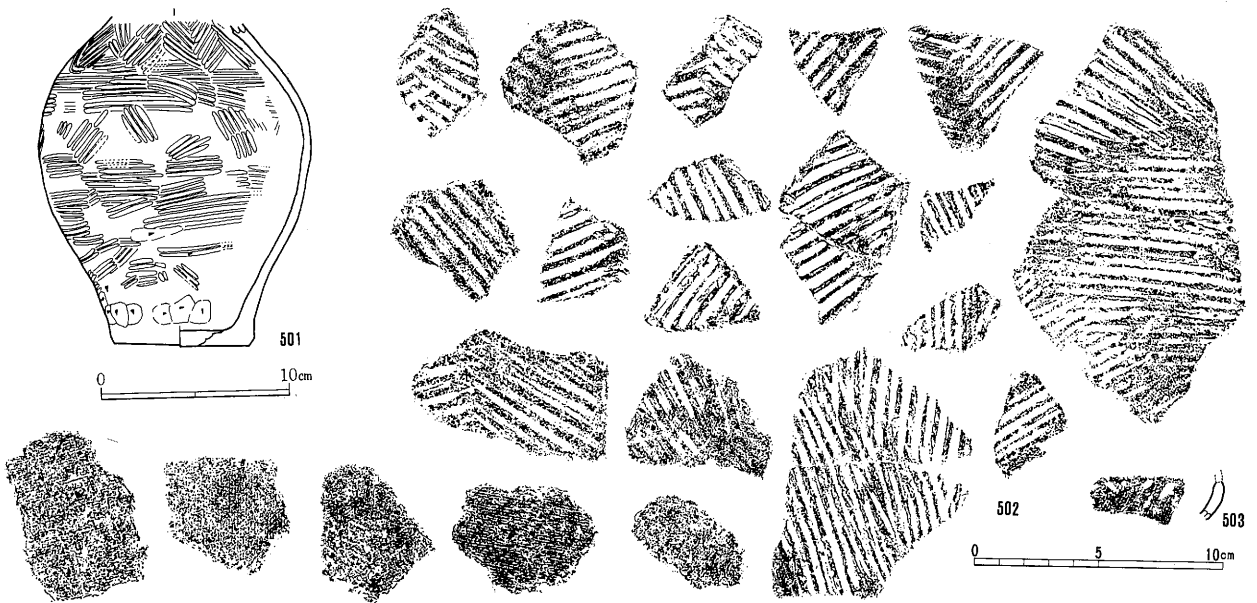


図235 中島A遺跡1号祭祀遺構実測図(1:30)及び出土遺物実測図・拓影

(501 1:4、502,503 1:3)

土器3点が発見され、土器片や石器が若干得られた。IVc層は南北40m、東西20m弱の範囲に堆積するが、遺構や完形土器はその西側の縁辺～中央にかけて存在した。IVc層は泥炭を主体としているが、遺構が存在することからみれば少なくとも乾燥する季節には滞水状態にはなっていなかったようだ。遺構、遺物は土器1型式の時間幅に納まるとみてよい。

② 1号祭祀遺構 (図235)

S42・E1付近のIVc層上面に構築されている。遺構は2つの部分からなる。1つはパミスを敷きつめて壺を埋置する「パミス敷部分」で、もう一つは下部に遺物を敷き上部に礫を配した「配石部分」である。パミス敷部分の端に配石部分が載っているが、両者の間に間層は全くなく、伴出遺物も同時期であることから、両部分は連続して構築された一体の遺構と判断した。

パミス敷部分は、75×45cmの楕円形の範囲に、まず1～2cmの厚さに炭を、次いで5cm程の厚さにパミスを敷きつめる。炭直下のIVc層には焼けた形跡はない。パミスとしたが、これは鮮黄色のパミスあるいは凝灰質の泥で、土壌化しておらず、塩嶺累層に乗る古い火山灰層から採取されたようだ。炭、パミスとも低湿地中央側に流れ出し、径1.5m程の範囲に拡散する。パミス敷部分のほぼ中央に、口縁部を欠失した小形の壺(501)が1点、やや傾いた正位に埋置される。壺の底部はIVc層中まで達しており、壺の外面に沿ってパミスや炭の層が下位のIVc層中に落ち込んでいる。敷きつめられたパミス・炭を後から掘り込んで土器を埋置したため、崩れたパミス・炭が穴の底に入ったのだろう。壺の口縁部は埋設前に打ち欠かれていたと思われるが、残った部分の上端もパミスの上面にそろっており、壺内部には壺の肩部破片が混入している。埋設後に高さの調節のため、さらに打ち欠かれたのではないか。壺の底部も内面側から打ち欠かれて径1.5cm程の孔があいている。埋設前の穿孔である。壺内部にはIVc層が若干転落し、その上に炭、パミスが順番に充填される。

配石部分はパミス敷部分の北西端直下につくられるが、下部構造と上部構造にわけられる。下部構造はまず15×70cm、厚さ1.2cmの板を東西方向に敷く。次にその上を中心に、風化の著しい土器片(502、503)を板とほぼ直交するよう南北方向に帯状に敷きつめる。土器片は末端で若干重なるが、1枚だけ敷くのが原則のようだ。但し、北側のはずれに3枚折り重なる部分があるが、これは上部構造をつくってから差し込んだものようである。土器片の上、板の中央付近には、焼けてポロポロになった花崗岩の半割円礫(径9cm、厚さ5cm)を割った面を下にして置く。このような下部構造の上に上部構造である礫が配置されるが、その間には炭だけが残される。下部構造で火を焚いたにしては焼土が全くなく、板も焼けていない。上部構造は主として3個の礫からなる。下部構造北端には25×20×10cmの角礫を板と平行に置き、東端にはそれと直交するよう70×15×15cmの細長い円礫を配する。2方向を囲んだ中央には45×40×8cmの偏平に割れた角礫を、下部構造の蓋のように乗せる。

パミス敷部分に埋置された壺(501)は後述する分類ではI A群の細頸壺Bに当たる。外面全

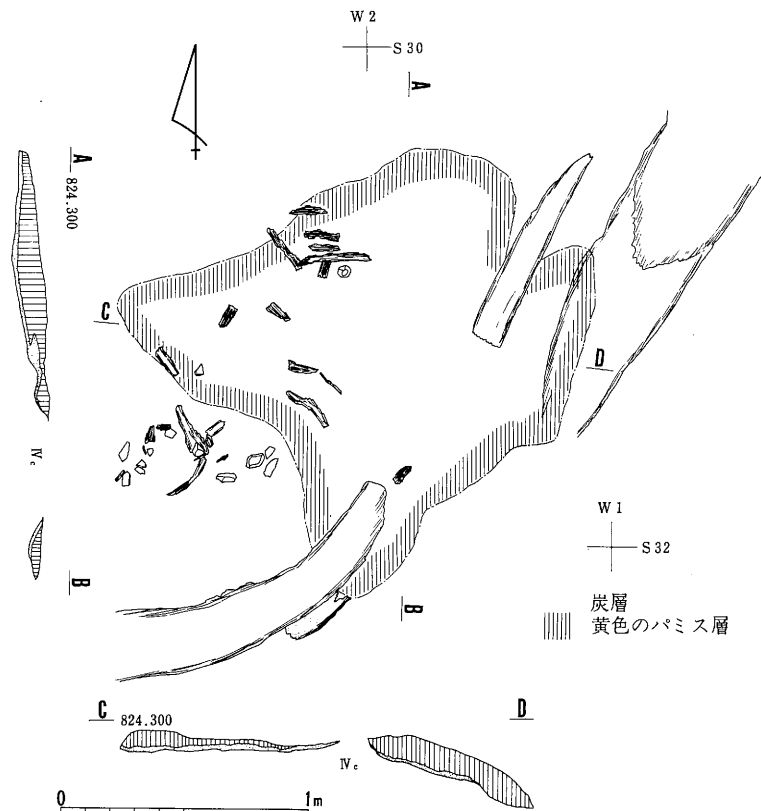


図236 中島A遺跡2号祭祀遺構実測図(1:30)

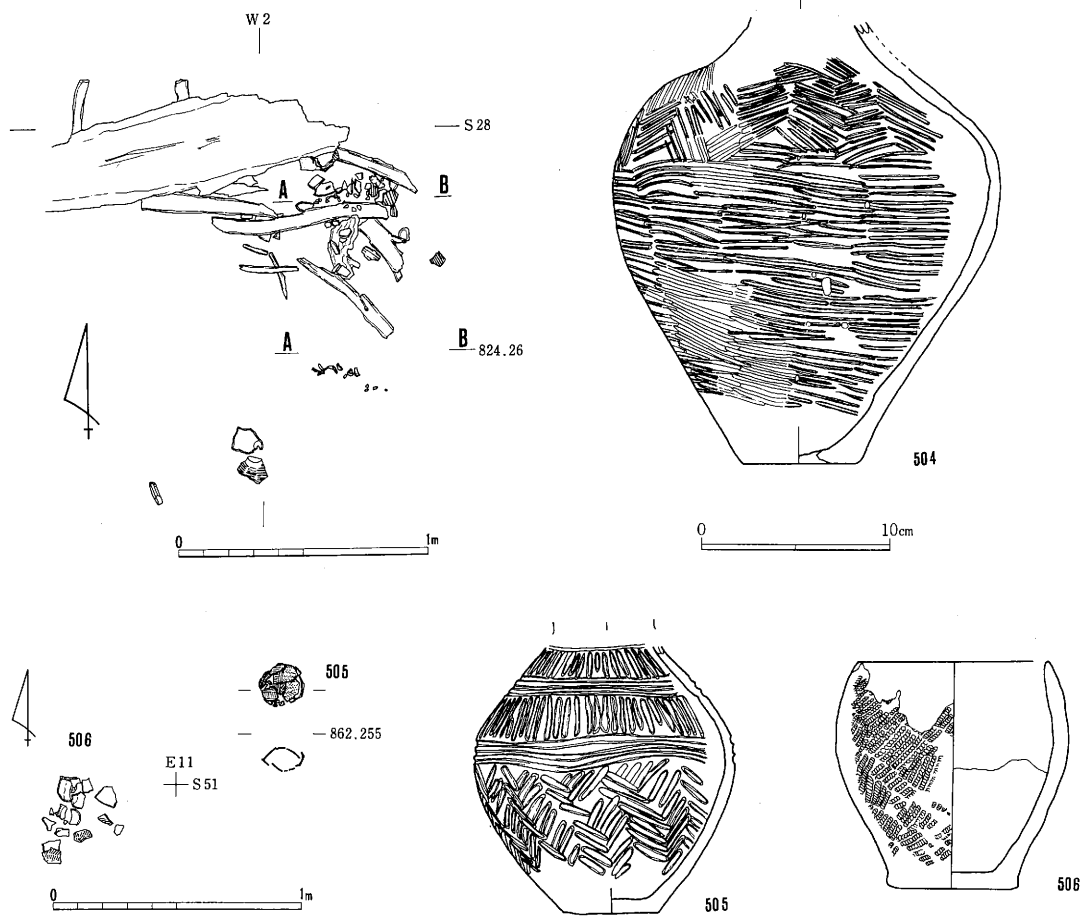


図237 中島A遺跡K・L地区IVc層単独出土土器実測図（1：4）及び出土状況実測図（1：30）

体にタール状の付着物がつき、底部外面の風化が著しいことからみて、煮沸に用いられた可能性が高い。立地や構造、遺物からみて祭祀遺構と判断されるが、どのような祭祀なのかは不明である。

なお、本遺構の南側1m程にも、小さなパミスのかたまりがあり、周辺には大きな礫が点在する。本遺構の構成材料と同一だが、これだけでは遺構とはみなしがたかった。同種遺構の残骸の可能性もあるが、確認できない。

③ 2号祭祀遺構（図236）

S31・W2付近に位置し、IVc層上面～上位に構築されている。周囲は低湿地の底に近い場所である。構造は単純で、1.5×1.3m程の不整形な範囲に厚さ1～2cmに炭を敷き、その上に厚さ10cm程に黄色で1号祭祀遺構より土壌化の進んだパミスを敷きつめる。炭の下のIVc層には焼けた痕跡は見当たらないが、パミス敷の南端には焼けた材が1点残されている。周囲には材が多量に存在するが、北東側の太い材の上には、パミス・炭が敷かれ、他の材は本遺構の上に乗る。特に乗せたのではなく、より新しい時期の材なのだろう。遺構に伴う遺物はない。

本遺構の構造は、1号祭祀遺構のパミス敷部分と同質で、材料である炭・パミスも同質である。同種の祭祀遺構と考えられ、規模はひとまわり大きく厚いが、埋設土器を欠き配石部分も省略されている。

④ 単独出土土器（図237）

3点以上の完形に近い土器（504～506）が単独で残されていた。

504はS29・W2付近のIVc層上位から出土した。付近は低湿地の底に近い部分である。土器は破片となり1.5m程の範囲に散ってやや散漫な出土状態であった。底部は外面側から打ち欠いて穿孔し、口縁部も欠

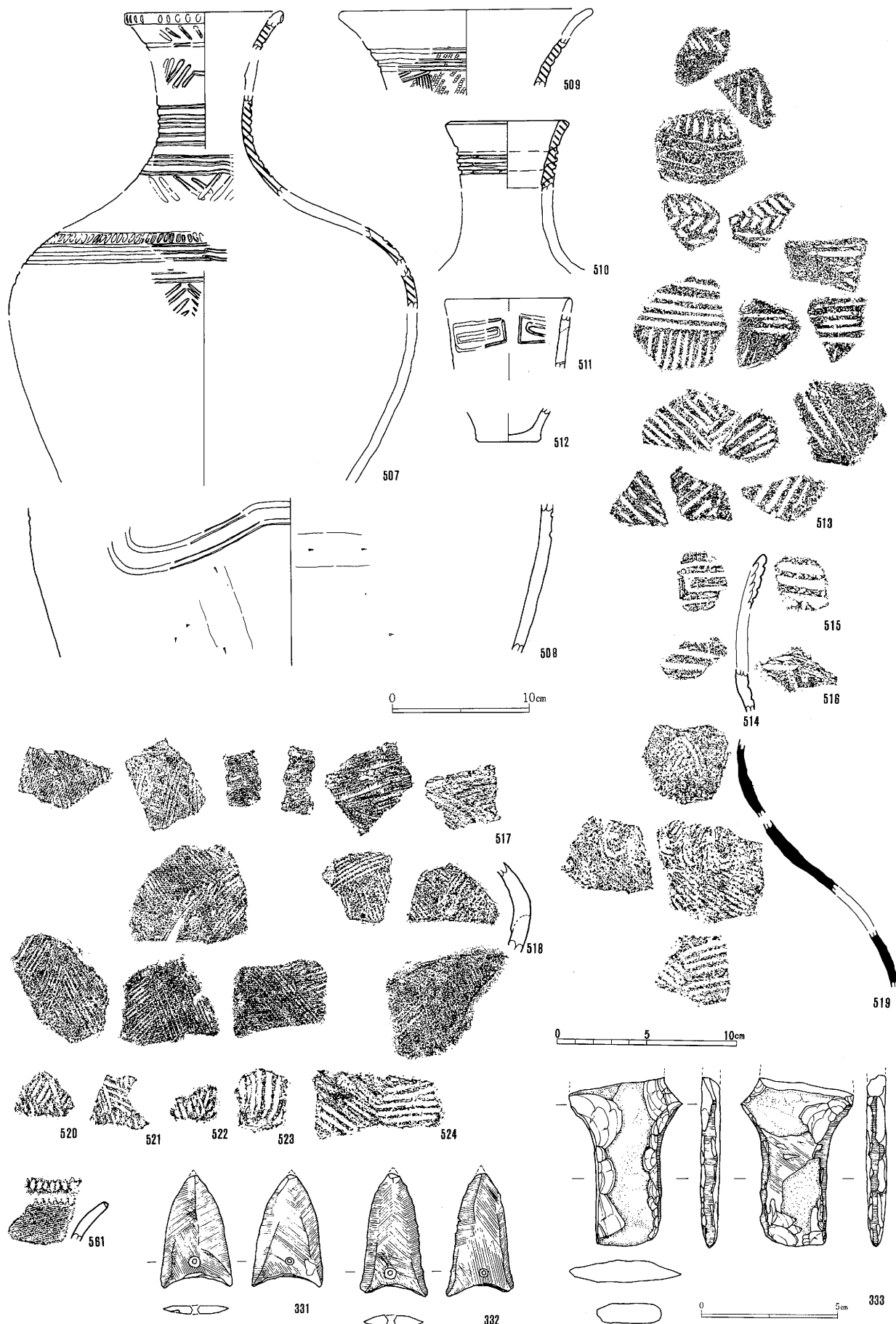


图238 中島A遺跡K・L地区出土弥生時代遺物実測図

(507~512 1 : 4、513~524,561 1 : 3、331~333 1 : 2)

失するが打ち欠かれた可能性がある。底部内面と口縁部外面の器表の荒れが著しい。後述する分類では I A 群の細頸壺 B に当たる。

505、506は S 51・E 11 付近の IV c 層上面から 50cm ほど離れて出土した。505は潰れてはいたがひとかたまりになり、506は 40cm 四方に散ってはいたが、ともに完形またはそれに近い形で残されたものである。505は 504 同様口縁部が打ち欠かれた可能性のある小形の壺で、底部は穿孔されていない。肩部内面と体部下半～底部の外面の器表は著しく荒れている。I A 群の細頸壺 A に当たり、底部には網代痕がみえる。506はほぼ完形の鉢で、体部上半には内外面とも厚みのある炭化物が全面的に付着し、下半～底部は明色に変色して、煮沸に用いられたことは確実である。底部には木葉痕がみえる。I A 群の鉢 B である。

このほか、S 45・E 9 付近の IV c 層から、著しく磨滅して、復元不能な壺 1 体分の破片 (513) が出土した。口縁部を欠くが底部は完存しており、完形に近い形で残された可能性がある。I A 群の細頸壺 A で、505 より大形になりそうだ。

⑤ 遺構外出土遺物 (図 238)

IV c 層及び IV c 層の分布域外の IV 層上面から若干の中期初頭の土器片と磨製石鏃 2 点が出土し、IV b 層以上からも若干の中期初頭の土器片と石戈 (?) 1 点が発見されたが、いずれも特記すべき出土状況を示さなかった。また、中期中葉の土器片 1 点 (561) が IV b 層から出土した。

⑥ 出土遺物

ア. 土器

土器の量はわずかだが、位置づけを明確にするために分類をしながら記述する。該期の土器は縄文時代晩期末葉前後の土器の系譜の中から誕生するが、新しい土器様式を確立しているとみられるため、独自の分類を行う。

広い意味での在地的土器を I 群、条痕文系土器 (断面塗潰し) を II 群とする。I 群は器形、文様等を共通しつつも胎土に二者がある。縄文時代晩期末葉前後の I A 群と酷似し、火山灰由来の混入物が主体となるのを I A 群、石英や長石の多いのを I B 群 (断面斜線) とする。I・II 群は時間的にひとまとまりであると思われるので、1 類のみ設定する。I 群 1 類は、庄の畑式、II 群 1 類は岩滑式とこれまで考えられてきた土器であり、条痕文系土器の 4 期区分 (市沢 1985) に従えば、ともに III 期に当る。

群別に種を設定すると、I 群には、壺、鉢があり甕ははっきりしない。壺は細頸壺と広口壺に細別される。これらの壺の多くは条痕文系土器の系譜から生まれており、条痕文をもつ B 種と、条痕文のモチーフがより装飾的な沈線文と化した A 種に区分できる。また、条痕文系土器とは異なった系譜に属する壺もあり、これを C 種とする。鉢は条痕文系土器にも浮線文系土器にも直接系譜がたどれない。工字文をもつ A 種と縄文をもつ B 種があるが、A は直線的に開いて鉢形となり、B は平底で口縁部がやや内湾して丸い。甕は、小破片にそれらしいものがあるが明瞭ではない。II 群は壺のみしかない。口縁部を欠くが細頸壺らしく B 種とする。

次に各群の組成をみる。

I A 群には細頸壺 A、B、広口壺 C、鉢 A、B、甕がある。

I A 群の細頸壺 A は 2 点あり (505、513)、ともに口縁部を欠失する。外面はヘラ描沈線文を全面に施し、内面はケズリを用いず強くナデで整形する。細頸壺 B は 3 点ある (501、502、504)。外面にはヘラまたは先端の割れた軟らかい工具で条痕を施すが内面は細頸壺 A と同様である。両者の施文方法は異なるが描かれるモチーフは共通し、I B 群の細頸壺 A とも共通する。広口壺 C は 1 点 (508) のみで、体部以外は不明である。内外面ともケズリ、ナデで整形し器表は平坦である。沈線 2 条で渦文に似た曲線を描くだろう。鉢 A は 2 点あり (511、514)、ケズリを用いずナデだけで整形する。沈線で工字文に由来するモチーフを描く。

鉢Bは1点のみ(506)で、内面はケズリとていねいなナデで整形し、外面は全面に縄文を施して口縁部付近にミガキを加える。甕の可能性のあるのは517、518などだが壺になる可能性も残しており、明瞭ではない。細密条痕は細かく、内面はケズリを用いずに強いナデで整形している。

I B群には細頸壺A、広口壺Cがある。細頸壺Aは2点(507、510)で、頸部に粘土紐積み上げ痕を残し、外面にはへら描沈線文をもつ。広口壺Cは1点(509)で、内面はナデで整形し、外面は縄文の後へら描沈線文を施す。515、516もI B群の壺の破片である。

II群は細頸壺Bが1点(519)と壺Bが若干(520~524)ある。器厚は4mm程度と薄く、内面は強いナデで整形し、外面には貝に似た工具または櫛状工具の羽状条痕か櫛状工具の波状文を描く。

以上のような土器のあり方の中で注意されるのは、甕の割合が著しく低く、皆無であったかもしれないことである。また、壺、鉢も口縁部を欠失したり底部を穿孔し、あるいは煮沸痕跡を残すなど、特殊な用いられ方、残され方をしている。遺構の性格と一致した土器のあり方と言ってよいだろう。

イ. 石器・石製品

IV c層分布域の南西縁付近から磨製石鏃2点(331、332)、01トレンチ調査中にIII層から石戈(?)が1点(333)出土した。IV c層上面~層中からは若干の石鏃や黒曜石片が得られたが、混入品である疑いが強い。

磨製石鏃はともに、無茎、基部近くに孔を1つもつタイプである。先端部をわずかに欠失するが、331はホルンフェルス製で長さ40.5mm、幅25.7mm、厚さ3.1mm、重さ3.9g、332は片岩製で長さ44.6mm、幅24.4mm、厚さ3.0mm、重さ3.9gとほぼ同大である。側縁部形態は331が直線的なのに、332は基部が張りだしている。ともに偏平で片面の先端部付近に鋸状の稜線が残される。側縁部は両面から研ぎ出されて鋭いが、基部は面をもつように研磨される。孔は2.0~2.2mm程で、ともに主として図左面側から回転穿孔される。333は副葬品または祭器の性格をもつとされる石戈の可能性があり、頁岩製で、関部~茎の破片である。身部を欠くため樋や鋸、孔の有無などが不明だが、偏平なつくりにしては茎が長い。関部は厚みを変えずに茎へ移行し、厚さはわずか7.4mmと偏平である。関部の幅は41.5mm、茎は幅24.7mmで、関部の最大幅の位置から測った茎の長さは約50mm、残存全長は62.1mmで残存重量は22.9gある。関部から茎への移行は曲線的で関部は形骸化していると言える。関部の一端が鋭く尖り、他端は尖らないため、身部は左右非対称の形態をとるだろう。全体に研磨が不十分で、茎部側縁からの剥離痕をとどめるが、側縁はかなり研磨される。これまでに知られた石戈に比べ、関部の幅は $\frac{2}{3}$ 以下と狭い。身部も幅が狭く短いものと思われる上、研磨も不十分で、矮小化されたという印象が強い。石戈、石剣の区分は、このような退化的もしくは地域的な例では難しいと思われるが、石戈だとすれば、分布上もつくりの薄さからも畿内型になるだろう[下条信行1982]。

これらの石器の帰属時期を決定する直接的な証拠はないが、遺構、土器が中期初頭のものしかないことからみて、それと同時期の可能性が高い。遺跡の性格に整合的な遺物であるが、長野県内では最古の資料ということになる。

(8) K・L地区 古墳時代~平安時代の遺物

① 低湿地の状況(図239)

低湿地のIV a・IV b層からは古墳時代から中世にかけての遺物が出土した。古墳時代の土器、平安時代の土器と陶器、それ自体では年代を決定できない木製品や切り痕のある枝などである。古墳時代の土器は微量にとどまるのでIV a、IV b層は平安時代の可能性が最も高く、 ^{14}C 年代測定値も既述の通り平安時代を裏づける値を示している。

IV a、IV b層は泥炭化した巨大な材を多量に含んでおり、低湿地は常時滞水した状態に近かったものとみられる。しかし、塚間川等の河川や沢が低湿地に流入した形跡は全くない。低湿地の滞水は地下水によ

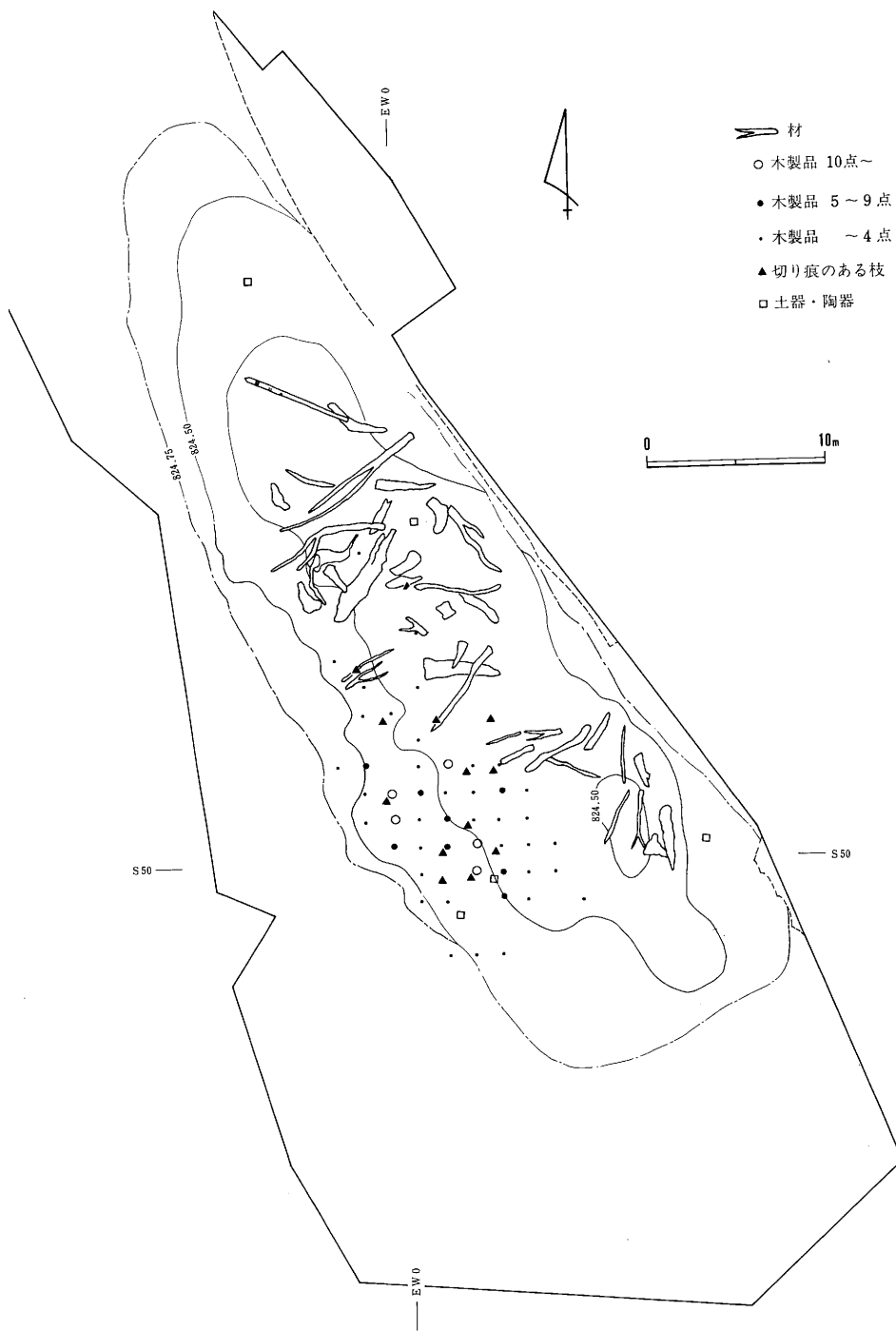


図239 中島A遺跡K・L地区IV a・IV b層遺物分布図(1:400)

るものとみなくてはならない。塚間川は巨大な材を流すような流量や規模はもたないし、洪水等も低湿地へ影響を与えなかったとすれば、材はもっと別の理由で低湿地に集まったことになる。図239にはIII～IV層の主要な遺物と材の分布を示したが、材は低湿地の凹部に主に残される。低湿地縁辺では遺体の分解が進むため、残りがよくないのかもしれない。巨大な樹木は低湿地の植生とは思われないので、これらの材はすべて低湿地外から持ち込まれたものである。その材の方向にはある程度の規則性があり、材の多くは低湿地の長軸方向即ち断層崖の走る方向と直交して残されている。材の根元は断層崖側にも、その反対側にも向いている。必ずしも縁辺に近い側が根元で、中心に近い側が枝となっているわけではないが、低湿地縁辺から投入されたか、倒れ込んだ可能性がある。一方、低湿地縁辺からは枝状の細い材が大量にまとまった状態で何

ヶ所からも発見されている(PL74 3、4)。これは低湿地にはえた灌木の根や樹幹が立ち腐れた状態で残ったのだろう。

低湿地西側の斜面は土壌が浅くはないが、東側の断層崖上には巨大な樹木を育てるだけの表土層はない。自然倒木がある程度低湿地に集まることは考えられないでもないが、大量の材の存在をそれだけでは説明しきれない。材の方向の規則性や切り痕の有る枝の存在は、人間の活動の介在を示している。

土器は点在するだけだが、遺物の大半を占める木製品の分布は大形材の分布とは重複せず、低湿地南西側に片寄っている。特に置かれたわけではないだろうが、南西側は低湿地の水が沢へあふれ出る場所なので、木製品はわずかな水流に流されて集まった可能性もある。

② 土器、陶器 (図241)

IV a、IV b層の年代観からみて、土器、陶器のうち533~538が材と同時期であろう。土器、陶器は散漫な出土状態を示すに過ぎないが、供膳形態の完形品が含まれる。特に平安時代の煮沸形態の土器はなく、一般的な生活址とは異なった遺跡の性格を示しているだろう。以下古墳時代も含めて土器、陶器を説明する。

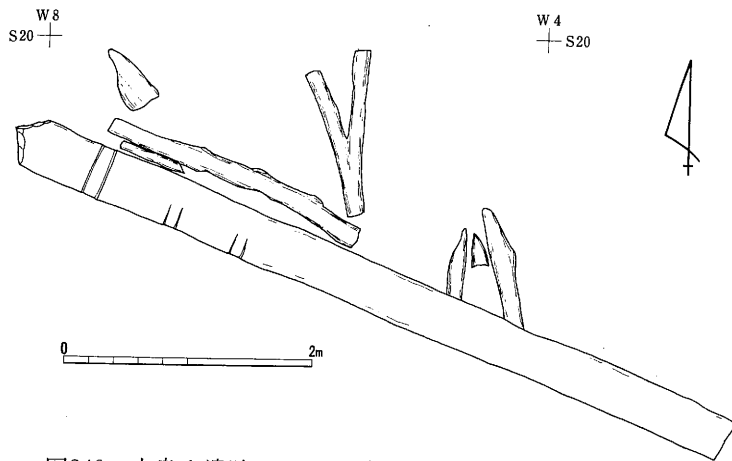


図240 中島A遺跡K・L地区大形加工材実測図 (1:60)

531は台付甕の台部で、端部を折り返しその上を指で押さえており、古墳時代前期のものと思われる。平安時代の土器、陶器には、須恵器(533~537)と灰釉陶器(538)、図示しないが土師器がわずかにある。須恵器は533~536が杯で、537は杯蓋である。533、534はロクロ調整で内外面ロクロ痕が残り、底部は糸切りである。胎土に砂を多く含み、焼成もよくない。535、536は同じようにロクロ調整がなされているが、内面はロクロナデで再調整されている。胎土には砂を含まず焼成が良好で、火襷痕が内外面に残る。537は天井部半ばより上を回転ヘラケズリ

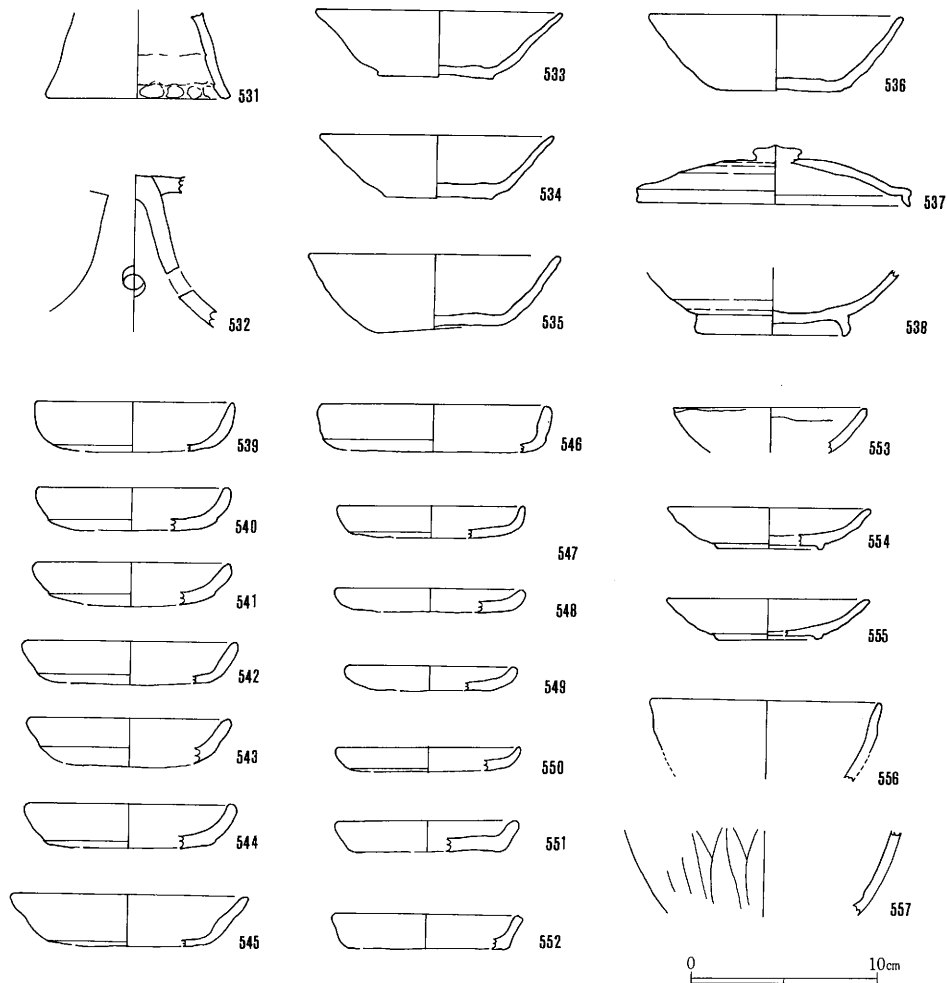


図241 中島A遺跡K・L地区出土古墳時代以降の遺物実測図 (1:4)
(532はJ地区、555はO地区出土)

で仕上げているほかは、ロクロ調整である。胎土に砂を多く含む。538は灰釉陶器の椀で、体部下半を回転ヘラケズリで仕上げている。釉は漬けがけで、内面には重ね焼き痕がみられる。高台の特徴などから、東濃窯大原2号窯式と思われる。灰釉陶器にはこの他に瓶の破片がある。

③ 木製品 (図240・242・243)

はし状木製品、蓋または底板かと思われる木製品、板、杭、祭祀具かと思われる木製品等がある。このうち杭は層序が不確定、祭祀具は他の木製品に比べて水分を含まず風化も進んでいない。底板または蓋板はⅡ～Ⅲ層出土で、いずれもより新しい時代の産物であろう。それ以外の木製品にしてもⅡ～Ⅲ層出土品を含んでいるが、形態差はない。便宜上、いずれもここで説明したい。

はし状木製品は43点出土した(1～18)。1辺4～7mm程の角柱の四面を削った上、面取りを行い、先端は削って尖らせる。完形品はなく、すべて折られており全長は不明である。素材が小さいので木取りはよくわからないが、征目が多いようだ。焼け焦げのある例がわずかにみられる(5)。

蓋または底板とみられる木製品は1点のみ(19)である。厚さ12mmの征目板を用いているが、焼け焦げが著しい。幅98mm、長さ217mmを残すが法量は確定できない。表、裏の区別は難しく、両面とも木目にほぼ直交する方向に無数のキズがついている。削ったりはつったりした痕跡ではなく、引っかき傷のようである。焼け焦げは両面にみられ木口面では特に著しい。

杭は1点(22)で径35mmの丸材の一端を2面から削り出しており、先端は尖らない。ナタまたはチョウナのような工具の痕跡がみられる。

祭祀具かと思われる木製品は1点(21)で、長さ363mm、幅15.2mm、最大厚10.3mmを計る。素材は割り取っているようで、断面は二等辺三角形で「刀」に似せた形になる。三面とも刃物で削られており、削った面はそれぞれ細長い。一方の端面は切り取られており基部と考える。他端は「刀」の背面と直交するように3つに割られ、その先端は焼け焦げて原状は不明である。Ⅲ～Ⅳ層から出土したが、風化が進んでおらず、新しい時期のもののように思える。このほか、先端を尖らせた木製品が1点(20)、Ⅳ層から出土した。幅12mm、厚さ6mmの角柱状で残存長は80mm、先端を四面から削って尖らせている。

板は138点ある(23～45)。いずれも一端または両端が欠失しており、長さは確定できない。厚さと幅の相関を図244に示した。3～4種に区分できそうである。板は征目が多いようで、割り取っただけで未調整なものが大形品の中にみられるが、概して平坦に調整されている。木口には切った痕跡が残る例がある。24、38、39～43の両端、29、31、33、36、40、42、45の上端、23、27の下端がそれと判断できる。40には上端に沿って鋸の切り痕(?)が残される。一端が磨耗している例も少なくない。25の一面には斜方向の凹みが残る。削られたのではなく、圧迫された凹みのようだ。28の下端には2ヶ所、釘を打ち込んだ孔が残されている。丸釘の跡らしく見えるが、断定はできない。Ⅳ層出土ではあるが、何らかの理由で混入した可能性もある。風化の程度は他の材とかわりがない。

板の中には一端をはずに切り落としたものが含まれる(36、40、42、45)。

角材の断片は36点出土した(46～51)。形状は不定である。

漆塗りの木地椀の小片1点はⅡ層から出土したが図示し得ない。

切り落とした痕跡のある板は13点(PL88 2・3)、加工痕のある大形材は1点(図240 PL74 1・2)出土した。枝は広葉樹ですべてははずに切られて樹皮を残し、切り面には鋭利な工具が数回当たっている。切り面の中央に帯状に突出部を残す例があり、金属性の刃物の刃こぼれ部分が当たったものと思われるため、これらの枝は金属器で切り落とされたと考えられる。枝には分枝が残されたままなので、枝自体の加工を目的にはしていないだろう。大形材1点はⅣb層上面から出土した。長さ620cm、径41cm程の大形丸材を半割し、割った面が上向きで出土した。一端は2方向から削り、先端を尖らせてあるが、他端の加工は不明

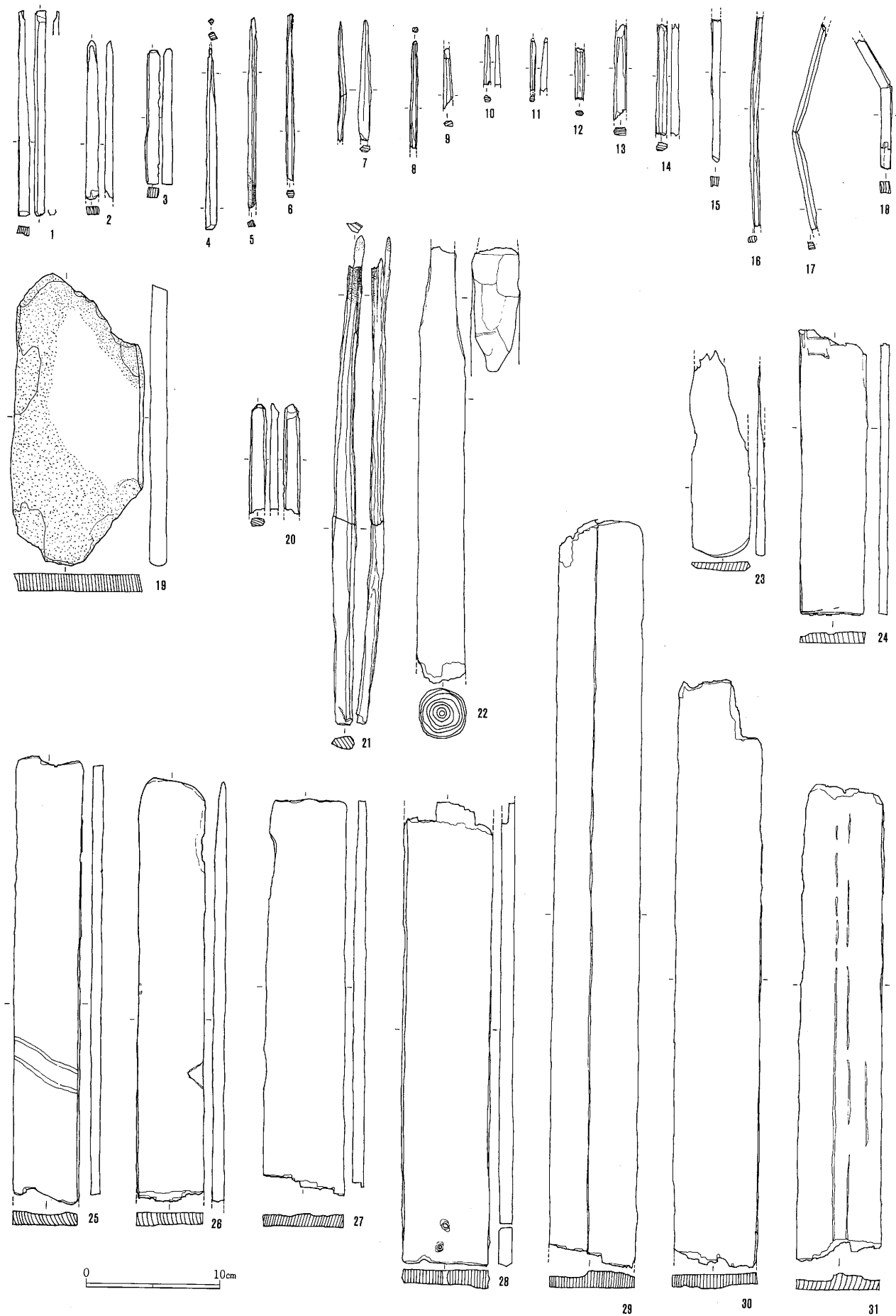


图242 中島A遺跡K・L地区出土木製品実測図1 (1:4)

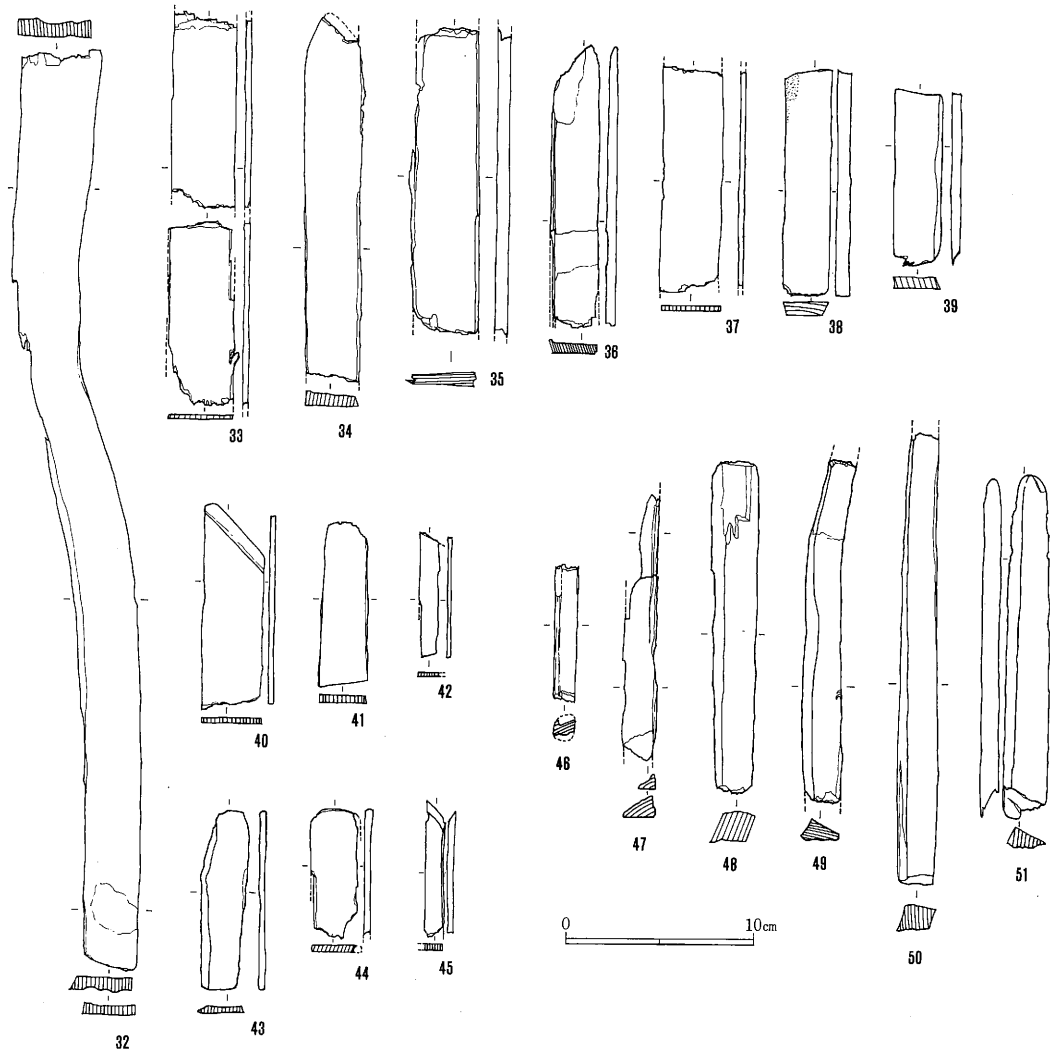


図243 中島A遺跡K・L地区出土木製品実測図2 (1:4)

である。割り面には、幅10~14cmの切り込みを、50~60cm間隔で3ヶ所に入れている。建築部材の可能性はあるが、性格を明らかにできない。

IVa、IVb層出土の木製品は、はし状木製品と板ばかりで、農耕具や工具の柄等を含まず、容器もほとんどない。やはり一般的な生活址とは異なった様相といえるだろう。

(9) K・L地区 中世~近世の遺物

I~III層からは中世~近世の遺物が散漫に出土した。遺物には土器、陶器、金属器、銭貨があり、既述の木製品の一部も中世~近世に属するだろう。III~IVb層が堆積学的には差がない可能性を指摘しておいたが、III層とIVa・IVb層とでは遺物に差がある。湿地堆積物で軟弱なIII層に、投棄された中世~近世遺物が入り込んだ可能性があるのかもしれない。

中世から近世初頭の土器、陶器には、土師器、陶器、青磁、内耳土器がある。内耳土器は図示できるものはない。最も多いのは土師

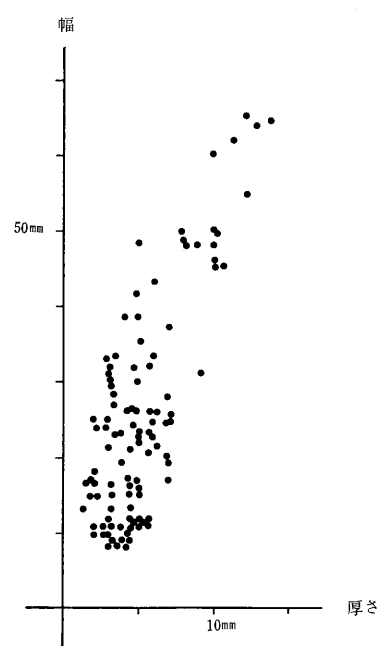


図244 中島A遺跡K・L地区出土木製品(板)の法量

器(539~552)で、いわゆる「かわらけ」である。539~550は内型成形で、口縁部から体部を一段のヨコナデで調整し、底部は指で押さえている。法量からみると、口径11cm~13cm、器高2.5cm~3cmの大形品と、口径10cm弱で器高1.5cm程度の小形品の2種に分けることができる。551と552はロクロ調整で、底部に糸切痕を残している。体部が垂直に近く立ち上がるのが特徴だか、前者のほうが古いと考えている。553~556は瀬戸、美濃系陶器である。553は縁釉皿で口縁部近くの内面に1cm程度の幅で濃黄緑色の灰釉がかけられている。体部が直線的に上がるなどの特徴から15世紀後半の所産と思われる(藤沢良祐1986)。554は志野の皿で長石釉が全面に施されている。口縁部が外反せずに丸味をもって立ち上がることや釉が薄くかけられていることなどから17世紀前半の所産と思われる。556は天目茶碗で、ツヤのある鉄釉がかけられている。口縁端部が尖っていることや、稜が明瞭でないことから15世紀後半の所産と思われる。557は龍泉窯系の青磁の椀で、外面の蓮弁文は削り出しによる。この他青磁は何点か出土している。

近世後半の土器・陶器も何点かある。

金属器には細長い板状の鉄製品1点がある。銭貨には北宋銭の景德元寶、聖宋元寶、元祐通寶が1点ずつあるほか、判統不能ながら宋~明銭の可能性のある銭貨3点、寛永通寶43点がある。

5. 成果と課題

(1) 縄文時代晩期末~弥生時代中期初頭の中島A遺跡周辺

中島A遺跡周辺からは条痕文系土器I~III期に比定しうる時期の遺跡がいくつか発見されている。本報告書に掲載した諸遺跡からも遺構・遺物が検出されている。詳細は各節を参照願うとして、主な遺跡を拾ってみると(図245)、西林遺跡からはIII期の炉址1基と遺物、大洞遺跡からはI期古相の土器をもつ土壇1基、膳棚B遺跡からはI期古相の土器をもつ土壇1基、中島B遺跡からはI期またはII期の土器をもつ土壇1基、柳海途遺跡からはI期中~新相の土器をもつ土壇1基が発見されている。土壇は大洞遺跡を除く3遺跡とも大形の土器片を伴っており、墓壇であったと思われる。そして、中島A遺跡からはI~II期の遺物のブロック(廃棄場)5ヶ所とIII期の祭祀遺構2基が発見されたが、他に遺構はなかった。大久保B、下り林、膳棚B(白山)の諸遺跡からも断片的ながら遺物が発見されており、膳棚B(白山)遺跡は中島A遺跡の周辺の中に入れて考えたい。

一方岡谷インターチェンジ周辺の開発事業に関連して、岡谷市教育委員会が4つの地点で確認調査を実施している。中島遺跡十五社地点、A地点、C地点、D地点がそれで、その概要は次の通りである(註1)。

十五社地点は、断層に起因する孤立丘上に位置する今井十五社遺跡の北隣り、孤立丘の北向斜面に位置する。表土が40~80cmと深く、漸移層、ローム層と続くが、耕土層から縄文時代中期の土器片がわずかに出土しただけであった。

A地点は中島A遺跡の最南端に当たり、今回調査したP地区の延長にある。層序は、耕土、攪乱層、暗褐色土、黒色土、漸移層、ロームの順である。暗褐色土上面に、固められて住居址の床面の可能性がある場所が発見され、柱穴の可能性のある落ち込みも2ヶ所あった。また、別に径100×60cm程の土壇が2基発見された。遺物はI~II期の土器等がある程度まとまって出土した。トレンチ調査のみなので住居址とは断定できないが、土壇は確実で、居住域の可能性は十分にあると思われる。

C地点は中島B遺跡の東側で沢をへだてている。耕土、黒色土、褐色土(土壌化した再堆積ローム)、再堆積ロームの順に堆積する。褐色土層上面から土壇が1基検出され、中から黒曜石片2点が出土した。他に遺物がなく時期を特定できない。

(註1) 岡谷市教育委員会から資料の提供を受けた。

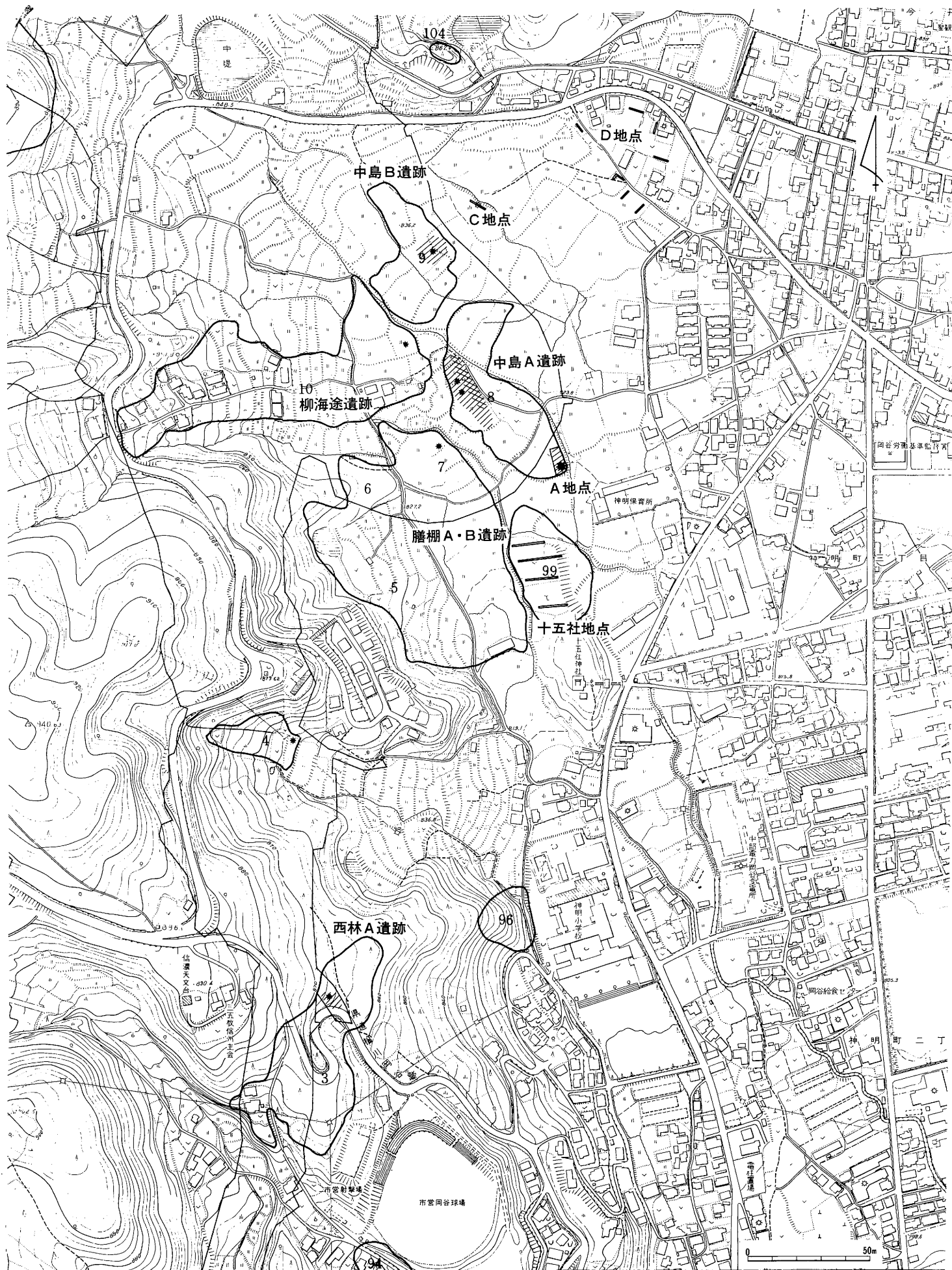


図245 中島A遺跡周辺の縄文時代晩期末～弥生時代中期初頭の遺跡分布図 (1:2,000)

D地点は扇状地をはずれ、今井の集落に隣接する山麓にある。山地から崩落した礫を多く含み、耕土、黒色土、漸移層、ローム層の順に堆積する。石鏃等の遺物がわずかに出土しただけであった。

中島A遺跡の周辺からは、このように点々とではあるがI～II期の遺構・遺物をもつ遺跡が発見されている。これらの諸遺跡を理解するのに参考となるのは茅野市御社宮司遺跡〔小林秀夫・百瀬長秀ほか1982〕である。I～II期に属する御社宮司遺跡は扇状地に立地し、微高地に居住域、湿地気味の低地に廃棄場がそれぞれ分離して発見された。その居住域からは炉址と墓壙だけが発見されたが、生活面の一部が流出したか耕作で失われ、比較的深い掘り方をもつ遺構が残ったものと考えられる。柳海途、中島B、膳棚Bの3遺跡も包含層はほとんどないので、掘り方の深い墓壙だけが、流失や削平を免れたというケースではないだろうか。とすれば居住域が存在した可能性は十分あると考えねばならない。時期不明の中島遺跡C地点は除くにしても、中島遺跡A地点もやはり居住域の存在が想定される。こうしてみると、低湿地の廃棄場を遠巻きに囲んで居住域が散在していることが理解できる。

I～II期の浮線文系土器が主体的な遺跡には、既に紹介した茅野市御社宮司遺跡の他、駒ヶ根市荒神沢遺跡〔気賀沢進・小原晃一ほか1979〕、塩尻市福沢遺跡〔小林康男・鳥羽嘉彦・前田清彦・百瀬忠幸1985〕（但し、III期も含む）、岡谷市新井南遺跡〔山田瑞穂・福沢幸一ほか1976〕などの発掘例があり、遺跡の構造まである程度捉えられている。新井南遺跡は扇状地に、荒神沢遺跡は段丘上に立地し、ともに居住域が確認されて遺物も少なくない。しかし、遺物等の廃棄場の適地が調査区域外にあり、両者が分離していた可能性は残される。福沢遺跡は山麓末端の舌状台地南向斜面に立地し、湿地化した凹地を囲んで土壙が、凹地からは多量の遺物が、それぞれ発見された。居住域が今一つははっきりしないが、廃棄場は住居域と隣接しつつもはっきり分離しているといえよう。湿地を廃棄場にした例は、松本市石行遺跡、II～IV期とやや時期は下がるが大町市来見原遺跡などもあげられ、いずれも近々報告されるようだ。このように居住域とは別に近隣の低湿地を廃棄場に利用するというタイプの遺跡が、この時期に確立していると考えてよさそうだ。

では廃棄場と居住域はどのくらい離れているのか。厳密に測れるわけではないが、福沢遺跡では2m足らず、御社宮司遺跡では15～65mであった。本遺跡のブロックから隣接遺跡の遺構までの最短距離を求めると、柳海途遺跡50m、膳棚B遺跡60m、中島B遺跡110m、中島遺跡A地点110mとなる。この4遺跡は若干時間差があり、少なくとも膳棚B遺跡と柳海途遺跡は共存しない。1つの廃棄場を共有するいくつかの集団の居住域と捉えるか、1つの廃棄場を中心にしてその周辺に転々と居住域を移した集団があったのか、或いはこの両方の組み合わせであったのか、いずれかの可能性を考えるべきだろう。また1つの廃棄場といっても既に示したとおり、ほぼ等質の5つのブロックに分かれているわけで、各ブロックと各居住域とが何らかの形で結びついている可能性も考えられるのである。こうしたI・II期の遺跡群のあり方は、御社宮司遺跡で示されたあり方と共通性が強い。

III期はどうか。本遺跡周辺では低湿地の祭祀遺構、祭祀遺物以外には1片の遺物すらなかった。西林A遺跡の炉址と土器・石器はひとまとまりの生活の跡としてよいが、本遺跡からは600m離れており立地も全く異なる。I～II期に低湿地を中心にして展開されていた一般的な生活址は忽然と消滅してしまうのだが、祭祀遺構を残した集団はそれほど遠方に居住していたわけではないだろう。

次に遺物に目を転じよう。土器の器種構成はこれまで、I期は浅鉢、甕、深鉢を主体とし、III期は壺・甕を主体とすると言われてきた。そして梨久保遺跡〔百瀬1986b〕の資料等からみてII期もIII期と同様ではないかと思われたのだが、本遺跡ではII期には浅鉢も壺も判然としないという結果になった。I期からIII期への変化は、浮線文系土器のセットの崩壊と、条痕文系土器、ひいては弥生土器のセットの成立を意味している。II期には遺跡ごとに器種構成に跛行性があると理解した方がよいのではなかろうか。また、甕や深鉢にみられる伝統的製作方法の固守にも注目しなくてはならない。

石器の組成にはいくつか特徴が指摘された。石鏃の比率の低下と粗雑化(不安定な素材の使用)、大陸系磨製石器の欠如、伝統的な打製石斧の多さ等からは、狩猟が占める位置の低下、稲作の未受容、打製石斧を用いた何らかの生産方法の比重の高さ等が推察される。土器同様に、伝統を変質させつつ固守しようとする姿が、石器にもうかがえるのではなからうか。

土製品、石製品では、石剣や土製円板がI期からすでに欠落しているのが特徴的であった。祭祀に関する用具の変化は、祭祀の方法や参加する集団のあり方の変化を反映してはいないだろうか。III期の祭祀遺構はあまり類例を聞かないが、土器の埋設や配石等縄文時代の伝統をひくのかもしれない。

最後に諏訪盆地一帯のI~IV期の遺跡を概観して、本遺跡の位置づけを明らかにしたい。既にいくつかの遺跡を紹介したが、立地と存続期間は表36のようにまとまる。I・II期の遺跡は、扇状地に進出し本遺跡や御社宮司遺跡のようなタイプか、経塚遺跡〔樋口昇・長崎元廣ほか1980〕のように居住域とも廃棄場とも区別できないようなタイプが存在するが、後者は前者の一部とも思われる。しかるにIII・IV期は、扇状地に立地する遺跡は庄の畑遺跡以外は消滅し、山麓や段丘上に集落が立地する。廃棄場が分離する例はない。本遺跡のあり方は、I~II期では一般的、III期では特殊とすることができよう。地域全体のI~IV期の問題は軽々しく論じられない。遺跡の立地や構成の変化、生産様式の変化、さらには社会の変化等いずれかの機会に取り組まねばならない課題である。

(2) 平安時代の中島A遺跡周辺

大量の泥炭を含むIV a・IV b層が成立したのは平安時代であると思われる。泥炭の主体たる大形材は、配列に一定の規則性をもって出土しており、周辺の状況からみても周囲の倒木が流入したといった単純なものではないことは確実であろう。ところで、花粉分析の結果を見直すと、IV a層から人工的な植生変化が示され、III層からはソバの花粉が出現した。しかし、層位的にも遺物や¹⁴C年代測定値からも、IV a層とIV b層は区分できそうもない。また、花粉分析は広域の植生変化を捉えるが、本遺跡低湿地周辺といった狭い範囲の変化を捉えるには不向きで、開発の開始時期も的確に捉えられるというわけではない。とすればIV a層で示される植生変化の前提となる自然林の伐採はIV b層形成時に始まったのではなからうか。厚い泥炭層の形成と大形材の一定の方向性は、本格的な開発(農地の造成)行為の結果だったと思われる。低湿地が伐採した木材の単なる捨て場なのかどうか、推論する資料は十分ではないが、加工した大形材は1点しかないことや、樹種同定の結果をみても針葉樹やアカガシ亜属を欠き、農具等にはあまり用いられない樹種が主体であることからすれば、やはり捨て場にすぎなかったのかもしれない。しかし、板等わずかな木製品は、伐採した木材の一部が利用されたことを示すだろう。開発行為に直結した場として低湿地を位置づけるなら、供膳形態の土器や陶器(日常雑器)、はし状木製品も、労働時の飲食に関連した器物と考えてよいのではなからうか。

今井地籍を中心とした岡谷市北部の開発の歴史の中で、本遺跡の資料がどう位置づくのかを、今後の課題としておきたい。

遺跡名	御社宮司	十二ノ后	荒神山	新井南	経塚	庄の畑	中島A	梨久保
立地	扇状地	山麓	山麓	扇状地	扇状地	扇状地	扇状地	台地
時期	I期							---
	II期			---				
	III期							
	IV期						---	---

表36 諏訪地方の主要遺跡一覧表

6. 小結

低湿地遺跡の存在を当初から予想してはいたものの、当埋文センターも県内各機関もその本格的な調査経験は無いといってよかった。調査方法は手さぐりに近く、とりわけ排水方法や微細資料の取り上げに苦慮し、得られた資料も不十分な点が少なくないだろう。反省をし、今後の調査に活かさねばならないことを痛感する。

しかし、得られた成果は大きかった。弥生時代開始期に関する資料は、近年充実しつつあるだけでなく、研究自体も進展している。しかし、周辺地域も含めて広範囲に遺跡群のあり方が捉えられた例は数少ない。本遺跡を中心とした岡谷インターチェンジ付近の遺跡群のもつ意義は大きい。遺物の面でも新しい知見が得られた。土器の系統の細分や時期の細分、石器組成等がそれで、生活・社会の変動期の一断面を捉えることができた。平安時代に関しては、自然科学的な各種の分析・同定を利用し、地域開発に関する資料が提示できたと思う。

発掘資料をもとに遺跡の再構成を計ってきたつもりである。不十分な点は多いにしても、今後の研究に役立つことを願って小結としたい。

参考文献

- 阿部朝衛 1979 「ピエス・エスキュー」『聖山』東北大学文学部考古学研究会
- 石川日出志 1985 「中部地方以西の縄文時代晩期浮線文土器」『信濃』37—4 信濃史学会
- 市沢英利 1985 「遺跡の動向」・「終末期の様相」『条痕文系土器』文化をめぐる諸問題 愛知考古学談話会
- 岡村道雄 1983 「松島湾宮戸島里浜貝塚における食糧生産活動とその季節性」『考古学研究』116 考古学研究会
- 小沢由香里 1986 「早期末～前期初頭土器の分類と検討」『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会
- 小野正文 1984 「土偶の分割塊製作法資料研究(1)」『丘陵』11 甲斐丘陵考古学研究会
- 神奈川考古同人会 1983 「シンポジウム 縄文時代早期末・前期初頭の諸問題」『神奈川考古』17
- 気賀沢進・小原晃一他 1979 『荒神沢遺跡』駒ヶ根市教育委員会
- 小林秀夫・百瀬長秀他 1982 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市その5—』長野県教育委員会
- 小林正春・佐々木嘉和・佐合英治他 1986 『恒川遺跡群』飯田市教育委員会
- 小林康男・鳥羽嘉彦・前田清彦・百瀬忠幸 1985 『堂の前・福沢・青木沢』塩尻市教育委員会
- 斉藤基生 1984 「打製石斧研究の現状」『信濃』35—4 信濃史学会
- 笹沢 浩 1975 「十二ノ后遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市その4—』長野県教育委員会
- 設楽博己 1982 「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』34—4 信濃史学会
- 下条信行 1982 「武器形石製品の性格」『平安博物館研究紀要』7
- 関野哲夫 1980 「鶴が島台式土器細分への覚書」『古代探叢』早稲田大学出版部
- 樋口昇一・長崎元廣他 1980 「経塚遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—岡谷市その4—』長野県教育委員会
- 藤沢良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館紀要V』瀬戸市歴史民俗資料館
- 百瀬長秀 1986 a 「縄文時代晩期末～弥生時代中期初頭土器の分類と検討」『梨久保遺跡』岡谷市教育委員会
- 百瀬長秀 1986 b 「浮線文系土器の変遷と分布」『歴史手帳』14—2 名著出版
- 守矢昌文他 1986 『高風呂遺跡』茅野市教育委員会
- 山田瑞穂・福沢幸一・高桑俊雄他 1976 「新井南遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—岡谷市その3—』長野県教育委員会

第9節 ^{なかじま} 中島B遺跡 (GNJ)

1. 遺跡の概観

岡谷市1511番地を中心とする。

塚間川の形成した扇状地の扇頂近くに位置する。周辺は全面的に水田化されて原地形が読みとりにくい。本来は、扇状地を開析する小さな沢がいく筋か存在したとみられる。西側は塚間川、東側は名前のわからない小さな沢に開析された狭い丘陵状の微高地の先端に立地する。塩嶺山塊直下に近いためか周辺は湧水地帯となっている。

遺跡の基盤となるのは塩嶺山塊からの崩落物であるが、角礫、亜角礫と砂、風化した火山灰等が淘汰されないまま堆積している。土石流等により形成された基盤が小さな沢により開析されて地形の原形がつけられたのであろう。また、風成のローム層は全く存在しない代わり、ロームの再堆積層が分布する。これはロームに砂礫が混合しているが、火山灰成分の多い場所は風化(土壌化)が進み、生活適地となり得る。遺跡は土壌化の進んだローム再堆積層中に形成されているが、類似した土層は岡谷インターチェンジ周辺の遺跡を見わたしても柳海途遺跡東端に残されていただけであった。従って、生活適地は限られていたと思われる。

水田開発は近代に入ってかららしいが、基盤づくりには著しい地形改変を行っており、削平は場所によっては基盤層にまで及び、盛土も最大2 m以上にもなる。土壌化したローム再堆積層は一部削平された可能性があり、層の広がりおよび遺跡の広がりには完全には把握できなかった。

2. 調査の概要

周辺の水田から縄文時代～弥生時代の遺物が採集されており、微高地全体が遺跡になると推定されていた。調査の結果、遺跡範囲はほぼ予想通りだったが、微高地の塩嶺山塊寄りには水田造成時に削平された可能性が高い。調査域は削平された部分を除く遺跡全面に及んでいるとみてよい。

発掘調査は用地買収の都合上2年次にわたった。1年次は遺跡の主要部分2,100㎡、2年次はその周辺部分1,590㎡を対象とした。1年次は昭和57年5月下旬～12月上旬、2年次は昭和59年4月下旬～8月中旬にそれぞれ実施した。調査研究員は1年次は主として5名、2年次は主として3名が当たり、1年次、2年次とも現地説明会を実施した。

整理作業は昭和57年度から断続的に行った。整理担当者が3回交替し、引きつぎのロスもあったが本報告に至った。この間昭和58年2月及び、昭和60年2月に、第1回及び第3回諏訪地区遺跡調査研究発表会で遺跡の概要を報告したほか、『考古学ジャーナル』238号(昭和59年)、当センター刊行の『長野県埋蔵文化財ニュース』No.1、No.2、No.3、No.10や『長野県埋蔵文化財センター年報』1に遺跡の紹介を行った。

調査の進行に沿って調査方法の要点を示すと、1年次は、遺跡の性格が予想しにくく、水田毎にトレンチを設定し、情報を得てから調査方法を考えることにした。その結果、縄文時代草創期のブロックの一端が捉えられ、その包含層も明白に把握できた。そこで包含層と同質の土層の広がる範囲全域を対象とした面的調査に切り替えた。しかし、用地買収が進展せず、ブロックの発見された水田以外の発掘調査は2年次に見送られた。また水田の境界付近に“のり”を残さざるを得ず、ブロックは1年次で完掘できなかった。包含層の把握は、土層観察用のあぜをブロックにかけて設定し、あぜのわきにサブトレンチを設定して包含層の微妙な変化を捉えて細分した。次いで細分された層の面的な広がりを捉え、各細分層上面の微

地形測量を行ってから、細分層ごとに発掘を実施した。分層には地質学、土壌学の専門家から度々指導・助言を得た。特に周辺地域の地質調査を信州大学酒井潤一助教授に依頼し、遺跡の各層の位置づけについて適切な教示を得ることができた。調査に当たっては重機の通路が確保できず、厚い水田の盛土もベルトコンベアを用いて人力で排除した。遺物は全点、座標と標高、層位を分布図に記録して取り上げた。土壌ごとサンプルする方法もあぜの撤去時に部分的に試みた。整理作業時に分布図をもとに遺物取上台帳を作成した。

2年次の調査は、包含層の広がりを把握するトレンチ調査から開始した。その結果広がりはほぼ1年次の発掘調査域で尽きていることが認められた。従って面的調査は1年次発掘調査域に隣接する、いわば掘り残し部分のみでよいと判断した。周辺の用地買収が進捗して通路が確保できたため、盛土、表土の排除には重機を用いた。層序は1年次と同一観点で捉えようとしたが、1年次の調査終了時にあぜをすべて撤去してしまったのと、2年次の調査が微高地から低地にかかる位置で堆積状況がやや異なっていたため、両年次の層序対比には困難があった。合理的な解釈はできているが、発掘現場で出した結論ではない部分もある。調査方法は1年次を基本的に踏襲した。遺物取り上げも同様だが、遺物取上台帳だけを用いた。

測量は、平面図、分布図、微地形図は遣り方測量による。測量基準点は岡谷インターチェンジ関連遺跡共通の、日本道路公団工事用基準杭B S T A 0 +87.0 (X=8934.0457, Y=-41060.9474) から北へ100m、西へ50mの地点に独自に設定した。標高も同じ工事用基準杭(827.733m)から転用した。

整理作業では、注記は石器を含め小さなチップ以外すべてに施した。整理作業が断続的ながらも長期間に及んだことが幸いし、遺物の接合には時間をかけることができた。黒曜石の接合は十分とはいえないが、粘板岩を素材とする石器やフレイクの接合は十分できたとみてよいだろう。以上の調査、整理作業を通じ多くの研究者・研究機関等から指導、助言を受けた。

なお、発掘調査時以来、先土器時代の遺跡として理解し、発表もしてきたが、遺物を十分検討した結果、縄文時代草創期の遺跡と結論を下すに至ったことを了解されたい。

3. 調査の経過

昭和57年

- | | |
|---|--|
| <p>5月21日 発掘調査開始。地形及び微量の採集遺物以外の情報がなく、トレンチを設定して包含層を探す。水田造成時に盛土と削平がなされている。</p> <p>5月28日 1、3トレンチ南端のVI層より黒曜石のフレイク集中出土、包含層を発見。</p> <p>6月3日 諏訪市教育委員会高見俊樹氏にフレイクの鑑定を依頼。尖頭器製作時に生じたフレイクとのこと。先土器時代の遺跡と考えて調査方法を考慮する。</p> <p>6月7日 信州大学酒井潤一助教授を招き、地質調査。包含層はロームの再堆積層と判明。</p> <p>6月14日 明治大学戸沢充則教授、東北歴史資料館岡村道雄氏来所。調査方法について指導を受ける。</p> <p>6月15日 包含層の広がりを掌握、面的調査の範囲を決める。盛土の排除は難航する。</p> <p>6月30日 V層上面で土壌検出。2面にわたる調査が必要となる。</p> <p>7月8日 土壌の調査に着手。遣り方の設置開始。排土用のベルトコンベア導入。</p> | <p>8月2日 VI層の調査開始。ブロックは2ヶ所で南側を1号、北側を2号と命名する。(但し、最終的には変更)。</p> <p>8月28日 長野県農事試験場梅村弘氏を招き、土壌調査。層序区分等で指導を受ける。</p> <p>8月29日 現地説明会開催。</p> <p>9月6日 包含層中及び包含層直下から礫多出。遺構の可能性を考えて実測するが、後に自然堆積と判断。</p> |
|---|--|



10月15日 酒井潤一氏を再度招き、地質調査。VII層以下は土石流で成立したことを示唆される。

11月11日 酒井潤一氏に周辺の地質調査を依頼。

11月15日 奈良国立文化財研究所松沢亜生氏来所。調査方法や遺物の観察方法について指導を受ける。

12月11日 礫の実測終了。本年度の調査終了。

12月13日 整理作業開始。発掘所見の調整と遺構図、取上台帳整備、縄文時代前期以降の遺物の実測を年度内に終了させる。

昭和58年

2月11日 第1回諏訪地区遺跡調査研究発表会にて、先土器時代の遺跡として概要報告。

昭和59年

4月23日 1年次調査地域周辺（FG、GI地区）の調査に着手。包含層はなく、トレンチ調査のみで終了。

6月28日 1年次発掘調査域ののり面の調査に着手。

7月16日 ブロックのつづきを発見。VI層最上位から隆起線文土器出土。

7月22日 現地説明会開催。

7月29日 現地説明会再度開催。

8月10日 VII層中に遺物がないことを確認し調査終了。

昭和60年

1月5日 整理作業再開。記録の整備と照合を年度内に終了。

4月1日 遺物の接合と実測、分布図等の作図を開始。

昭和61年

8月20日 報告内容の検討、図版作成開始。

昭和62年

2月20日 原稿執筆完了。

4. 調査の結果

(1) 層序と地形形成 (図247)

調査が2年次にわたったのと地形差等を考慮し、調査範囲を大きく3つの地点に区分し、手近な大地区名を冠して、G地区、FG地区、GI地区と命名した。G地区は遺跡の中心で、小丘陵上である。FG地区は小丘陵の西斜面、GI地区は同じく南斜面に当たる (図11・246)。

G地区の基本的層序は以下の通りである。

I層：現耕土層である。

II層：水田造成時につくられた盛土層である。III～VII層質の土を斜面上方から盛っており、遺物が若干含まれる。盛土は遺跡周辺から採取されたものだろう。

III層：黒色土層で旧地表とみられる。発掘調査域北西側では削平されて存在しない。大きな礫が層下位に点在する。縄文時代～近世の遺物を含む。

IV層：砂礫層で、発掘調査域東～南端に存在する。

V層：砂質土層でたいへん堅い。発掘調査域北西では削平されて失われている。上面からは縄文時代晩期末の土壌や時期不明の土壌、木の根の跡が検出されたが、V層自体は遺物を含まない。

VI層：土壌化した再堆積ローム層である。最上位は腐植が加わって黒いが、他は黄白色で、砂や小礫を多量に含み、下位には巨大な礫も含まれる。全体に軟質で、場所によって微妙に色調や礫等のあり方が変わり、調査時には細分したが最終的には1つの層と判断した。発掘調査域北西側には当初より存在していないようだ。また、南東側斜面はVI層が再流出、再堆積した層がわずかながら形成されている。VI層は縄文時代草創期の包含層で、ブロック群が3ヶ所検出され、土壌も2基発見されている。

VII層：火山灰及び砂礫の再堆積層で、全く土壌化していない。乾燥すると硬く、水を含めば軟弱になる。砂礫の淘汰の悪さからみて、土石流によってもたらされたと考えられる。

FG地区、GI地区の層序は、原則的にはG地区の層序に共通しており、同一の名称を与えてある。但し、II層は盛土ではなく褐色の砂質土である。また、III層はGI地区では植物遺体を含んで青みを帯びた色調となる。V層は再堆積ローム層で、G地区のVI層またはVII層に対比できるが、遺物は全く含まれない。

沖積世の扇状地形形成時に土石流等によってもたらされたVII層の上面は、沢による開析を含めて小さな起伏をもつ。そのうち、礫の少ない地点は土壌化が進行し、VI層やそれに類する層が所々に成立したとみられるが、そうした場所が縄文時代草創期には生活適地として選択され、遺跡が残されることになったと考

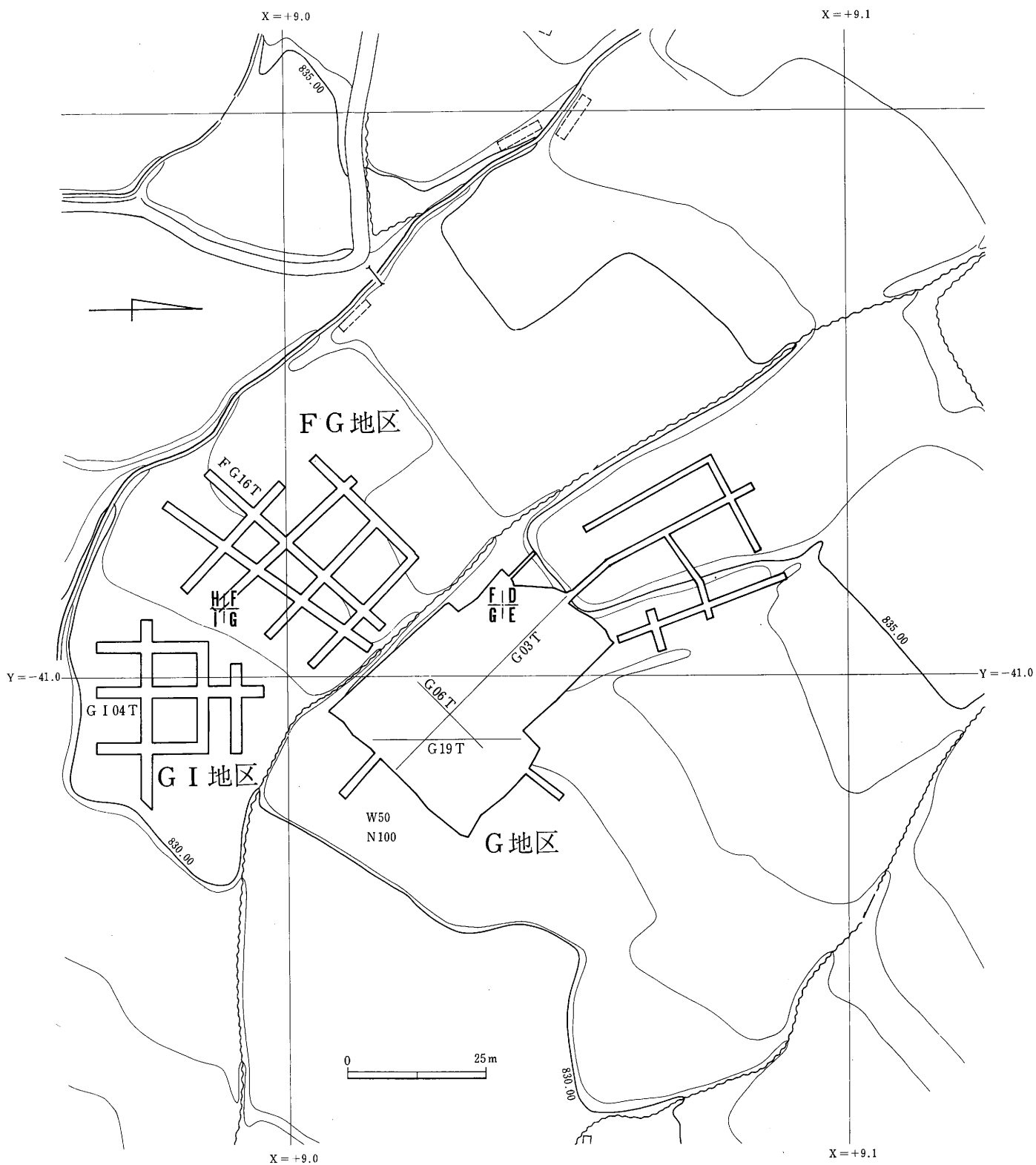


図246 中島B遺跡発掘範囲及び地形図（1：1,000）

えられる。また、人間の生活により、周囲の地表の土壌化が促進される一面もあったかもしれない。一方、VI層上位の腐植は、遺跡廃絶後、地表が草原等になり安定していた事を示す。遺跡の廃絶は直接的には災害等によるのではなかったのだろう。その後IV—V層の堆積を経て、縄文時代晩期末には再び安定した地表（III層）が形成され、近世以降になって水田として開拓された。

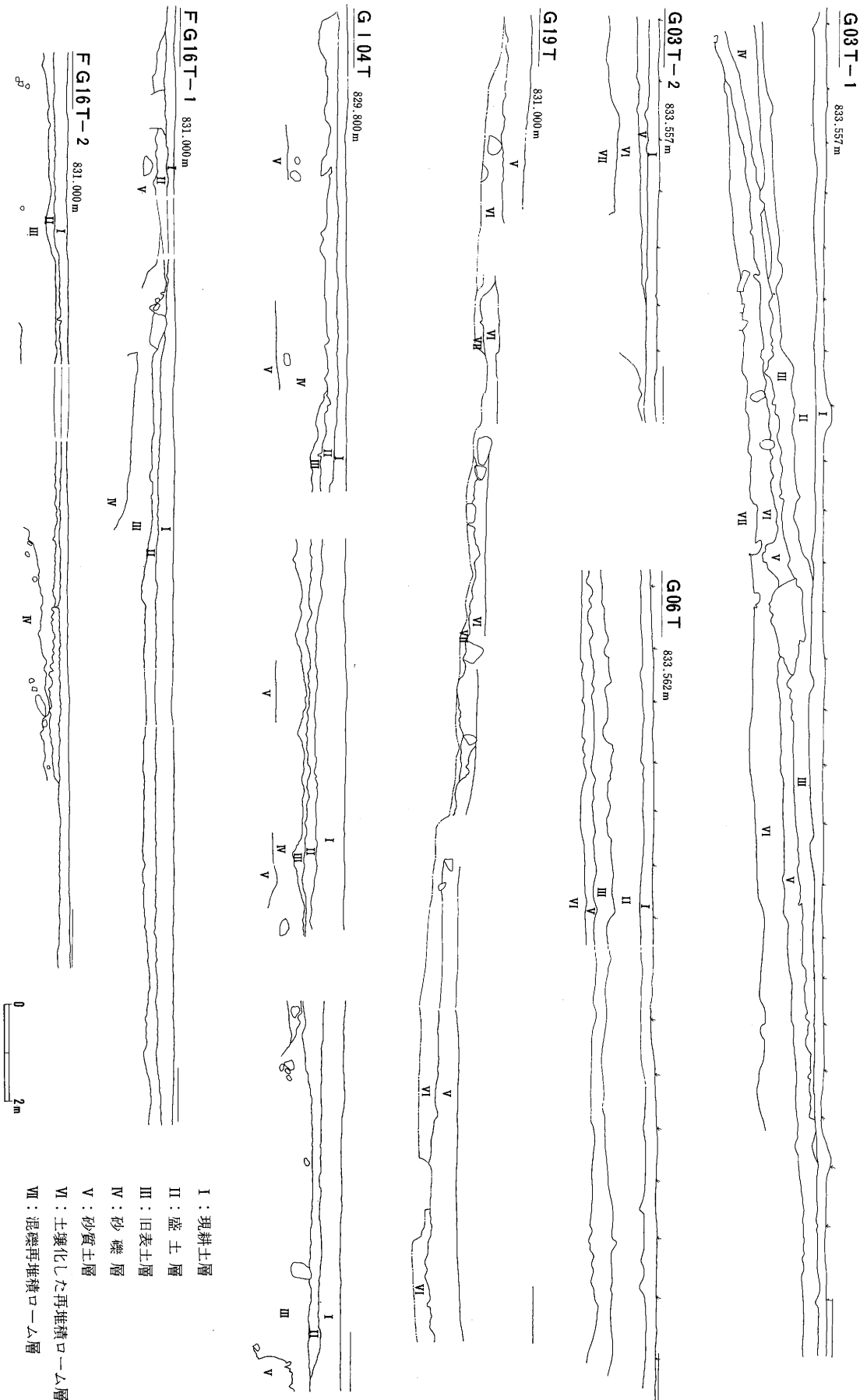


図247 中島B遺跡土層図 (1 : 120)

(2) 遺構と遺物の概観

本遺跡は、G地区のVI層中及びV層上面において遺構が検出され、同じくI～III・IV層からは遺物が発見された。

VI層からは縄文時代草創期の土壌2基と遺物のブロック群3ヶ所が発見された。土壌はVI層中で検出されたが遺物をもたない。ブロックは微高地から斜面にかけて位置し、いずれもVI層上面でその一端が発見された。ブロックごとに遺物組成は異なるが、隆起線文土器少量と槍先形尖頭器や石斧、及びそれらの製作時に生じたフレイク・チップを多量にもつ。また、ロームマウンドが数ヶ所残されていた。

V層上面からは縄文時代晩期末の土壌1基、時期不明の土壌若干が検出された。III層からは縄文時代～近世にいたる遺物が発見された。

FG地区、GI地区はI～III層で縄文時代～近世の遺物が散見された。

(3) 縄文時代草創期の遺構と遺物

本遺跡では、縄文時代草創期に属するブロック17ヶ所（ブロック群3ヶ所）と石器・土器など遺物約5,000点を良好な出土状態で得ることができた。本項では、その遺構と遺物について詳述するわけであるが、はじめにブロックの認定基準及び遺物の認定基準について触れ、以下、ブロックごとに記述を進めてゆく。

① ブロックの認定

ブロックとは、遺物が集中して分布している箇所について用いている。本遺跡においては、発掘調査時点で大きく3ヶ所のブロック群を認定した。本書の記述において以下に出てくる1号ブロック群、2号ブロック群、3号ブロックがそれに当たる。その後、整理過程で検討を経た上、3つの大きなブロックはさらに細分され、1号ブロック群は1-A、1-Bの2グループに、2号ブロック群は2-A～2-Nの14グループに分けられた。そしてこの1-A、1-B、2-A～2-N、3号ブロックの計17ヶ所が、いわゆる先土器時代研究で主に使われているブロックに相当すると考える。

さて、この17ヶ所のブロックの認定の方法であるが、大きく3段階に分けて行った。第1段階は、以後の作業の前提となるべきもので、垂直分布による同時性の把握である。異なる時期のブロックが重なっている場合を想定しての作業であったが、本遺跡の場合、大きな3つのブロックの遺物はほとんどがVI層中から出土し、(その中でもVI層上部に集中する。)、2枚以上の文化層は認められなかった。

第2段階は、前段階の作業をふえまた上で、遺物の平面的集中分布の把握である。ここではあくまで視覚的に遺物の集中する範囲を抽出することを目的としており、客観性を期すために遺物の出土した範囲を50cm四方に区切り、その50cm四方のマス目に属する遺物の点数を数え、それを単位として等量線を引いた。その結果、2号ブロック群中に数ヶ所の等量線の高いところ(遺物密集区域)が確認され、そこを中心に遺物は外縁部に向かって徐々に散漫な分布を呈してゆき、等量線の最も低いところをブロックの境として設定し、2-A～2-Eの計5ヶ所のブロックを捉えることができた。さらに密集とはいえないが、散漫ながら遺物の分布する範囲もブロックとして捉えると、2-F～2-Nの計9ヶ所が設定できた。1号ブロック群も同様に、散漫な分布ながら1-A、1-Bの2ヶ所に分けて設定でき、この段階でほぼブロックのかたちと数量が把握されたといえる。

次に第3段階として、連鎖するブロックに関して器種の分布、個別別資料の分布状況を加味し修正を行った。ブロックの認定に関しては、「遺物の分布上の視覚的まとまりに対して用い、分布上のまとまりということの他に意味をもたない。」という鈴木忠司氏の定義(鈴木忠司1980)に基本的に則っている。しかしながら連鎖するブロックは等量線で境界を引くとブロックの形には凹凸ができる。単独に確認されるブロックは、円形が基本となっており、接するブロックは重なるような部分も考慮しなくてはならない。そこで

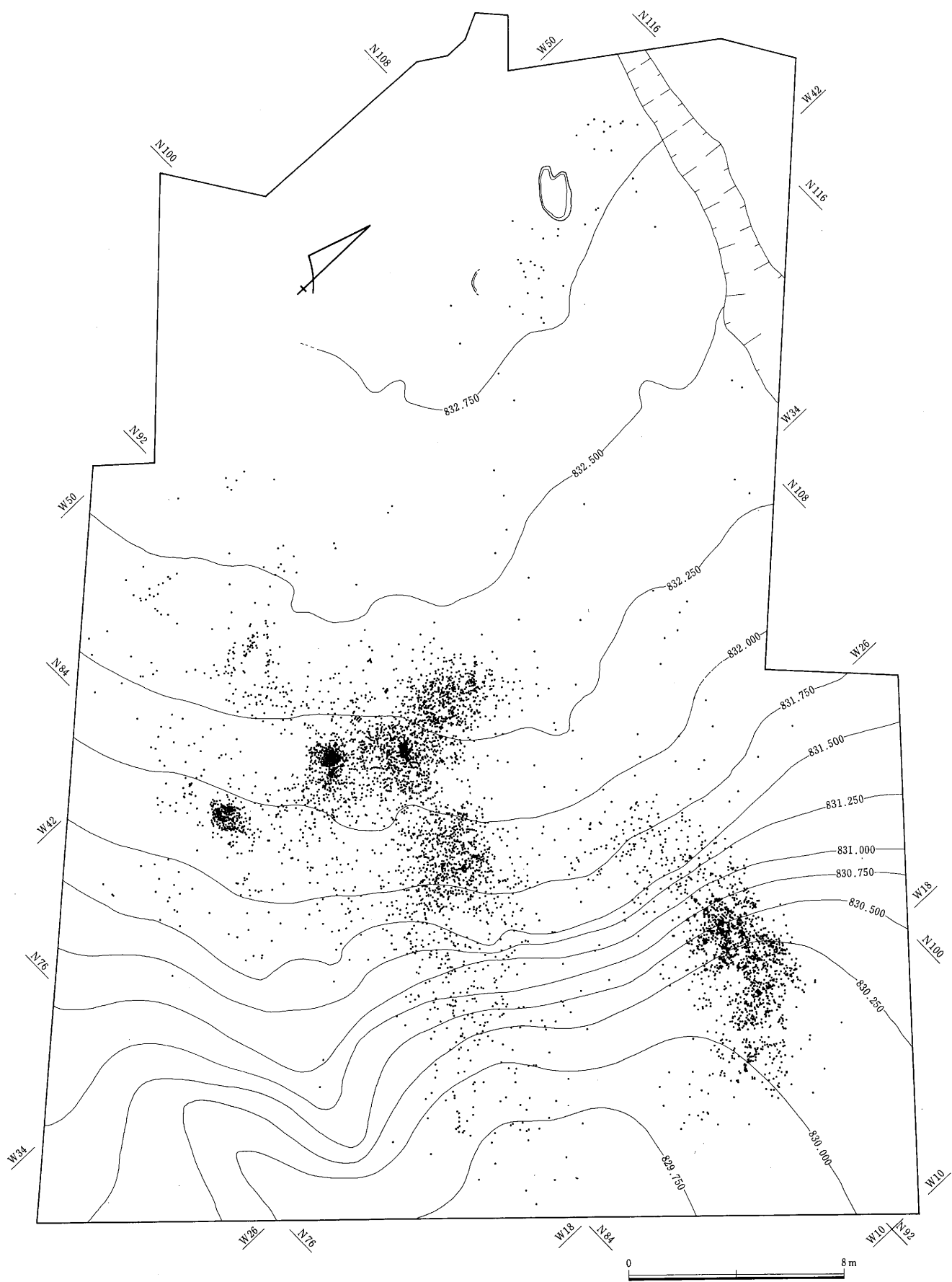


図248 中島B遺跡縄文時代草創期遺物分布及び遺構配置図 (1:200)

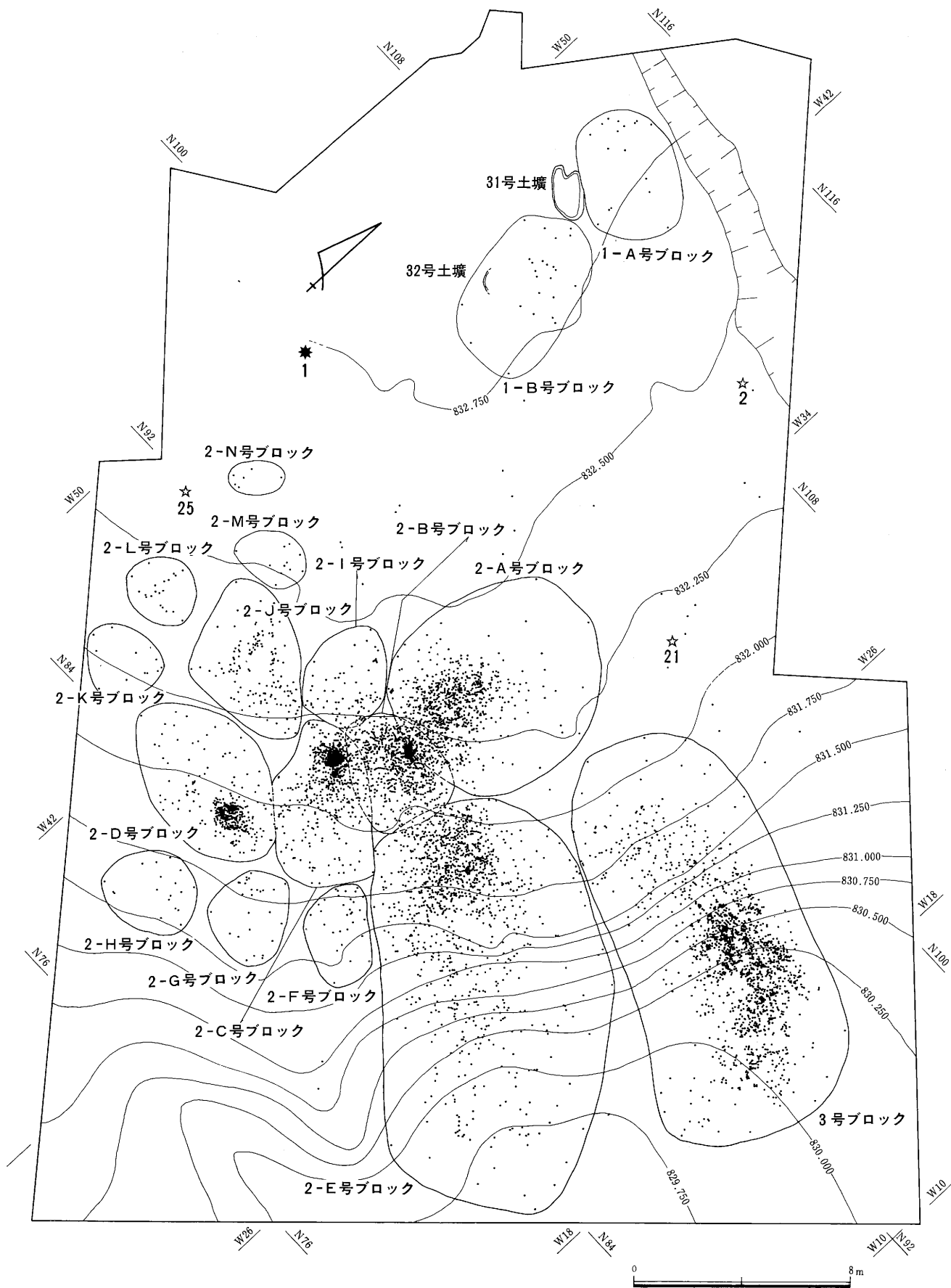


図249 中島B遺跡縄文時代草創期ブロック及び土坑配置図 (1:200)

器種の分布、個体別資料の分布を検討することで、2つのブロックの関係を重なりとして捉えることにした。言いかえれば、ブロックは円形が基本的なかたちであるという前提に立ち、見かけ上連鎖するブロックは2つのブロックが部分的に重なっているという理解のもとにブロックを設定した。それは2つのブロックを仮にAとBと呼ぶならば、 $A \cap B$ の部分があり、その部分は本来的にはA、Bの両者が混在する空間であるという認識のもとにブロックを認定しようとするものである。

この操作はあくまで視覚的なまとまりとしてとらえたブロックのうち、見かけ上連鎖するものに対して、一定の理解の方法を明示しただけであり、実際には $A \cap B$ の部分が明瞭に線引きできるものではなく、また厳密に線引きを行うことが目的ではないことをことわっておく。

以上の段階を経て認識されたものを本書ではブロックとして扱い、それらブロックの詳細な分析、検討を経て捉えるユニットへの志向の基本単位として設定した(註1)。

② 遺物の認定

ア 石器形態

石器の器種名・形態分類には実に多くの呼び方があり石器研究を混乱させている面もある。ここでは石器形態の分類の基準を明記し、それに則って本項の記述を進めてゆく。

槍先形尖頭器：この石器は器種判別そのものにはあまり問題はないが、形態分類とその名称に多様なものがある。本書では、全体形状を基準にI類を柳葉形(細身のもの)、II類を木葉形(幅広のもの)に大別した。I類とII類の違いは、長幅比がほぼ3：1以上をI類、それ以下をII類とした。大きさについても大形は7cm前後以上のもの、中形は5cm前後のもの、小形は3～4cmのものとする基準を設けた(註2)。

石器判別で一番難しいのが、完成品と未製品の区分である。出発点を素材とし、到達点を完成品と考えたとき、未製品は出発点→到達点の過程に生じるものであり、素材に近い状態のものから完成品に近いものまで多様な様相を呈す。特に完成品に近い未製品と完成品の区分は困難である。そもそも完成品か未製品かの判別は当時の製作者の意識内にあると考えられ、遺物として残された石器自身からその両者を完全に区分することは無理なことである。本書では、便宜的に先の素材→完成品への過程を完成度から以下の4ランクに区分して把握した。

ランクA：完成品。器体両面が整えられており、周縁部も微細な調整によって概形が整えられている。

側面形も著しい反りはなく、側面にみられる稜線も直線的になる。

ランクB：限りなく完成品に近く、完成品か未製品か判断し兼ねるもの。完成品との区分は難しいが、側縁の一部がやや粗い調整であったり、側面の稜線がジクザグになっており、最終的な形状調整が行われていないと判断したもの。

ランクC：形態がほぼわかるまで加工されているが、調整加工が粗く、形状が整っていないなど、未製品であると判断されるもの。

ランクD：形態もわからない、素材に近い状態の未製品。

以上の基準のもとに、実際の呼称としては、ランクAを「槍先形尖頭器」、ランクB～Dを「尖頭器未製

(註1) 鈴木忠司氏によれば、器種分布、個体別資料の分布の操作は、視覚的に設定されたブロックの統廃合の操作であり、それはユニットの設定への操作段階に位置づけている(鈴木1980)。しかし、ここで行った作業はあくまで視覚的に設定されたブロックの修正であり、氏の言われる遺跡全体の中での評価のもとに行われるブロックの再編成とはレベルが違う。よって本書における第3段階までの操作は、ブロックの設定のレベルにあると理解する。

(註2) 長幅比3：1という数字が当時の人々にとって絶対的な比率であったとはとうてい思えないことである。しかし、従来より曖昧に使われているやや細身、やや幅広という用語に一定の基準を設けて使用しようというのが目的である。従って3：1の長幅比をもっていても、石器群全体の中で木葉形という理解をした方が良い場合も出てくるのが予想される。また、大きさについても同様の考えをもって使用している。

品」として区別した。

打製石斧：局部磨製の石斧を含めて総称した。縄文時代一般に認められるような磨製石斧は本遺跡からは出土しなかった。刃部が研磨されたものを含め、いわゆる斧形の石器を一括して扱った。また、接合関係をもち刃部等の製作が不完全と思われるものに対し石斧未製品の語を用いた。

削器：いわゆるスクレイパーと称される石器で、調整加工によって刃部が作出されている。その刃の厚さと刃部の位置で、分厚い刃をもつ搔器(エンドスクレイパー)と、薄い刃をもつ削器(サイドスクレイパー)に大別されるが、本遺跡からは削器しか認められなかった。

小剥離痕のある剥片：従来、使用痕のある剥片や2次加工のある剥片と称されていたものを一括した。剥片の縁辺に見られる不連続かつ大きさも不揃いな小剥離痕は刃こぼれとして認定しやすいが、部分的に連続する小剥離痕は調整加工なのか刃こぼれなのか判断が困難である。そこでこれらを一括して把握しておき具体的な資料にあたり、判断のつくものに対しては使用痕であることを明記するようにした。

剥片・碎片：剥片は調整剥片と目的剥片の二者に大別される。調整剥片とは石核整形、石核修正、石器を作る過程で生じた剥片に対して用いる。目的剥片とは剥片そのものを道具としたり、その剥片を道具の素材とするために打ち剥がされた剥片をさす。碎片は便宜的に長さ1cmに満たない小剥片と、剥片の碎けたものを称した。

石核：剥片を剥ぎとるための母体である。本遺跡においては、後に詳述することになるが、剥片を一定量剥離する技術が顕著には認められず、そのことから石核の存在は例外的である。また、尖頭器未製品とした一部に石核の可能性があるものが含まれており、その資料については具体的な記述の中でふれる。

原石：石器の母材となる石塊である。本遺跡においては黒曜石と粘板岩が主な石材となり、黒曜石については多数原石が認められたが、粘板岩製は接合資料2例のみである。黒曜石の原石は完全に自然面で被われている例はほとんどなく、原石の一部に1～2度の加撃が加えられているのが特徴的である。尖頭器未製品との区分が問題になってくるが、部分的な剥離のものは原石として捉えた。

イ 個体別資料の識別

本遺跡の主たる石質は黒曜石であり、全体の90%以上を占める。次に粘板岩が8%を占め、あとはチャート、玄武岩、珪質粘板岩、珪質泥岩という構成になっている。黒曜石は透明度が高く、黒色や白色や赤褐色の縞を含んでおり、その特徴により分類も可能であるが、その一方で同一の個体に、黒縞、白縞の両方を含んでいることが観察され、あえて個体識別はひかえた。但し、白色斑点を含む特徴的な一群(個体別資料No.11)と接合資料(個体別資料No.12、13)についてのみ個体識別を行った。

以下、本遺跡で識別した個体の特徴を明記する。

個体別資料No.1：粘板岩。風化により表面は暗黄褐色を呈し、白色の縞が入る亜角礫。

個体別資料No.2：粘板岩。風化により表面は青灰色を呈し、全体的に白色の縞が入る亜角礫。

個体別資料No.3：チャート。黄白色を呈し、黒色の縞が入る。剥片2点のみなので原石形状は不明。

個体別資料No.4：粘板岩。風化により表面は白色を呈す。原石形状は不明。

個体別資料No.5：粘板岩。風化により表面は青灰白色を呈す。原石形状は不明。

個体別資料No.6：粘板岩。風化により表面は青灰色を呈す亜角礫。

個体別資料No.7：粘板岩。風化により表面は灰白色を呈す。全体的に白色の縞が入り、また黒色の細い脈が走るのが特徴的である。原石形状は不明。

個体別資料No.8：粘板岩。風化により表面は灰白色を呈す。部分的に砂質のところがある。幼児頭大の亜角礫。

個体別資料No.9：玄武岩。表面がガラス質の印象をうける。原石形状は不明。

個別資料No.10：珪質粘板岩。茶褐色を呈す。原石形状は不明。

個別資料No.11：黒曜石。流紋岩化した部分が白色斑点状にみえる。原石形状は不明。

個別資料No.12：黒曜石。接合資料No.9。垂角礫である。

個別資料No.13：黒曜石。接合資料No.10を含み自然面は無数のつぶれ状の亀裂により白色を呈す。円礫である。

個別資料No.14：チャート。赤色を呈するもので、光沢をもつものともたないものの二者があるが、一括して扱った。

③ 1号ブロック群

ア 遺物の遺存状態

本ブロック群は、N102～N114・W41～45の範囲に、1-A・1-B号の2ヶ所のブロックで構成されている。立地は、2号ブロック群・3号ブロックが微高地上縁辺に位置するのに対して、本ブロック群は微高地のやや奥まった比較的平坦なところに位置する。以下、各ブロックごとに分布の状況を記述する。

(ア) 1-A号ブロック (図250)

本ブロックは、N110・W45を中心に直径約6mの範囲に円形の広がりをもつ。散漫な分布形態を示し、すぐ南にはほぼ接するかたちで1-B号ブロックが位置する。垂直分布は、VI層中に約30cmの厚さをもって包含されているが、本ブロックの周辺は調査区内でも一番標高が高く、現耕土であるI層の直下にVI層が露出する部分があり、後世の攪乱によりVI層上部に位置した一部の遺物が消失している可能性がある。

遺物の総点数は17点であり、その器種別構成は、槍先形尖頭器4点、小剥離痕のある剥片1点、剥片・碎片12点よりなり、少点数ながら道具の量が多いといえよう。またそれらは東半部にまとまって分布するという状況を呈している。石質構成は、粘板岩、チャート、黒曜石、珪質粘板岩からなる。それらの個体

器種 ブロック	槍先形 尖頭器	尖頭器 未製品	打製石斧	石斧 未製品	削器	小剥離痕 のある剥片	剥片・ 碎片	石核	原石	計
1-A	4					1	12			17
1-B				3(2)			18			21
外	1						4			5
計	5			3(2)		1	34			43

表37 中島B遺跡1号ブロック群器種別組成表 ()内は実際の個体数

ブロック	器種 個別資料No.	槍先形 尖頭器	尖頭器 未製品	打製 石斧	石斧 未製品	削器	小剥離痕 のある剥片	剥片・ 碎片	石核	原石	計
1-A	1							3			3
	2							6			6
	3							2			2
	チャート(単)	3					1				4
	珪質粘板岩(単)	1									1
	黒曜石							1			1
1-B	1				1			6			7
	2				2			9			11
	珪質泥岩(単)							1			1
	黒曜石							2			2

表38 中島B遺跡1号ブロック群個別資料組成表

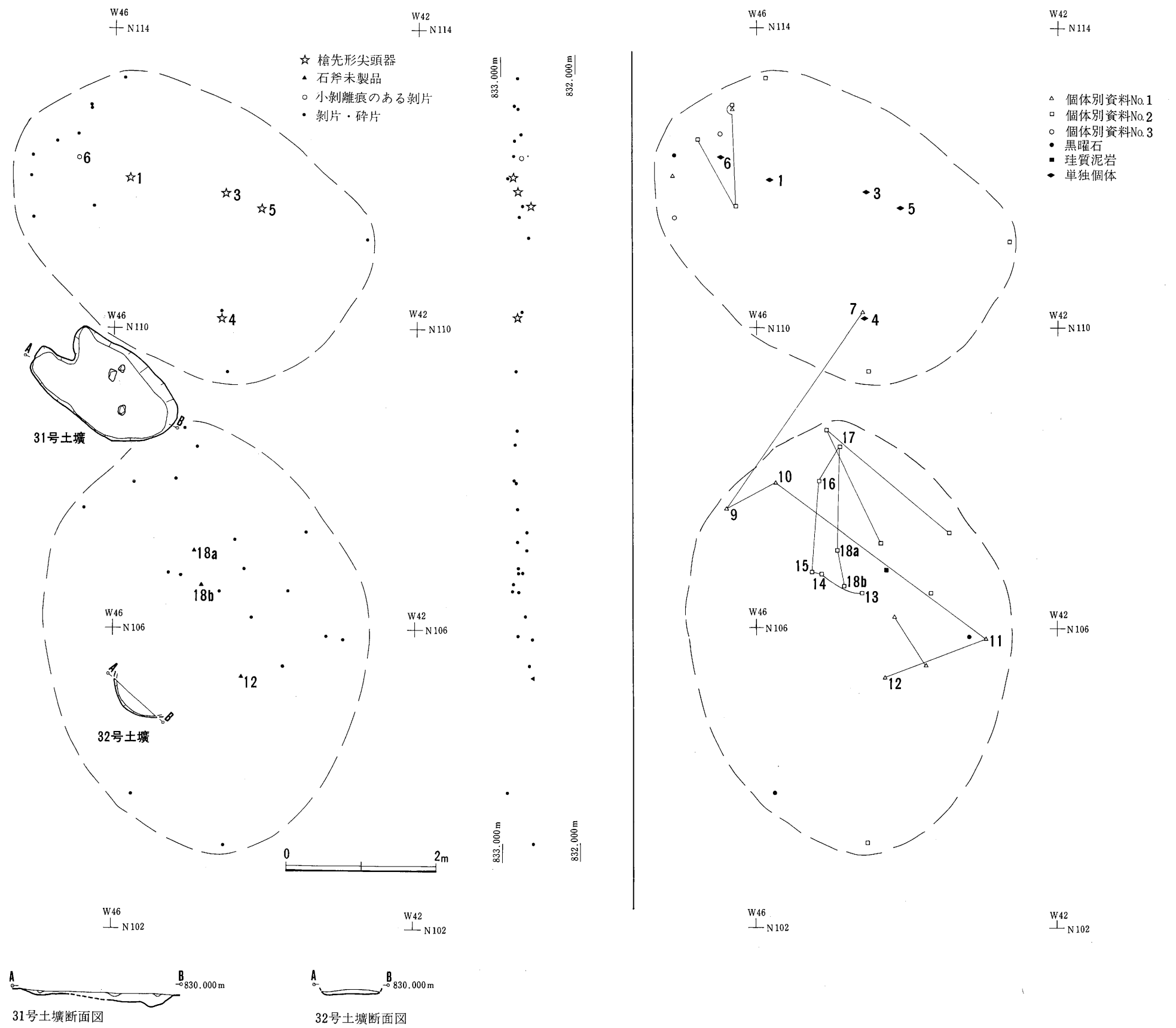


図250 中島B遺跡1号ブロック群器種別分布図(左)・個別別資料分布図(右)

及び31号・32号土壌実測図(1:60)

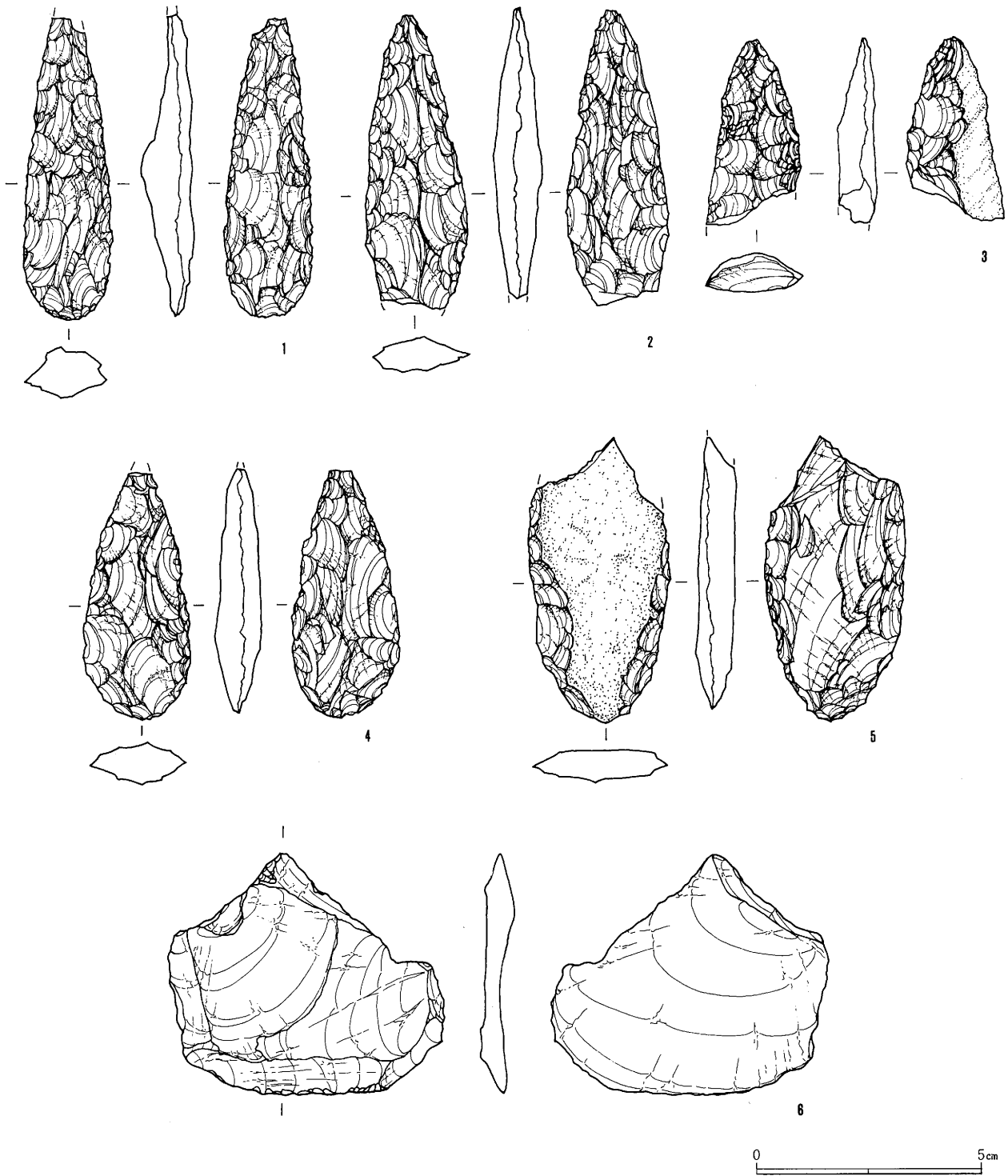


図251 中島B遺跡1号ブロック群出土石器実測図1 (3 : 4)

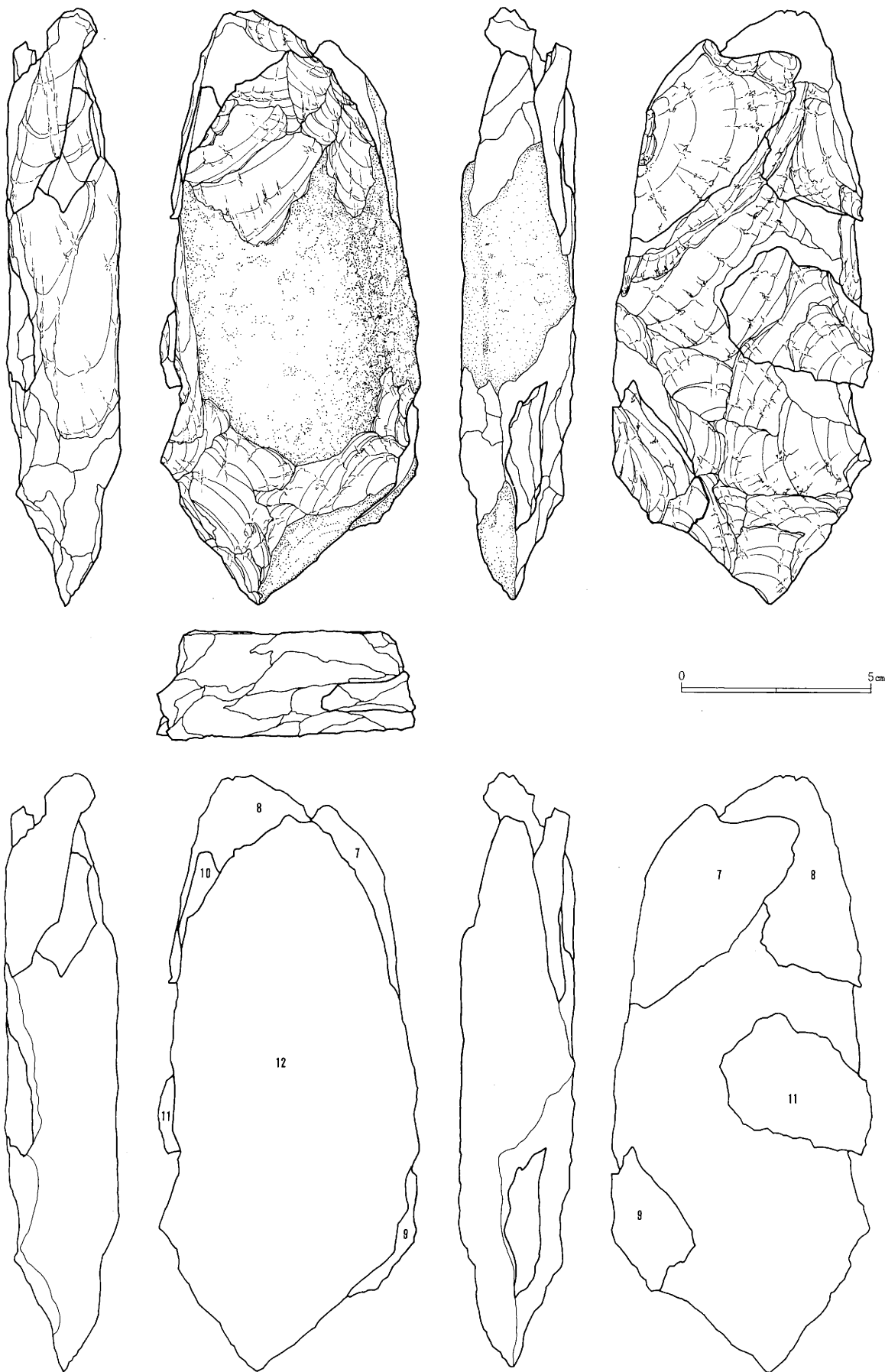


図252 中島B遺跡1号ブロック群出土石器実測図2 (接合資料No.1 2:3)

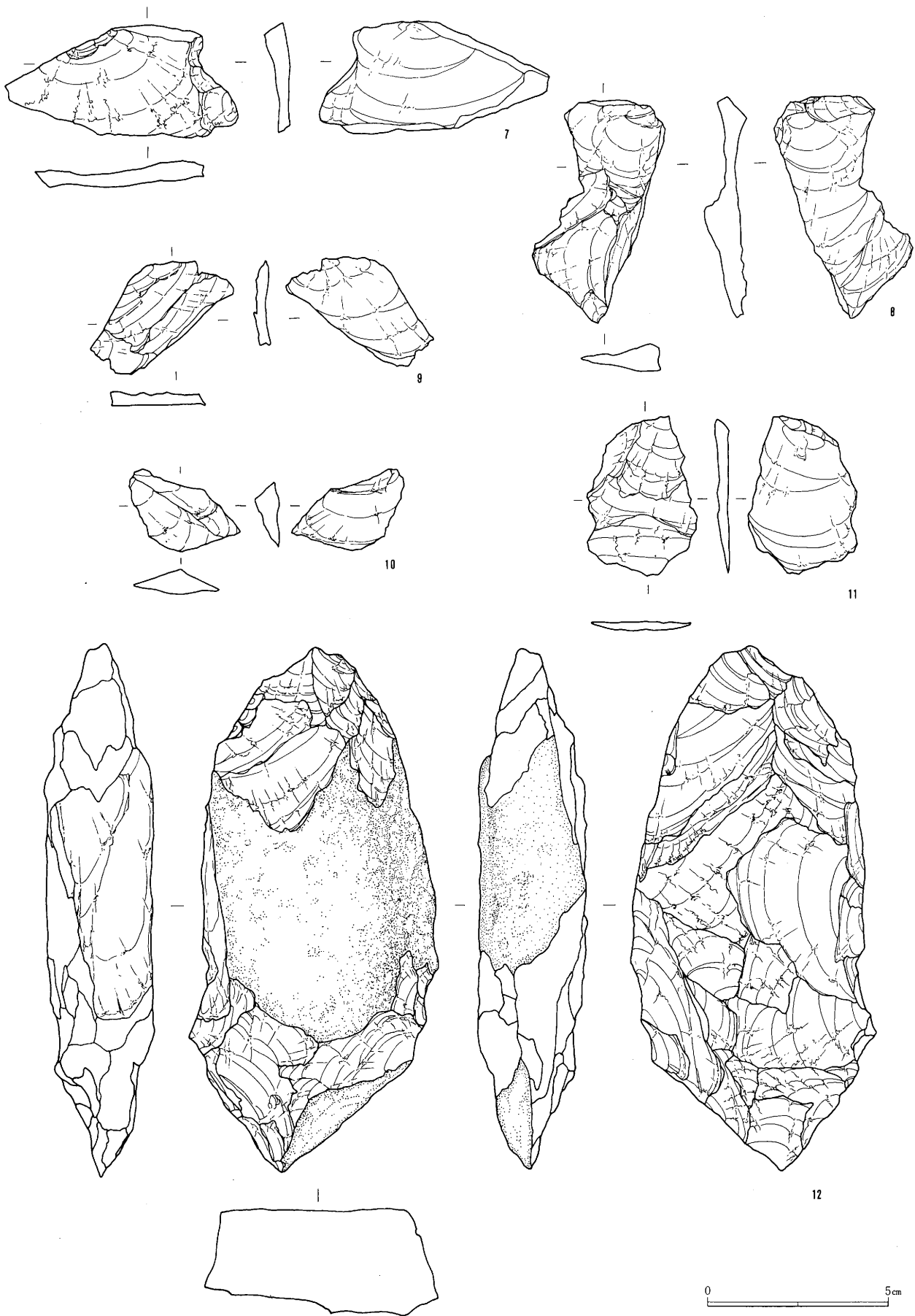


図253 中島B遺跡1号ブロック群出土石器実測図3 (接合資料No.1 2:3)

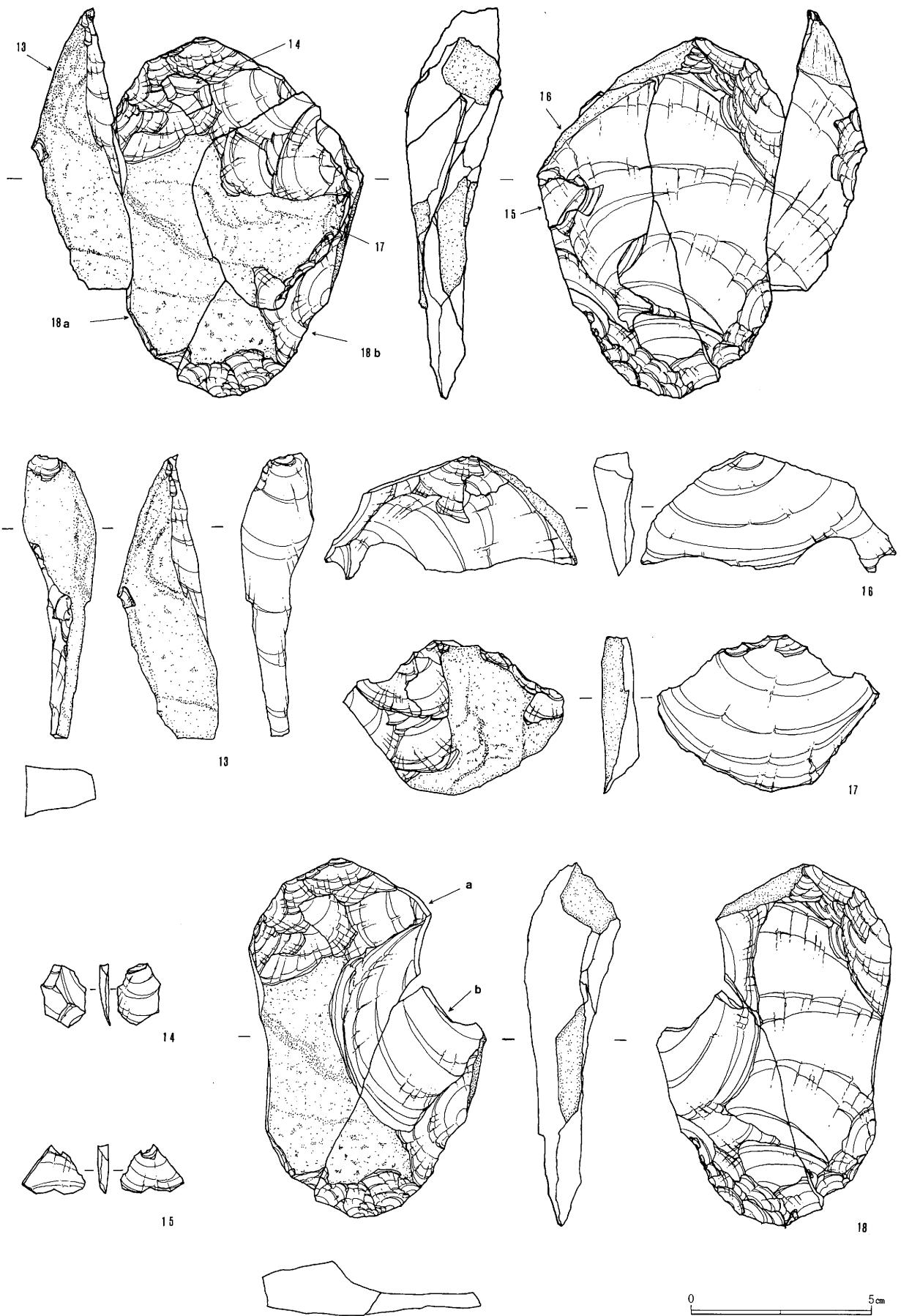


図254 中島B遺跡1号ブロック群出土石器実測図4 (接合資料No.2 2:3)

別構成は表38に示すとおりである。槍先形尖頭器4点及び小剥離痕のある剥片1点のいわゆる道具はすべて単一個体である。個体別資料No.1・No.2の剥片・碎片は、後述する1-B号ブロックと同一個体であり、打製石斧製作時に作出された剥片・碎片と考えられる。

(イ) 1-B号ブロック (図250)

本ブロックは、N105・W44を中心に直径約6mの範囲に円形の広がりをもつ。その分布の在り方は、32号土壌をとりまくような状態で、散漫な分布形態を示し、その北には1-A号ブロックが隣接する。垂直分布は1-A号ブロックとほぼ同様の状況を呈す。

遺物の総点数は21点であり、その器種別構成は、打製石斧未製品3点(うち2点は同一個体の割れたもの)、剥片・碎片18点よりなる。石質構成は、粘板岩が主体をなし、その他にチャート、黒曜石、珪質泥岩がある。それらの個体別構成は表38に示すとおりである。個体別資料No.1及びNo.2が本ブロックの主体をなすが、それらは各個体ごとに打製石斧未製品を1点ずつ含み、またその多くが接合し、打製石斧の製作が行われたことがうかがわれる。

イ 石器群の特徴

本ブロック群からは、槍先形尖頭器4点、打製石斧未製品3点、小剥離痕のある剥片1点、剥片・碎片34点が出土した。さらに、本ブロック群より東方8mのところ、槍先形尖頭器が出土しており、ブロック外ではあるが本ブロック群の石器といっしょに扱う。以下、器種ごとに説明を加える。

(ア) 槍先形尖頭器 (図251-1~5)

1~3はI類柳葉形槍先形尖頭器、4・5はII類木葉形槍先形尖頭器に分類される。調整加工は、1~4が両面調整であり、その両面に及ぶ調整のため素材が礫なのか、剥片なのか、礫片なのかわからない。ただ、3は片面の一部に自然面を残している。5は、自然面を残す剥片を素材とした周縁調整のものである。調整加工の種類としてはフリーレイキングが主となるが、石質の堅さからくるものか、部分的にステップレイキングが目立つものもある(1.表面中央両側縁、裏面右側縁。2.表面上半部両側縁。5.裏面両側縁)。I類である1と2は、長さ7cm前後で、基部近くに最大幅をもつなどよく似ている。2の基部もおそらく1と同様に丸味をおびるであろう。3も上半部しか出土しなかったが、1・2と同様の特徴をもつ可能性が高い。1~3とも、非常に斉一性が強いといえる。一方、木葉形のうち4は最大幅が基部近くにあり、その基部が丸味をもつという特徴は、先の柳葉形のもの共通するが、長さがやや寸詰まりな点から、木葉形に分類した。5は推定10cmの長さを持ち、他の4本の槍先形尖頭器よりもひとまわり大きく、また最大幅も胴部中央部にくる。石材は、1が珪質粘板岩の他はチャート製である。すべて同一個体をもたない単独個体である。

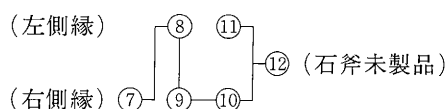
(イ) 小剥離痕のある剥片 (図251-6)

方形の剥片を素材として、その末端部に不連続な小剥離痕が認められる。使用痕として理解できる。チャート製、単独個体である。

(ウ) 接合資料

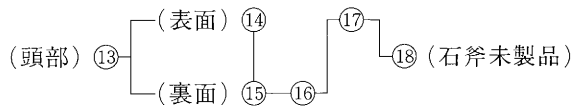
本ブロック群には、4例の接合資料がある。うち2例について説明を加える。他の2例は自然面を持つ剥片同士の接合で、原石を打ち割った初期の段階の接合例である。

接合資料No.1 (図252、253)：本資料は石斧未製品と剥片が接合した例である。剥離順序は以下のようである。



剥片の特徴としては、末端がヒンジフラクチャーするものが顕著であり、直方体の原石をかなり粗い剥離で石斧のかたちを作り上げようとしたことがうかがわれる。

接合資料No.2 (図254)：本資料も、No.1と同様に石斧未製品と剥片が接合した例である。剥離順序は以下のようなものである。



④ 2号ブロック群

ア 遺物の遺存状態

本ブロック群ではN80～N98・W20～W48の範囲に、2-A～2-N号まで計14ヶ所のブロックが認められた。地形的には微高地上縁辺部から傾斜面にかけて立地する。以下、ブロックごとに分布の状況を記述する。

(ア) 2-A号ブロック (図255)

本ブロックはN94・W35を中心に直径約6mの範囲に円形の広がりをもつ。ブロック内南部に直径約3mの範囲で密な分布を示す部分があり、そこからブロックの外縁部に向かって漸次散漫になってゆく。すくなく2-B号ブロックが重なるような状態で連なっている。垂直分布はVI層中に約60cmの厚さをもって包含されている。

遺物の総点数は665点であり、その器種組成は表39に示す。2-B号との重複部分はA・B両ブロックの遺物が混在する部分と考えられるが、組成表上の扱いは便宜的に2-B号ブロックに帰属させた。従って本来的な2-A号ブロックの遺物量は(組成表上の総点数)+(本来2-A号ブロックに帰属する遺物)になる。石質構成は黒曜石がその主体をなし99%を占める。その他にはチャート、粘板岩がある。それらの個別別構成は表40に示した。

器種分布の在り方をみると、槍先形尖頭器(24)、打製石斧(55)、小剥離痕のある剥片などの道具が、散

器種 ブロック	槍先形 尖頭器	尖頭器 未製品	打製石斧	石斧 未製品	削器	小剥離痕 のある剥片	剥片・ 碎片	石核	原石	計
2-A	1	1	1			2	659		1	665
2-B	5	6				2	694		3	710
2-C	2	2					473	1	1	479
2-D			1			2	341			344
2-E	3	30(22)				6	999	1	10	1049
2-F		1				1	29			31
2-G					1		26			27
2-H		1					17			18
2-I							50			50
2-J		4		1		2	111			118
2-K							11			11
2-L							20			20
2-M							11			11
2-N							6			6
外	2					1	25			28
計	13	45(33)	2	1	1	16	3472	2	15	3567

表39 中島B遺跡2号ブロック群器種別組成表 ()内は実際の個体数

ブロック	器種 個体別資料No.	槍先形 尖頭器	尖頭器 未製品	打 製 石 斧	石斧 未製品	削器	小剥離痕 のある剥片	剥片・ 碎片	石核	原石	計
2 A	10							2			2
	14							4			4
	黒曜石	1	1					2		1	658
	粘板岩(単)			1							1
2 B	5							1			1
	6							1			1
	14							5			5
	黒曜石	5	6					2		3	703
2 C	5							20			20
	6							121			121
	7							160			160
	8							1			1
	9							7	1		8
	黒曜石	2	2					164		1	169
2 D	5							2			2
	7							3			3
	11							9			9
	粘板岩			1							1
	黒曜石							2			331
2 E	8							43	1		44
	14							4			4
	黒曜石	3	30					6		10	1001
2 F	14							1			1
	黒曜石		1					1			30
2 G	11							1			1
	粘板岩(単)					1					1
	黒曜石							25			25
2 H	黒曜石		1					17			18
2 I	5							2			2
	6							1			1
	7							2			2
	黒曜石							45			45
2 J	4				1			3			4
	6							6			6
	7							3			3
	9							1			1
	13							8			8
	14							2			2
	黒曜石		4					2			97
2 K	9							3			3
	黒曜石							47			47
2 L	9							16			16
	黒曜石							4			4
2 M	5							1			1
	黒曜石							10			11
2 N	10							3			3
	黒曜石							3			3

表40 中島B遺跡2号ブロック群個体別資料組成表

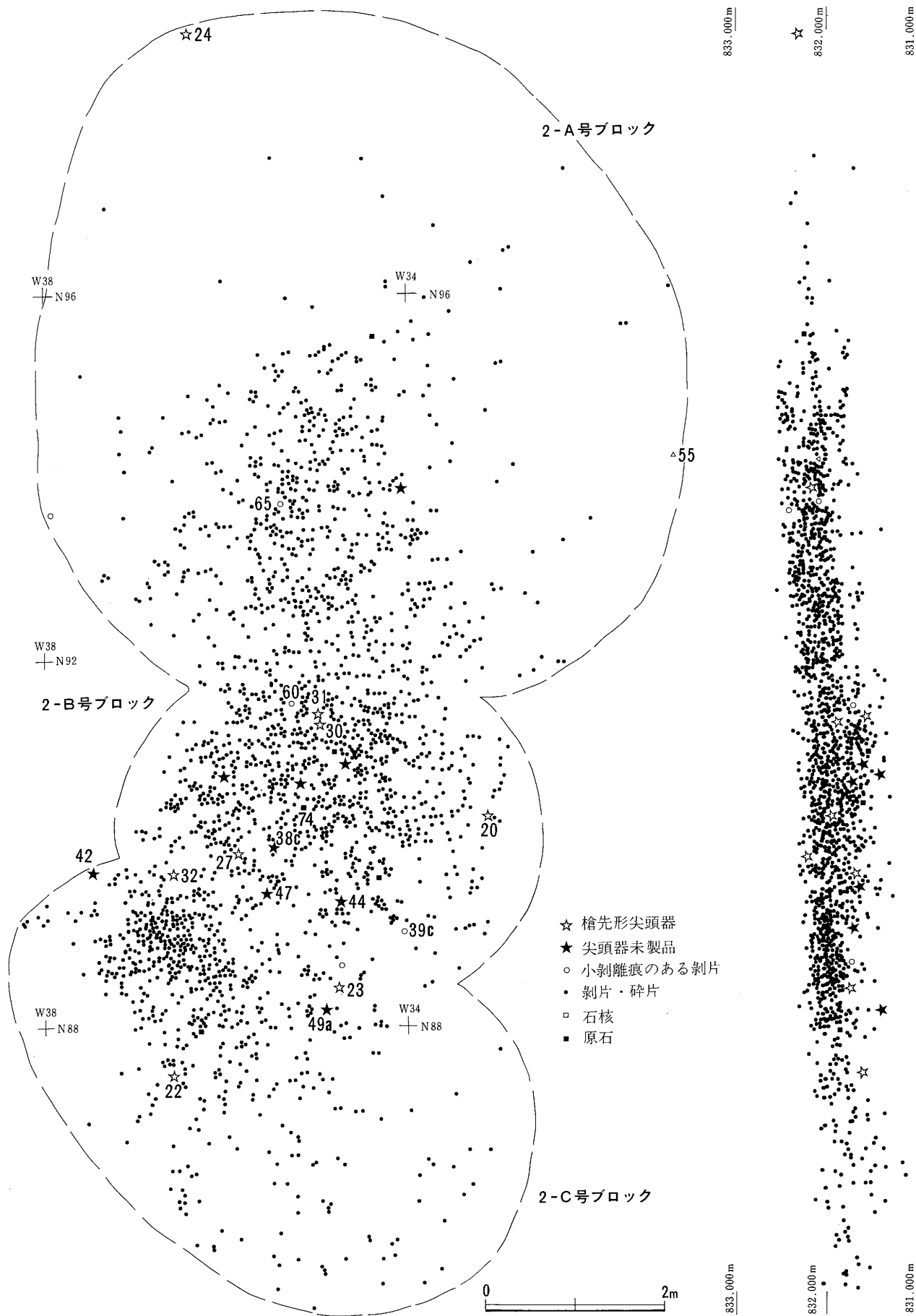


図255 中島B遺跡 2-A～2-C号ブロック器種別分布図 (1:60)

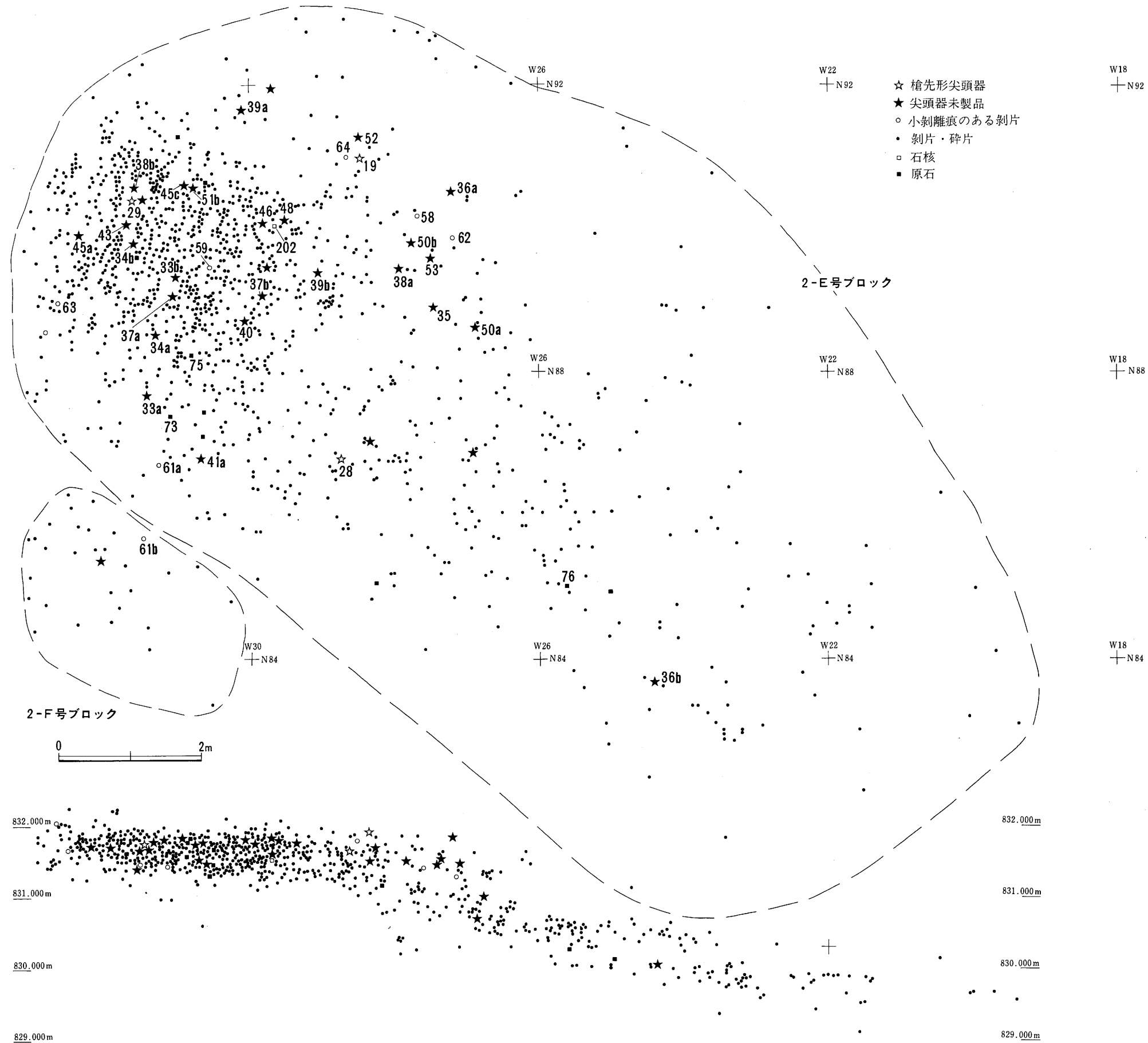


図256 中島B遺跡 2-E・2-F号ブロック器種別分布図 (1:60)

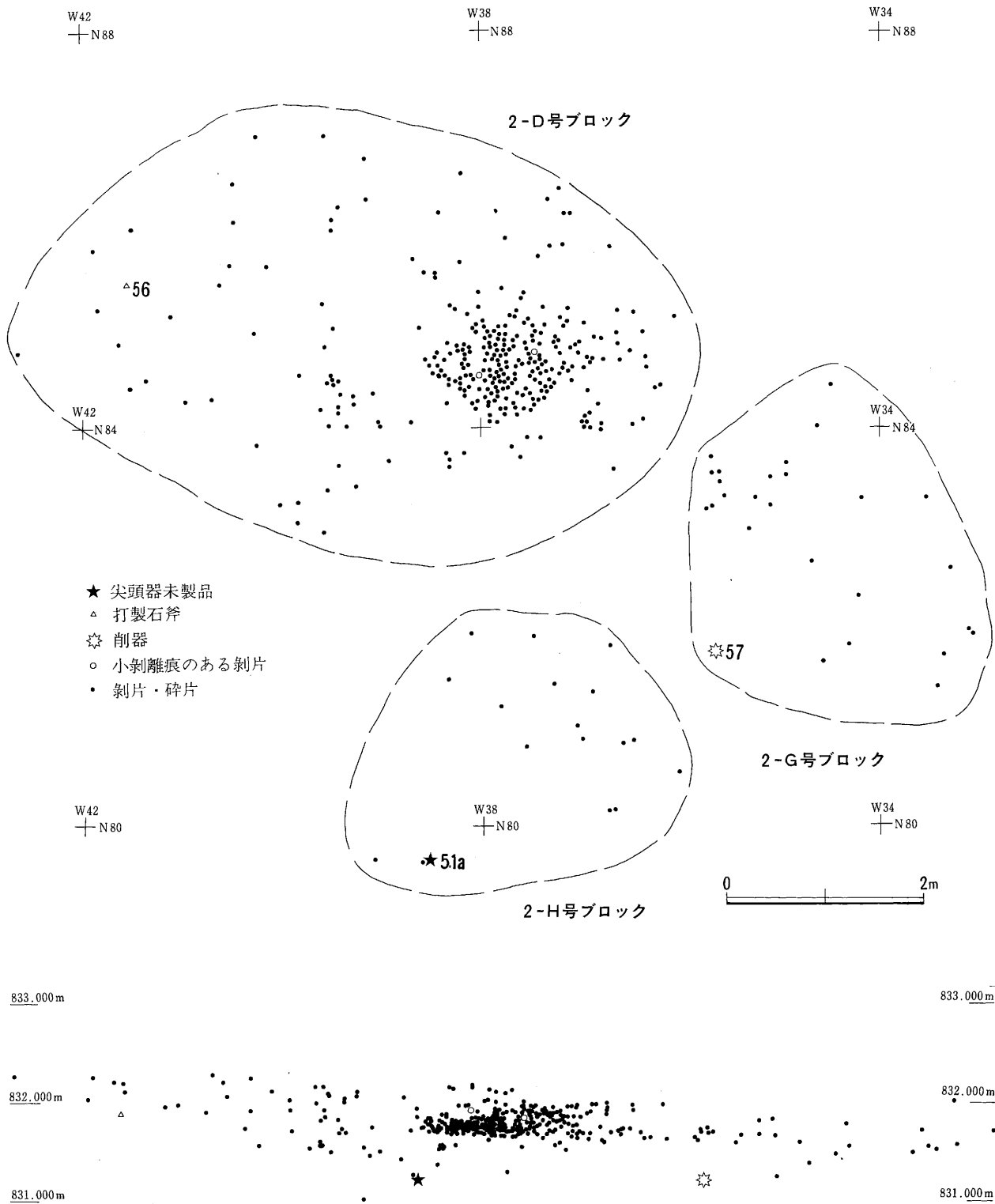


図257 中島B遺跡2-D・2-G・2-H号ブロック器種別分布図 (1:60)

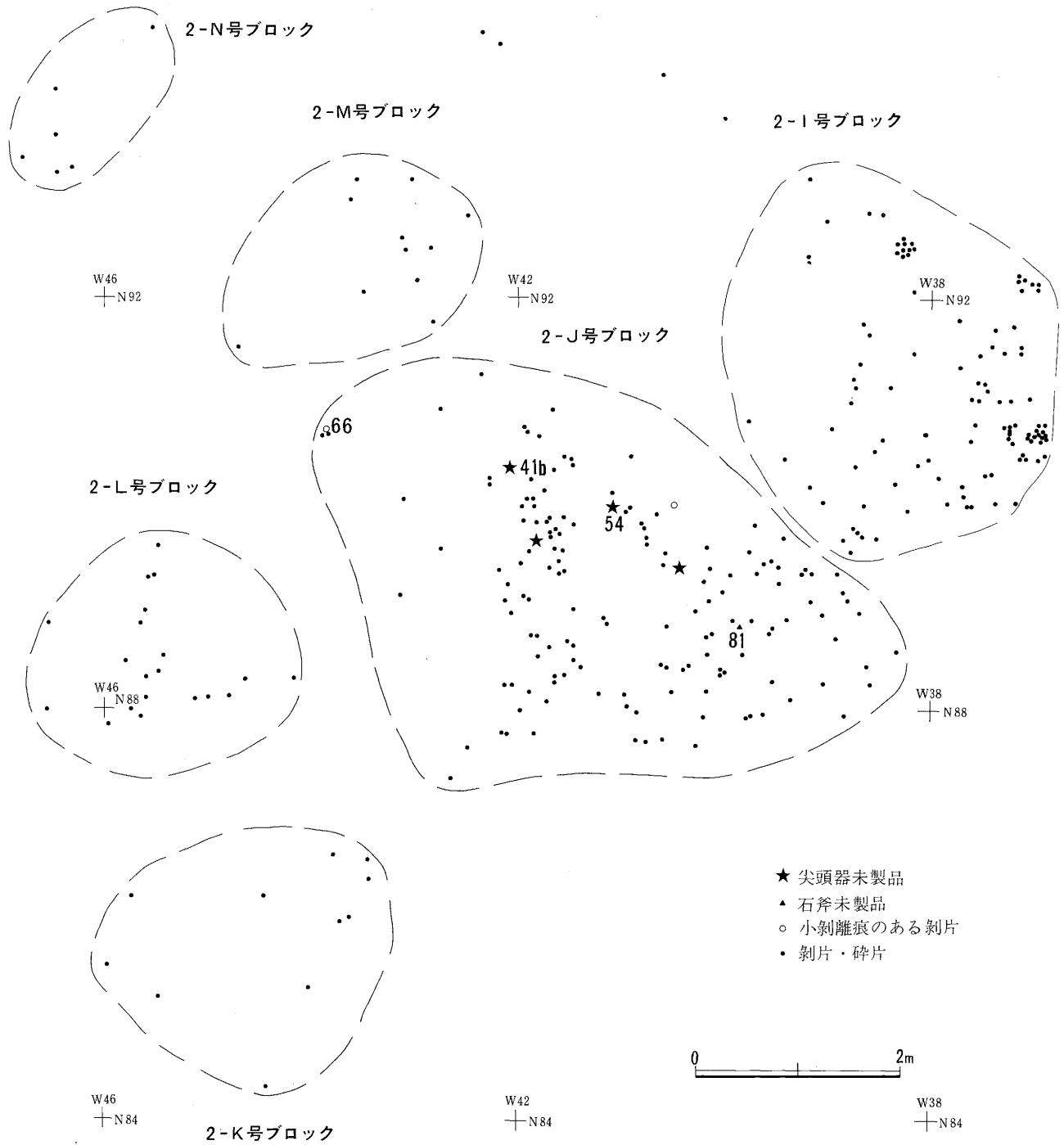


図258 中島B遺跡2-I～2-N号ブロック器種別分布図 (1:60)

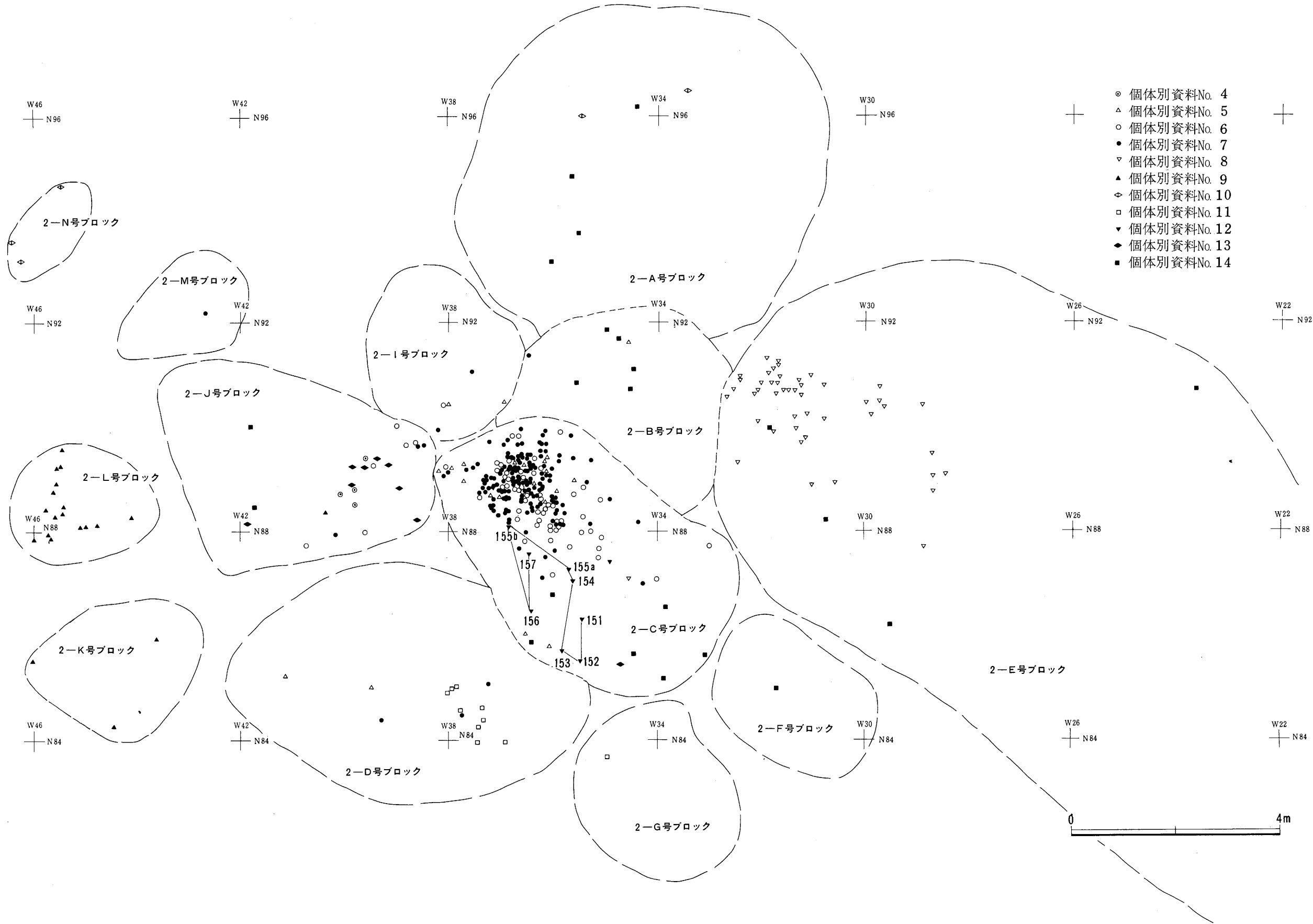


図259 中島B遺跡2号ブロック群個別別資料分布及び接合資料No.9接合状況図 (1 : 75)

漫分布域から出土し、それに対して密集分布域は黒曜石の槍先形尖頭器製作時に剥出された調整剥片、破片がほとんどを占める。他には尖頭器未製品、原石も出土している。黒曜石製の槍先形尖頭器の製作が行われた場であることが推定される。

チャート製のやや大形の縦長剥片が4点出土しているが、これらは何らかの道具の素材になりうるような目的的な剥片の性格をもっている。

(イ) 2-Bブロック (図255)

本ブロックはN91・W35を中心に直径約4mの範囲に円形の広がりをもつ。ブロック内やや北東よりのところに直径約1mの範囲で濃密な分布を示す部分がある。北側の2-A号、南側の2-C号とは部分的に重なるように連なり、東側の2-E号、西側の2-I号各ブロックとは接するように連なっている。垂直分布はVI層中に約1mの厚さをもって包含されている。

遺物の総点数は710点であり、その器種組成は表39に示した。2-A号、2-C号両ブロックとの重複部分の遺物の帰属については便宜的に、2-A号との重複部分は本ブロックに、2-C号との重複部分は2-C号ブロックにそれぞれ帰属させた。個別別資料の構成は表40に示した。

器種分布の在り方をみると、槍先形尖頭器(20、27、30~32)、小剥離痕のある剥片(60)などはブロック外縁部から出土し、中心部近くの密集部分からは、黒曜石製の槍先形尖頭器調整剥片・破片を主体とし、さらに尖頭器未製品・原石も出土している。

(ウ) 2-C号ブロック (図255)

本ブロックはN87・W36を中心に北東~南西にかけて長軸をもつ約6m×3mの範囲に楕円形の広がりをもつ。ブロック内北東部に直径約2mの範囲で密集部分を持ち、南東部分は散漫な分布域である。北側の2-B号ブロックとは部分的に重なるように連なり、他の3方のブロック(2-F号・2-D号・2-J号)とは接するように連なっている。垂直分布はVI層中に約60cmの厚さをもって包含されている。

遺物の総点数は479点であり、その器種組成は表39に示した。2-B号ブロックとの重複部分の遺物は便宜的に本ブロックに帰属させた。石質構成は、粘板岩と黒曜石が主体をなす。個別別資料の構成は表40に示すとおりである。粘板岩は個別別資料No.6及びNo.7の2つの個体で90%以上を占める。また、それらは接合率が高く、石斧製作の際に剥出されたと思われる剥片の接合例(接合資料No.5、No.6、No.7)や、石斧を再加工したと思われる剥片の接合例(接合資料No.4)などの石斧に関連した資料である。一方、黒曜石の剥片・破片は槍先形尖頭器製作の際の調整剥片である。

器種分布の在り方をみると槍先形尖頭器(22・23)、小剥離痕のある剥片など道具は、密集部分の外縁部から出土している。石質別の分布では、密集部はそのほとんどが粘板岩によって占められており、黒曜石は散漫な分布域にみられ、石質によって分布域、その分布状態が異なっている。

(エ) 2-D号ブロック (図257)

本ブロックはN85・W39を中心に東西約8m、南北約4mの範囲に楕円形の広がりをもっている。ブロック内東半部に直径約1mの範囲に密集部分があり、西半部は散漫な分布域となる。北側に接するように2-C号、2-J号両ブロックが連なる。垂直分布はVI層に約60cmの厚さをもって包含されている。

遺物の総点数は344点であり、その器種組成は表39に、個別別資料の構成は表40に示すとおりである。打製石斧(56)が散漫分布域から出土している。密集部分は黒曜石製の槍先形尖頭器調整剥片・破片によって構成されている。また個別別資料No.11は本ブロックに特徴的にみられる個体である。

(オ) 2-E号ブロック (図256)

本ブロックは微高地上平坦面の縁辺部、傾斜面との境に立地しており、一部の遺物は斜面に流出したと考えられる。従って本来的にはN89・W31を中心とした直径約5mの範囲にほぼ円形の広がりをもって分

布していたと思われるが、実際に遺物は南東方向斜面へ延びている。西側は2-B号ブロックと接しており、その境界は不明瞭である。垂直分布は平坦面ではVI層中に約80cmの厚さをもって包含されている。

遺物の総点数は1049点であり、本遺跡のブロック中3号ブロックに次ぐ量の多さである。器種組成は表39に示したが、特に尖頭器未製品の量の多さが注目される。石質は黒曜石が主体を占める。個別別資料の構成は表40に示した。粘板岩の資料には幼児頭大の原石を打割した一括接合資料44点があり、その他チャート、粘板岩が若干出土している。

器種分布の在り方をみると、尖頭器未製品は平坦面の密集分布域を中心に出土しているが特に密集分布域の北部～東部にかけての外縁部に集中する箇所がある。これら尖頭器未製品は接合例が多い。ブロック内での接合例が多いのはもとより、ブロックを越えて接合する例として38、39は、はじめ2-B号ブロックにおいて尖頭器製作の作業を行って、その後本ブロックに作業の場を移したことがうかがわれる例である。他に41は2-B号と、49は3号と、51は2-H号各ブロックとそれぞれ接合関係をもつ。個別別資料No.8の幼児頭大の原石を打割した資料はブロック北東部に直径約1mの範囲にまとまって出土した。

(カ) 2-F号ブロック (図256)

本ブロックはN85・W32を中心に直径約3mの範囲に円形に広がるが、小規模で分布も散漫である。垂直分布はVI層中に約30cmの厚さをもって包含されている。遺物の総点数は31点で、黒曜石が主な石質で、尖頭器未製品1点の他は槍先形尖頭器の調整剥片・破片がほとんどである。そのほかにはチャートの剥片1点が出土したのみである。

(キ) 2-G号ブロック (図257)

本ブロックはN83・W35を中心に直径約3mの範囲に円形に広がるが、小規模で分布も散漫である。垂直分布はVI層中に約30cmの厚さをもっている。遺物の総点数は27点で、ブロック西縁で削器(57)が1点出土したほかはすべて黒曜石の槍先形尖頭器の調整剥片・破片で構成されている。

(ク) 2-H号ブロック (図257)

本ブロックはN81・W38を中心に直径約3mの範囲に円形の広がりをもつが、小規模で分布も散漫である。垂直分布はVI層中に約30cmの厚さをもっている。遺物の総点数は18点で、すべて黒曜石。1点出土している尖頭器未製品は2-E号ブロックのものと接合する。他は槍先形尖頭器の調整剥片・破片である。

(ケ) 2-I号ブロック (図258)

本ブロックはN91・W39を中心に直径約3.5mの範囲に円形の広がりをもち、ブロック全体に散漫な分布状態を呈している。東側に2-B号ブロックが接するように連なっている。垂直分布はVI層中に約60cmの厚さをもつ。遺物の総点数は50点であり、粘板岩の石斧製作に関する剥片が若干あるほかは黒曜石の槍先形尖頭器の調整剥片・破片で構成されている。

(コ) 2-J号ブロック (図257)

本ブロックもまたN89・W41を中心に直径約4mの範囲に円形の広がりをもっているが、ブロック全体が散漫な分布状態を呈している。東側に2-B号ブロックが接するように連なっている。垂直分布はVI層中に約1mの厚さをもって包含されている。遺物の総点数は118点であり、その器種組成は表39に示した。黒曜石の槍先形尖頭器調整剥片・破片が主体をなし、尖頭器未製品も4点出土している。若干の粘板岩の資料はブロック東半部から出土する傾向にあり、黒曜石が西半部に多い点と対照的である。粘板岩の資料は2-C号ブロックと一部接合する。また接合資料No.3は石斧未製品と剥片の接合例で、本ブロックで石斧製作が行われたことがうかがわれるが、接合した剥片は4点と少なく、自然面をもつ剥片もないので原石がある程度加工された状態でもたらされたものと考えられる。

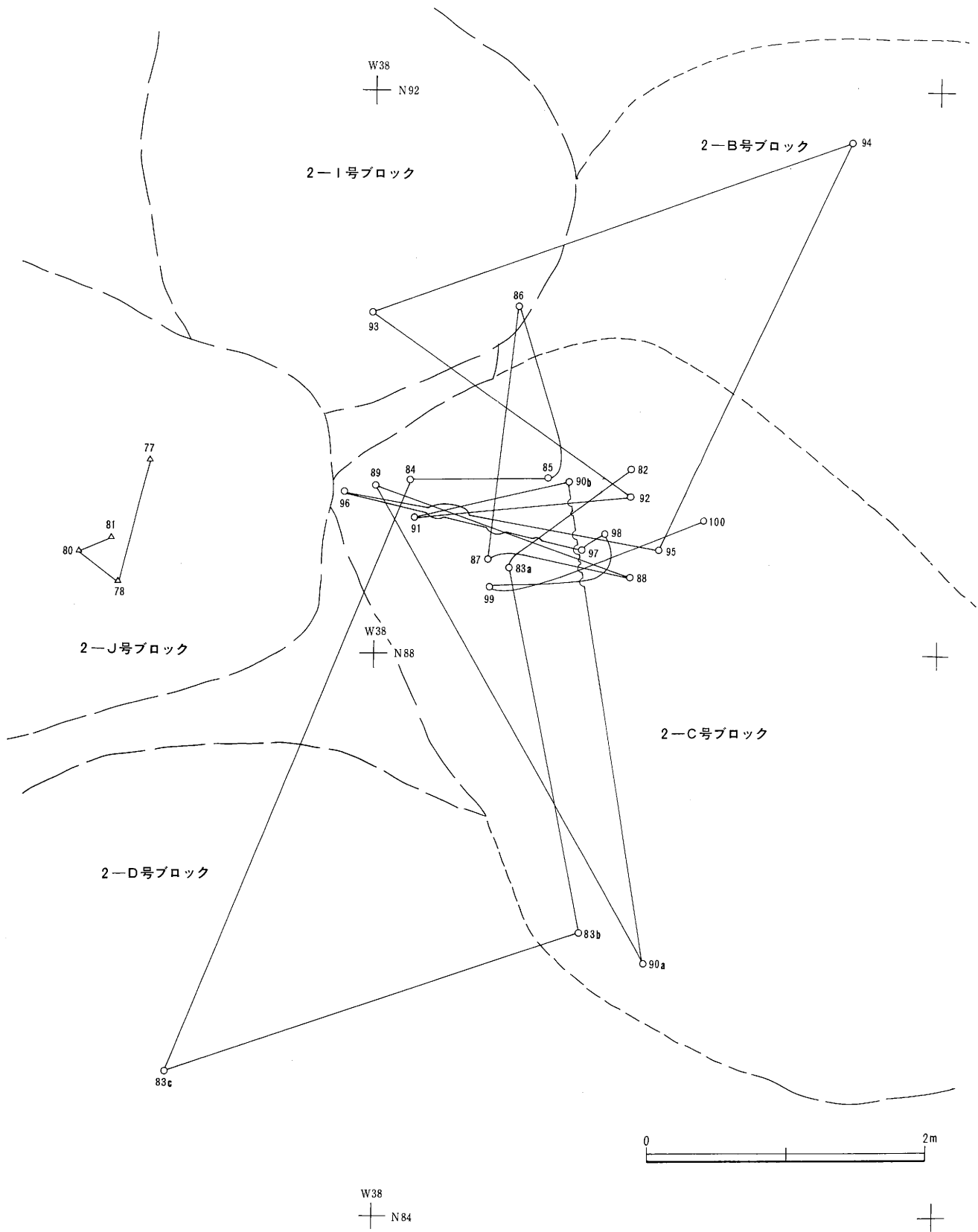


図260 中島B遺跡接合資料No. 3 及びNo. 4 接合状況図 (1 : 40)

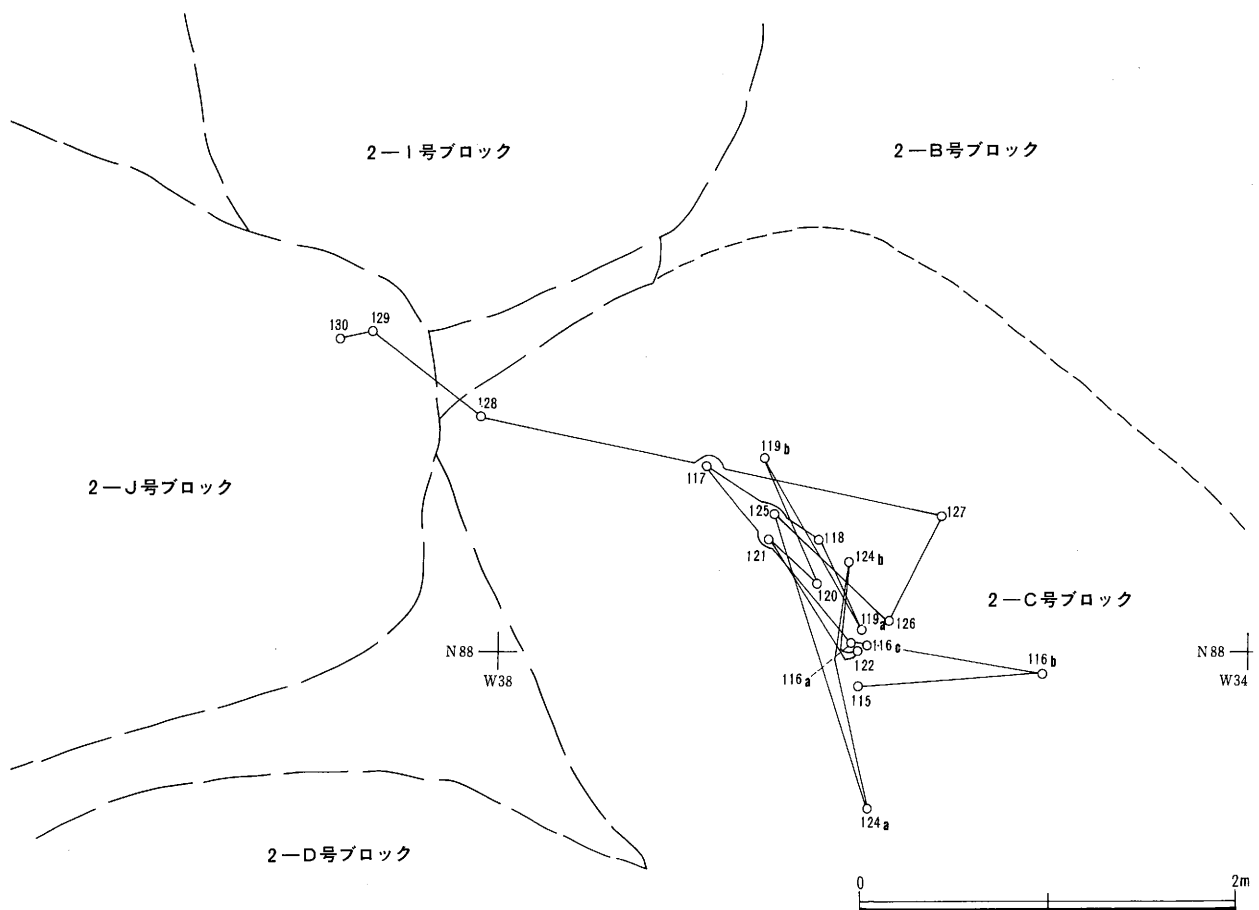
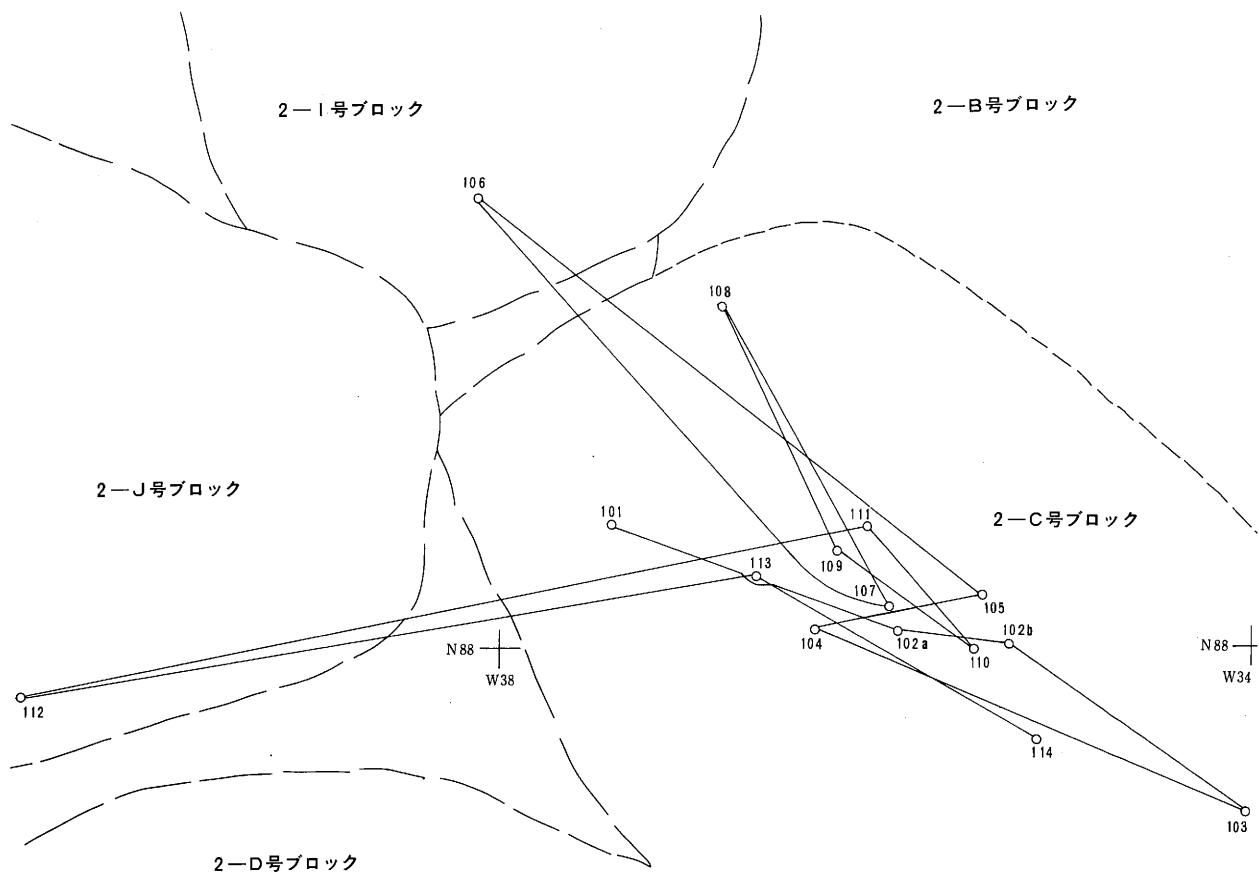


図261 中島B遺跡接合資料No.5 (上)及びNo.6 (下)接合状況図 (1:40)

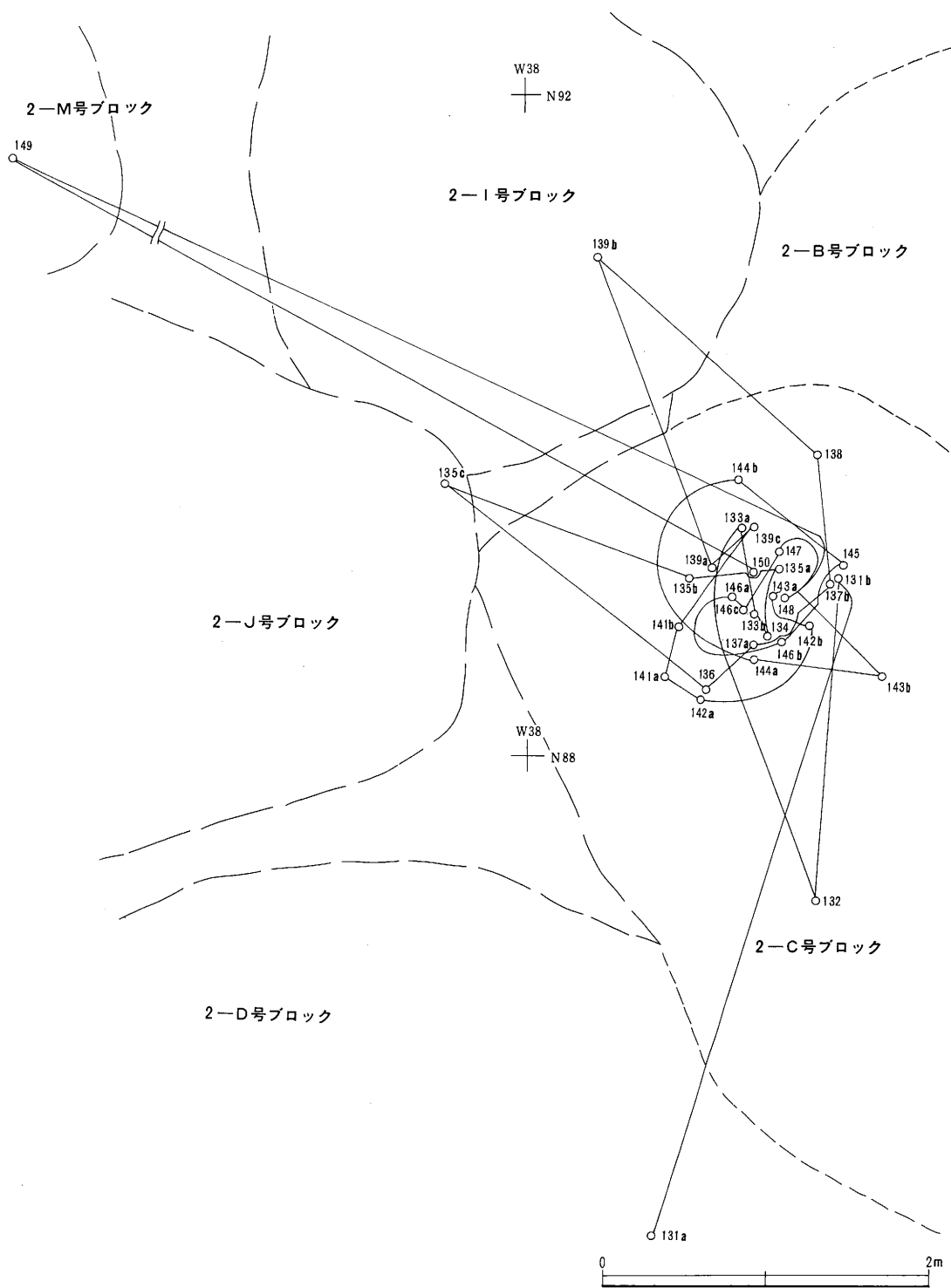


図262 中島B遺跡接合資料No.7 接合状況図 (1:40)

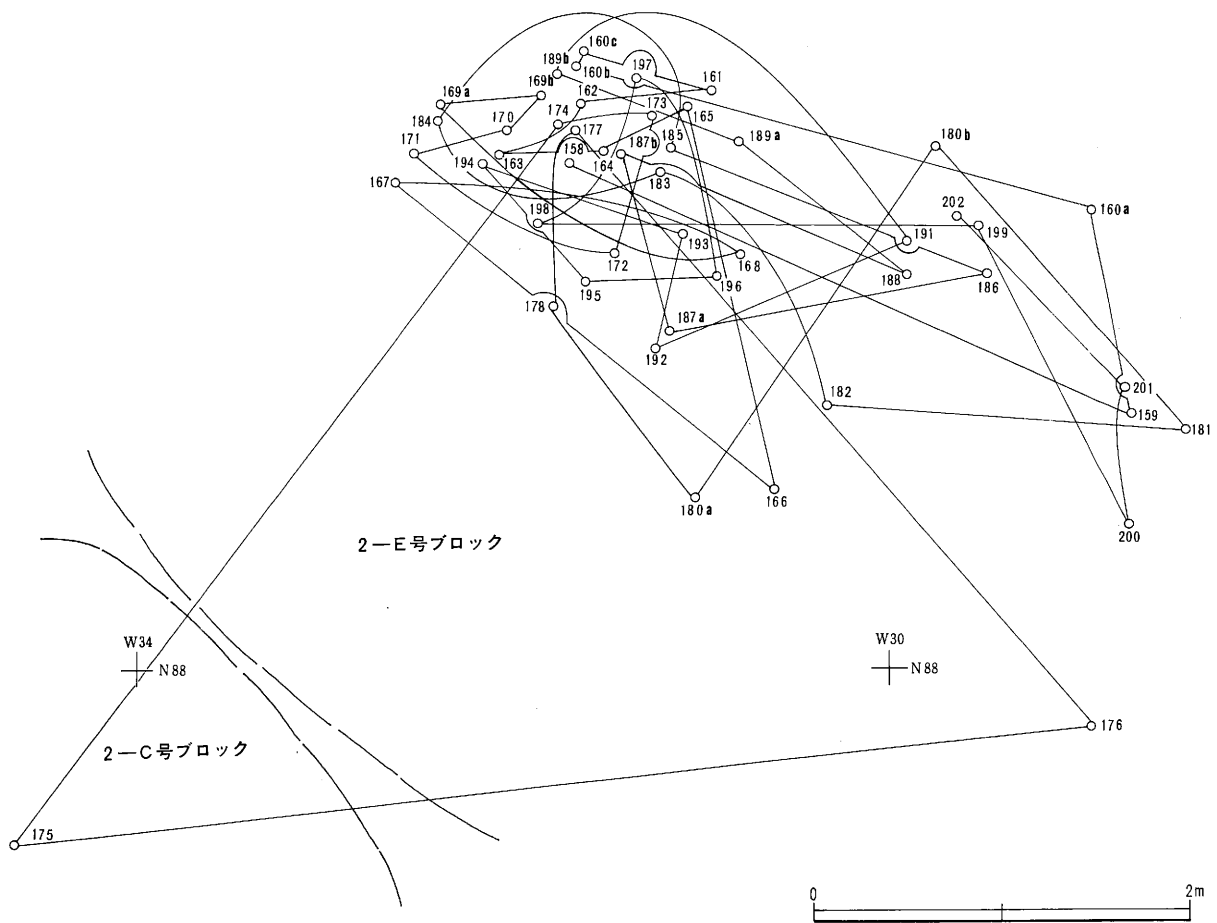


図263 中島B遺跡接合資料No.8 接合状況図 (1:40)

(㊦) 2-K号ブロック (図258)

本ブロックもN86・W45を中心に直径約3mの範囲に円形の広がりをもつが、小規模で分布も散漫である。垂直分布はVI層中に約40cmの厚さをもっている。遺物の総点数は11点で、すべて槍先形尖頭器の調整剥片・碎片である。石質は、3点玄武岩があるほかはすべて黒曜石である。

(シ) 2-L号ブロック (図258)

本ブロックもまたN89・W46を中心に直径約3mの小規模な範囲に円形の広がりをもって散漫に分布する。垂直分布はVI層中に約30cmの厚さをもって包含されている。遺物の総点数は20点である。玄武岩(個別資料No.9)の剥片・碎片によって構成されるブロックで、他は黒曜石剥片が4点のみである。玄武岩製石器は本遺跡からは出土しなかったが、その剥片の特徴から槍先形尖頭器製作時の調整剥片と考えられる。

(ス) 2-M号ブロック (図258)

本ブロックはN92・W44を中心に直径約2mの範囲に円形の広がりをもつ。他同様小規模で分布も散漫である。垂直分布はVI層中に約20cmの厚さで包含されている。遺物の総点数は11点、黒曜石10点は槍先形尖頭器調整剥片・碎片であり、他の1点は個別資料No.5の石斧製作時調整剥片である(接合資料No.7)。

(セ) 2-N号ブロック (図258)

本ブロックはN94・W46付近に珪質粘板岩の剥片が3点、黒曜石剥片が3点集まっており、ブロックにするには点数やその分布に問題はあるが、珪質粘板岩(個別資料No.10)が特徴的であったため、一応ブロックとして扱った。垂直分布はVI層中に約10cmの厚さで包含される。

(ウ) ブロック外 (図249)

ブロック外から出土した石器は、21の黒曜石製槍先形尖頭器、25の珪質粘板岩製の槍先形尖頭器がある。また、N99・W48付近で細隆起線文土器が一括出土をしている。周囲にはまったく遺物の出土をみない単独出土である。VI層最上面より検出された。

イ. 石器群の特徴

2号ブロック群からは、槍先形尖頭器13点、尖頭器未製品45点、打製石斧2点、石斧未製品1点、削器1点、小剥離痕のある剥片16点、石核2点、原石15点、剥片・碎片3472点が出土した。以下、器種ごとに記述を行う。なお石核については、両者ともに接合資料の中で扱う。

(ア) 槍先形尖頭器 (図264-19~32)

形態上大きく2つに分類できる。I類柳葉形槍先形尖頭器は19~24が、II類木葉形槍先形尖頭器は、25~29がこれに相当する。なお、30~32は欠損部分が多く、形態分類をひかえた。

I類：大きさの点で2細分される。19・20は、6cmからそれ以上の長さのやや大形の一群である。両面調整で、断面形はレンズ状を呈す。表裏とも押圧剥離によりみごとに仕上げられている。全体形状は、19が欠損品のため一部不明確なところもあるが、20とほぼ同様な形状であると考えられ、先端・基部ともに尖がり、最大幅が胴部中央やや下半にくる形状であろう。一方、21~24は長さ5cm前後の中形からやや小形の一群である。半両面調整の21・22、周縁調整の23・24がある。22~24は、素材が剥片であることを示しているが、表面には自然面が多く残っており、素材となる剥片を一定量尖頭器製作のために剥離したのではなく、原石を打ち割ってゆく過程で初期段階に剥出される自然面をもつやや厚手の剥片を利用したものと理解される。この点については、後で詳しく触れることにして、ここでは、自然面を片面に残す剥片を素材とした半両面・周縁調整の一群の槍先形尖頭器の存在を注意しておきたい。

欠損部など個々の観察を行おう。19は先端・基部を欠く。特に基部側は、基部末端方向からの加撃によって欠損している。20~22は先端部をわずかに欠いている。また21・22は基部に自然面が認められ、やや平基に近い形態になる。23の基部は自然面であり、ほぼ完形である。24は、先端方向からの加撃で欠けている。23・24ともに作りが全体に粗く(23の基部、24の右側縁にはほとんど調整が施されていない。)未製品である可能性もある。石質はすべて黒曜石である。

II類：これも大きさの点で2細分される。25・26の中形と27~29の小形の一群である。25は長さ5cmを測る中形で、半両面調整、平基の完形品である。基部の微細な剥離は、折れ面に施されたような調整であり、一度折れた基部を再加工したものかもしれない。26は両面調整、基部欠損のため全体形状は不明だが、残存部から推定すると、菱形を呈するかもしれない。27~29は長さ3cm前後の小形の一群である。3点ともに剥片を素材とした周縁調整を施し、表面は27が調整加工以外は自然面、28が多方向からの剥離面、29も多方面の剥離面と自然面が看取される。この小形周縁調整の一群も、先のI類中~小形の一群と製作上同様の特徴を示す一群として注意しておきたい。石質は25が珪質粘板岩で、他はすべて黒曜石である。

その他：30~32は破損品でその形態が不明であるが、上記のI類かII類のいずれかに属するであろう。30・31は黒曜石ながらその透明度がよく似ており、また出土地点も近いことから同一個体の可能性が強く、もし同一個体として復元するならば、7cm前後のやや大形のII類槍先形尖頭器として捉えられる。石質はすべて黒曜石である。

(イ) 尖頭器未製品 (図265~267-33~54)

完成度ランクCとしたものは33~43、ランクDとしたものは44~54である。

33は、ほぼ完成品に近いが、正面図左側縁表方向からの加撃で折れており、左側縁の胴部~先端への調整中に折れたと理解した。同様な例として34は正面図右側縁表方向から、36は正面図左側縁表方向から、

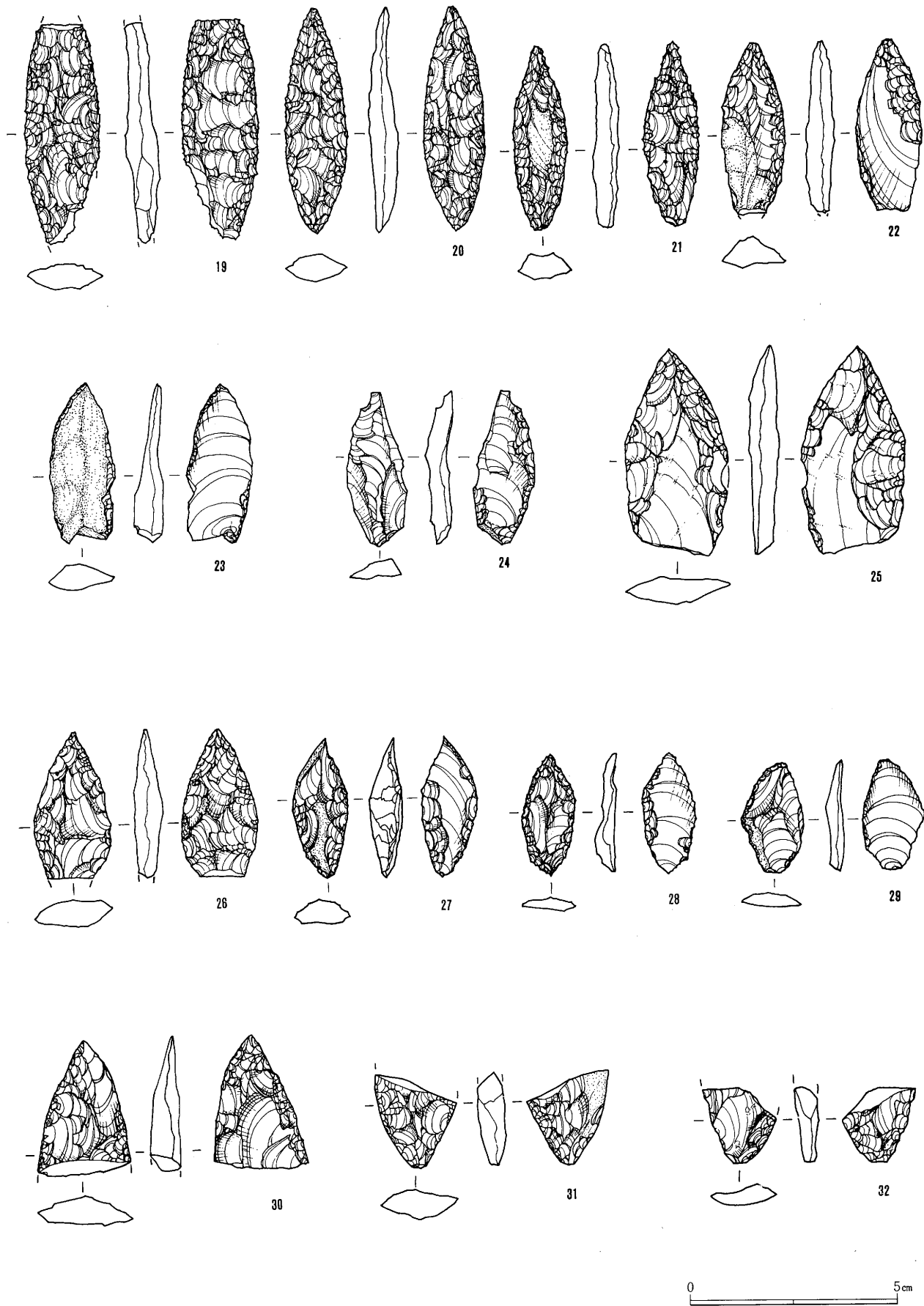


図264 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図1 (3:4)

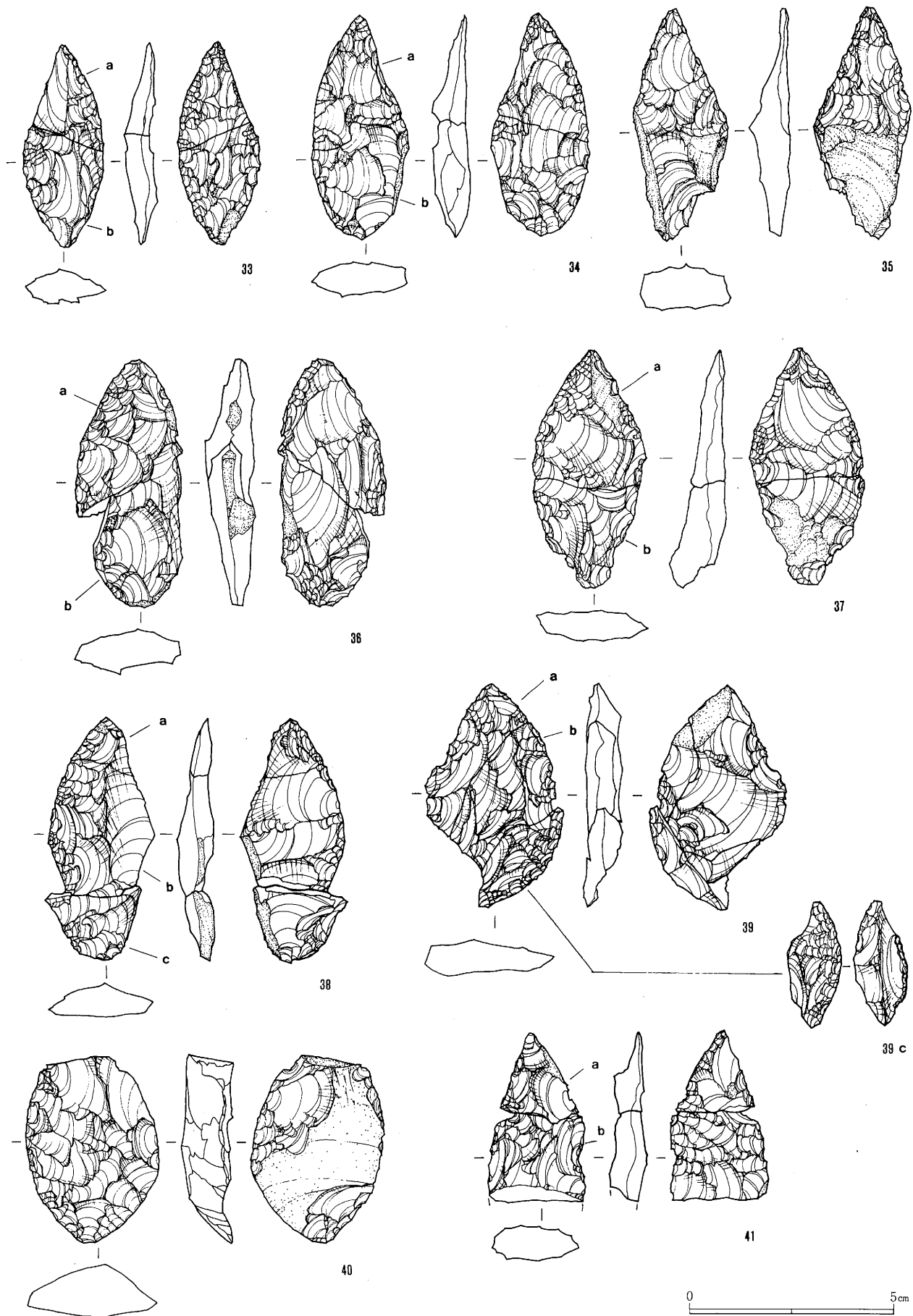


図265 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図2 (3:4)

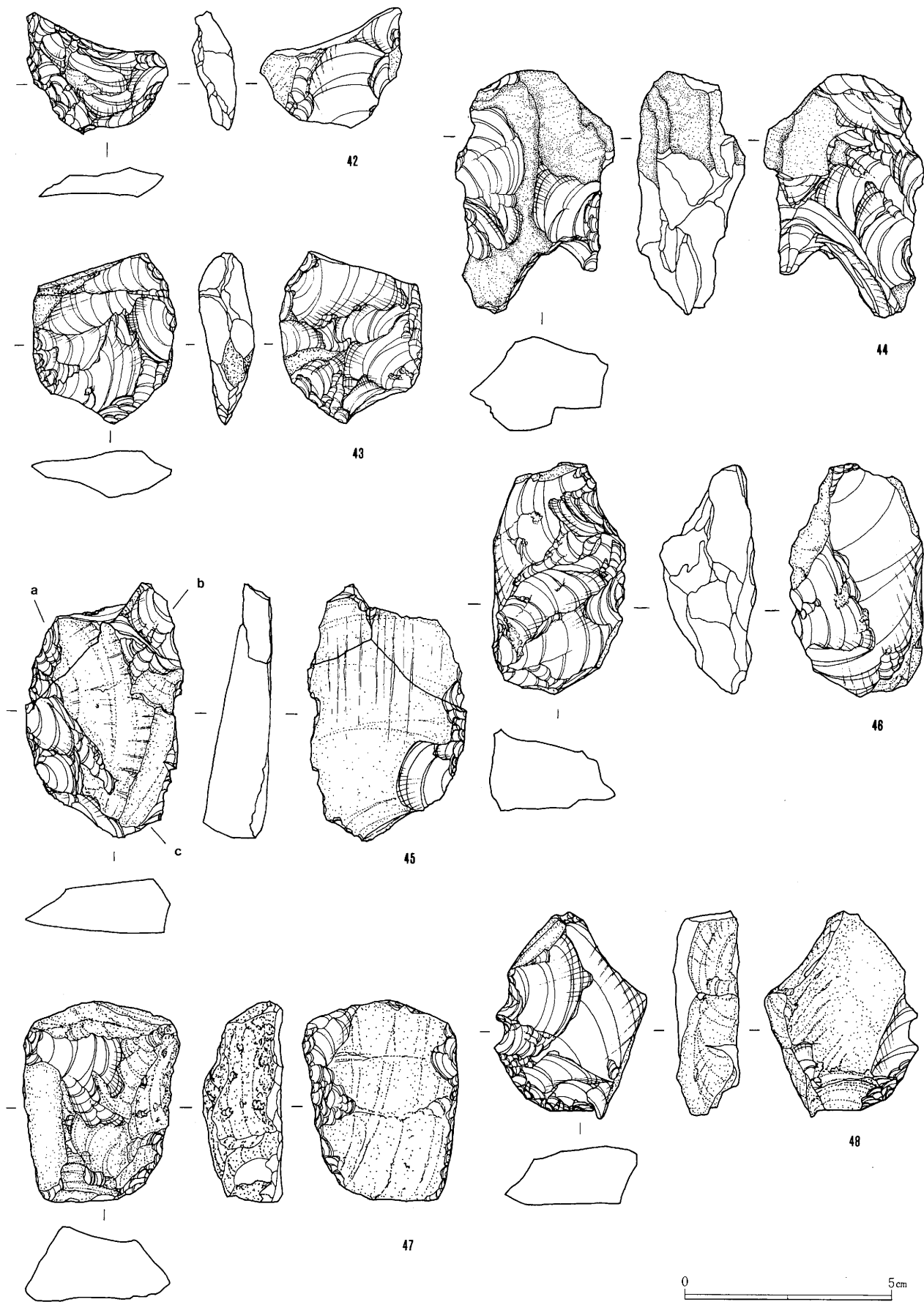
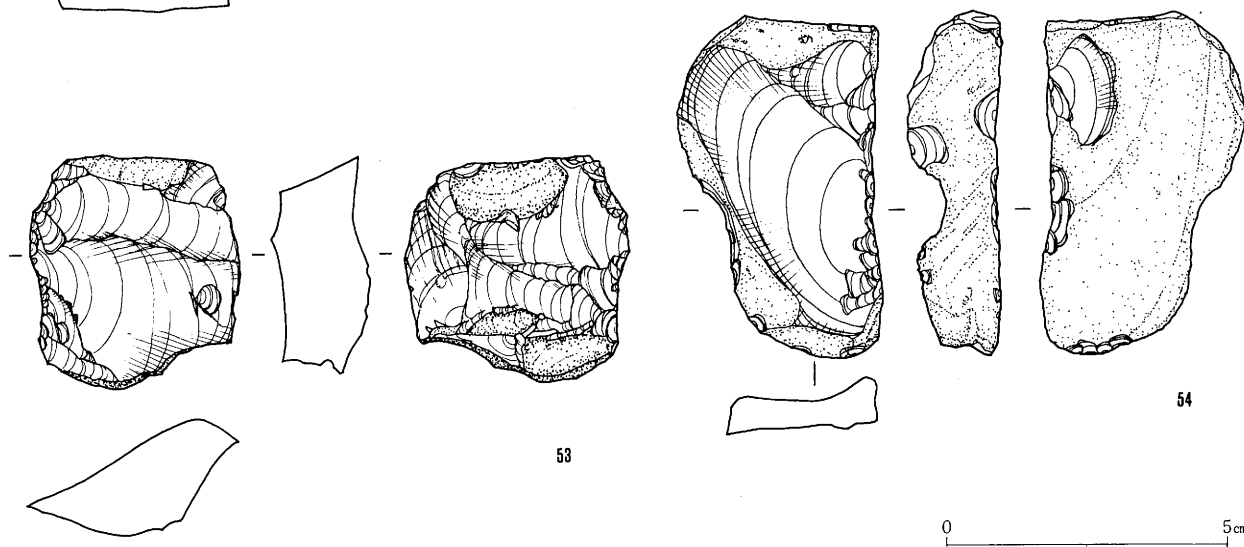
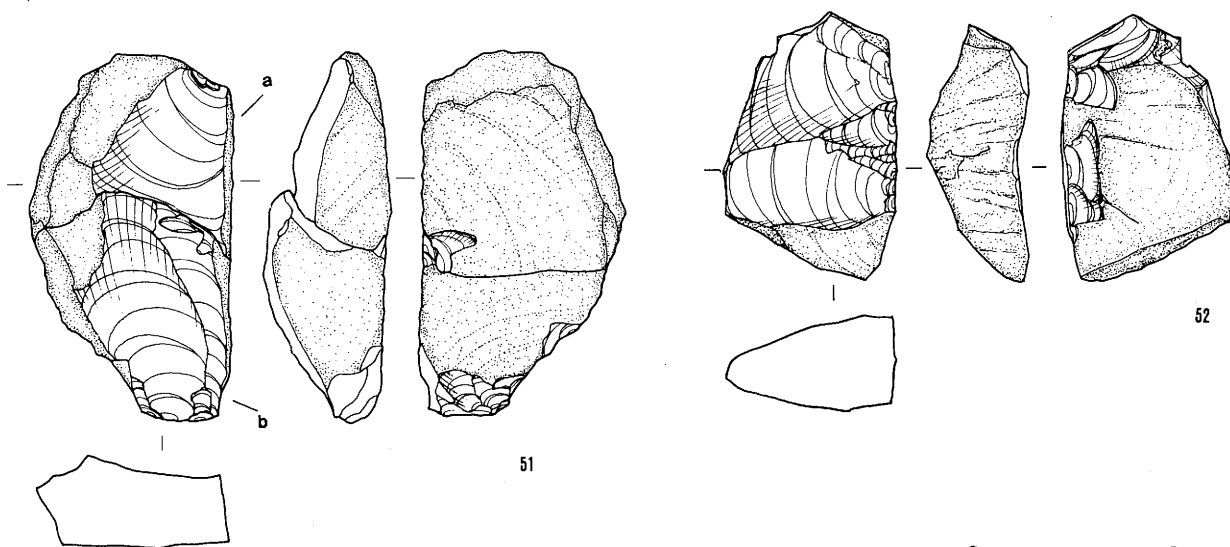
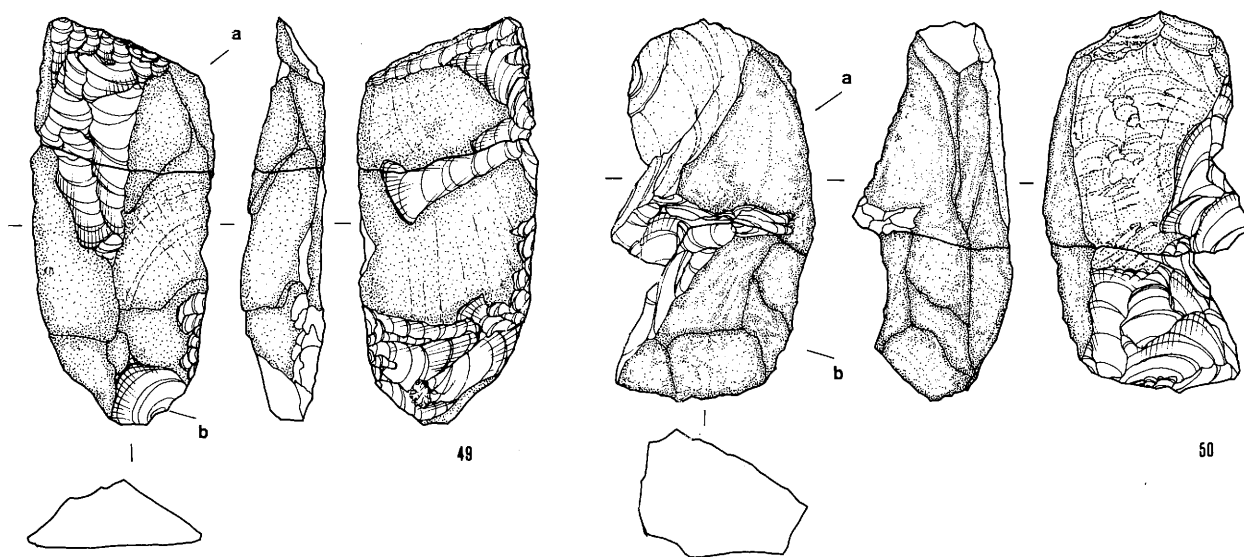


図266 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図3 (3:4)



0 5cm

図267 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図4 (3:4)

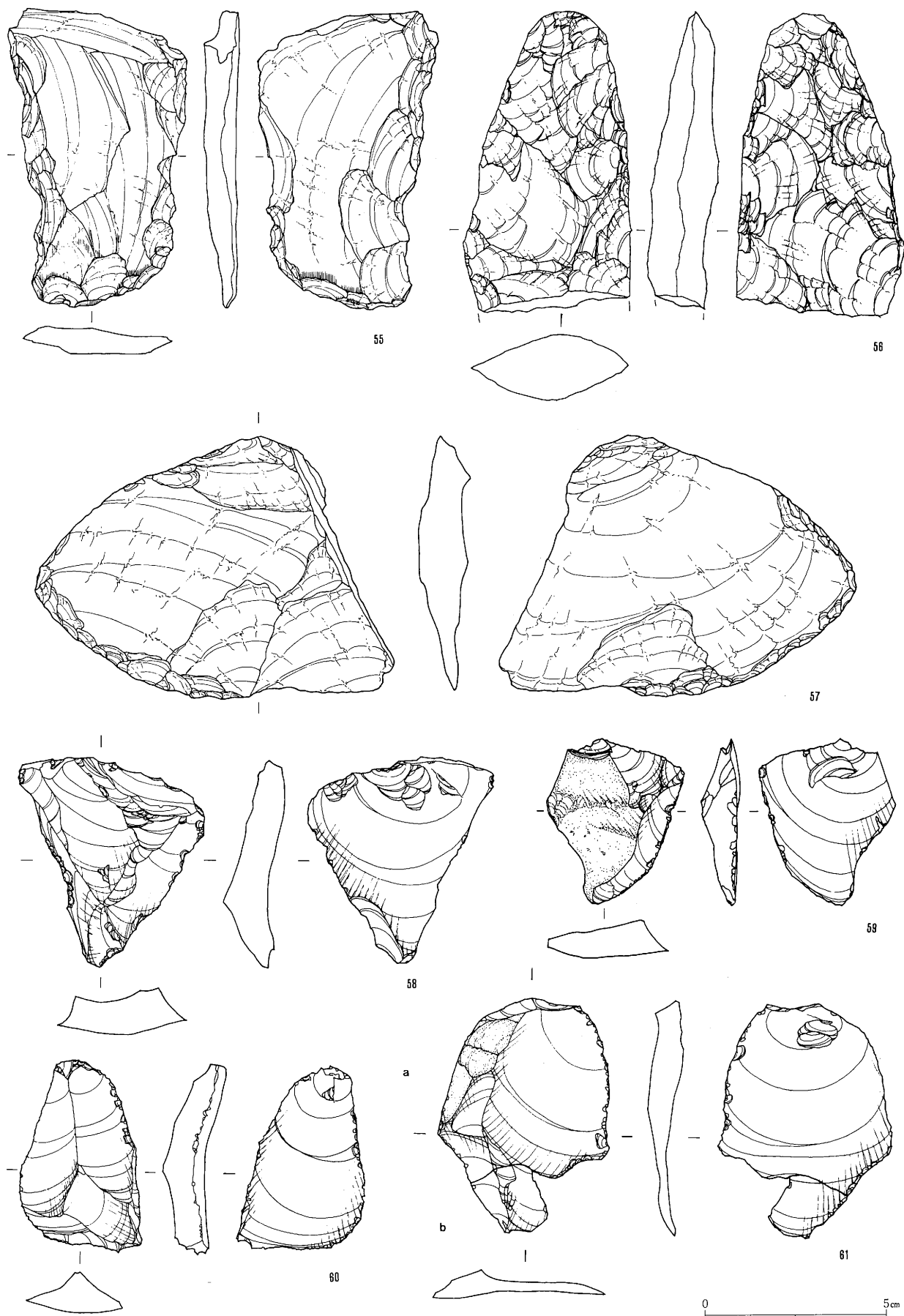


図268 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図5 (2:3)

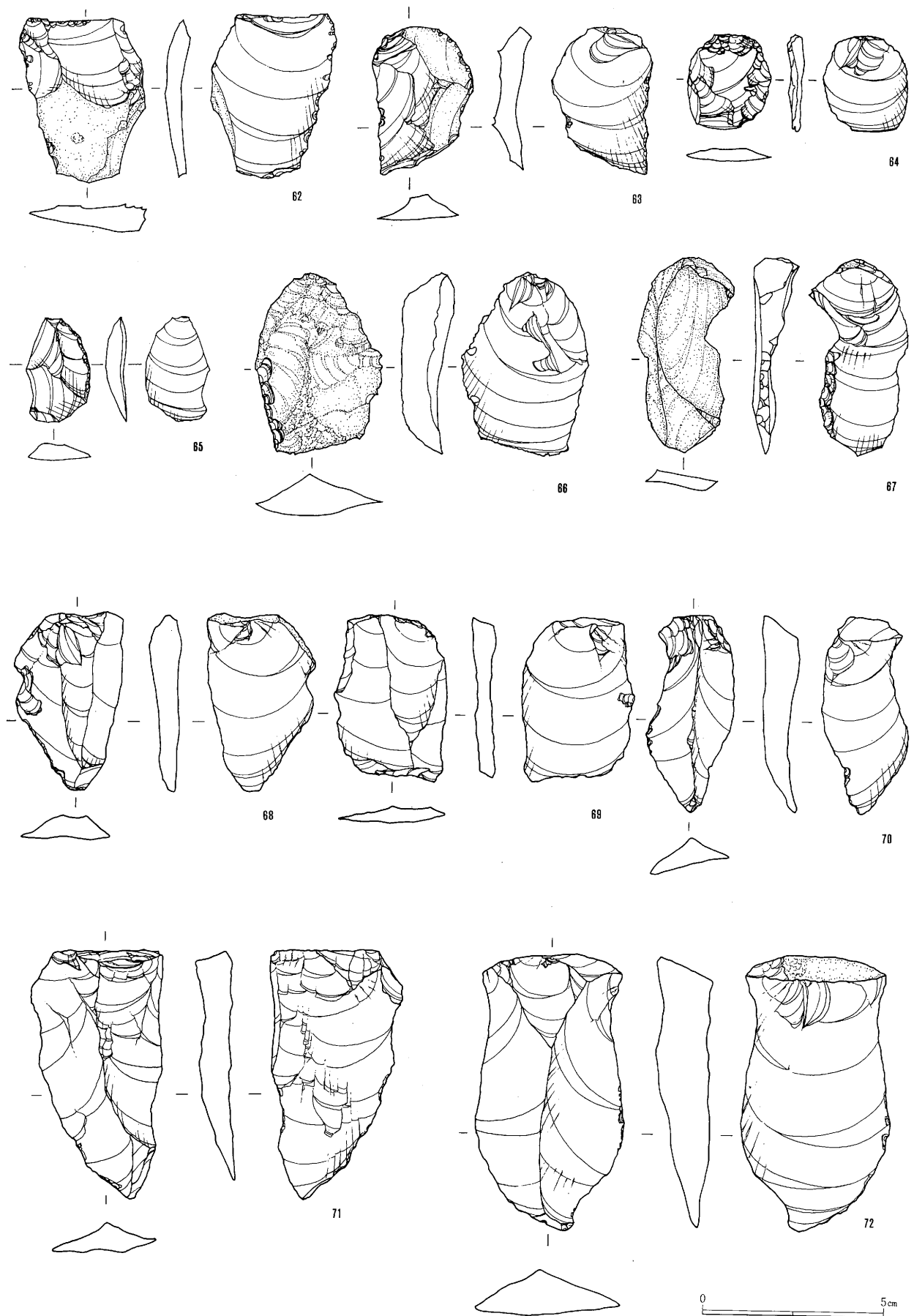


図269 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図6 (2:3)

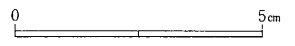
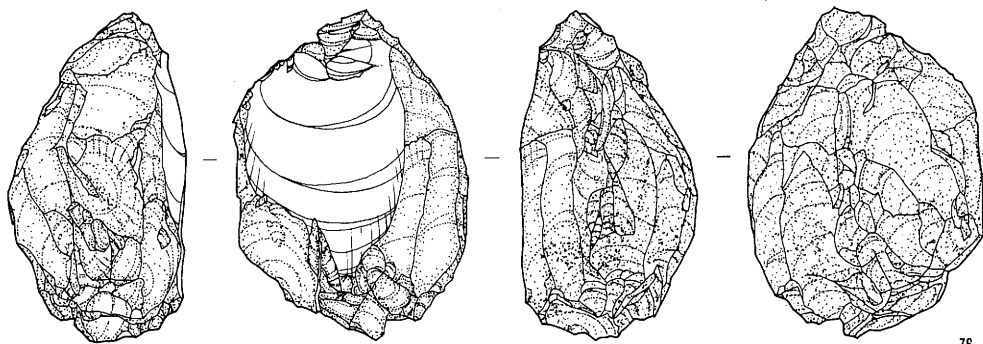
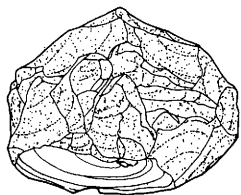
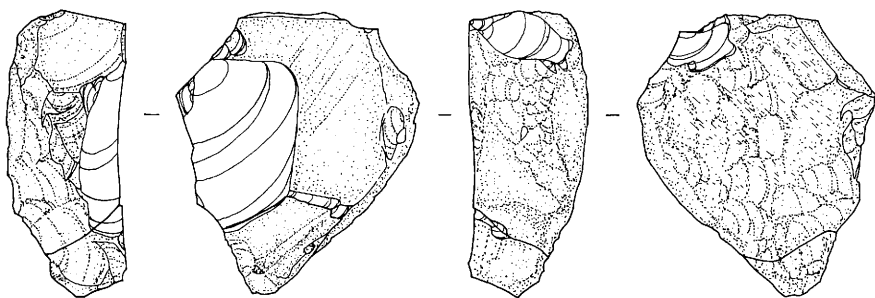
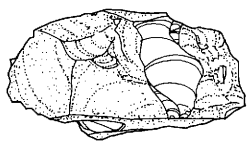
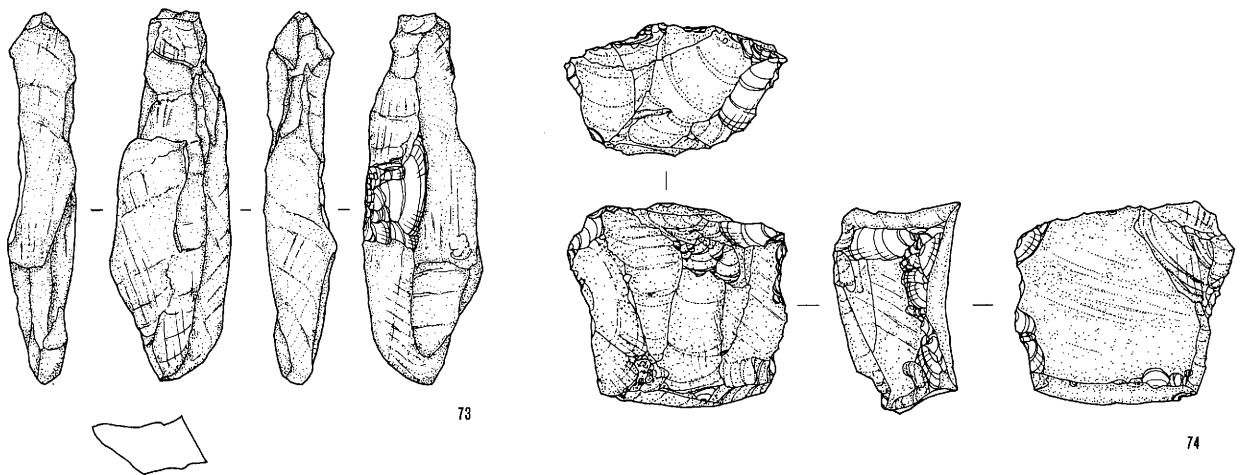


図270 中島B遺跡2号ノロック群出土石器実測図7 (2:3)

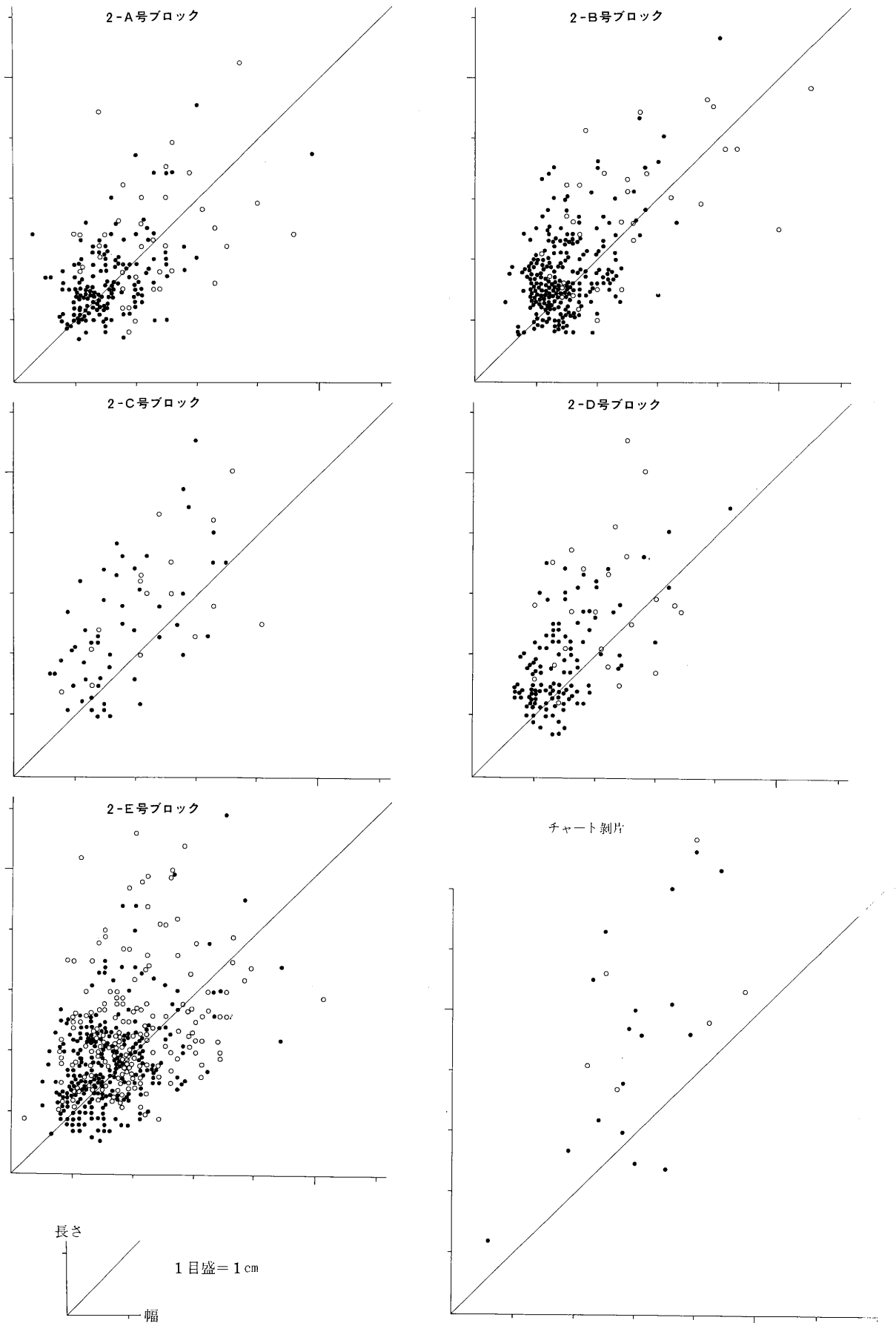


図271 中島B遺跡2号ブロック群出土剥片長幅比グラフ (○は自然面をもつ剥片)

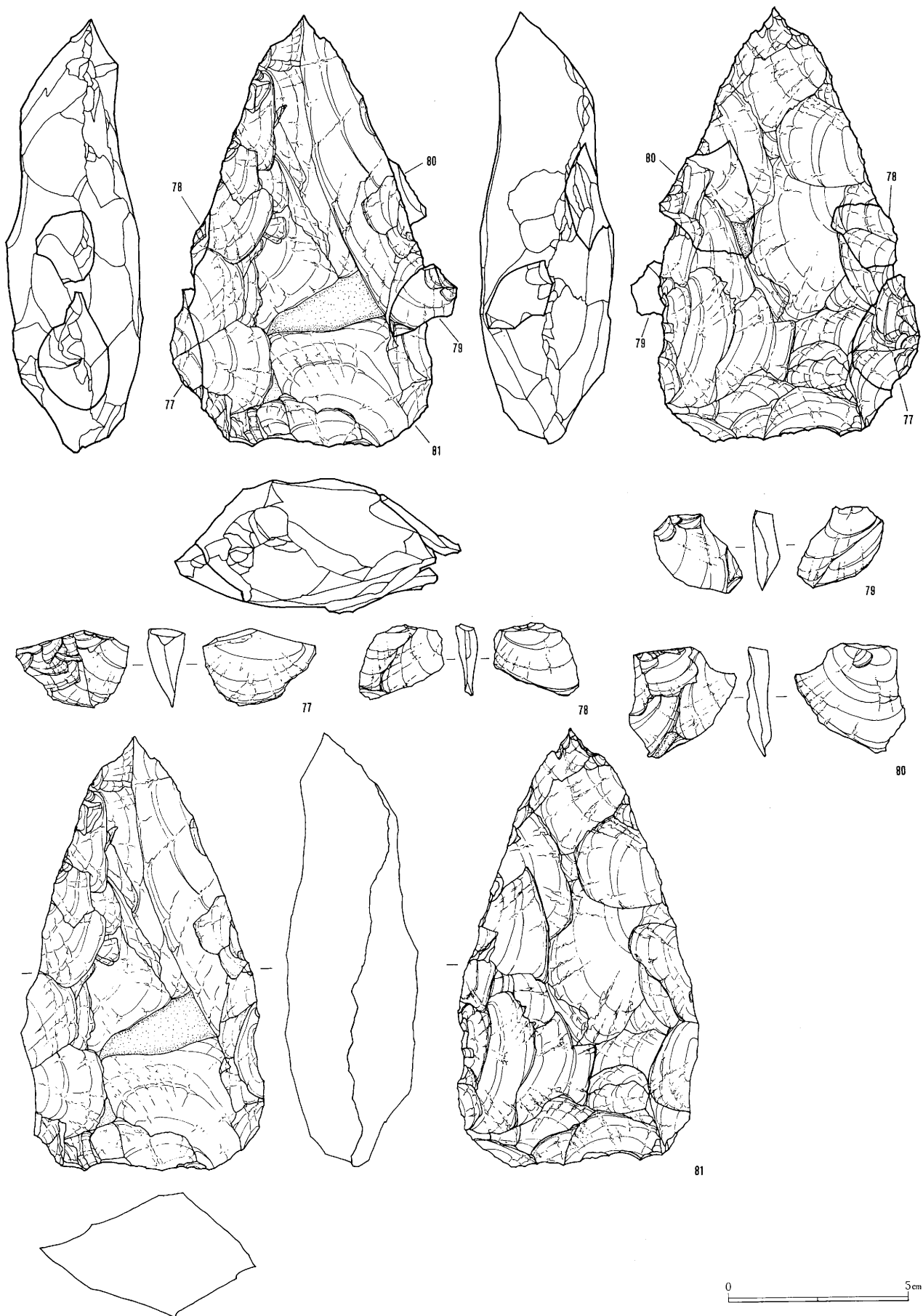


図272 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図8 (接合資料No.3 2:3)

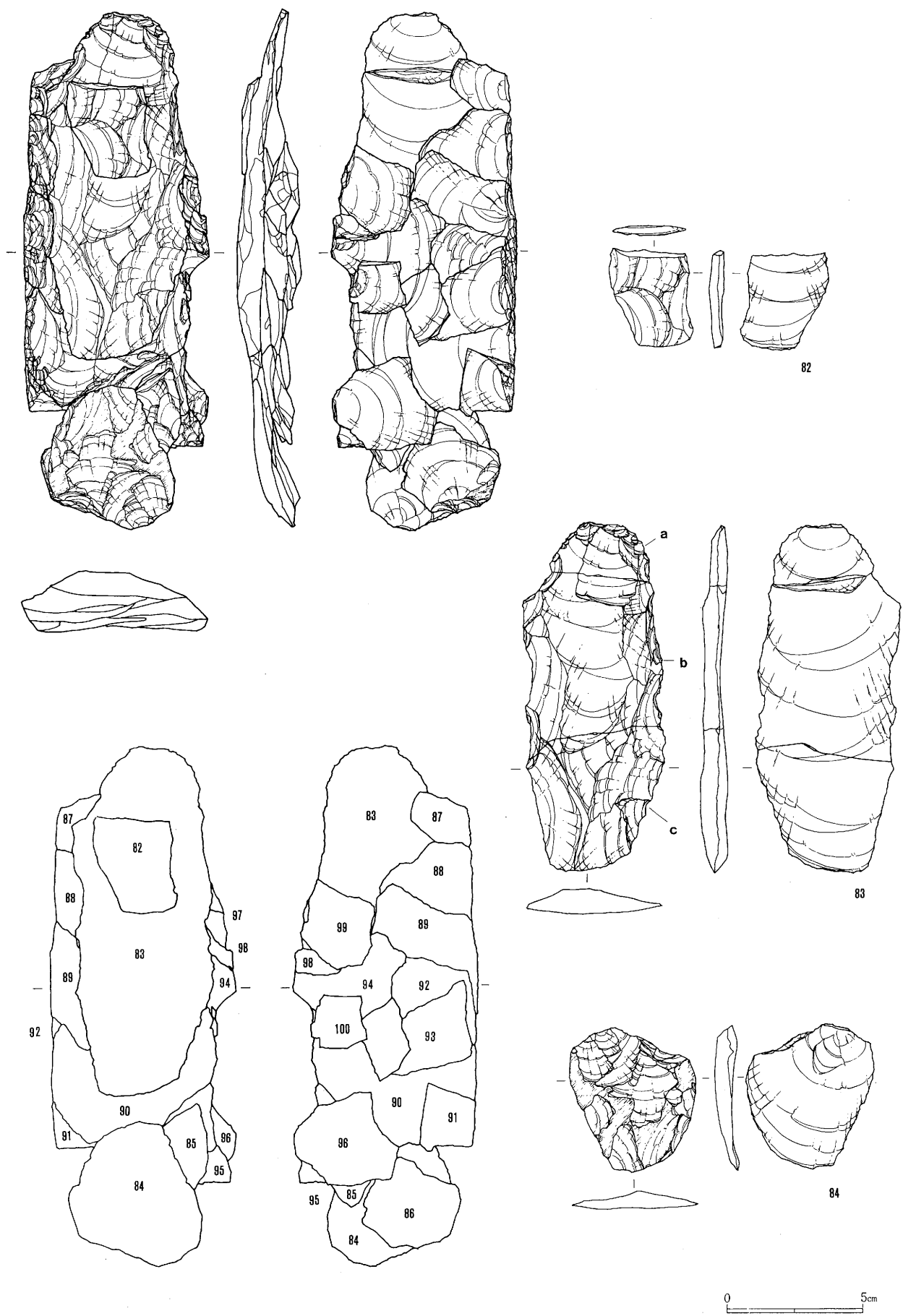


図273 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図9 (接合資料No.4 1:2)

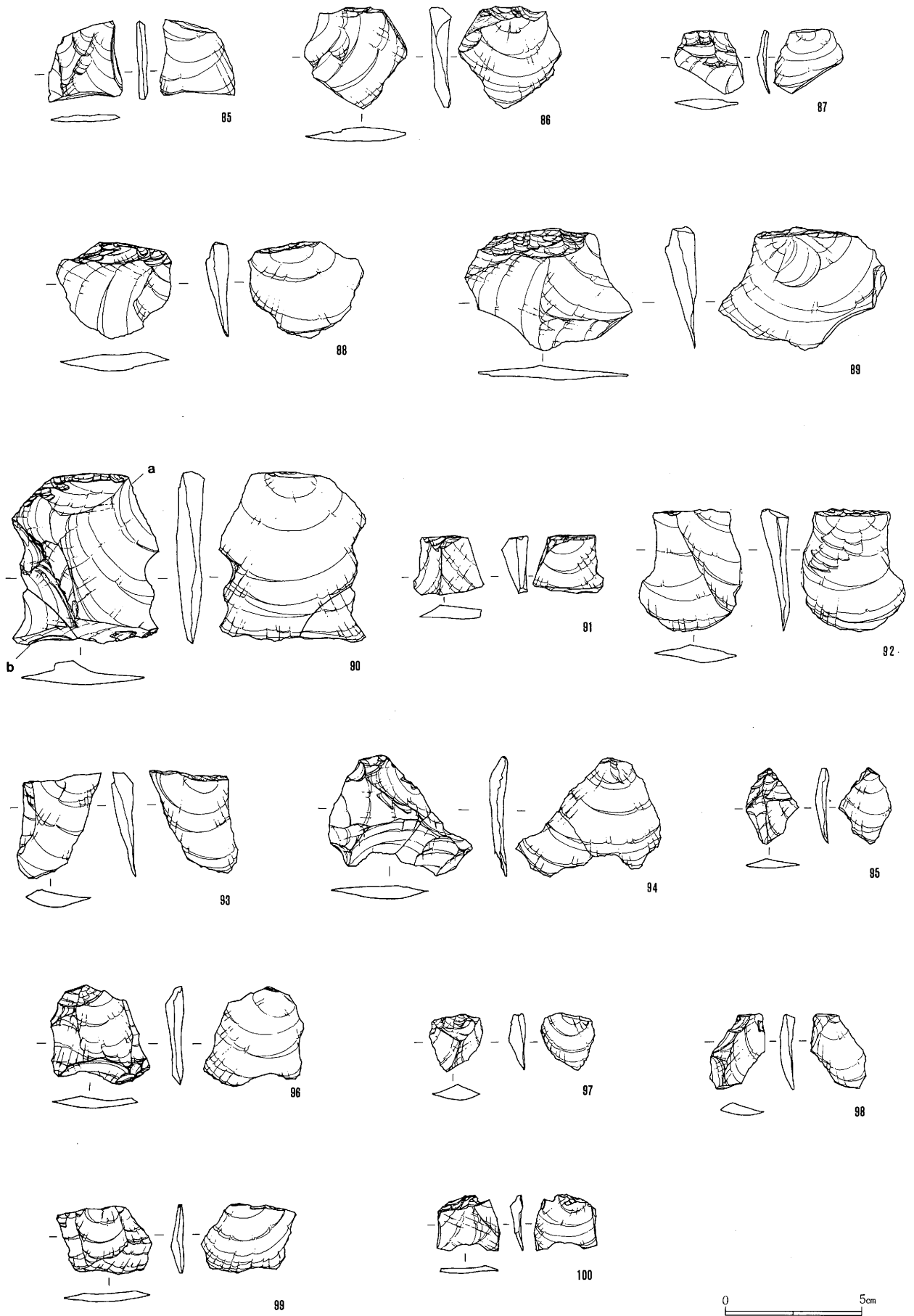


図274 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図10 (接合資料No.4 1:2)

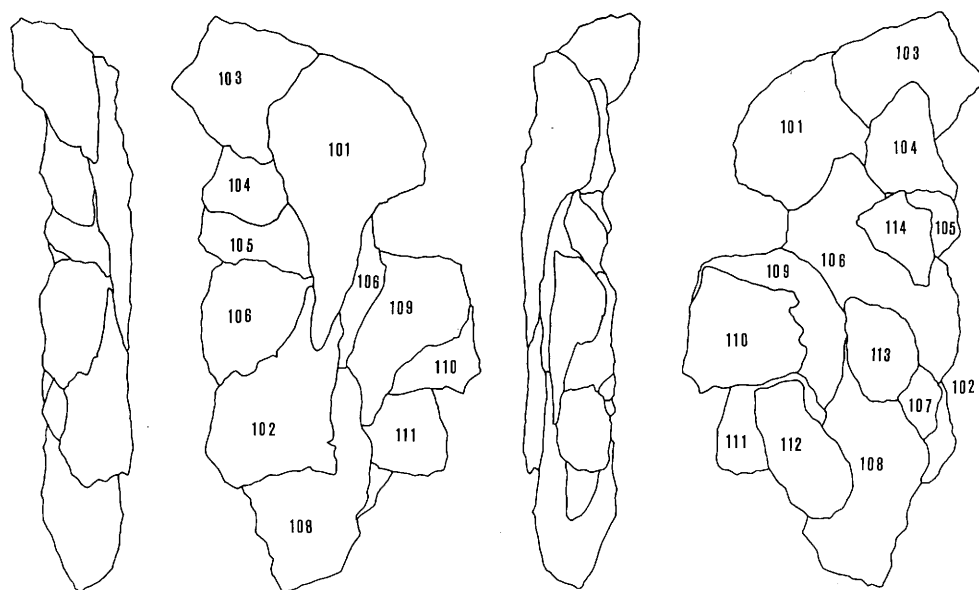
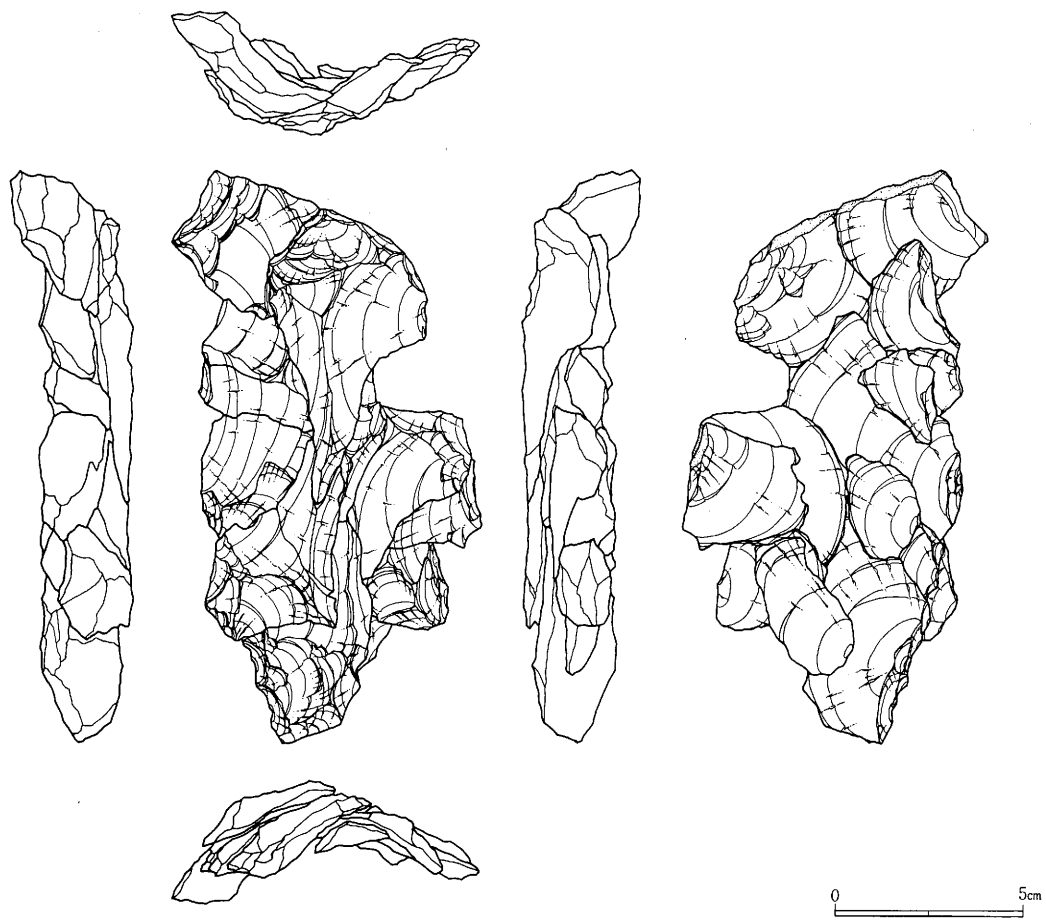


図275 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図11 (接合資料No.5 1:2)



図276 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図12 (接合資料No.5 1:2)

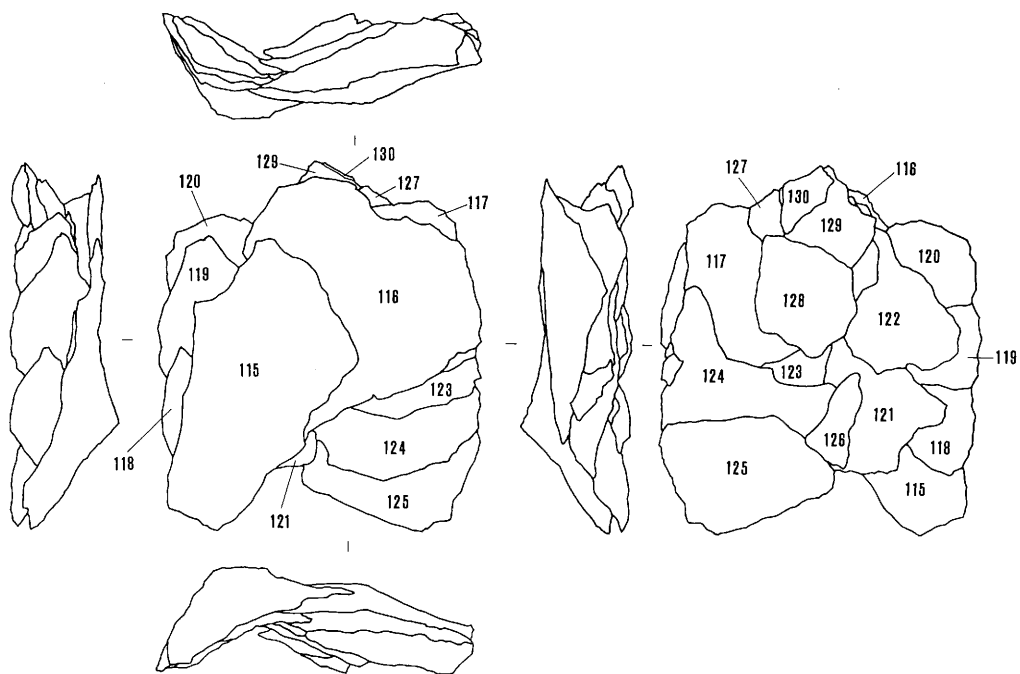
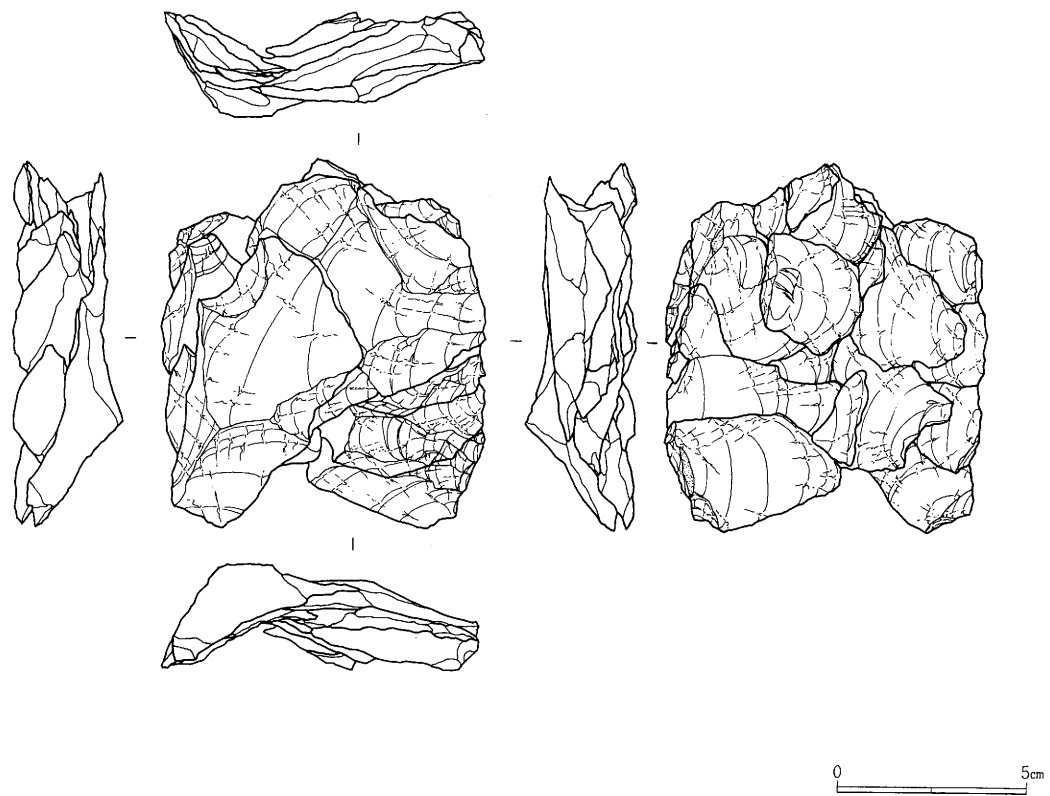


図277 中島B遺跡 2号ブロック群出土石器実測図13 (接合資料No.6 1:2)

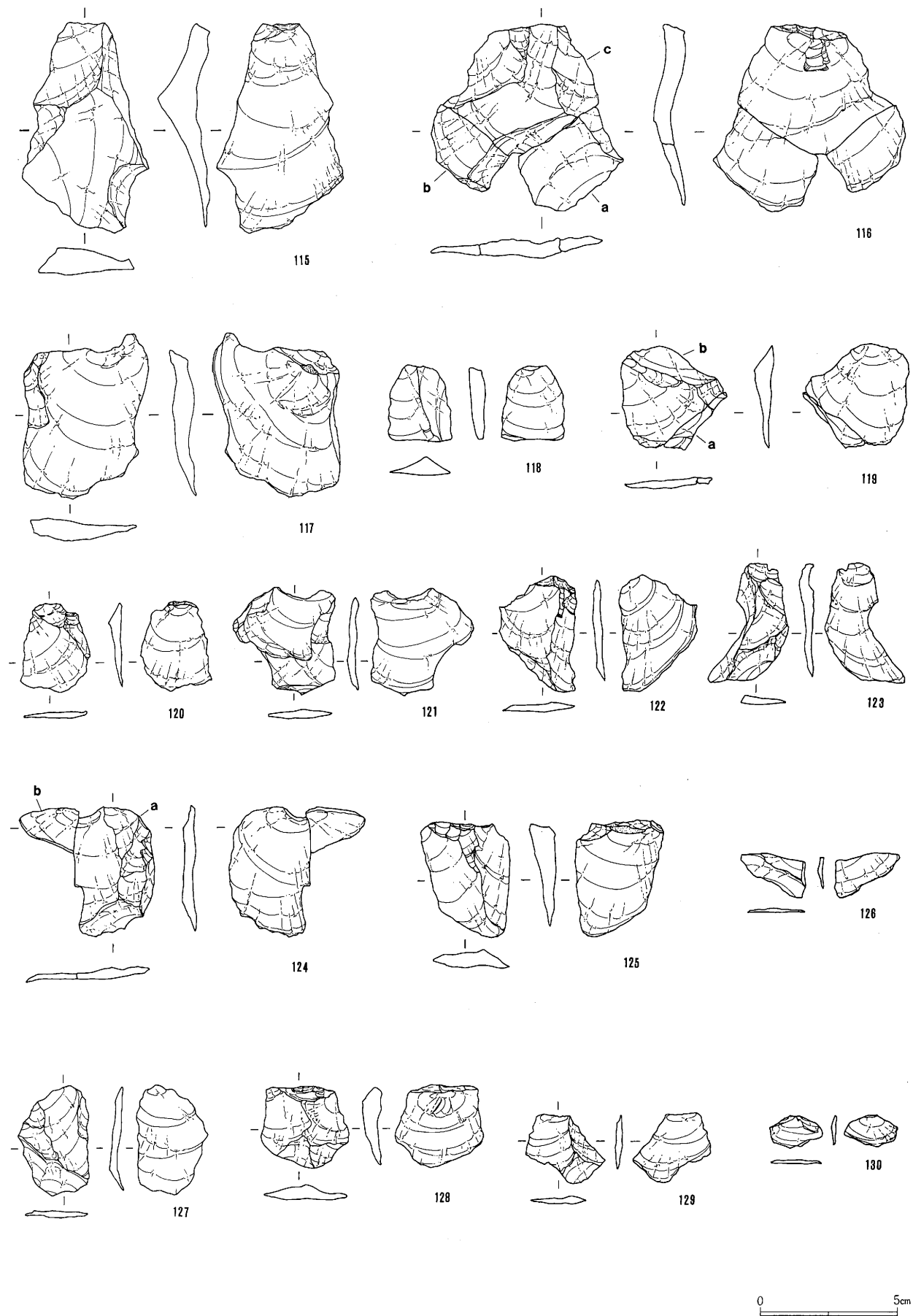


図278 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図14 (接合資料No.6 1:2)

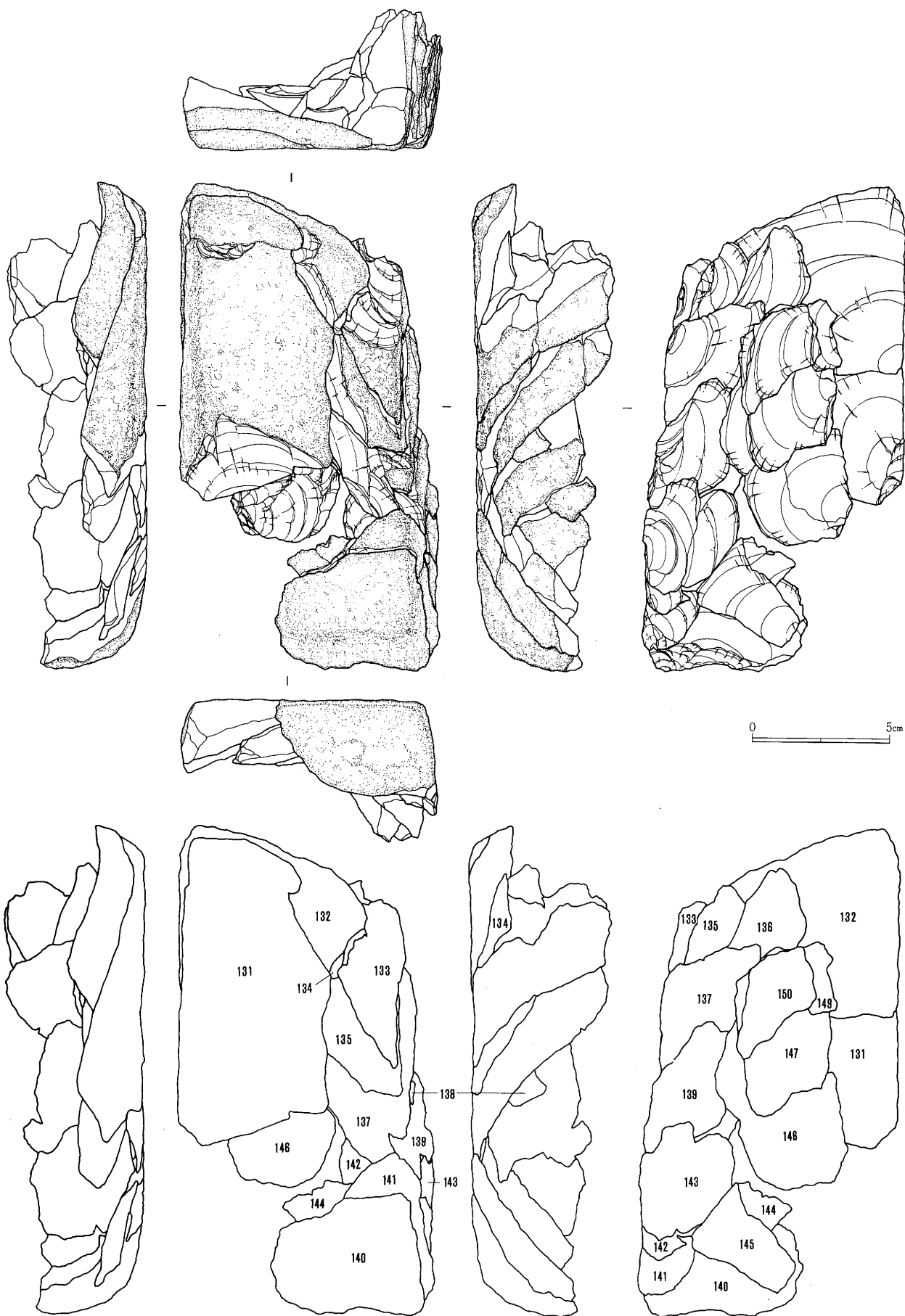


図279 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図15 (接合資料No.7 1:2)



図280 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図16 (接合資料No.7 1:2)



図281 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図17 (接合資料No.7上、No.9下、1:2)

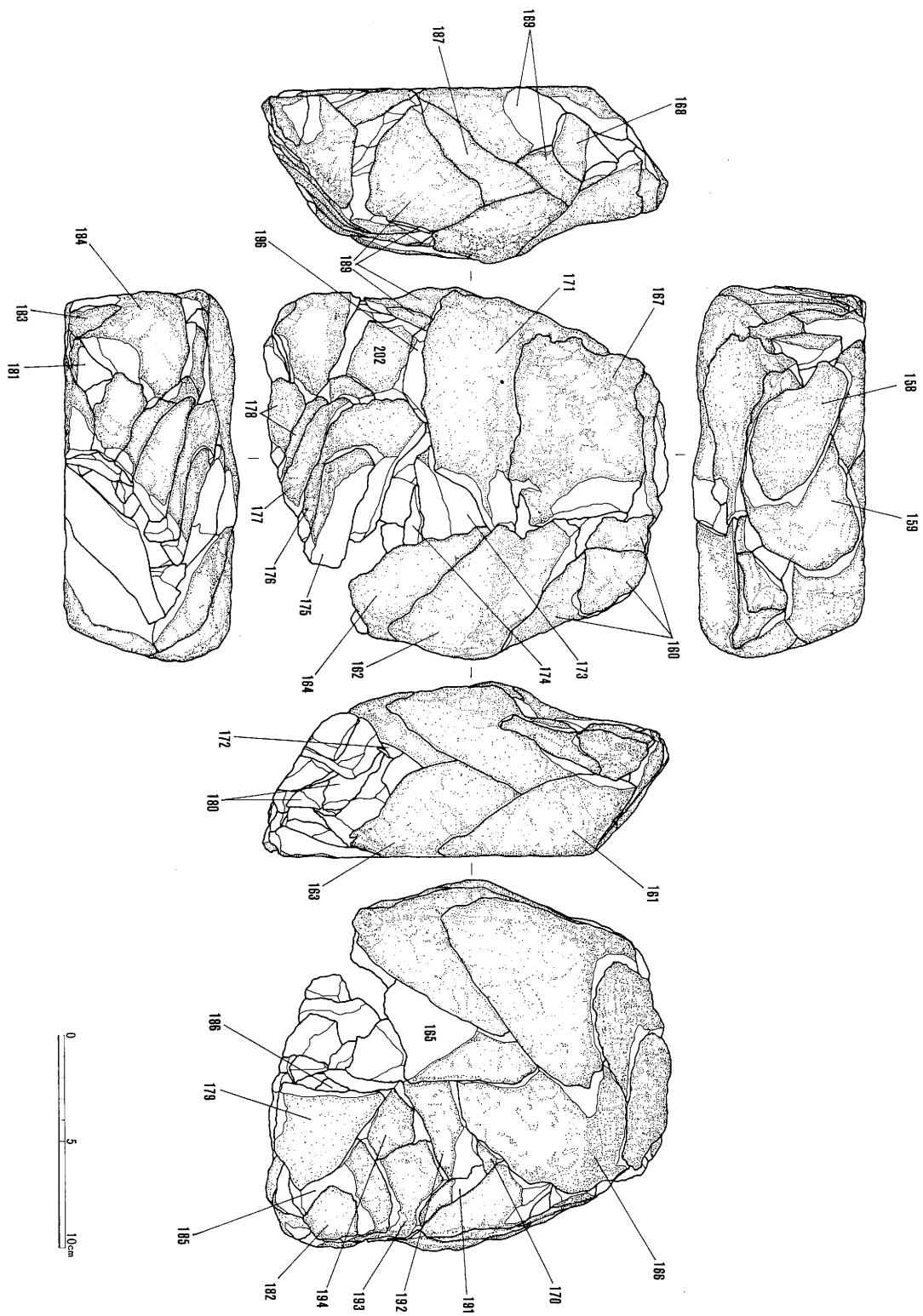


図282 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図18 (接合資料No.8 1:3)

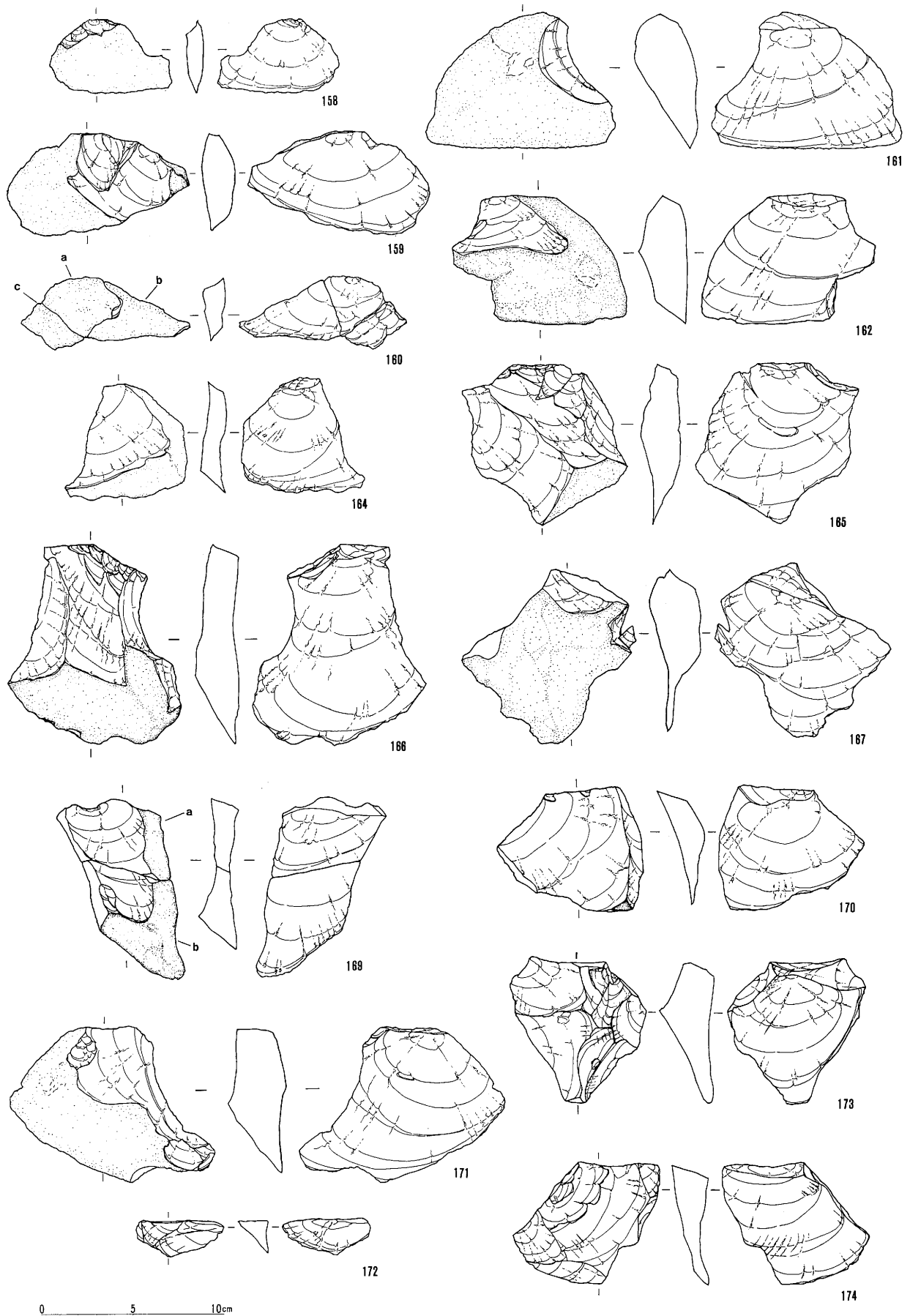


図283 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図19 (接合資料No.8 1:3)

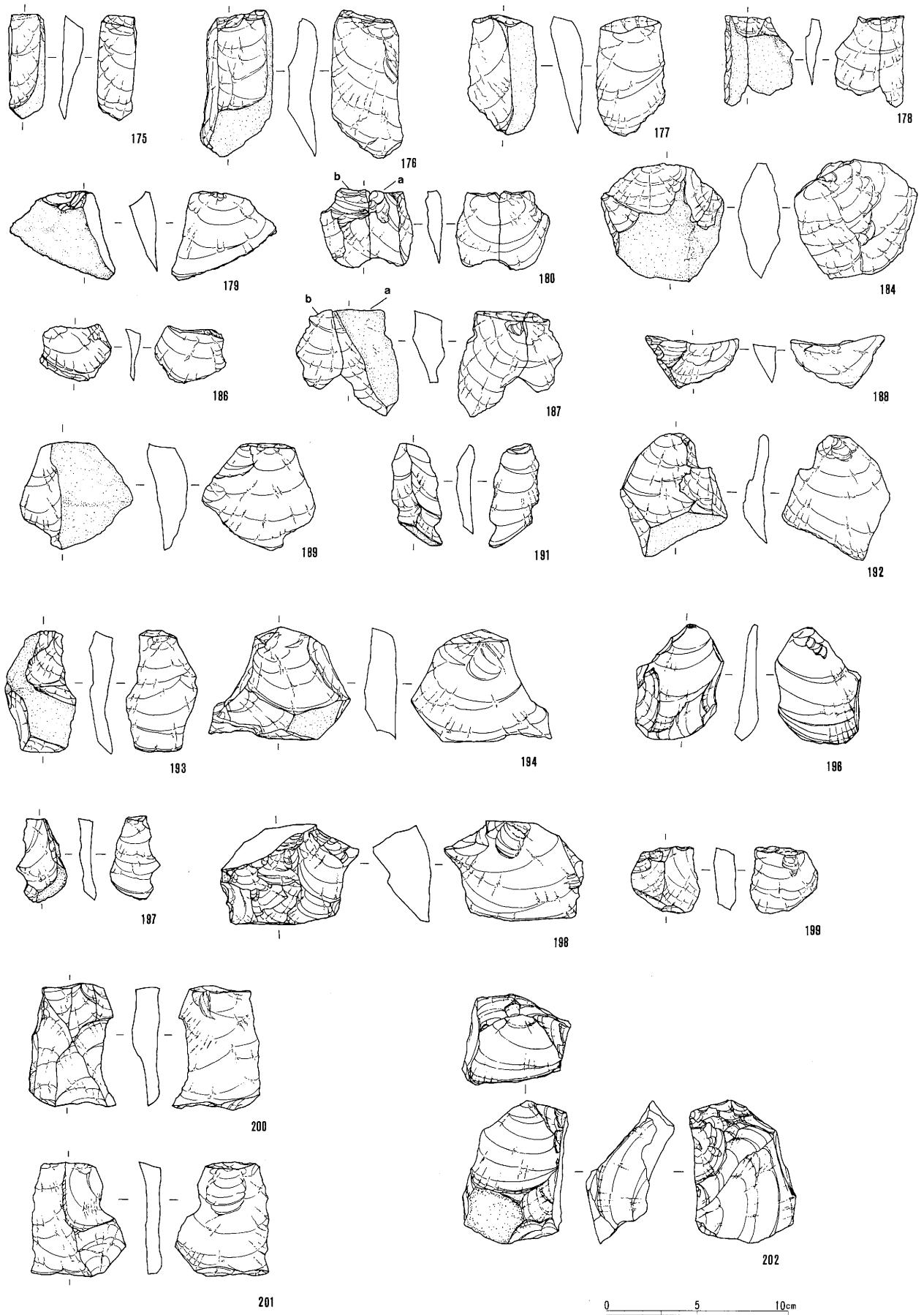


図284 中島B遺跡2号ブロック群出土石器実測図20 (接合資料No.8 1:3)

37は正面図左側縁裏方向からの加撃でそれぞれ折れている。38・39は製作途上一度折れた（大きく割れた）にもかかわらず、さらに加工を続けたが、最終的にまた折れてしまった資料である。38はa・bとcとが、正面図左側縁表方向からの加撃で大きく割れ、そのうちa・bは基部側の加工をさらに行ったが、最終的に先端部近く、正面図左側縁裏方向からの加撃でaとbが折れてしまっている。39はa・bとcとが正面図左側縁裏方向から右側縁にまで達する大きな加撃によって剥離され、そのうち、左側縁下半部の加工を経たのち、正面図右側縁表方向からの加撃でaとbが大きく二分してしまったものである。38・39の両資料は、38c及び39cが2-B号ブロックからの出土で、38a・b及び39a・bは2-E号ブロックから出土しており、2-Bブロックから2-E号ブロックへと製作作業場所が移っていることも注意しておきたい。また、39cは剥離後さらに調整加工が加えられている。器種名は小剥離痕のある剥片に一応分類したが、図上裏面稜上中央の小剥離は厚みを整えるための、また同面右側縁の小剥離はかたちを整えるための調整とみるならば、小形の槍先形尖頭器未製品とも理解することができる。先にあげた剥片素材の小形周縁調整の槍先形尖頭器の性格を考える上でも注意しておきたい。

44～54は原石に近い段階の資料である。扁平な直方体（板状）の原石の長軸を縦にすえ、主に左右側縁の表裏から調整が施されている。平均的な大きさは、長さ5～7cm、幅4cm前後、厚さ2～3cmになる。これら尖頭器未成品の資料から、本遺跡の槍先形尖頭器は、板状の原石を素材として、ほぼ一原石に対して一個の槍先形尖頭器を製作していたことがうかがわれる。51～54は、表面に大きな剥離痕が認められ、石核とも捉えられるが、剥離痕の状況からとられた剥片を想定すると、反りのきつい剥片になり、いわゆるポイントフレイクの特徴と共通する。また、51・52・54は自然面を多く残し、とられた剥片の数量はきわめて少ない。さらに各資料の裏面には、小さいながらも剥離痕が認められることから、石核とせずに尖頭器の未製品としてとらえた。但し、先ほどから再三ふれてきた剥片素材の尖頭器の存在から、これらの資料がその石核となった可能性はある。しかしながら、これらの資料は、逆に、剥片をとることを目的とした作業が安定した技術基盤にあったのではなく、本石器群の基本的な技術基盤は、原石から直接槍先形尖頭器を作るところにあり、これらの一連の作業体系上で剥片素材の槍先形尖頭器を作ることは、副次的な技術であると評価できるのである。

(ウ) 打製石斧（図268-55・56）

55は、剥片を素材とした薄手のものである。頭部欠損。刃部は両面とも研磨（磨耗？）痕が認められる。研磨部分には線状痕が認められ、表裏とも器体長軸と同方向である。粘板岩製、単独個体である。56は、両面にわたって槍先形尖頭器と同様の調整加工が施されており、素材の面は残されていない。刃部側下部欠損。頭部付近の剥離痕の稜は磨耗のためか光沢をもち、シャープさを欠く。粘板岩製。剥片が1点、本石斧の表面左側縁に接合する。

(エ) 削器（図268-57）

砂岩製の横長剥片を素材として表面には剥片端部左半部に、裏面には剥片左側縁に加工が施され刃部を形成している。素材となった剥片はその打面部の特徴から石斧など両面調整の石器を作る際に剥出された剥片と類似しており、調整剥片を転用した可能性がある。

(オ) 小剥離痕のある剥片（図268-269-58～67）

58～65は不連続かつ大きさも不揃いな小剥離痕が認められる一群である。小剥離痕のある部位はさまざままで規則性はうかがえず使用痕の可能性が強い。66、67には連続する小剥離痕が認められる。削器的な役割をはたしたか、あるいは周縁調整の槍先形尖頭器の未製品と考えることもできようか。これら小剥離痕のある剥片は、槍先形尖頭器製作の際に剥出された調整剥片と同様な特徴をもち、尖頭器の製作時に生じた剥片を転用したと考えられる。

(カ) 剥片 (図269-68~72・図271)

黒曜石製のものは、フリーフレイキングによる薄手でかつ反りのある剥片が圧倒的に多い。槍先形尖頭器製作時に剥出された調整剥片で、いわゆるポイントフレイクと呼ばれる。形状はさまざまなものがある。量的に多く出土したブロックの剥片の長幅比を図271に示した。長さ6cm前後を最大とし、連続と小さくなってゆくグラフにおける分布状況は、原石から製品へ作業が進行したことを示していると考えられる。剥片の表面を観察すると自然面を残すものが20%強を占め、それらは大形で厚手のものが目立つ傾向にある。尖頭器製作初期の段階にやや粗く割ったものであろう。

粘板岩製も黒曜石製の剥片の特徴とよく似ている。ただし粘板岩では槍先形尖頭器ではなく打製石斧の製作が行われたと考えられ、その調整剥片と思われる。自然面を残す剥片はほとんどなく、原石の荒割りには本遺跡以外で行われたようである。

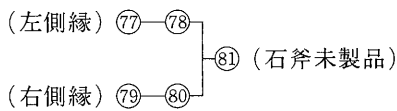
チャート製の剥片(68~72)は図271のグラフにみるように大形で縦長のものが多い。どのような石器の素材となったのか不明ではあるが目的的な剥片の性格をおびている。

(キ) 原石 (図270-73~76)

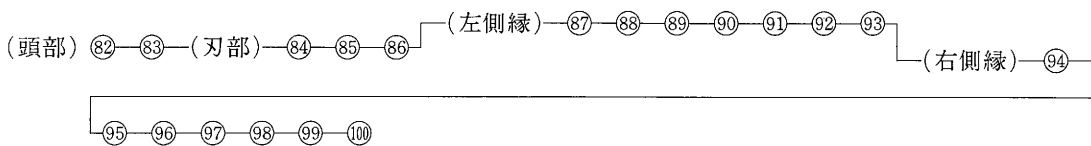
板状に近い転石である。ただ、部分的に1回~数回の加撃をうけており、全面自然面を残すものは15例中1点だけである。尖頭器製作過程のごく初期の段階で作業が中断されたのかしれないが、この部分的な剥離の意味は不明である。

(ク) 接合資料

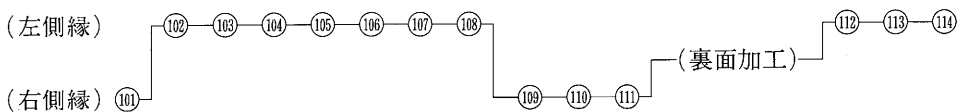
接合資料No.3 (図272-77~81・図260)：本資料は石斧未製品と剥片が接合した例である。剥離順序は以下のようなものである。



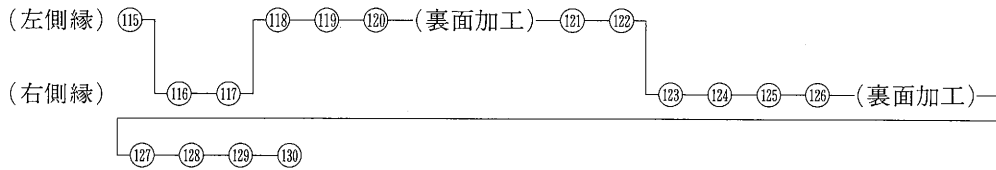
接合資料No.4 (図273・274-82~100・図260)：打製石斧の再加工例であるが石斧本体は遺跡内からは検出されなかった。再加工以前の石斧は長さ19cmを測り、両側縁がほぼ平行する短冊形を呈していたと考えられる。刃部には両面ともに斜方向の研磨部分がみられる。剥離順序は以下のようなものである。



接合資料No.5 (図275・276-101~114・図261)：石斧製作の際に剥出された調整剥片が接合した例である。石斧本体は出土していない。また本資料は次の接合資料No.6と同一個体であり、同一の石斧を製作した際の接合例であろう。剥離順序は以下のようなものである。

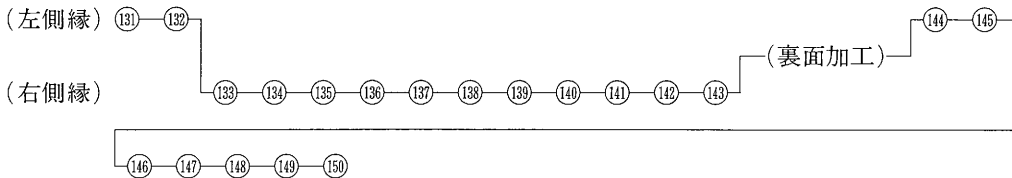


接合資料No. 6 (図277・278-115~130・図261) : No. 5 と同一個体である。剥離順序を以下に示す。

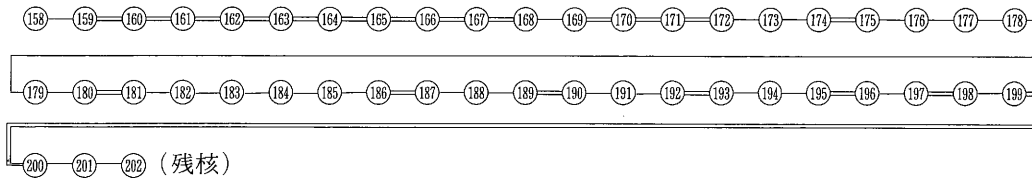


No. 5、No. 6 には特徴的な一筋の石の脈がみられ、その脈の方向から判断すると一個の石斧の表面と裏面それぞれの接合例と考えられる。両資料が仮に接合したとして原石の形状を推定すると、直方体を呈するが、その表面は剥離痕で被われていたものであろう。同一個体別資料の剥離をみても自然面をもつ剥片はきわめて少なく、遺跡外である程度荒割りした段階のものが本遺跡にもたらされたのであろう。

接合資料No. 7 (図279~281-131~150・図262) : 本例も直方体の直角礫を素材として、石斧製作に関連すると思われる調整剥片の接合例であるがこの場合は自然面をもつ剥片が多いことから、原石がそのまま本遺跡にもたらされたと考えられる。剥離順序は以下のものである。

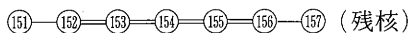


接合資料No. 8 (図282~284-158~202・図263) : 本資料は幼児頭大の円礫の打割剥片が接合した例である。打面を頻繁に転移しながら剥片を剥ぎとってゆくが、この剥片が何を目的としてとられたものかは不明である。数枚の剥片が欠落するが遺跡外へ持ち出されたものであろうか。最終的には202が残り残核と考えられる。剥離順序は以下のものである。=は打面が転移したことを示す。



初期段階は特に打面転移が著しく剥片を1枚剥ぐと打面を変えるが、172以降は数枚ずつ剥離が行われている。

接合資料No. 9 (図281-151~157・図259) : 本資料は黒曜石の接合例である。自然面を剥ぎとるかのよう打面転移を頻繁に行いながら剥離作業が進行している。とられた剥片には規格性がない。157は残核。剥離順序は以下のものである。=は打面転移を示す。



イ 土器 (図285)

細隆起線文器片40点が出土した。その中の大形の破片をもとに復元すると、口径22cm、器高は約20cmと推定される。口縁部は外反し、口唇部は丸味をおびる。胴部はほぼ垂直に立ち上がり、底部は丸底と思われる。口縁下に6~7状の細隆起線が施されるが、部分的に途切れる。また、最下条の細隆起線より斜方向に走る細隆起線が2条認められる。これら細隆起線は見かけ上微隆起線の印象をうけるが、細い粘土紐を貼り付けた後にへら状の工具で断面三角形に仕上げている。器厚は7mm前後を平均とするが、部分的に肥厚したり薄くなったり一定しない。胴部付近の破片で内面に明確に輪積痕を残す部分があった。器内

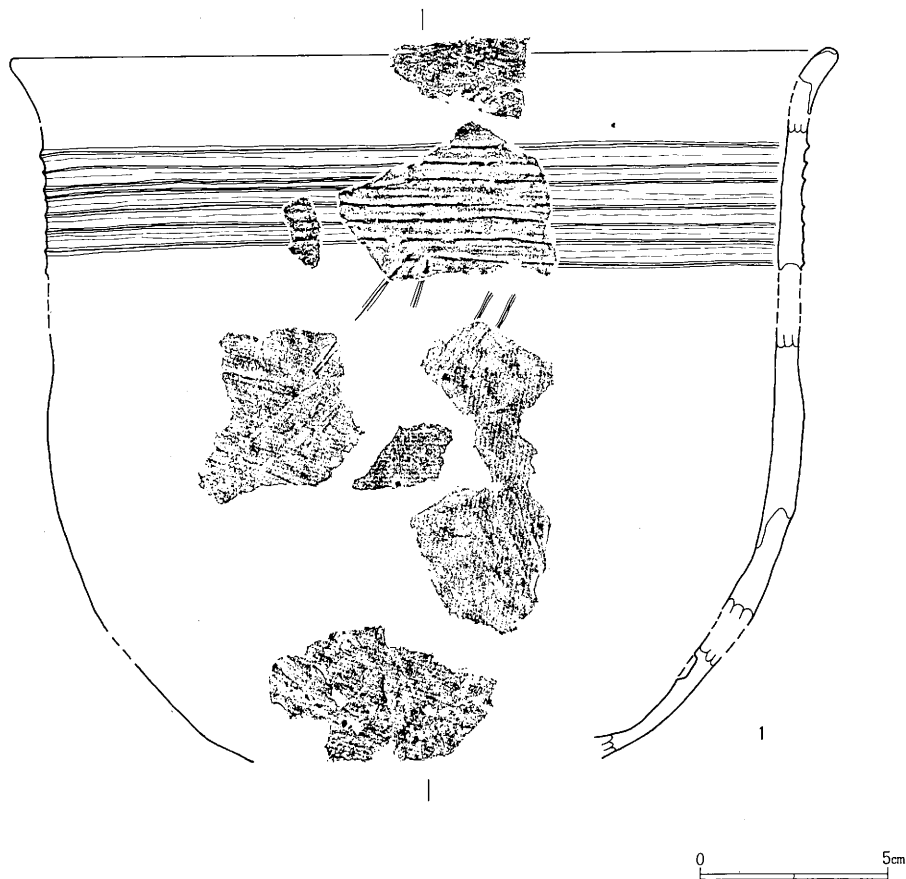


図285 中島B遺跡2号ブロック群周辺部出土土器拓影（1：2）

外ともよく調整されており、特に器表面はややつやが出るほどである。調整方向は口縁部が横位、胴部が斜位～縦位、底部付近が縦位となっている。胎土には長石、赤色スコリア、輝石、軽石が含まれる。

⑤ 3号ブロック

ア 遺物の遺存状況（図286）

本ブロックはN95・W22を中心として約15m×7mの範囲に東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し分布している。地形的には微高地平坦面の端部から斜面にかけて立地しており、遺物の多くは斜面から出土した。本遺跡における遺物量の多い他のブロックの多くがその範囲内に遺物密集部分と散漫部分を持つのに対し、本ブロックはその粗密差が明瞭でない。本来的にはN96・W26を中心とした平坦面に位置していた遺物が斜面部に流出した可能性が強い。垂直分布はVI層中に平坦面では約60cm、斜面部では厚いところで約80cmの厚さをもって包含されている。

遺物は1535点で本遺跡のブロックのうちで最大量を示す。また本ブロックには隆起線文土器1個体が伴っている。石器の器種組成は尖頭器未製品39点、小剥離痕のある剥片5点、石核1点、原石10点、剥片・碎片1462点があり、尖頭器未製品は2-E号ブロックとともに多い。剥片・碎片は槍先形尖頭器の調整剥片・碎片である。石質はすべて黒曜石である。

器種分布の在り方をみると尖頭器未製品が集中する部分が認められる。土器も集中して出土しており、先に述べたように本ブロックの遺物が流出により大きく動いているとしたならば、それは一時期に地すべりに動いたことが想定される。

尖頭器未製品は接合例がいくつか認められるが、ブロック内での接合例がほとんどで、それらは東西方

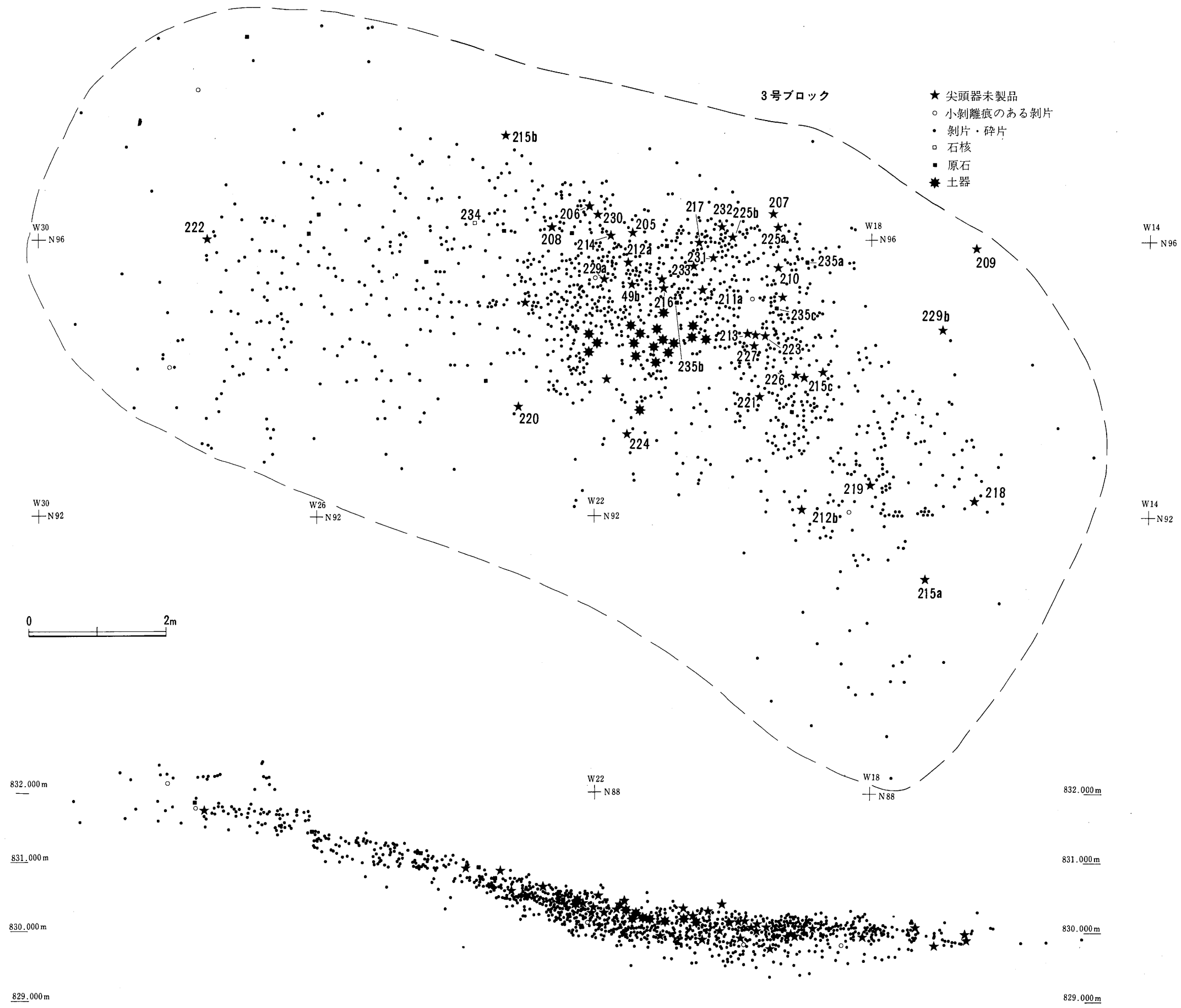


図286 中島B遺跡3号ブロック器種別分布図 (1:60)

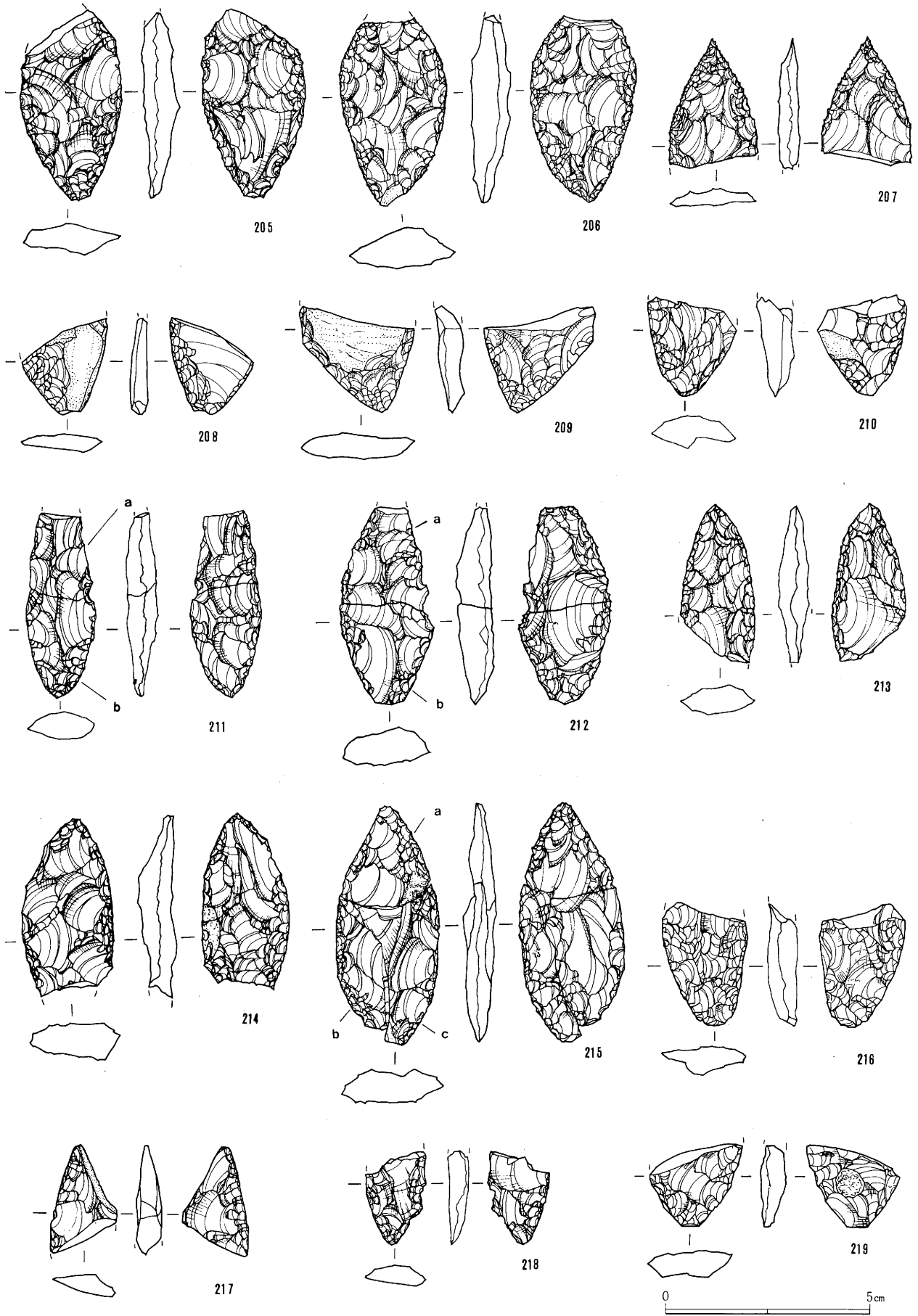


図287 中島B遺跡3号ブロック出土石器実測図1 (3:4)

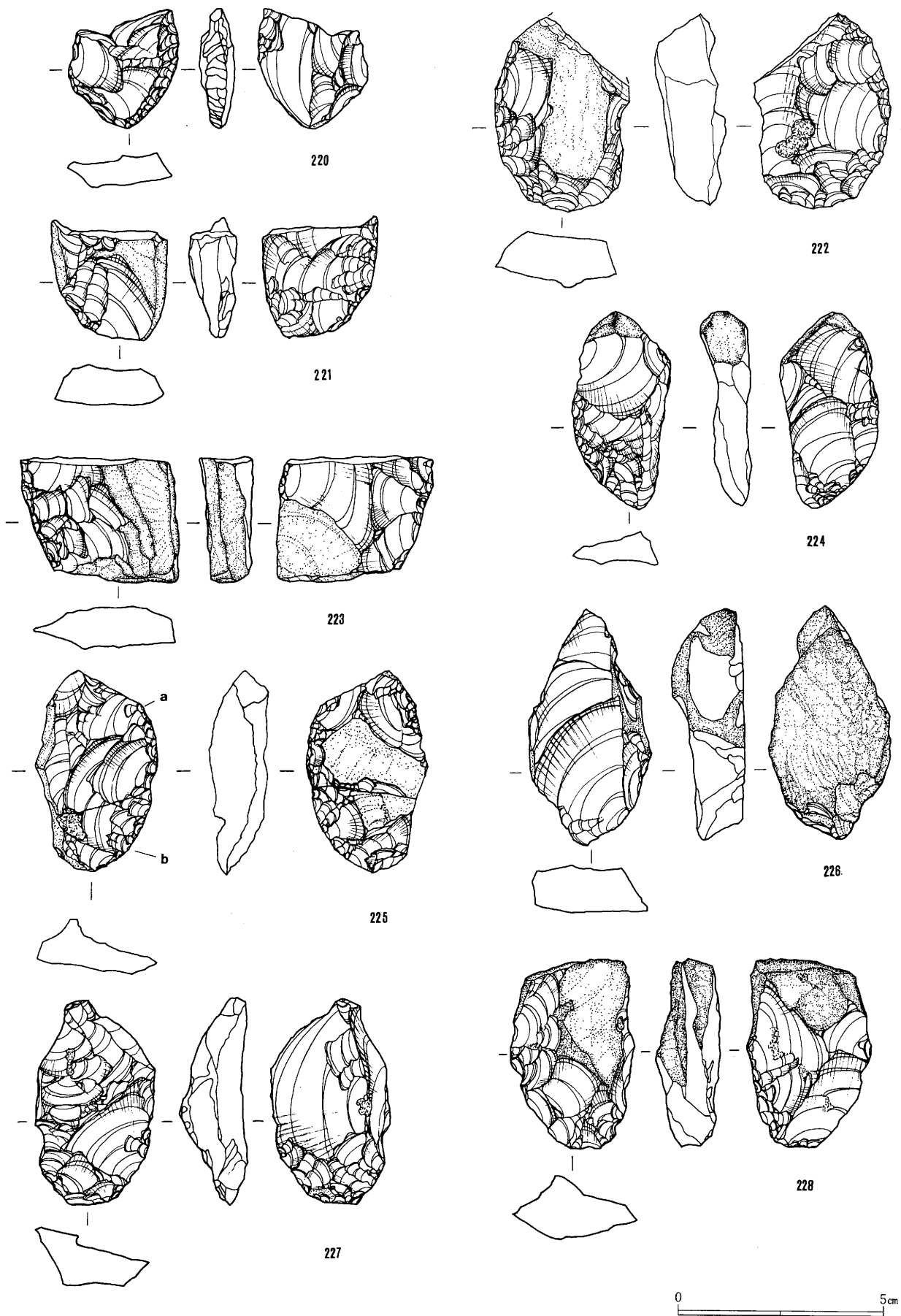


図288 中島B遺跡3号ブロック出土石器実測図2 (3:4)

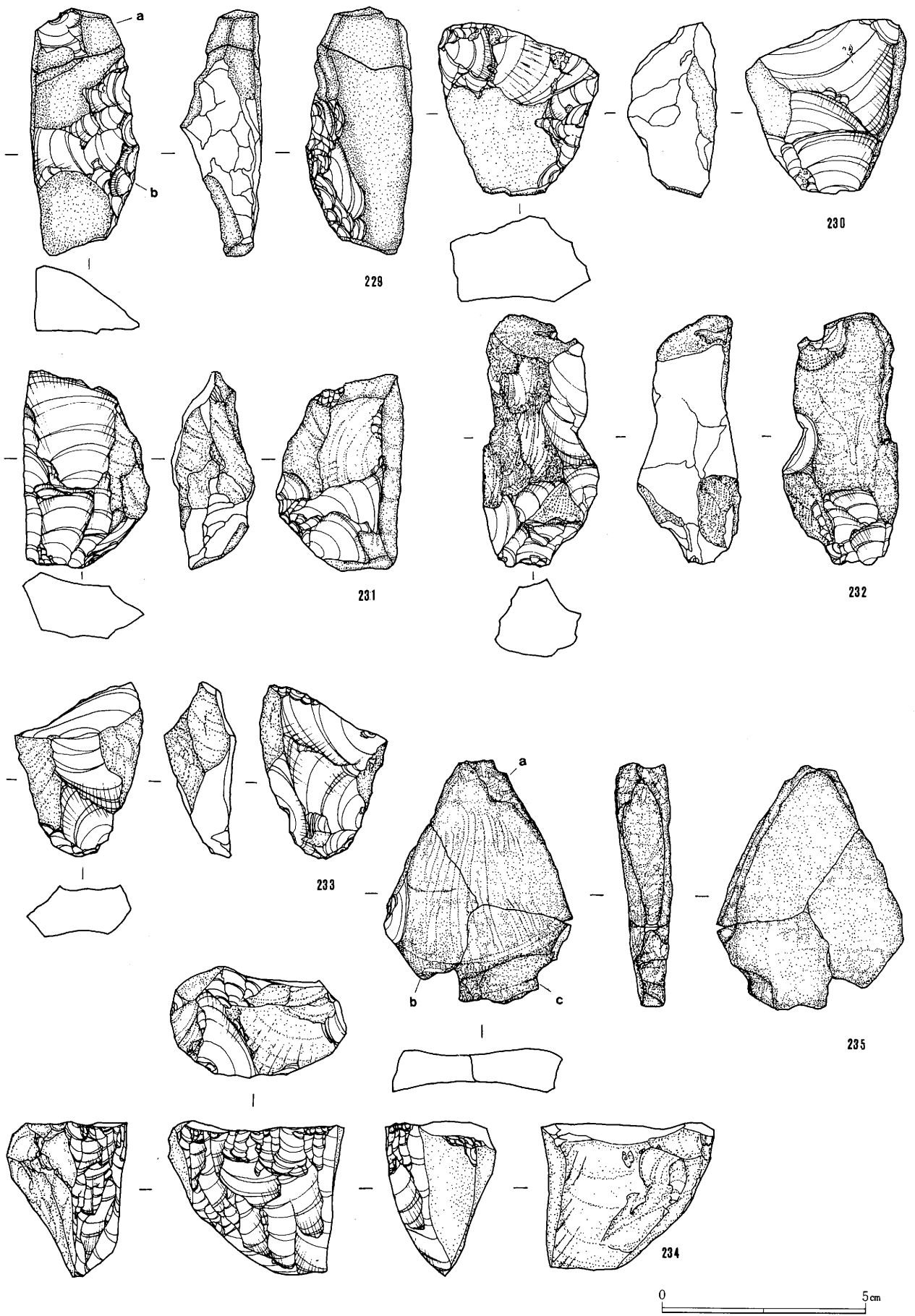


図289 中島B遺跡3号ブロック出土石器実測図3 (3:4)

向の接合例が多く、遺物の動きが東西方向に大きかったことを示しており、このことから遺物の流出が裏付けられる。ブロックを越えて接合する例は49の1例のみ2-C号ブロックと接合関係をもつ。

イ 石器群の特徴

本ブロックから出土した石器群について器種ごとに記述する。

(ア) 尖頭器未製品 (図287～289-205～233)

完成度をみると、ランクBは205～210、ランクCは211～221、ランクDは222～233となる。

205～207は完成度が高く製品としても良いくらいであるが、205は正面図左側縁表方向から、206は正面図右側縁表方向からの加撃によって先端部が破損したと理解し、未製品として分類した。この2点は木葉形を呈し、サイズもよく似ている。208～210は破損品で形態はよくわからない。208は剥片を素材とした周縁調整の槍先形尖頭器となろう。211～213は柳葉形槍先形尖頭器の未製品。この3点もサイズの点でよく

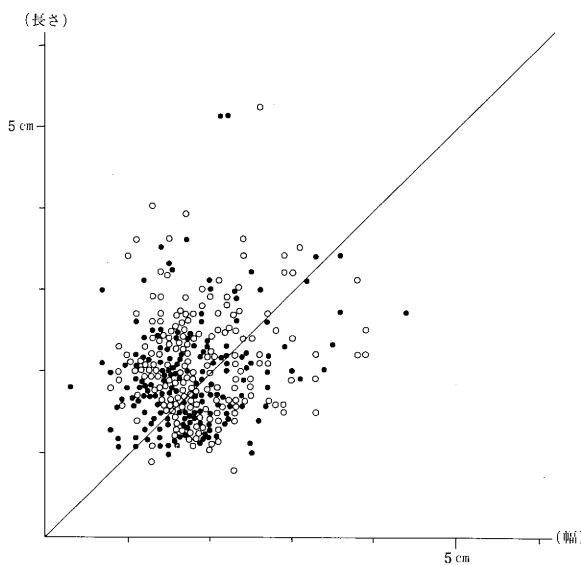


図290 中島B遺跡3号ブロック
出土剥片長幅比グラフ
(○は自然面をもつ剥片)

似ている。214はやや細身ながら205・206とほぼ同様のサイズを呈しているが完成度が低い。215は正面図右側縁裏方向からの加撃でcが大きく剥がれた後、裏面基部右側縁に調整を加え、尖頭器製作の作業が続行したが最終的には正面図右側縁(夾雑物の近く)裏方向からの加撃で二分してしまったものである。216～221は破損品のため形態不明。

222～233は原石に近い段階の資料である。板状の原石を素材としているものが多い。表裏に自然面を残す例も多く認められる。これらの資料は大きさの点で2号ブロック群と比べるとひとまわり小さい点が注意される。

(イ) 小剥離痕のある剥片

図示することはできなかったが、特徴は2号ブロック群の小剥離痕のある剥片と同様で、槍

先形尖頭器の調整剥片に小剥離痕が認められる。

(ウ) 剥片 (図290)

すべて黒曜石製であり2号ブロック群の特徴と同様で槍先形尖頭器の調整剥片と考えられる。その長幅比は図290のグラフに示したが、2号ブロック群と比較して、大きさ・そのバラつきはほぼ同じであるが、自然面をもつ剥片が50%以上を占め、さらにはかなり小さなものにまで認められる。これらは尖頭器未製品の項でも指摘したが、素材そのものが2号ブロック群に比べ小さく、素材と製品との大きさにあまり差のなかったことがうかがわれる。

(エ) 石核 (図289-234)

打面は2個の大きな剥離によって形成されており、正面に作業面がある。作業面の剥離痕はフリーレイキングの様相を呈しており、それにより有効な目的的な剥片が多数とれたとは考えづらい。尖頭器未製品とは一面に集中的に剥離を行うという点で区別したが、石核と呼ぶには疑問点が残る。

(オ) 原石 (図289-235)

211は板状の原石、正面図下方向からの加撃で3分割されている。他の資料は写真図版に掲載したが、その特徴は2号ブロック群と同様で、1回～数回の部分的な加撃が加えられている。

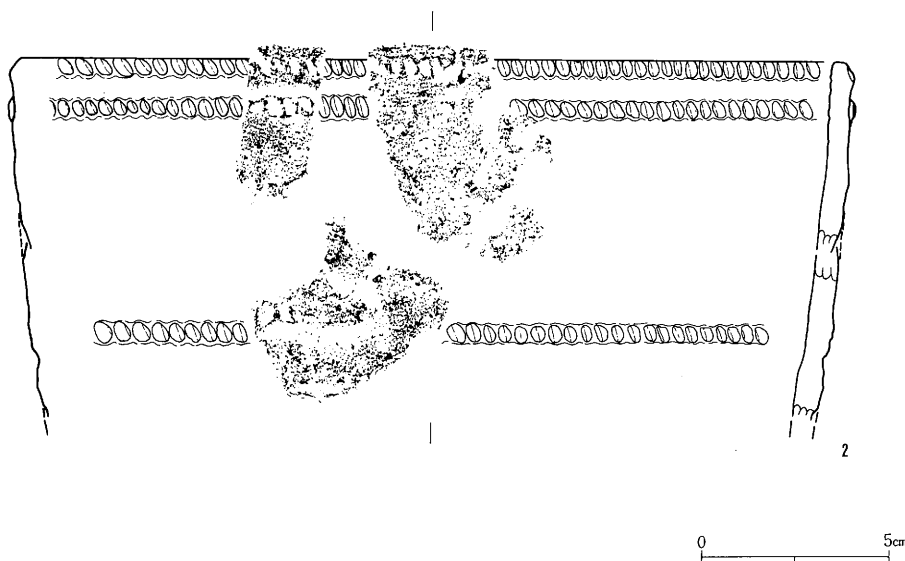


図291 中島B遺跡3号ブロック出土土器拓影(1:2)

ウ 土器(図291)

隆起線文土器が出土している。破片数は18点を数えるがそのほとんどは胴部の無文部で、しかも1cm前後の小破片である。口縁部近くの比較的大きな破片をもとに復元すると、推定口径22cm、口唇上は調整により平坦になる。器厚は7mm前後である。口縁上端にやや左傾する刻みをもち、さらに口縁下に1条の隆帯を貼り付け、その上に同様の刻みが施される。さらに間隔をあけて1条隆帯を貼り付けている。上の隆帯と下の隆帯との間隔は破片数が少ないため不確定である。器表面が荒れているため調整の度合、方向は不明である。胎土には雲母、長石、石英、軽石を含む。なお、土器集中出土地点のほぼ同一レベル中に炭化物が認められたため¹⁴C年代測定を行い12,460±310B.P.という年代が得られた。

⑥ 土壌

VI層下部より31号、32号の2基の土壌が確認された。2基とも1号ブロック群とその分布が重なり、両者の関連性が注目される。しかしながら、31号土壌は上層の遺構である3号土壌に切られ、非常に遺存状態が悪かった。一方、32号土壌も層序確認のために入れたトレンチの断面から検出されたため、全貌がつかめなかった。以下、各土壌の特徴を記述しておく。

ア 31号土壌(図250)

N109・W46を中心に2m×1.1mの規模で長軸をN45°Eにもち、1-A号と1-B号両ブロックの境に位置する。平面プランは北東端に挟りが入る楕円形が捉えられたが、確認面から底面までが10cmと浅く、さらに南東端から北東端に向って底面がゆるやかに上がることから北東端の形状は明確ではない。覆土はVII層の茶褐色ブロックを含むが、VI層質の暗褐色土を基調にしている。また礫が含まれる。底面には3個の礫が確認された。遺物は出土しなかった。

イ 32号土壌(図250)

N105・W45付近で確認されたが、先にも述べたようにトレンチでほとんどが切られ規模等不明である。覆土はVI層を基調とするが、多量に炭化物が含まれ黒色に近い色を呈す。遺物は出土しなかった。

以上、両土壌ともに遺物の出土が見られず該期の遺構であるという確定的な証拠はないが発掘時やその後の整理結果からその可能性が高いというニュアンスで捉えておきたい。

図 No.	器 種	石 質	個別 資料No.	重量(g)	ブロック	備 考
1	槍先形尖頭器	珪質粘板岩	単独	13.0	1-A	
2	"	チャート	"	16.0	外	
3	"	"	"	6.4	1-A	
4	"	"	"	13.5	"	
5	"	"	"	17.9	"	
6	小剥離痕のある剥片	"	"	23.5	"	
7	剥 片	粘板岩	1	13.0	"	接合資料No.1
8	"	"	"	18.1	—	"
9	"	"	"	5.4	1-B	"
10	"	"	"	3.3	"	"
11	"	"	"	5.1	"	"
12	石斧未製品	"	"	348.0	"	"
13	剥 片	"	2	26.2	"	接合資料No.2
14	"	"	"	0.5	"	"
15	"	"	"	0.6	"	"
16	"	"	"	16.6	"	"
17	"	"	"	24.8	"	"
18 a	石斧未製品	"	"	73.2	"	"
18 b	"	"	"	28.3	"	"
19	槍先形尖頭器	黒曜石	単独?	6.2	2-E	
20	"	"	—	4.4	2-B	
21	"	"	—	3.3	外	
22	"	"	—	3.5	2-C	
23	"	"	—	3.1	"	
24	"	"	—	2.8	2-A	
25	"	珪質粘板岩	単独	8.3	外	
26	"	黒曜石	"	3.6	—	
27	"	"	—	2.2	2-B	
28	"	"	—	1.4	2-E	
29	"	"	—	1.4	"	
30	"	"	—	3.8	2-B	
31	"	"	—	2.4	"	
32	"	"	—	1.2	"	
33 a	尖頭器未製品	"	—	1.9	2-E	
33 b	"	"	—	3.3	"	
34 a	"	"	—	3.8	"	
34 b	"	"	—	5.6	"	
35	"	"	—	8.7	"	
36 a	"	"	—	6.8	"	
36 b	"	"	—	7.1	"	
37 a	"	"	—	6.3	"	
37 b	"	"	—	6.6	"	
38 a	"	"	—	0.8	"	
38 b	"	"	—	7.2	"	
38 c	"	"	—	2.5	2-B	
39 a	"	"	—	5.6	2-E	

図 No.	器 種	石 質	個別 資料No.	重量(g)	ブロック	備 考
39 b	尖頭器未製品	黒曜石	—	5.2	2-E	
39 c	小剥離痕のある剥片	"	—	1.5	2-B	
40	尖頭器未製品	"	—	19.8	2-E	
41 a	"	"	—	1.7	"	
41 b	"	"	—	5.1	2-J	
42	"	"	—	6.4	2-C	
43	"	"	—	15.3	2-E	
44	"	"	—	41.0	2-B	
45 a	"	"	—	3.3	2-E	
45 b	"	"	—	1.7	—	
45 c	"	"	—	27.2	2-E	
46	"	"	—	36.4	"	
47	"	"	—	37.3	2-B	
48	"	"	—	25.1	2-E	
49 a	"	"	—	7.9	2-C	
49 b	"	"	—	18.2	3	
50 a	"	"	—	33.4	2-E	
50 b	"	"	—	19.8	"	
51 a	"	"	—	28.1	2-H	
51 b	"	"	—	26.8	2-E	
52	"	"	—	21.5	"	
53	"	"	—	30.2	"	
54	"	"	—	31.5	2-J	
55	打製石斧	粘板岩	単独	42.3	2-A	
56	"	"	—	76.4	2-D	
57	削 器	"	単独	93.0	2-G	
58	小剥離痕のある剥片	黒曜石	—	25.3	2-E	
59	"	"	—	12.0	"	
60	"	"	—	16.0	2-B	
61 a	"	"	—	16.3	2-E	
61 b	"	"	—	1.2	2-F	
62	"	"	—	8.7	2-E	
63	"	"	—	8.0	"	
64	"	"	—	2.5	2-D	
65	"	"	—	1.8	2-A	
66	"	"	—	18.7	2-J	
67	"	"	—	9.8	外	
68	剥 片	チャート	14	13.1	2-C	
69	"	"	"	10.4	2-F	
70	"	"	"	9.5	2-C	
71	"	"	"	21.7	2-A	
72	"	"	"	43.6	2-C	
73	原 石	黒曜石	—	18.3	2-E	
74	"	"	—	48.1	2-B	
75	"	"	—	72.9	2-E	
76	"	"	—	111.9	"	

表41 中島B遺跡実測図掲載石器一覧表 1

図 No.	器 種	石 質	個別 資料No.	重量(g)	ブロック	備 考
77	剥 片	粘 板 岩	4	5.1	2-J	接合資料No.3
78	"	"	"	2.8	"	"
79	"	"	"	2.2	—	"
80	"	"	"	4.5	2-J	"
81	石 斧 未 製 品	"	"	287.0	"	"
82	剥 片	"	5	5.7	2-C	接合資料No.4
83 a	"	"	"	4.8	"	"
83 b	"	"	"	37.8	"	"
83 c	"	"	"	26.9	2-D	"
84	"	"	"	23.5	2-C	"
85	"	"	"	3.1	"	"
86	"	"	"	5.8	2-I	"
87	"	"	"	1.4	2-C	"
88	"	"	"	6.4	"	"
89	"	"	"	9.1	"	"
90 a	"	"	"	27.0	"	"
90 b	"	"	"	0.8	"	"
91	"	"	"	4.5	"	"
92	"	"	"	10.6	"	"
93	"	"	"	4.3	2-I	"
94	"	"	"	8.2	2-B	"
95	"	"	"	1.5	2-C	"
96	"	"	"	6.6	"	"
97	"	"	"	1.9	"	"
98	"	"	"	2.0	"	"
99	"	"	"	3.4	"	"
100	"	"	"	1.8	"	"
101	"	"	6	25.1	"	接合資料No.5
102 a	"	"	"	7.4	"	"
102 b	"	"	"	3.4	"	"
103	"	"	"	13.9	"	"
104	"	"	"	5.5	"	"
105	"	"	"	3.4	"	"
106	"	"	"	21.8	2-I	"
107	"	"	"	3.5	2-C	"
108	"	"	"	19.8	"	"
109	"	"	"	9.4	"	"
110	"	"	"	4.6	"	"
111	"	"	"	4.0	"	"
112	"	"	"	2.5	2-J	"
113	"	"	"	1.8	2-C	"
114	"	"	"	1.4	"	"
115	"	"	"	32.3	"	接合資料No.6
116 a	"	"	"	4.3	"	"
116 b	"	"	"	3.1	"	"
116 c	"	"	"	21.5	"	"

図 No.	器 種	石 質	個別 資料No.	重量(g)	ブロック	備 考
117	剥 片	粘 板 岩	6	21.9	2-C	接合資料No.6
118	"	"	"	4.9	"	"
119 a	"	"	"	0.6	"	"
119 b	"	"	"	7.1	"	"
120	"	"	"	3.1	"	"
121	"	"	"	4.9	"	"
122	"	"	"	3.8	"	"
123	"	"	"	3.5	"	"
124 a	"	"	"	7.9	"	"
124 b	"	"	"	0.9	"	"
125	"	"	"	11.7	"	"
126	"	"	"	0.8	"	"
127	"	"	"	3.6	"	"
128	"	"	"	5.7	"	"
129	"	"	"	1.8	2-J	"
130	"	"	"	0.4	"	"
131 a	"	"	7	7.4	2-D	接合資料No.7
131 b	"	"	"	84.2	2-C	"
132	"	"	"	74.7	"	"
133 a	"	"	"	9.8	"	"
133 b	"	"	"	11.0	"	"
134	"	"	"	3.5	"	"
135 a	"	"	"	4.2	"	"
135 b	"	"	"	2.0	"	"
135 c	"	"	"	34.0	2-J	"
136	"	"	"	11.6	2-C	"
137 a	"	"	"	3.5	"	"
137 b	"	"	"	6.7	"	"
137 c	"	"	"	29.8	—	"
138	"	"	"	1.3	2-C	"
139 a	"	"	"	1.3	"	"
139 b	"	"	"	25.3	"	"
139 c	"	"	"	1.0	"	"
140	"	"	"	54.1	—	"
141 a	"	"	"	14.0	2-C	"
141 b	"	"	"	5.0	"	"
142 a	"	"	"	4.1	"	"
142 b	"	"	"	3.7	"	"
143 a	"	"	"	13.2	"	"
143 b	"	"	"	5.7	"	"
144 a	"	"	"	1.4	"	"
144 b	"	"	"	0.9	"	"
145	"	"	"	7.6	"	"
146 a	"	"	"	7.9	"	"
146 b	"	"	"	12.2	"	"
146 c	"	"	"	5.9	"	"

表42 中島B遺跡実測区掲載石器一覧表2

図 No.	器 種	石 質	個別資料No.	重量(g)	ブロック	備 考
147	剥 片	粘 板 岩	7	16.3	2-C	接合資料No.7
148	"	"	"	3.7	"	"
149	"	"	"	5.4	2-M	"
150	"	"	"	4.5	2-C	"
151	"	黒 曜 石	12	1.0	"	接合資料No.8
152	"	"	"	10.5	"	"
153	"	"	"	3.9	"	"
154	"	"	"	7.1	"	"
155 a	"	"	"	6.1	"	"
155 b	"	"	"	3.9	"	"
156	"	"	"	27.4	"	"
157	石 核	"	"	21.5	"	"
158	剥 片	粘 板 岩	8	20.7	2-E	接合資料No.9
159	"	"	"	89.4	"	"
160 a	"	"	"	13.8	"	"
160 b	"	"	"	16.2	"	"
160 c	"	"	"	5.4	"	"
161	"	"	"	225.7	"	"
162	"	"	"	175.0	"	"
164	"	"	"	57.2	"	"
165	"	"	"	146.3	"	"
166	"	"	"	237.0	"	"
167	"	"	"	174.0	"	"
169 a	"	"	"	40.9	"	"
169 b	"	"	"	53.2	"	"
170	"	"	"	88.5	"	"
171	"	"	"	248.0	"	"
172	"	"	"	11.9	"	"
173	"	"	"	126.1	"	"
174	"	"	"	90.4	"	"
175	"	"	"	17.7	2-C	"
176	"	"	"	48.0	2-E	"
177	"	"	"	39.5	"	"
178	"	"	"	13.2	"	"
179	"	"	"	24.8	"	"
180 a	"	"	"	10.3	"	"
180 b	"	"	"	11.7	"	"
184	"	"	"	101.2	"	"
186	"	"	"	7.1	"	"
187 a	"	"	"	30.8	"	"
187 b	"	"	"	10.4	"	"
188	"	"	"	16.9	"	"
189	"	"	"	61.4	"	"
191	"	"	"	10.9	"	"
192	"	"	"	38.7	"	"
193	"	"	"	31.9	"	"
194	"	"	"	89.0	"	"

図 No.	器 種	石 質	個別資料No.	重量(g)	ブロック	備 考
196	剥 片	粘 板 岩	8	33.6	2-E	
197	"	"	"	8.1	"	"
198	"	"	"	113.5	"	"
199	"	"	"	15.3	"	"
200	"	"	"	50.4	"	"
201	"	"	"	31.8	"	"
202	石 核	"	"	140.0	"	"
205	尖頭器未製品	黒 曜 石	—	7.6	3	
206	"	"	—	10.9	"	
207	"	"	—	3.1	"	
208	"	"	—	1.7	"	
209	"	"	—	3.2	"	
210	"	"	—	3.0	"	
211 a	"	"	—	2.2	"	
211 b	"	"	—	3.0	—	
212 a	"	"	—	3.8	3	
212 b	"	"	—	4.2	"	
213	"	"	—	4.4	"	
214	"	"	—	7.8	"	
215 a	"	"	—	2.5	"	
215 b	"	"	—	4.4	"	
215 c	"	"	—	2.4	"	
216	"	"	—	3.8	"	
217	"	"	—	1.9	"	
218	"	"	—	1.9	"	
219	"	"	—	2.4	"	
220	"	"	—	5.1	"	
221	"	"	—	9.0	"	
222	"	"	—	22.6	"	
223	"	"	—	14.8	"	
224	"	"	—	9.9	"	
225 a	"	"	—	3.9	"	
225 b	"	"	—	10.4	"	
226	"	"	—	23.6	"	
227	"	"	—	16.2	"	
228	"	"	—	17.6	"	
229 a	"	"	—	4.1	"	
229 b	"	"	—	22.1	"	
230	"	"	—	30.7	"	
231	"	"	—	25.9	"	
232	"	"	—	30.2	"	
233	"	"	—	15.0	"	
234	石 核	"	—	38.5	"	
235 a	原 石	"	—	15.6	"	
235 b	"	"	—	9.5	"	
235 c	"	"	—	5.5	"	

表43 中島B遺跡実測図掲載石器一覧表 3

⑦ 中島B遺跡VI層中の植物珪酸体

帯広畜産大学 近藤錬三

ア 植物珪酸体の分離・定量法

分析に供した試料(NK-1~NK-6)は中島B遺跡N90・W30付近のVI層から採取した。NK-1はVI層最上位で以下順次VI層下位に至る。

土壌からの植物珪酸体の分離は、ほぼ佐瀬・近藤(1974年)の方法に準じた(図292参照)。

風乾細土(<2mm)10gを500mlトルビーカーにとり、過酸化水素、熱塩酸および超音波処理後、篩と沈降法によって10~200 μ mの粒径画分をえた。この画分試料1.0~0.5gをマルト・クイックセパレーター用遠心管に取り、比重2.3のツレー重液20mlとよく混合した。1500~2000回転で約5分間遠心分離した後、遠心管上の浮上物(植物珪酸体)を前もって用意したろ紙に移した。この操作は、浮上物が肉眼で認められてくるまで繰り返した(ほぼ5回)。

ろ紙上の植物珪酸体の形別組成は、上記の植物珪酸体の少量をスライドガラス上にとりカナダバルサムで固定した後、佐瀬・近藤(1974年)、近藤・隅田(1978、1981年)の分類に準じ、偏光顕微鏡と走査電子顕微鏡で同定した。

イ 植物珪酸体の形態的特徴

供試試料から分離した植物珪酸体は、その形態的特徴に基づいて、I)イネ科草本起源珪酸体、II)樹木起源珪酸体、III)ワラビ科起源珪酸体、IV)未記載珪酸体に区別した(表44)。

イネ科草本起源珪酸体は、葉身表皮細胞中の短細胞に由来する小型珪酸体と、機動細胞、プリッケルヘア、長細胞などに由来する大型珪酸体に二大別した。さらに、小型珪酸体はタケ型、キビ型、ヒゲシバ型、ウシノケグサ型、ダンチク型およびその他珪酸体に細別した。

樹木起源珪酸体は、その形態的特徴から広葉樹型と針葉樹型に二大別されるが、ここでは一括して樹木起源として表示した。

未記載珪酸体の中には、植物珪酸体の破片、風化物、前述のI)に属するが未だ分類されていない珪酸体、カヤツリグサ科起源珪酸体および起源不明の珪酸体が含まれている。

つぎに、写真図版を用いて各珪酸体の特徴を解説する。

a) タケ型 (PL104: a~g)

タケ亜科(タケ類、ササ類)及び一部のダンチク亜科の葉身表皮細胞に特徴的に観察される長座鞍珪酸体である。試料中で検出されるタケ型珪酸体の多くはササ属(チマキザザ節)に由来するものである。

b) キビ型 (PL104: h~l)

暖地型イネ科草本であるキビ亜科および一部のダンチク亜科の葉身表皮細胞に特徴的に観察される亜鈴形(h~k、m)、複合亜鈴形(n)、十字形(l)珪酸体である。

試料中で検出されるキビ型珪酸体の給源植物は、エノコログサ属(j、h、k、n)、ススキ属(m)、トウモロコシ属? (l)などである。

c) ヒゲシバ型 (PL104: o~q)

シバ、ニワホコリなどのスズメガヤ亜科およびヨシの葉身表皮細胞に特徴的に観察される短座鞍形(または、両刃の戦斧形)珪酸体である。

試料中で検出される多くの珪酸体は、ヨシに由来するものであるが、スズメガヤ亜科に由来するものも

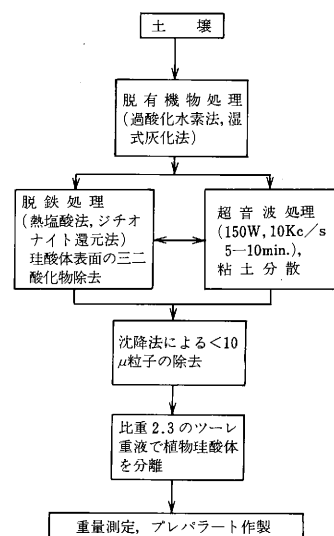


図292 植物珪酸体の分離・定量法

一部観察される。P、Qはヨシ属に由来する珪酸体である。oはカゼクサ属の珪酸体に形態が似ている。

d) ウシノケグサ型 (P L104: s~v)

ヌカボ、ノガリヤス属などの寒地型イネ科草本であるイチゴツナギ亜科の葉身表皮細胞に特徴的に観察されるボート状形態の珪酸体である。s、vはスズメノチャシキ属、t、uはノガリヤス属の珪酸体に形態が似ている。

e) ダンチク型およびその他 (P L104: r)

ダンチク亜科に観察される鞍形 (またはテーブル状) 珪酸体である。

ダンチク型珪酸体はタケ型およびヒゲシバ型に類似し、それらの珪酸体よりやや小型である。他方、その他は、a) ~ d) のいずれにも属さない短細胞珪酸体で、一般にダンチク亜科に多く見られる。

f) ファン型 (P L105: a~h)

イネ科草本の葉身表皮細胞にのみ特徴的に観察される機動細胞由来の扇状 (または食パン状) 形態の珪酸体である。ファン型珪酸体は科、属、あるいは種の間で形態的違いが認められる。

試料中で検出されるファン型珪酸体の給源植物は、ササ属 (b)、ヨシ属 (a)、ススキ属 (g) などである。なお、dはトモロコシ属、hはイチゴツナギ亜科のファン型珪酸体にそれぞれ似ている。

g) ポイント型 (P L105: i~k)

イネ科草本葉身表皮細胞のprickle hairに由来する矢尻状、またはかぎ状形態の珪酸体である。この種の珪酸体は、特にタケ亜科およびイチゴツナギ亜科に多く含有されている。

h) 棒状型 (P L106: l~n)

イネ科草本葉身表皮細胞の長細胞に由来する棒状形態の珪酸体である。棒状型珪酸体は小型珪酸体と異なり、イネ科植物分類グループとさほど関係が認められない。

i) 樹木起源珪酸体 (P L105: o)

樹木起源珪酸体の大部分は、葉部の表皮細胞、表皮毛、表皮毛基部および維管束細胞に由来する。

試料中には、広葉樹由来の「はめ絵パズル」状珪酸体が検出されるほか、ごく僅か針葉樹起源珪酸体も観察される。

j) 未記載 (または未分類) 珪酸体 (P L105: p, q)

この種の珪酸体は、①、給源が全く不明な珪酸体 (p)、②、カヤツリグサ科由来の珪酸体、③、前述の a) ~ h) に分類されていないイネ科草本起源珪酸体 (q)、④、①~③の珪酸体の破片および風化物が包含される。

なお、qは柵状細胞に由来する珪酸体である。

ウ 植物珪酸体の形態別組成

表44で明らかのように、同定される植物珪酸体の大多数はイネ科草本に由来するものである。これらの中で、小型珪酸体は15~37%の範囲にあり、Nk-1試料から下層の試料に向かって漸次減少する。他方、大型珪酸体の割合は37~42%の範囲にあって、各試料間でさほど違いが認められなかった。Nk-1試料は大型と小型珪酸体の割合に違いが認められないが、他の試料では大型珪酸体の割合が圧倒的に多かった。

また、未記載珪酸体の割合は下層の試料ほど高く、Nk-3試料以下で珪酸体の風化が著しかった。

植物分類グループと密接な関係がある小型珪酸体の中では、一般にタケ型およびその他がそれ以外の小型珪酸体より多いが、Nk-1および2試料を除き他はさほど違いが認められない。Nk-1, 2試料ではタケ型と同程度の割合でキビ型およびウシノケグサ型を含有していた。

以上の形態別組成の結果、走査電子顕微鏡観察、およびイネ科草本の珪酸体生産量を総合的に考慮すると、試料から推定される植生の大略は、タケ亜科、キビ亜科およびウシノケグサ亜科イネ科草本を主とし、

試料	イネ科草本起源珪酸体						樹木 起源 珪酸体	未記載 珪酸体			
	小型珪酸体			大型珪酸体							
	タケ型	キビ型	ヒゲシ バ型	ダンチ ク型	ウシノケ グサ型	その他			ファン型	ポイント型	棒状型
Nk-1	8(11)	8(11)	5(7)	3(4)	4(5)	9(12)	12	7	19	+	25
Nk-2	6(8)	3(4)	2(3)	1(1)	6(8)	11(15)	11	13	18	1	29
Nk-3	9(15)	2(3)	2(3)	+	4(7)	7(11)	6	15	16	+	38
Nk-4	5(8)	4(6)	1(2)	1(2)	3(5)	9(15)	8	15	16	+	38
Nk-5	11(19)	+	-	-	+	4(7)	17	16	9	-	42
Nk-6	7(12)	2(3)	2(3)	1(2)	6(10)	7(12)	3	14	18	-	42

() は未記載珪酸体を除く

*各試料につき500個以上計数 + : 1%以下

表44 中島B遺跡植物珪酸体の形態別組成表(%)

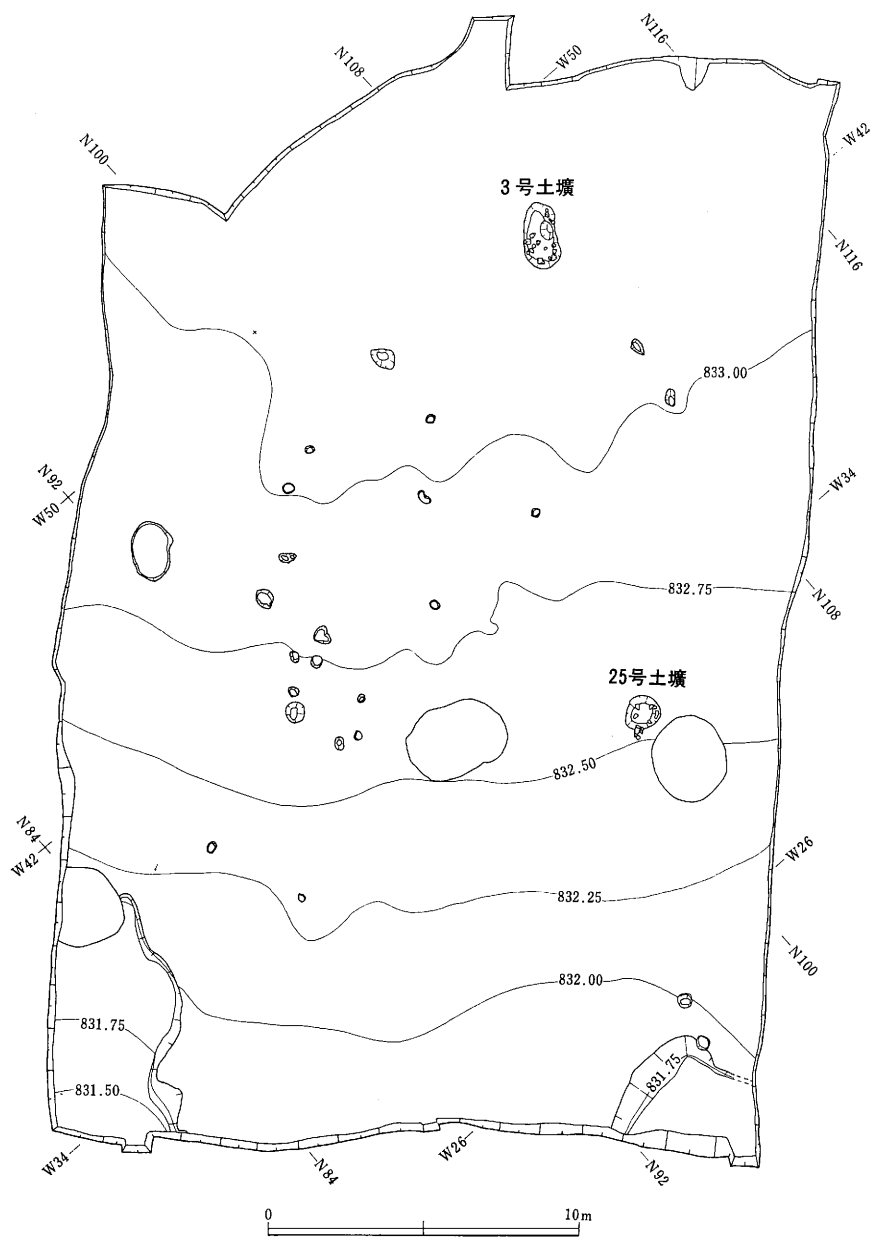


図293 中島B遺跡縄文時代前期以後の遺跡配置図 (1:250)

その他にヨシ属などのダンチク亜科を伴っていたと思われる。

各試料別に推定されるイネ科草本を見ると、Nk-1, 2 試料の植生は、エノコログサ属、ススキ属などのキビ亜科を主要構成種とし、それにササ属(チマキザサ節)、イチゴツナギ亜科、ヨシ属を伴っていたと思われる。Nk-3 および5 試料ではササ属の優勢な植生が推定され、特にNk-3 試料においてノガリヤス属などのイチゴツナギ亜科がそれらに伴っていたと思われる。Nk-4 試料では、Nk-2 試料と類似した植生が推定される。

なお、参考試料のNk-6 は、形態別組成からNk-3 試料に対比されよう。

(昭和58年 9月20日)

(4) 縄文時代前期～晩期の遺構と遺物

① 土壙 (図293・294)

図293に示した土壙のうち3号土壙と25号土壙以外は木の根の跡との区分があいまいで、それと断定しかねる。3号土壙はN109・W46に位置する。V層上面で検出され、埋土はIV層質である。長径2.2m×短径1.1mの楕円形で深さは0.35mである。径10~20cmの角礫が多数入っており、いくつかは壁や底に貼りついている。III層にはこの程度の礫はあまりないので、意図的であるといえる。土壙の底面はVI層に達しており、31号土壙を切っている。遺物はないため、帰属時期を決められない。

25号土壙はN101・W32付近に位置する。周囲はV層がなく、VI層上面で検出された。埋土はIII層質で単一である。長径1.2m×短径1.1mでほぼ円

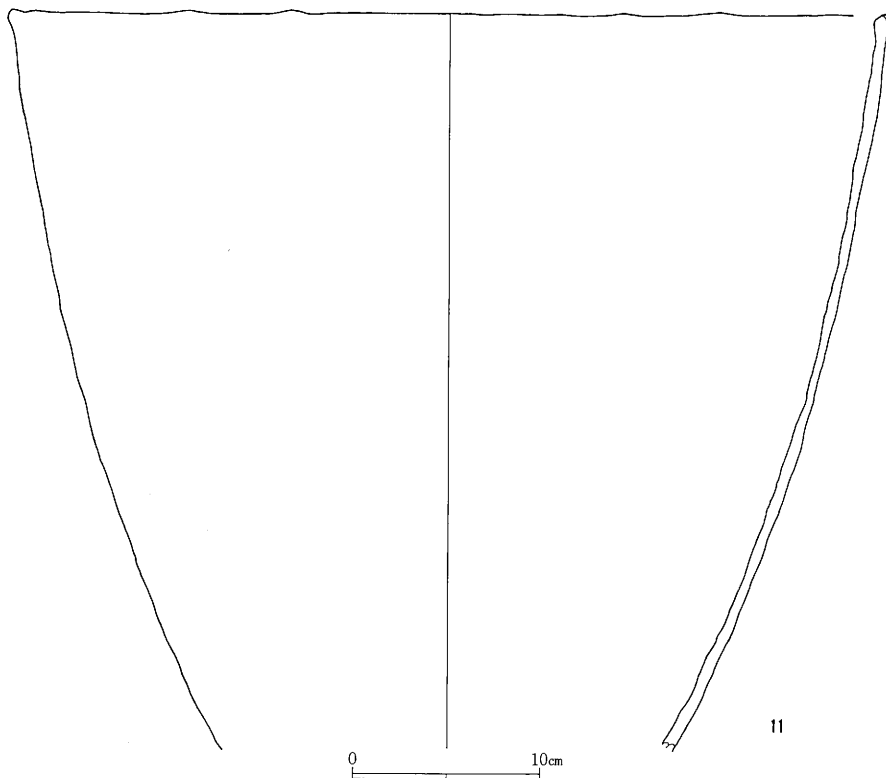
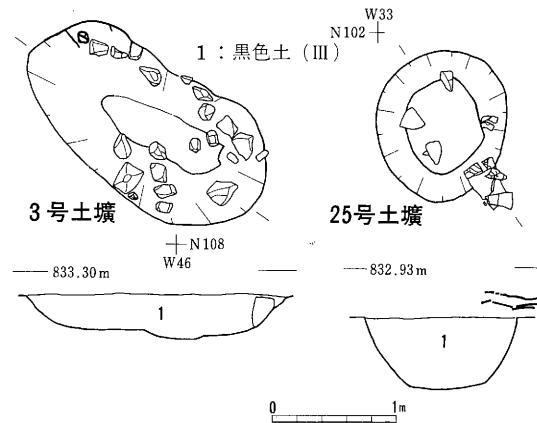


図294 中島B遺跡3号・25号土壙実測図 (1:60) 及び25号土壙出土土器実測図 (1:4)

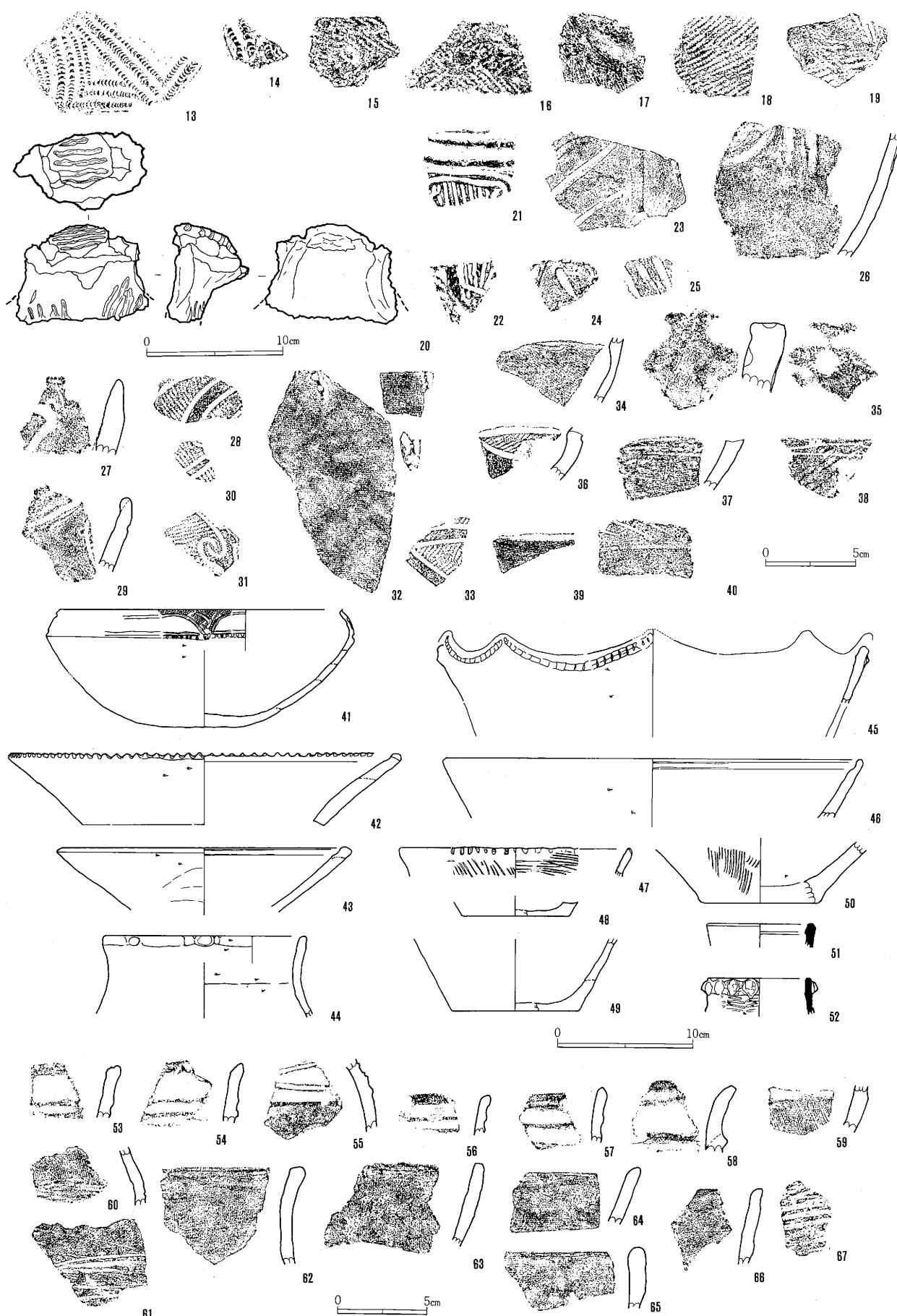


图295 中島B遺跡G地区出土遺物実測図・拓影 1 (13~19、21~40、53~67 1 : 3、20、41~52 1 : 4)

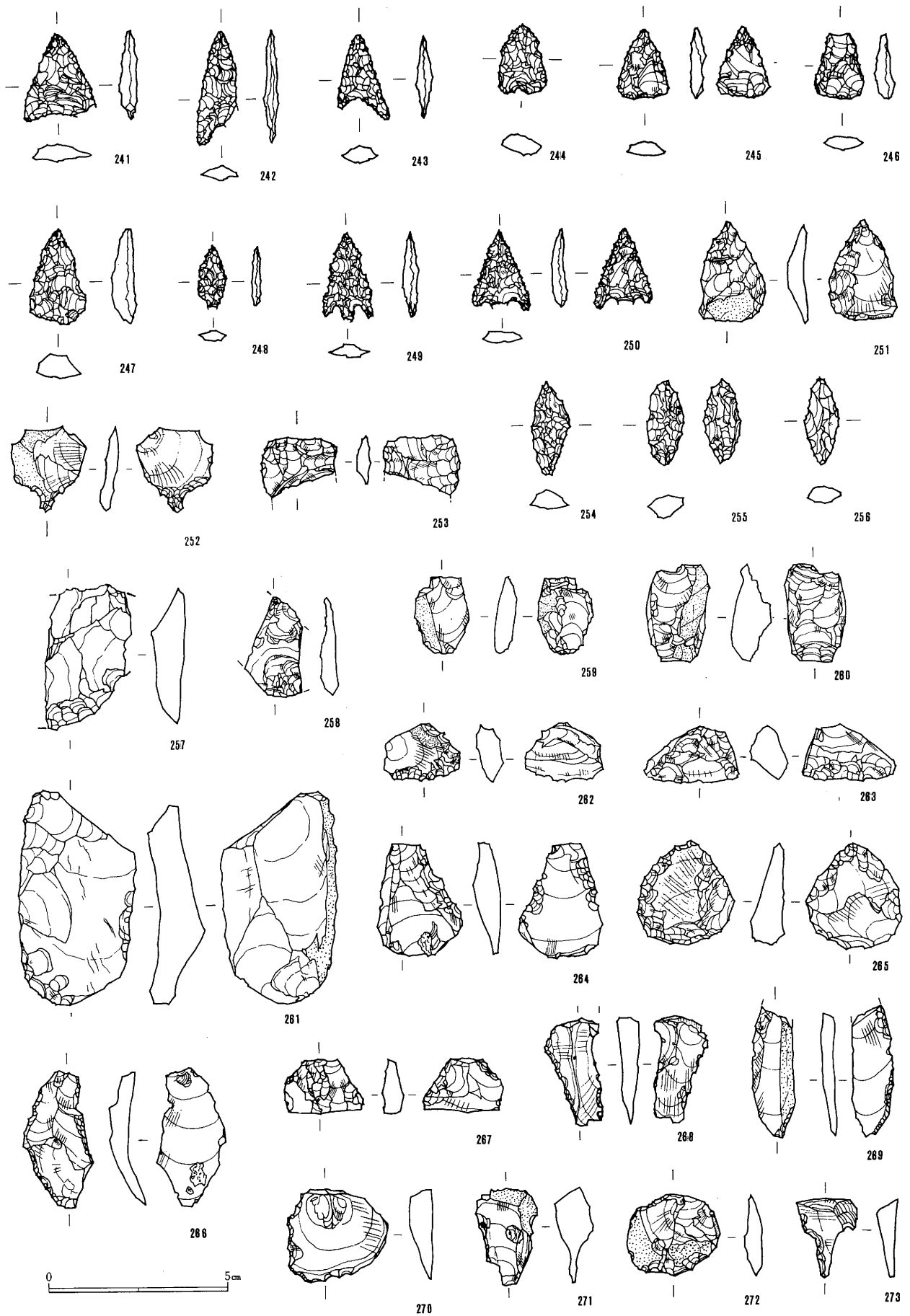


图296 中島B遺跡G地区出土遺物実測图2 (2:3)

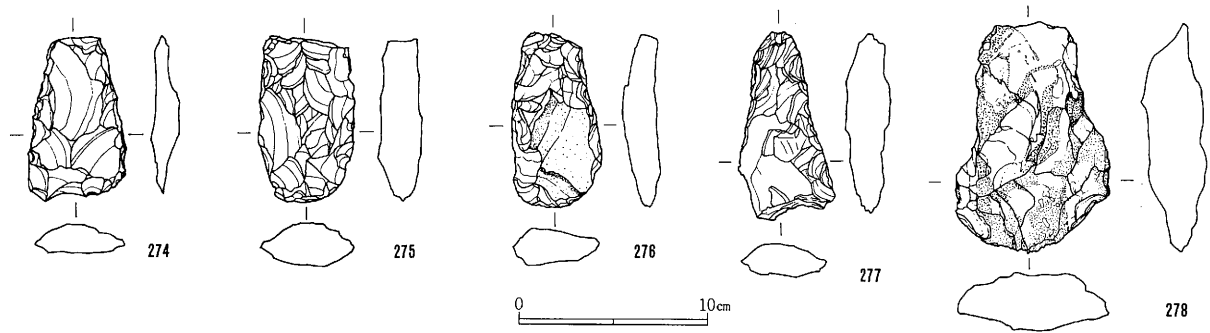


図297 中島B遺跡G地区出土遺物実測図3 (1:4)

形を呈し、検出面からの深さは0.6mである。検出面より上位20cmから、半ば土壌からはずれて縄文時代晩期末葉前後の土器(11)が発見された。11は大きな破片で、内面を下に向けて二重に重なっており、口縁部は土壌内側に向いていた。また、土器片に接して30cm×10cm程の細長い円礫がおかれていた。土壌は埋土からみてⅢ層中から掘り込まれた可能性が高い。恐らくは土壌を埋めたあと土器片を伏せて置いたと思われる、骨こそ発見されなかったものの、墓であったのではなかろうか。11は中島A遺跡の分類に従えば、I A群2類の深鉢Cに相当する。

② 遺構外の遺物 (図295~300)

G地区では遺物はⅢ層中及びⅥ層のロームマウンド中からある程度出土したが、特定の場所に集中する等、特記すべき状況を示していない。FG地区、GI地区は遺物量も少なく、これまた特記すべき状況を示さない。以下G地区とFG・GI地区において概要を記す。

G地区からは、土器、石器が出土した。土器は前期末(13・14)、中期後半(20~26)、後期前葉~中葉(27~43)晩期前葉(45)、晩期末葉前後(44、46~67)がある。このうち晩期末葉前後の土器は最も量が多く、石器の多くはこの時期に属するだろう。石器は石鏃50点(241~250)、石槍1点(251)、石錐8点(252~256)、スクレイパー2点(257・258)、ピエス・エスキュー5点(259・260)、小剥離痕のある剥片117点(261~273)、打製石斧35点(274~278)、磨石1点、その他の石器31点、剥片・石核・原石多数がある。打製石斧・磨石以外はほとんどが黒曜石を素材とする。黒曜石やチャート製の石器の総重量は148.2g、小剥離痕のある剥片は306.4g、剥片1081g、石核1061g、原石87gである。黒曜石片の中には、草創期の石片が混入している可能性があるが、明瞭にそれと指摘できるものはなかった。FG、GI地区からは土器、石器が出土した。土器は中期後葉(68)、後期初頭(70~74)、晩期末葉前後(75~118)等があるが、やはり晩期末葉前後が多数を占める。石器には、石鏃21点(279~289)、石槍2点(290・291)、石錐1点(292)、スクレイパー2点(293・294)、小剥離痕のある剥片12点(300・301)、打製石斧40点(303~325)、横刃形石器1点(326)、乳棒状石斧1点(327)、その他の石器5点(295~299)、剥片・石核・原石多数がある。黒曜石、チャート製の石器の総重量は52.6g、小剥離痕のある剥片51.9g、原石207g、石核458g、剥片1274gであった。

(5) 弥生時代以降の遺物 (図301)

I~Ⅲ層にかけて散漫ながらも各時期の遺物が出土した。特記すべき出土状況を示さないが、各層の年代を決定づける資料になろう。

121は弥生時代中期後半の甕で櫛描波状文をもち、口唇部には縄文が施される。329は磨製石鏃の破片である。122~126は古墳時代の中頃の土器で、ほとんどが破片で全体を知り得るものはない。122は杯で、細かなヘラミガキが施されている。123は高杯の杯部、124・125は罎の口縁部である。124はタテ方向のヘラ

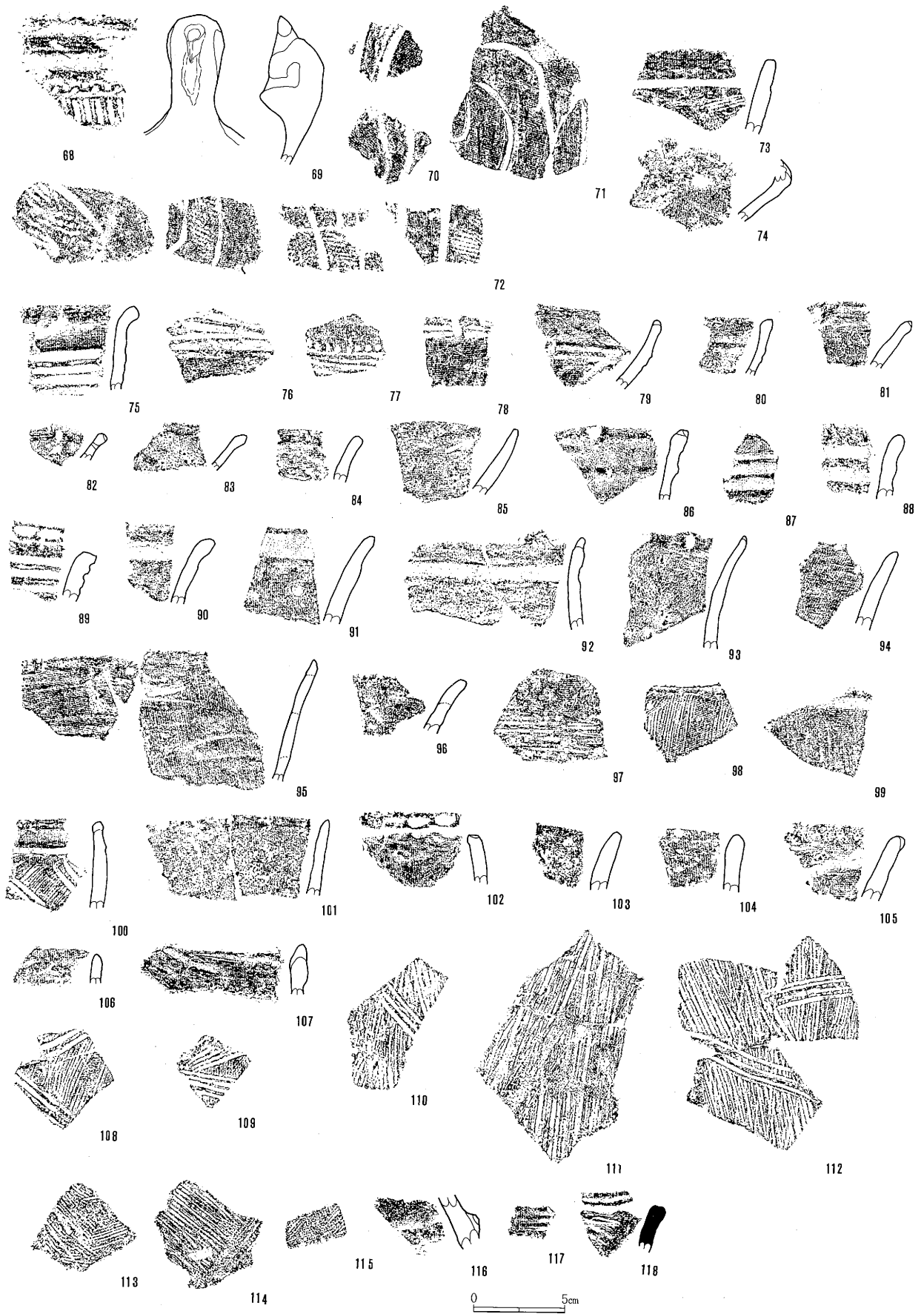


图298 中島B遺跡FG・GI地区出土遺物拓影1 (1:3)



図299 中島B遺跡FG・GI地区出土遺物実測図2 (279~302 2:3、303~308 1:4)

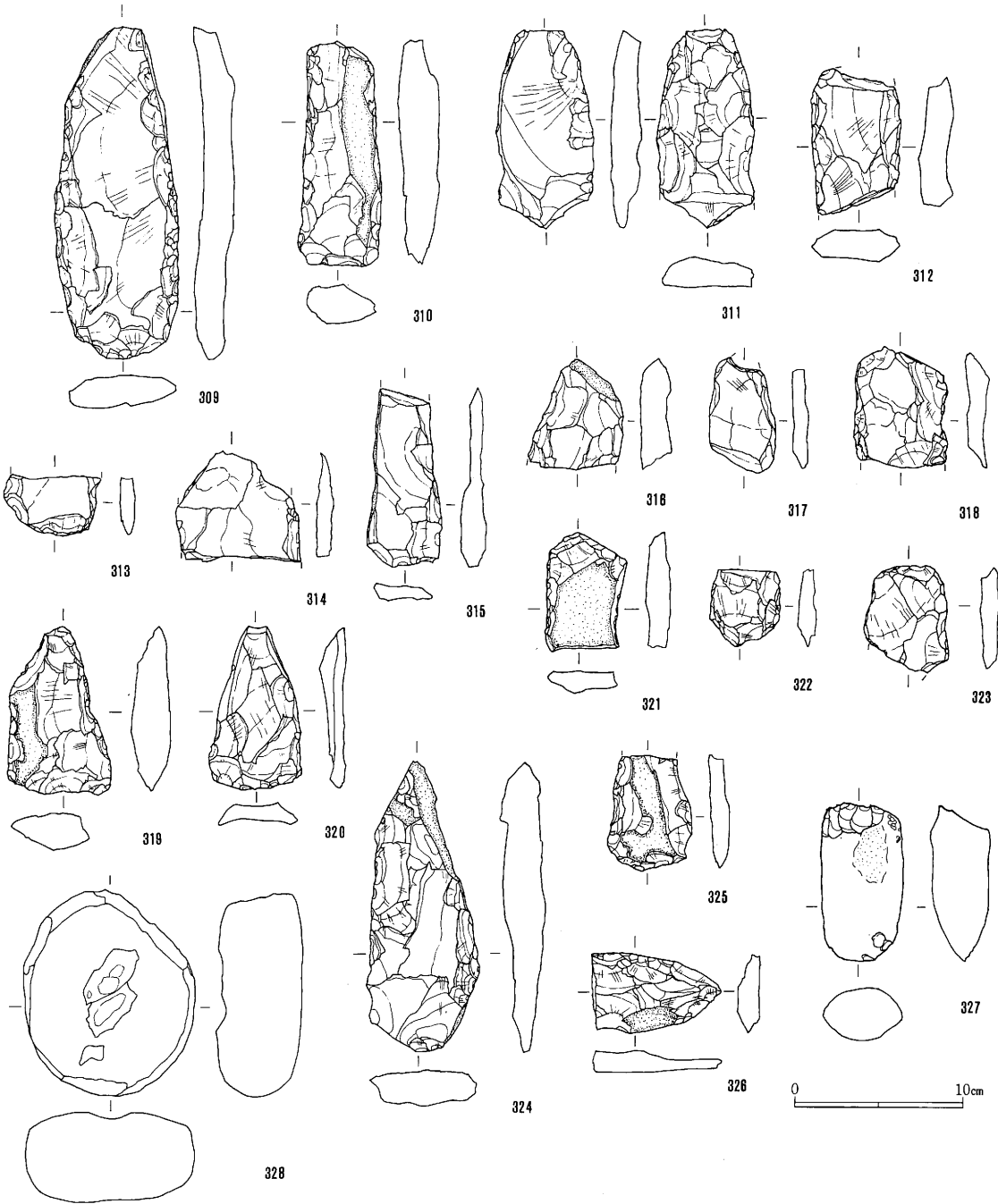


図300 中島B遺跡FG・GI地区出土遺物実測図3 (1:4)

ミガキが丁寧に施されている。126は小形の壺で、ヘラミガキが横方向に施されている。この他図示しないが、甕の破片がある。

127~130は中世の土器及び陶器である。127・128はいわゆる「かわらけ」で、内型成形で口縁部に一度ないし二度の強いヨコナデがはいる。129は縁釉皿で口縁部ちかくに灰釉が内外面ともかけられている。瀬戸・美濃系で窖窯末期と思われる。130は折縁皿で、全体に灰釉がかけられており、129と同じく瀬戸・美濃系で大窯期と思われる。その他内耳土器の破片がある。

この他図示しないが、近世の陶器が多数出土している。

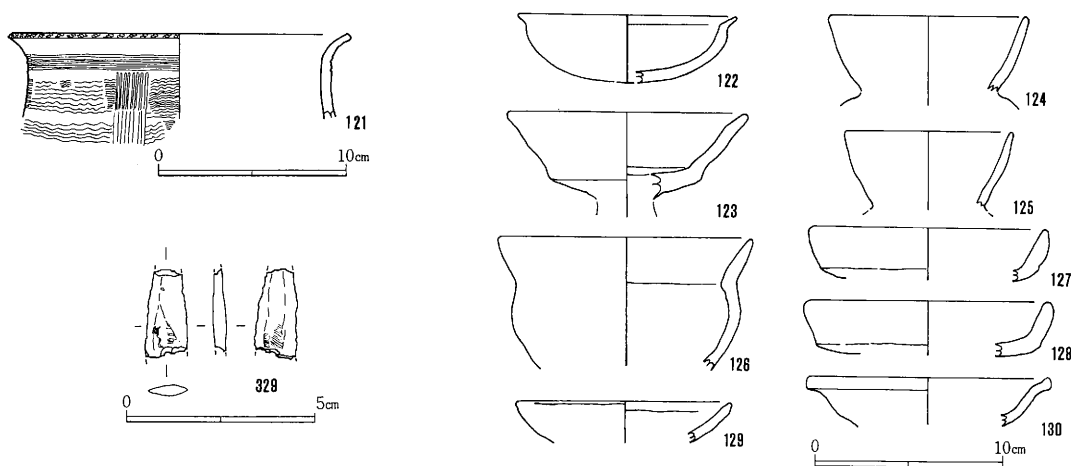


図301 中島B遺跡出土弥生時代以降の遺物実測図 (121~130、1 : 4、329 1 : 2)

5. 成果と課題

本項では、縄文時代草創期の文化層について若干のまとめと問題提起を行い、成果と課題としたい。

(1) 遺跡の成り立ち

本遺跡において確認された17ヶ所のブロックは、大きくは1号・2号ブロック群、3号ブロックの3つに把握され、ブロック群ごとに特徴を記述してきた。ここではそれら3つのブロック群がどのような性格をもって関連しあっているのかを比較検討し、本遺跡の成り立ちを考えてみたい。

1号ブロック群は、槍先形尖頭器、小剥離痕のある剥片、打製石斧の未製品、石斧製作時の調整剥片によって構成されている。前二者はチャート、珪質粘板岩を使用しているが、遺跡内に同一の個体別資料をもたず搬入品である可能性がきわめて強い。打製石斧製作に関する資料は個体別資料No.1及びNo.2からなり、両ブロックの剥片・碎片の90%以上を占める。おそらく本ブロック群において行われた作業は、打製石斧の製作であったと考えられる。槍先形尖頭器が搬入品であるのに対し対照的である。

さて、1-A号と1-B号2つのブロックの関連を考えてみよう。1-A号は槍先形尖頭器、小剥離痕のある剥片といった道具を主とし、さらに5点の石斧製作の調整剥片が出土している。石斧の調整剥片は自然面を大きく残す剥片が接合し、それらは原石をはじめに打ち割った段階であり、石斧製作工程の中では初期の段階であると理解される(1-A号の個体別資料No.2)。一方、1-B号は打製石斧未製品とその調整剥片が豊富に接合する(接合資料No.1及びNo.2)。これらの資料は石斧製作中の失敗または製作放棄と理解され、本ブロックにおいて2個の石斧の製作作業が中止したといえる。さらに両ブロックに共有されている個体別資料No.2から1-A号における石斧製作作業の開始→1-B号における石斧製作作業の中止という時間的な流れを追うことができる。

上記のことから、本ブロック群は、槍先形尖頭器など道具の遺棄空間(1-A号ブロック)と打製石斧の製作作業空間(1-A号ブロック→1-B号ブロックへ移行)という2種の構成要素から成り立っていると考えられる。

2号ブロック群は、黒曜石製の槍先形尖頭器及び打製石斧の製作に関連する資料が主体をなすが、石質をみると黒曜石が90%以上を占めることから、槍先形尖頭器の製作が主体であったといえる。ブロックごとにみても、槍先形尖頭器は各ブロックで製作されたと考えられるが、打製石斧の製作の痕跡が認められるのは2-C号・2-J号ブロックの2ヶ所である。ではもう少し詳しく各ブロックの関連を考えてみよう。個々のブロックをその規模からみると大きく3つに分けられる。①遺物総点数300点以上とまとまってお

り、遺物の密集度が高い、もしくは密集部分を有する大規模ブロック。2-A号～2-E号ブロックがこれに相当する。②遺物総点数50点以上、分布は散漫な中規模ブロック。2-I号・2-J号ブロックがこれに相当する。③遺物総点数30点前後からそれ以下で、分布は散漫な小規模ブロック。2-F号～2-H号、2-K号～2-H号ブロックがこれに相当する。

さて、大規模ブロックからその特徴をみてみよう。2-C号ブロックを除き他のブロックでは槍先形尖頭器製作の調整剥片がその主体をなし、さらに尖頭器未製品、原石などが伴っており、槍先形尖頭器の製作作業が行われた場として理解される。また、それらはブロック範囲内の密集部分を形成している。特に2-E号ブロックは尖頭器未製品の量も多く遺物総点数が1000点近くにもものぼる。一方製品としての槍先形尖頭器は散漫な分布域からブロック外縁部にかけて、さらにはブロック外からの出土をみる。槍先形尖頭器はほとんどが黒曜石製であり個体識別は困難であるが、19は透明度の低い黒色の黒曜石、24は乳白色の黒曜石、25は珪質粘板岩と遺跡内に同一個体をもたない単独資料と考えられ、それらを含め製品の槍先形尖頭器は遺跡外で製作されたものが本遺跡にもたらされ遺棄された可能性がきわめて高い。製品(=道具)としての槍先形尖頭器はブロック外縁部～ブロック外に遺棄の空間を推定できる。大規模ブロックのうち2-C号ブロックは粘板岩の剥片・破片が半数以上を占め、また接合例から石斧の製作作業が行われた場として理解される。しかしながら完成品は遺跡内から検出されず、遺跡外へ製品として持ち出されたと考えたい。

中・小規模ブロックも槍先形尖頭器の調整剥片・破片を主体とする点では大規模ブロックとかわりはない。しかし散漫な分布は尖頭器製作があまりその場で集中的には行われなかったことを示している。2-L号ブロックなどは、個別別資料No.9(玄武岩)の槍先形尖頭器製作の調整剥片で占められており、1原石がそこで消費されている。おそらく、中・小規模ブロックでは1～2個程度の原石の消費が行われていたと考えられる。大規模ブロックとこれら中・小規模ブロックとの関係を推定すると、大規模ブロックは、中・小規模のブロックがほぼ同じ位置で累積的に形成された結果として理解することができよう。大規模ブロックに尖頭器未製品、原石が多いこともそのことを裏づける資料といえよう。また、槍先形尖頭器(25)、削器(57)、小剥離痕のある剥片などの道具は、大規模ブロックと同様にブロック外縁部～ブロック外に出土する傾向にある。

以上から、本ブロック群は、槍先形尖頭器を集中的に製作した大規模ブロック(2-A、B、D、E号)とせいぜい1～2個の原石を消費した程度の製作作業にとどまったと思われる中・小規模ブロック、さらに石斧製作が集中的に行われた2-C号ブロック、小規模な作業にとどまったと思われる中・小規模ブロック、さらに石斧製作が集中的に行われた2-C号ブロック、小規模な作業にとどまった2-J号ブロックの集合体として捉えられる。各ブロックは、その石器製作作業の頻度によって規模が異なるものの、石器製作作業空間として理解され、それらが連なるように位置し本ブロック群を形成していたと考えられ、ブロック外縁部～ブロック外は道具の遺棄空間として理解される。

3号ブロックは2号ブロック群の大規模ブロックの様相に近い。ただし前項でも述べたように立地が傾斜変換点にあったため流出した遺物が多い可能性が高く、ブロック内の分布状況は詳しく語れない。しかし器種組成上の特徴として多量の槍先形尖頭器調整剥片・破片の他に尖頭器未製品、原石も相当量出土する点は、隣接する2-E号ブロックによく似ており、槍先形尖頭器の集中的な製作作業空間であったと理解される。ただ3号ブロックは確実に完成品と思われる槍先形尖頭器がない点および土器が伴出している点が注目される。

以上、本遺跡において検出された1号ブロック群、2号ブロック群、3号ブロックの3グループは、槍先形尖頭器や打製石斧を製作したと考えられる製作作業空間と、石器、土器など道具の遺棄空間の2つか

ら成り立っている遺構と結論し、それらをまとめると以下のようになる。

- 1号ブロック群
 - 1-A号……………(槍先形尖頭器の遺棄) + (打製石斧の製作→1-B号ブロックへ)
 - 1-B号……………(打製石斧の製作)

- 2号ブロック群
 - 2-A号……………外縁部(槍先形尖頭器・打製石斧の遺棄) + 密集部(槍先形尖頭器の製作)
 - 2-B号……………外縁部(槍先形尖頭器などの遺棄) + 密集部(槍先形尖頭器の制作→一部の尖頭器は2-E号ブロックへ)
 - 2-C号……………外縁部(槍先形尖頭器などの遺棄) + 密集部(打製石斧の製作→製品は遺跡へ) + 東半部(槍先形尖頭器の製作)
 - 2-D号……………外縁部(打製石斧の遺棄) + 密集部(槍先形尖頭器の製作)
 - 2-E号……………外縁部(槍先形尖頭器の遺棄) + 密集部(同上)
 - 2-F号……………(槍先形尖頭器の製作)
 - 2-G号……………(削器の遺棄) + (槍先形尖頭器の製作)
 - 2-H号……………(槍先形尖頭器の製作)
 - 2-I号……………(同上)
 - 2-J号……………東半部(打製石斧の製作) + 西半部(槍先形尖頭器の製作)
 - 2-K号……………(槍先形尖頭器の製作)
 - 2-L号……………(同上)
 - 2-M号……………(同上)
 - 2-N号……………(同上)
 - ブロック外…(槍先形尖頭器の遺棄) + (土器の遺棄)

- 3号ブロック……………(槍先形尖頭器の製作) + (土器の遺棄)

そこで上記の状況をもとに本遺跡の形成、展開、他遺跡への移動を考えてみることにしよう。1号ブロック群は2号ブロック群・3号ブロックとはやや離れたところに立地し、石質も異なり共有する個別別資料をもたない。槍先形尖頭器自身の特徴も異なるなど両ブロック群の関連性は薄い。さらに一步解釈を進めれば、違う集団が残したとも考えられる。ここでは1号ブロック群と2号ブロック群・3号ブロックとを分けて遺跡の成り立ちをモデル化して記述してみよう。

1号ブロック群：ブロックの規模は小さく遺跡への逗留は短期間であり、槍先形尖頭器の遺棄と打製石斧の製作が行われたと考えられる。ただし打製石斧は製作中に遺棄されており、新たな打製石斧は製作できずに本遺跡を立ち去ったと推定される。

2号ブロック群・3号ブロック：微高地上の縁辺部に占地し、かなり集中的に槍先形尖頭器、打製石斧を製作したと考えられる。1号ブロック群に比べ長期の逗留が予想され、おびただしい量の遺物は製作址的な遺跡であったことをうかがわせる。石器などの道具がブロック外縁部からブロック外に単独出土をみることが、当時の集団の行動範囲がブロック外に及ぶ広範な位置を占めていたとも考えられる。それはブロックの密集部分を石器製作作業の場とすれば、そのまわりに居住の場があったと想定もできる。そして一定量の槍先形尖頭器、打製石斧を製作し次の遺跡へと移動していったのではなかろうか。

以上、本遺跡の成り立ちの大枠をモデル的に記述したが、さらに微視的な観点から検討を加えればより実体感をもった当時の生活が復元されることであろう。

(2) 槍先形尖頭器について

本遺跡では槍先形尖頭器の資料がまとまって出土した。それらは1号ブロック群から出土したチャート
を主な石材とした一群と2号・3号両ブロック群から出土した黒曜石を主な石材とした一群に大別される。
なかでも黒曜石製の槍先形尖頭器は原石、剥片、未製品といった製作工程を復元することが可能な資料と
ともに出土している。以下、この黒曜石製の石器群について若干のまとめを行うことにする。

完成品として捉えられた槍先形尖頭器は、形態で柳葉形（Ⅰ類）と木葉形（Ⅱ類）の二群に大別された。
大きさはⅠ類が大形と中形、Ⅱ類が中形と小形からなり、形態が規格性をもって作り分けられていること
がうかがわれる。調整加工も押圧剝離によって製作されており（19・20など）先土器時代後半期より出現し
たと考えられる槍先形尖頭器石器群のうちで最も発達した段階の様相を呈している。

ではこれらの槍先形尖頭器の製作過程を追ってみよう。完成品の槍先形尖頭器が遺跡外からの搬入品で
ある可能性が強いことは先に述べたところであり、完成品と遺跡に残された尖頭器製作の痕跡（原石・剥片・
未製品）とは直接には結びつかないが、少なくとも同一の製作技術があったという前提のもとに進めてゆ
く。一般的に両面に調整が施される槍先形尖頭器はその素材が剥片であるのか礫であるのか判別が困難で
あるとされている。しかし本遺跡から多量に出土した尖頭器未製品はその困難な素材推定に格好な資料と
なった。完成度ランクB～Dは原石から完成品へ至る製作の過程を反映している。そこから復元される槍
先形尖頭器の製作方法は、拳大かそれ以下の円礫もしくは板状礫を順次打ち割ってゆき、一原石に対しほ
ぼ一個の槍先形尖頭器が作られていたと考えられる。尖頭器未製品の中に表裏ともに自然面を残す資料が
特徴的である。この槍先形尖頭器の製作方法を仮にA類と称しておこう。

ところがその一方で本遺跡には剥片を素材とした周縁調整の槍先形尖頭器が上述した礫を素材とした一
群と共伴している。個々の遺物の記載の項でも述べてきたように、本遺跡からは例外的なものを除き石核
の存在は認められない。また何らかの道具の製作を目的とし剥片の剝離も認めがたく、いわゆる剥片石器
製作技術の伝統はみることができない。となるとこの剥片素材の槍先形尖頭器は先に示したA類の製作過
程に生じた調整剥片を利用したと考えるべきであろう。周縁調整の槍先形尖頭器自体の表面を観察しても
自然面を残すものが多くA類製作過程のうちでもその初期段階の比較的厚手の調整剥片を使ったものと理
解される。つまりこれら周縁調整の槍先形尖頭器の製作方法は基本的にはA類製作技術過程の中に位置づ
けられ、その中で派生的な部分で生じたものと考えられる。これを仮にB類と称する。

本遺跡における槍先形尖頭器はA類製作技術を基本としそれに内包される技術としてB類があると捉え
られ、その技術基盤のもとに一群の槍先形尖頭器が製作されたといえよう。従来、周縁調整の槍先形尖頭
器は、先土器時代のナイフ形石器の終末の段階に顕著にみられた。そこにみられる周縁調整の槍先形尖頭
器は、ナイフ形石器文化の基本的な技術である剥片石器製作技術の基盤がまさに新しい技術へ移行する段
階に位置づけられるが、そこにはまだ剥片石器製作技術の基盤が色濃く残っている（註1）。本遺跡の周縁
調整の槍先形尖頭器は剥片石器製作技術の伝統からは完全に離脱した技術の中で製作されたものとして評
価し、これに「中島型」の型式名をあたえたい（図中23・24・27～30）。槍先形尖頭器の型式学的検討はナ
イフ形石器のそれに比べ遅れをとっておりその型式設定が試行錯誤の段階であるのが現状である。その中
にあってむやみに型式設定を行うことはつつしむべきことである。しかしながら「中島型」と称すべき一
群は先土器時代の周縁調整の一群とは明らかに区分して考えるべきものであるという意図のもとにあえて
（註1）この問題の詳細については別の機会に述べたいと思う。

提唱したい。また今後の課題としては、該期の中にその類例をもとめることであろう。剥片を素材としている例としては神奈川県寺尾遺跡〔白石浩之1980〕、細石器を伴う北海道置戸安住遺跡〔戸沢充則1967〕などがあげられるが、「中島型」とはまた異なった状況を呈している。他遺跡との比較検討を有効に進めてゆく上での叩き台になるものとして「中島型」槍先形尖頭器を捉えておきたい。

(3) 遺跡の評価と編年的位置

本遺跡における該期遺物群の位置づけは、隆起線文系土器群の伴出から縄文時代草創期として捉えることができる。但し、1号ブロック群は、土器は伴出せず、また、遺跡の構成上も他のブロックとはやや異なる様相を呈し、微妙な時間差は認められるかもしれない。ただ中～大形の両面調整の槍先形尖頭器の特徴や打製石斧などの出土は、従来より捉えられてきた縄文時代草創期の石器群と同等の内容をもつ。さらに出土層位も2号ブロック群、3号ブロックと同じであり、ほぼ同時期の所産と考えられる。

2号ブロック群、3号ブロックから出土した隆起線文系土器群について少しふれておきたい。2号ブロック群周辺部から出土した細隆起線文土器(1)は、非常に細い粘土紐を貼り付けており、その文様効果は微隆起線文土器とかわらない。一方、3号ブロックから出土した隆起線文土器(2)はやや太めの隆帯を連続的に貼り付け、その隆帯上に刻みをもっており、二者の特徴は大きく異なっている。県内の比較的まとまった資料としては、狐久保遺跡〔小林孚1968〕、荷取洞窟遺跡〔小林達雄1963〕、石小屋洞穴遺跡〔永峯光一1967〕があげられる。狐久保遺跡例は報文によれば、太めの隆帯や、細隆起線文や、微隆起線文をもつ一群が出土している。本遺跡と比べれば、太めの隆帯と細隆起線文が共通するが、狐久保遺跡例はいずれの隆帯も小波状を呈す点で違いがある。荷取洞窟遺跡例はすべて微隆起線文土器である。石小屋洞穴遺跡例は復元された好資料をもつが、それは報文によれば口端から頸部にかけて2条の太い粘土紐を貼り付け、隆帯上に刻みもち、さらにその下には4条の微隆起線文(報文では微隆起となっているが、細い粘土紐を貼り付けたものである。)が施されている。本遺跡の2個体は両者をかねそなえているともいえる土器でもある。ただし隆帯上の刻みに若干の違いは認められる。該期土器は、その類例が増加しているとはいうものの、まだ完形個体も少なく、該期の編年観も統一をみない〔小林達雄1974、鈴木保彦1977、大塚達朗1983〕。現時点において本遺跡の資料は隆起線文系土器群の一群に属し、また出土位置は離れているものの、遺跡の構成全体からみれば同一の時期の所産として捉えられる可能性が高いという評価をあたえ、その細別は今後の資料の増加を待ちたい。

2号ブロック群、3号ブロックから出土した石器群は槍先形尖頭器と打製石斧に代表される。今この二者は前者が黒曜石製、後者が粘板岩製と石質を異にし、分布も重ならない。しかし遺跡全体の構成を考えた上では、これらをあえて分離することも困難であり一群として捉えた。縄文時代草創期の組成上、槍先形尖頭器と打製石斧のセット例は多い。しかしながら該期の石器群には他に石鏃、有茎尖頭器が特徴的に伴う例が非常に多いにもかかわらず、本遺跡では出土しなかった点はどうに解釈すべきであろうか。その一つとして、本遺跡の性格が槍先形尖頭器の製作に重点がおかれた遺跡であると評価される点で、特定器種のかたよりは十分に考えられることである。例えば東京都前田耕地遺跡、新潟県本の木遺跡などからはおびただしい量の槍先形尖頭器が出土しており、該期における製作址的遺跡として注目されている点を考えれば本遺跡は前二者の遺跡に比べて規模は小さいものの共通する性格をもつと考えられる。また本遺跡の槍先形尖頭器の特徴は発達期の様相を呈し、先土器時代とされる諏訪市上ノ平遺跡との共通点を見出すこともできる。先土器時代から縄文時代にかけての変革期の石器群の様相は実に多様である。本遺跡においても1号ブロック群と2号ブロック群・3号ブロックとは組成上は類似しているが槍先形尖頭器の特徴は違っている。該期の様相を理解してゆくためには、超大形の槍先形尖頭器と丸ノミ形石斧に代表

される石器群(長者久保・神子柴文化)、有茎尖頭器や石鏃を伴う石器群との相互関連を検討してゆく必要がある。とにかく本遺跡は先土器時代から縄文時代への変革期を知る上で重要な指摘をしようとする遺跡として評価される。

6. 小結

中島B遺跡からは、主として縄文時代草創期と晩期末葉前後の遺構・遺物が発見された。後者は中島A遺跡を中心とした遺跡群の一環として理解すべきで、第8節で検討した。

縄文時代草創期では、3つのブロック群から槍先形尖頭器と打製石斧を主とする石器群、それらの製作時に生じた剥片類多数及び隆起線文系土器が発見された。ブロック群には、廃棄の場と製作址的な場とが含まれており、個別別資料の追跡からブロックを残した集団の動きの一部も復元された。また槍先形尖頭器は独自の製作技法に基づくことが指摘でき、石器組成には片寄りがあることも判明した。隆起線文土器のうち1点は器形がある程度推定できる好資料であった。この時期のまとまった資料は諏訪地方はもとより長野県内でもほとんど知られていないだけに、研究の端緒を開く貴重な例となるだろう。

発掘時には岡谷市初の先土器時代遺跡と考えられ、各方面から注目を集め、本報告以前に何回か概要を公表してきた。しかし検討の結果、その年代観は縄文時代草創期に変更され、石斧の石材も当初の凝灰岩から粘板岩に改められることになった。十分に検討ができていない段階で資料を公開する難しさを改めて知らされた。それ以上に、年代観等については意見の分かれる資料であり、本書の結論に対する異論も少なくないだろう。本報告が、研究を深め建設的な議論を行う契機になることを願って小結としたい。

参考文献

- 安藤政雄・矢島国雄・鈴木次郎他 1974 『砂川先土器時代遺跡』 所沢市教育委員会
安藤政雄 1974 「砂川遺跡についての一考察—個別別資料による石器群の検討—」『史館』2 史館同人会
" 1975 「砂川遺跡」『日本の旧石器文化』2 雄山閣出版
" 1977 「砂川遺跡についての一考察—個別別資料による石器群の検討(2)—」『史館』9 史館同人会
" 1977 「遺跡の中の遺物」『季刊どるめん』15 J.I.C.C 出版局
大塚達朗 1982 「隆起線文土器瞥見」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』1 東京大学
小林達雄 1963 「長野県荷取洞窟出土の微隆起線文土器」『石器時代』6 石器時代文化研究会
" 1974 「縄文土器の起源」『考古学ジャーナル』100 ニューサイエンス社
小林 孚 1968 「長野県上水内郡信濃町狐久保遺跡緊急発掘調査概報」『信濃』20-4 信濃史学会
近藤鍊三 1974 「Opal Phytoliths—植物珪酸体の形態の特徴とイネ科植物分類グループとの関係」『ペドロジスト』18
" 1976 「樹木起源のケイ酸体について」『ペドロジスト』20
" 1977 「Opal Phytoliths, Inorganic, Biogenic Particles in Plants and Soils.」『JARQ』
近藤鍊三・隅田友子 1978 「樹木葉のケイ酸体に関する研究(第1報) 裸子植物および単子葉被子植物樹木葉のケイ酸体について」『日本土壌肥科学会誌』49
近藤鍊三・ピアスン友子 1981 「樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報) 双子葉被子植物樹木葉のケイ酸体について」『帯広畜産大学研究報告』12
近藤鍊三 1983 「植物珪酸体(プラントオパール)分析の農学および理学への応用」『十勝農学談話会』25
近藤鍊三 1985 「プラントオパールとその応用をめぐって」『歴史公論』103 講談社
佐瀬 隆・近藤鍊三 1974 「北海道の埋没火山灰土腐植層中の植物珪酸体について」『帯広畜産大学研究報告』8
白石浩之 1980 『寺尾遺跡』神奈川県教育委員会
杉原莊介 1973 『長野県上ノ平の尖頭器石器文化』明治大学文学部研究報告考古学3 明治大学文学部考古学研究室
鈴木忠司 1980 『寺谷遺跡』平安博物館
鈴木保彦 1969 「縄文草創期の土器群とその編年」『史叢』12・13合併号
" 1977 「縄文土器出現の様相」『季刊どるめん』15 J.I.C.C 出版
芹沢長介・中山淳子 1963 「新潟県津南町本ノ木遺跡調査予報」『越佐研究』12
戸沢充則 1967 「北海道置戸安住遺跡の調査と石器群」『考古学集刊』2-4 東京考古学会
" 1968 「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』4-1 東京考古学会
戸田哲也 1984 『月見野上野遺跡第2地点発掘調査報告書』月見野上野遺跡調査団
永峯光一 1967 「長野県石小屋洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社
" 1968 「石小屋洞穴発見の微隆起線文土器」『古代文化』20-8・9 古代学協会
大和市教育委員会 1986 『月見野遺跡群上野遺跡第1地点』大和市教育委員会

やながい と

第10節 柳海途遺跡 (GYG)

1. 遺跡の概観

岡谷市1404番地付近に所在し、遺跡西端を塩尻峠へ登る国道20号線が南北に走る。遺跡一帯は塩嶺山塊の崖錐とその下に広がる扇状地という地形環境にある。塚間川の形成した小扇状地に向かって、塩嶺山塊末端から小さな沢が東流するが、この沢によって東向きの崖錐が形成されている。遺跡は崖錐から塚間川の扇状地にかけて立地する。沢は扇状地に至って柳海途遺跡と膳棚B遺跡の境界となり、中島A遺跡の低湿地直前で南東に向きを変えて中島A・膳棚B遺跡を区分し、塚間川と合流する。柳海途遺跡周辺は水田・宅地となっている。沢は現在も小さな氾濫を起こし、水田を土砂で埋めることがあり、宅地の基礎工事は基盤層に及んでいる。崖錐地形の末端は湧水線となっている。膳棚A・B、中島A・B各遺跡と近接しており、有機的関連をもって存在していると言ってよい。

2. 調査の概要

本遺跡は縄文時代の遺物が採集される遺跡として知られていた。範囲は国道20号線付近を中央とする崖錐地域を中心として、塚間川の扇状地右岸まで広がるとされていた。調査域は当初予想された遺跡の中心部から東側全域に及んでおり、その主要部分を調査し得たとみられる。調査面積は15,030㎡、用地買収の都合上発掘調査は二年次にわたった。発掘調査は昭和57年9月3日と、昭和58年5月上旬～11月中旬まで行われ、調査研究員は主として3名が当たった。整理作業は58年度から断続的に行われ、本報告の刊行に至った。この間、当センター刊行の『長野県埋蔵文化財ニュース』No.6及びNo.8や『長野県埋蔵文化財センター年報』1に遺跡の紹介を行った。

本遺跡はその立地状況が集落址むきとはいえず、採集遺物も微量であったため、全面に密に遺構が存在するとは思われなかった。そこで遺跡の中心を見出すためのトレンチ調査を全面に行い、その結果を見て調査方法を考えることにした。72本設定したトレンチ調査の結果、遺物包含層は発見できなかったが、溝址、河川址、土壌の可能性のある落ち込みがいくつか検出された。隣接する膳棚B遺跡でも同様な河川址が発見されており、両者の関係把握のため面的調査を行うことにした。土壌らしい落ち込み周辺も面的調査が必要と判断され、面的調査は約1,300㎡に及んだ。トレンチ調査は手作業で行い、面的調査は、表土剥ぎに重機を使用した。測量は遺構については遣り方測量で行い、他の平面図は光波測距儀を用いた座標計測で作成した。測量基準点は、岡谷インター・チェンジ関連遺跡共通の、日本道路公団の工事用センター杭、BSTA 0 +87.0を用いた。その座標値はX=8934.0457、Y=-41060.9474である。座標北は複数の工事用杭の座標値から算出した。レベル原点は測量基準点と同一の杭を用いた。その値は827.773mである。大地区は岡谷インター・チェンジ関連遺跡全体にかかるように設定した。

3. 調査の経過

昭和57年	昭和58年
9月3日 崖錐地域末端の水田一枚にトレンチを3本設定。遺物は散見されるが包含層は捉えられず。面的調査不要として本年度の調査は1日で終了。	5月10日 塚間川の扇状地地域から調査開始。水田ごとにトレンチを設定する。 6月2日 01トレンチで溝を発見。後に1号河川址と判明。 7月13日 18～20トレンチで溝址を検出。

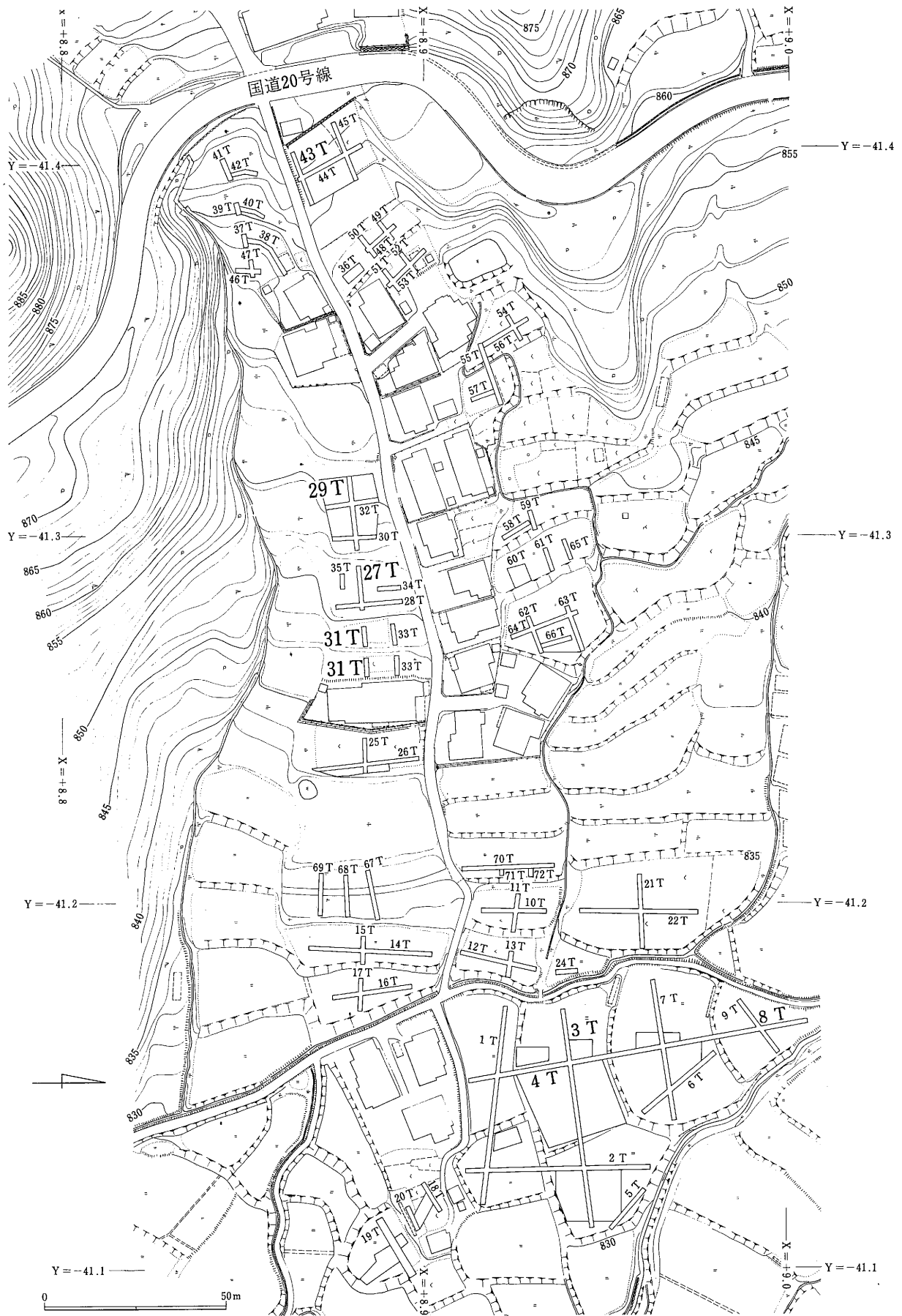


図302 柳海途遺跡トレンチ配置・発掘範囲及び地形図 (1:1,500)

- 7月19日 溝等の調査のため面的調査が必要と判断。重機を用いて表土剥ぎを開始する。
- 8月19日 中島B遺跡との関連を考慮し、遺跡北東端に面的調査を広げる。同遺跡包含層と同質の再堆積ローム層がいくらか広がっていたものの遺物は皆無。
- 9月5日 03トレンチの落ち込みは1号土壌であることが判明。
- 9月30日 崖錐地域に調査の重点を置くが包含層はなく、遺構も検出できず。
- 10月7日 扇状地域の調査終了。
- 11月16日 崖錐地域は面的調査不要と判断。記録も終了したため、発掘調査終了。
- 12月15日 整理作業開始。遺構・遺跡の記録の補訂・整備と遺物の記録までを年度内に終了し、いったん作業を中断。



- 昭和60年
- 8月30日 整理作業再開。図版作製を年内に終了。他遺跡の進捗を待つ。
- 昭和61年
- 10月7日 原稿執筆。

4. 調査の結果

(1) 層序と地形形成 (図303)

本遺跡は地形上から塚間川の扇状地地域と崖錐地域とに区分できる。(図302)。

塚間川の扇状地地域の基本的層序は次の通りである。

- I層：現耕土と床土及び水田造成のための盛土である。
- II層：黒色土で旧表土であろう。水田造成時に削平され、扇状地の東端・西端に残る。縄文時代早期～晩期の遺物が散見される。1号溝址はII層上面で検出される。また近世陶器を含む1号河川址の埋土の一部はII層と同質で、II層の成立年代を決める手がかりとなろう。
- III層：II～IV層の漸移層である。II層と同様の分布をもつ。
- IV層：再堆積ローム層でII～III層と同様の分布をもつが、土壌化が進んでいるのは発掘域北東付近に限られる。
- V層：塩嶺累層に由来する砂礫層で、巨礫を含み、基盤となる。

崖錐地域の基本的層序は次の通りである。

- I層：現耕土及び水田造成のための盛土。
- II層：混礫黒色土で旧表土である。III層以下に入っている巨礫が頭を出している。縄文時代～近世の遺物が散見される。
- III層：混礫褐色土でII～IV層の漸移層である。縄文時代～平安時代の遺物が散見される。
- IV層：礫を多く含むローム層またはローム混じりの砂礫層である。
- V層：塩嶺累層に由来する砂礫層で、巨礫を含み、基盤となる。

両地域の層序は、土質・堆積状況からみて共通性がある。各層の年代決定資料には差があるものの、その出土状況が不安定なため、積極的に年代的な相違があるとも言えない。両者ともII層は近世以前の遺物をもつ層、III層は平安時代以前の遺物をもつ層としておきたい。層序の基本は両地域とも、塩嶺累層に由来する砂礫層を基盤とし、その上にローム層の再堆積層または砂礫まじりのローム層がのる。そしてその上部が土壌化するのだが、崖錐地域は土壌化が進まず、扇状地地域は水田造成時に削平されて土壌化した層が失われている。

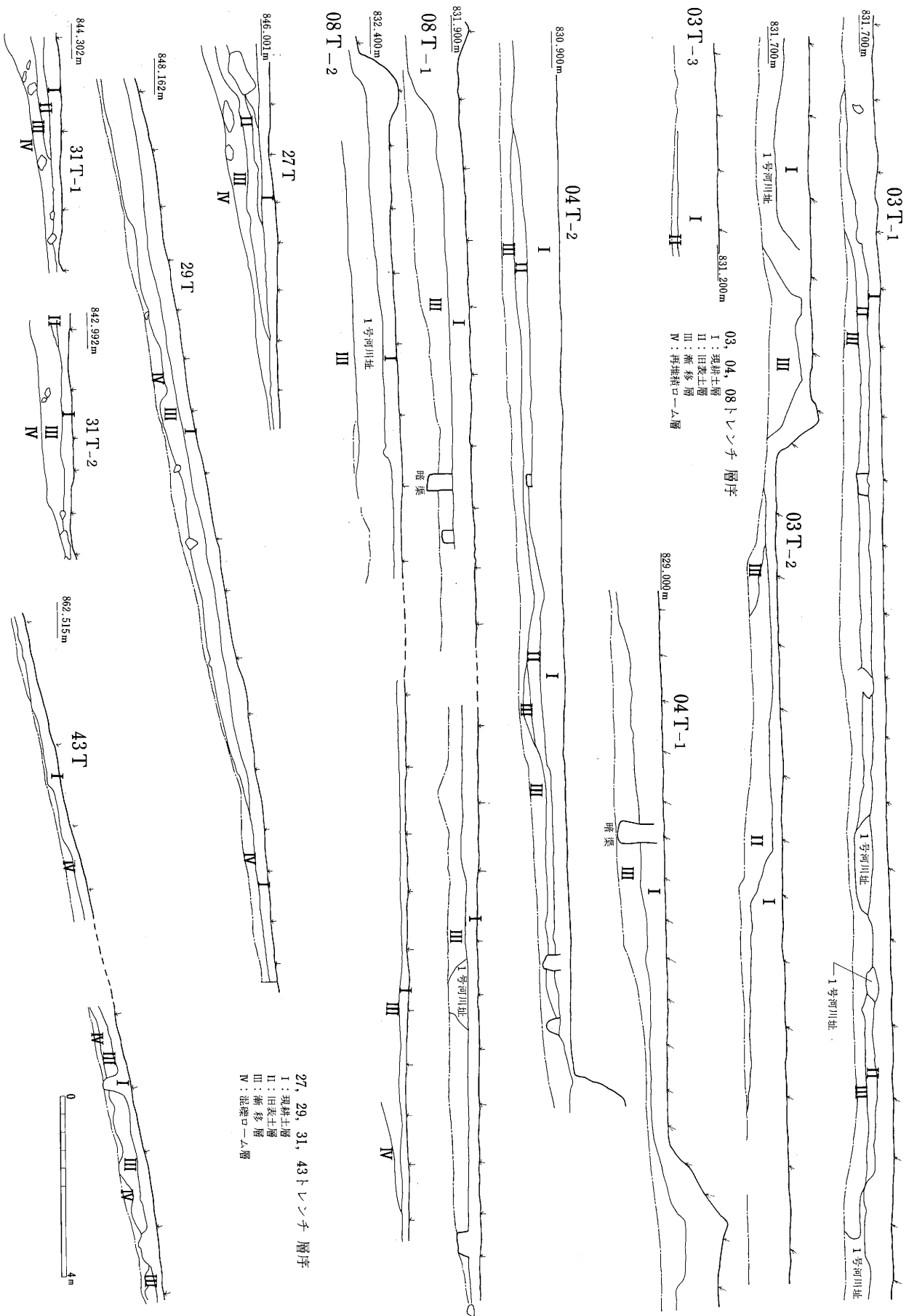


図303 柳海途遺跡土層図 (1 : 120)

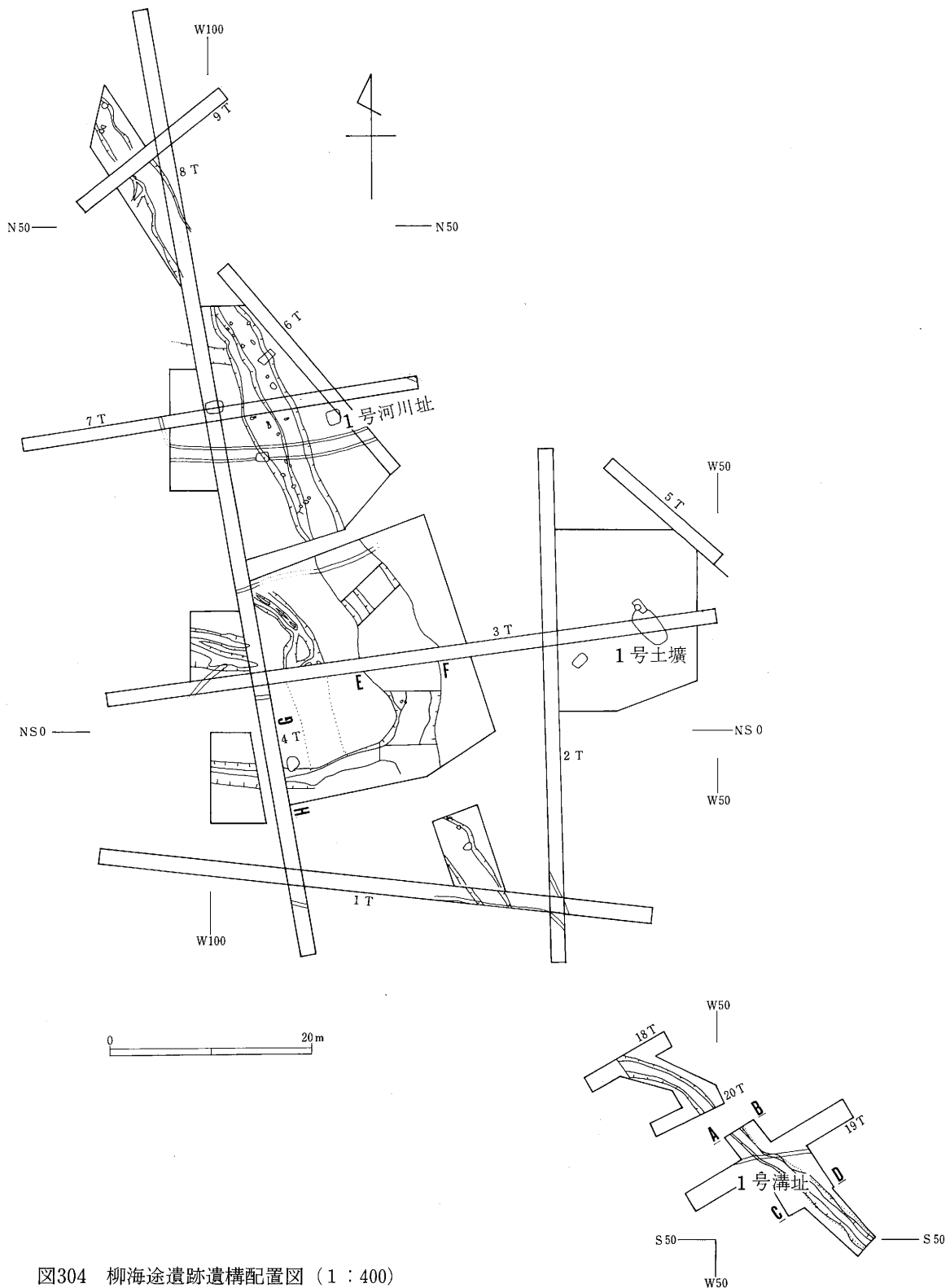


図304 柳海途遺跡遺構配置図 (1:400)

(2) 遺構と遺物の概観 (図304)

遺構は扇状地地域に存在し、II層上面で検出された溝址1本とI層直下で検出された土壙1基がある。また、遺構ではないが解説を必要とするものに河川址がある。1号溝址は遺跡南東端に位置し、1号河川址の延長上にあり、1号土壙は遺跡東端に位置する。1号河川址は発掘域中央を北西から南東へ貫流している。遺物には縄文時代早期～晩期の土器・石器・剥片等、弥生時代～近世の土器・陶器等があるが、石

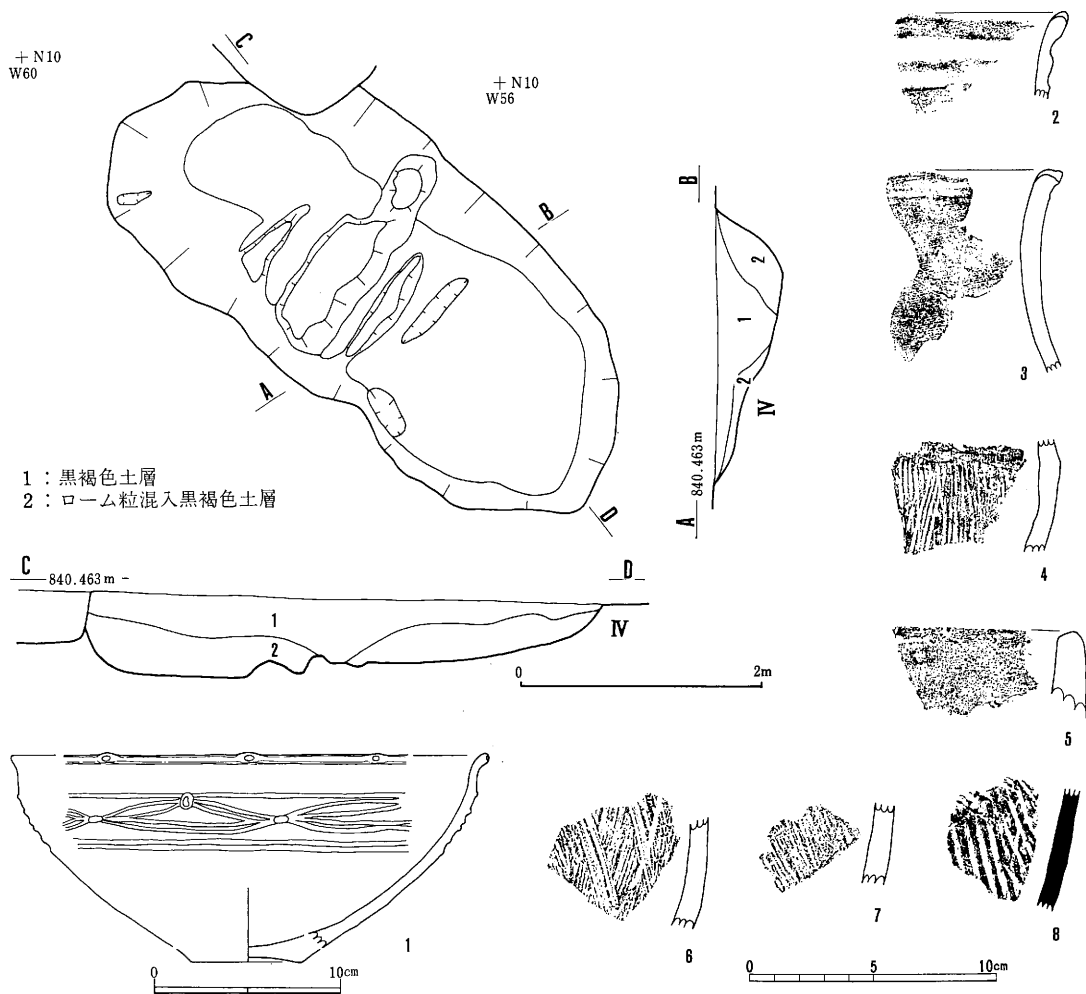


図305 柳海途遺跡1号土壌実測図（1：60）及び出土遺物実測図・拓影（1 1：4、2～8 1：3）

器を除けば少量で時期的にもまとまらない。

(3) 縄文時代の遺構と遺物

① 1号土壌（図305）

N10・W50付近に位置するが、周囲に遺構はなく孤立状態にある。中島A遺跡の低湿地西縁に当たり、両者の関係は注目すべきである。付近は水田造成時にIV層上部まで削平されており、IV層発見と同時に検出された。埋土は黒褐色土でII、III層と近似した土質である。下位にはローム粒が含まれる。埋土からみて本来はII層中またはIII層上面から掘り込まれているだろう。検出時に埋土中にわずかな焼土粒が認められ、その下から縄文時代晩期末葉の浅鉢形土器(1)の大形破片が伏せられて出土、さらにその直下に炭化した板状木片(PL106-6)が出土した。土壌上部が削平されていたとすれば、確実に土壌内に埋置された遺物である。土壌がある程度埋没または埋め戻された後で土器が埋置されたと考えられる。本址は平面楕円形で径は4.8×2.2m、検出面からの深さ0.65m、断面形は舟底形をとり底面は起伏がある。西側の壁面には4条の溝が刻まれており、後世攪乱を受けた可能性もある。遺物は既述の土器、木片以外にも、同時期の土器片26点と剥片類6点があり、底面近くから木片がさらに1片出土している。土器はいずれも中島A遺跡出土の縄文時代晩期末葉前後第I群に当たるが、8のみは同第II群土器に相当する(P317～P318参照)。遺構・遺物のあり方からみて、縄文時代晩期の墓である可能性が高い。

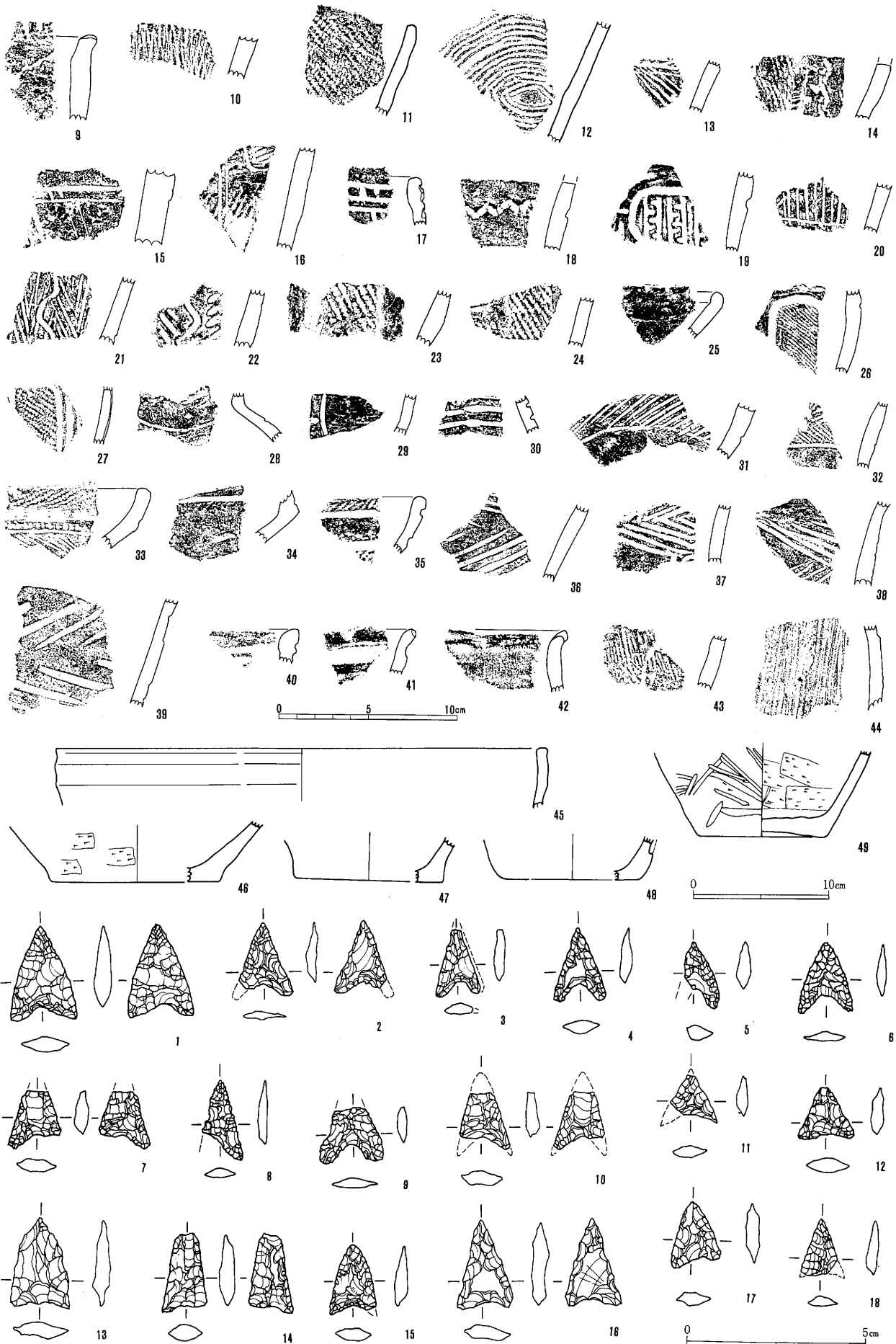


图306 柳海途遗迹遺構外出土遺物実測図・拓影1 (土器9~44 1:3、45~49 1:4、石器1~18 2:3)

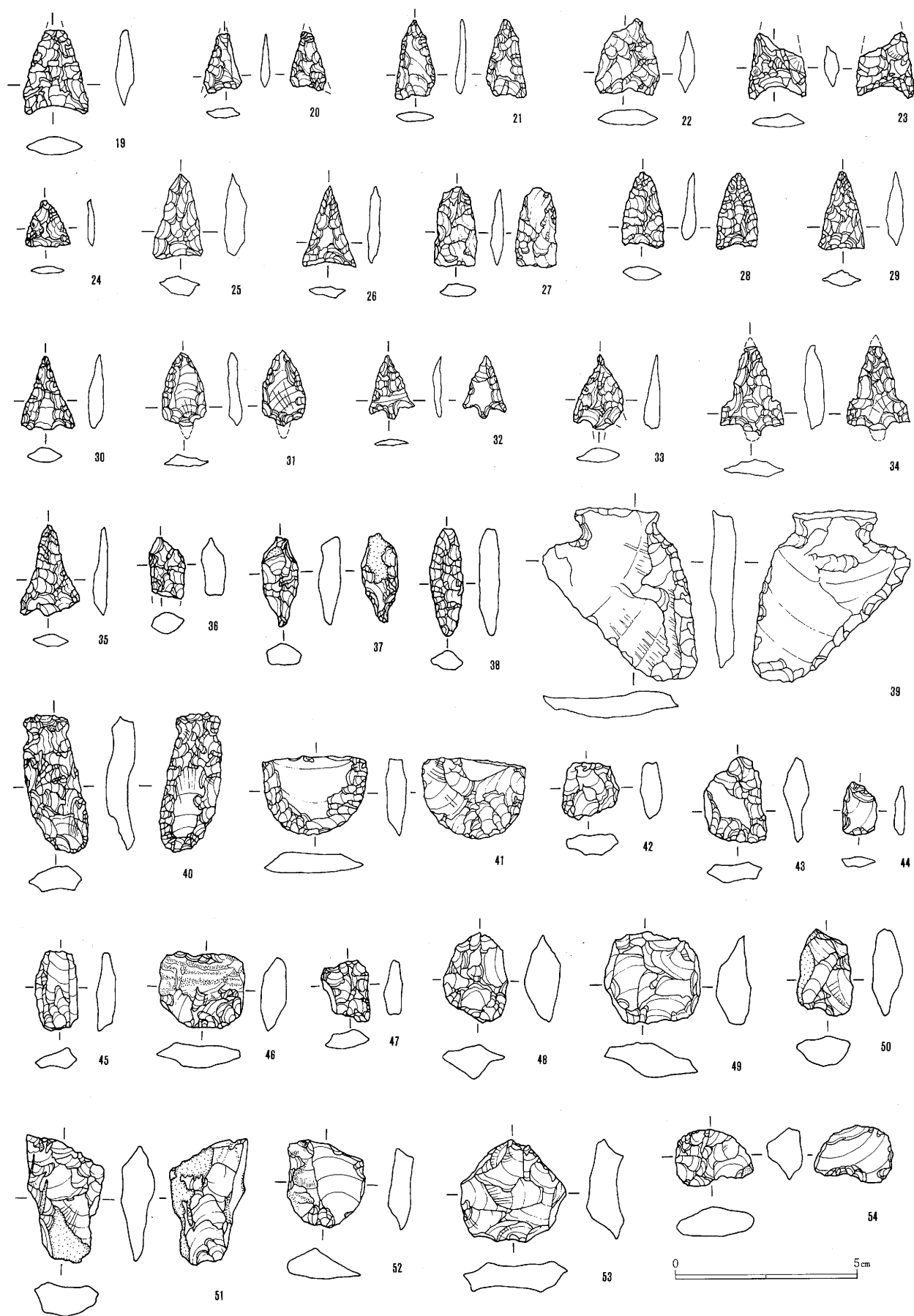


图307 柳海途遗迹外出土遺物実測图2 (2:3)

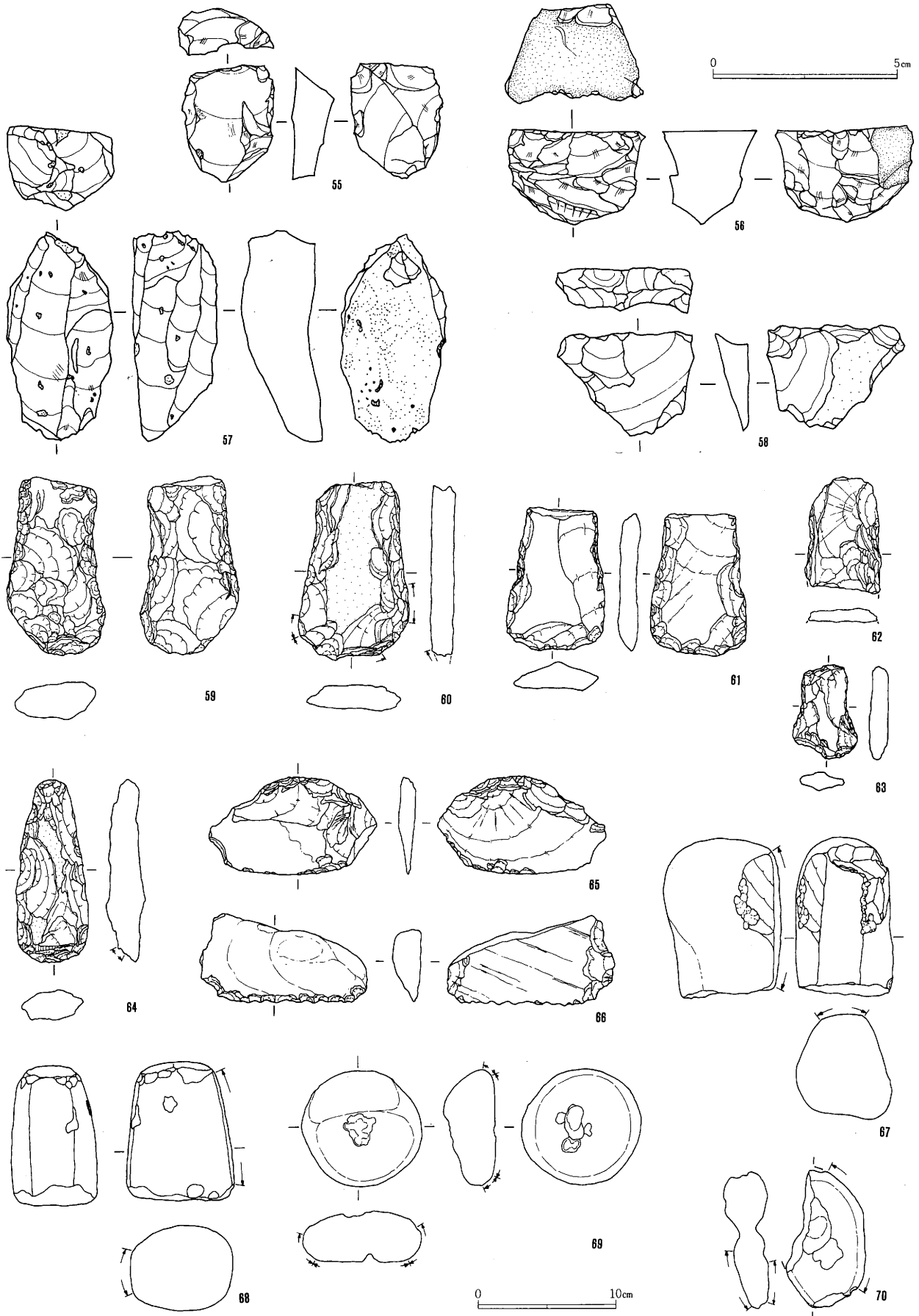


图308 柳海途遺跡遺構外出土遺物実測図3 (55~58, 2 : 3, 59~70 1 : 4)

② 遺構外出土遺物 (図306~308)

I~III層から散漫に出土しており、土器、石器、剥片、石核等がある。ここでは後述の理由で1号溝址、1号河川址の遺物も含めて記述する。土器は早期~晚期まであり、時間幅は長い。早期には近年、早期末葉~前期初頭の土器群の一つとして注目されつつある絡条体圧痕文土器など(9、10)が、前期では諸磯c式(12、13)がある。中期では梨久保式(14~17)数片と中葉諸型式(18~20)、後葉の諸型式(21~24)が少量ずつある。後期では堀ノ内式(26~28)少々と加曾利B式(31~38)が10点程ある。晚期では前半の土器少々と末葉の水I式土器(40~49)があるが、後者は1号土壙周辺から出土している。石器及び剥片、石核等には、石鏃53点(1~35)、石錐3点(36~38)、石匙2点(39、40)、スクレイパー1点(41)、ピエス・エスキュー41点(42~54)、小剥離痕のある剥片403点、打製石斧24点(59~64)、横刃形石器2点(65、66)、磨製石斧2点、磨石・凹石4点(67~70)、石皿1点、その他24点、剥片690点、石核59点(55~58)、原石24点がある。石鏃とピエス・エスキュー、剥片、小剥離痕のある剥片、石核等黒曜石製品が、他の遺物に比較して著しく多い。

(4) 弥生時代以降の遺構と遺物

① 1号溝址 (図309)

S8・W78付近からS50・W35付近にかけて北西から南東へ延びている。断面形からみて人工の溝址であると判断した。1号河川址の延長上にあり、中島A遺跡の低湿地または膳棚B遺跡との間の沢に向かっている。II層上面で検出されたが、II層の形成が1号河川址の埋没に近接した時期だとすれば、河川址より新しい可能性がある。規模は幅90~140cm、確認できた長さ30m以上で、検出面からの深さ80cm程度である。直線的だが、ほぼ等高線に直角に走っており、南東端は斜面にかかるためゆるく曲がっている。埋土は3層に分層できる。最下層(3層)は砂礫層、2層は暗褐色土混じりの黒色土で二酸化マンガが沈着して硬い。1層は漆黒色の腐植土で、長時間にわたる滞水状態を示すものとみられる。溝址は廃絶後も湿った状態にあったのだろう。断面形は不整ながらも方形に近く、底の方が幅広になる。埋土中から縄文時代晚期土器片と石器・剥片類多数、古墳時代前期土器片1点、灰釉陶器瓶小片1点が出土しているが、すべて流入品とみられる。1号溝址が機能していたのは河川址との関係からより新しい時代と考えられ、これらの遺物は遺構外遺物に含めておく。

② 1号河川址 (図309)

N60・W110付近からS2・W70付近にかけて北西~南東に延びている。本流の幅は最大5m、長さ60m以上、検出面からの深さ60cmで、その延長上に1号溝址が存在する。また、崖錐地域から延びる小規模な支流5本を合わせている。検出はI層直下であるが、周囲は水田造成時に削平されており、河川の存在した時期の地表面はわからない。埋土は砂礫層、灰色の砂層、黒色土等に区分できるが、互層をなしている

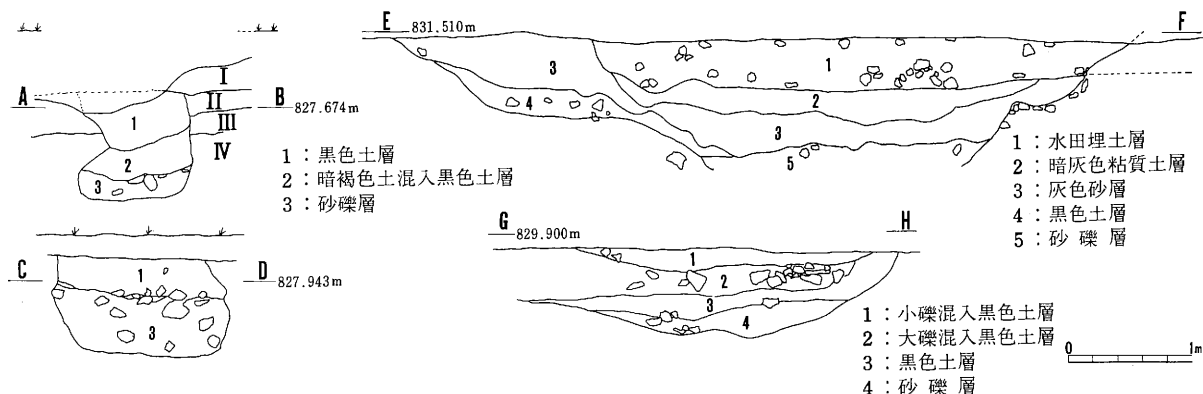


図309 柳海途遺跡1号溝址(A-B、C-D)及び1号河川址(E-F、G-H)断面図(1:60)

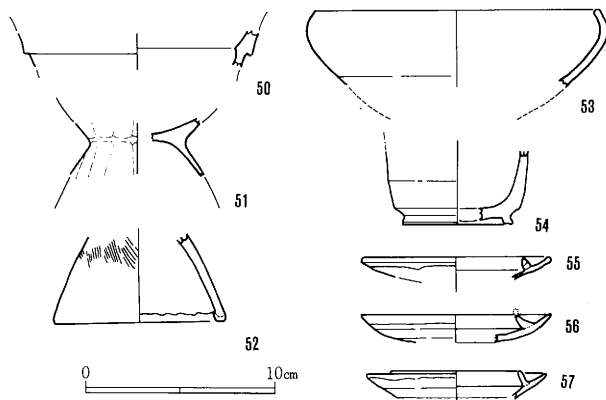


図310 柳海途遺跡遺構外出土遺物実測図4 (1:4)

の木表は割ったあと磨き、木裏は割り取ったままである。両端は切られているが、鋸を用いているかもしれない。文字は書かれていない。

③ 遺構外出土遺物 (図310)

I～III層まで散漫に出土している。出土遺物には、弥生時代後期土器片、古墳時代の壺(50)と台付甕(51、52)、奈良時代の須恵器鉄鉢(53)、平安時代の土師器杯と灰釉陶器椀、近世のほうろくや燈明皿等の陶器片(55～57)がある。

5. 小結

発掘調査の結果、近世のものと思われる溝址と河川址各1本、縄文時代晩期末の土壙1基が発見され、遺物も散漫ながら出土した。縄文時代の土壙は中島A遺跡と一体として理解すべきで、第8節で検討した。縄文時代の遺物のうち石鏃等狩猟に関する遺物の多さは注目してよい。立地からみても狩猟活動に関係した場所であった可能性がある。しかし弥生時代以降、地形・地質が農耕に不向きのためか、開拓の痕跡は近世に至るまでみられない。散見される遺物は、寝食の場とは異なった生活の場であった事を示すだろう。

事が観察されるため堆積学的には1層とすべきだろう。黒色土は河岸付近に分布しているが、これはII層と質的に近い。河川の埋没とII層の形成が近接していると考えられるゆえんである。遺物はすべて流入品とみられる。縄文土器片と石器や剥片多数、古墳時代前期の甕と後期の杯、平安時代の土師器杯と須恵器杯、近世陶器の椀、時期不明の板が少数出土しているが、近世陶器と板以外は遺構外遺物と同様に扱う。近世陶器は河川の機能喪失時期を示す可能性が高い。板は河川の底近くで見られた。182×56mm、厚さ3.6mmで板目の

第4章 結語

今回の発掘調査で得られた主要な成果をあげれば次のようになろう。

1. 縄文時代草創期

岡谷市内はもとより諏訪地方でもまとまった資料は未発見であったが、中島B遺跡の遺構・遺物はこの空白を埋めることになった。扇状地という遺跡立地、製作・廃棄の場という遺跡構造、槍先形尖頭器と石斧を主とする石器組成、隆起線文系土器群の発見、等々注目される要素が多く、とりわけ報告の刊行が待たれていたといえよう。その年代的位置づけや「中島型」槍先形尖頭器の提唱等、今後問題となることが予想されるが、さらに分析をすすめ、認識を深めてゆきたい。

2. 縄文時代早期前半

縄文式土器研究史上著名な下り林遺跡の発掘調査は、今回もまた小範囲で、層位的な資料や遺構は得られなかったが、押型文土器のうち立野式や樋沢式の理解を深める知見が得られた。

3. 縄文時代早期後半～前期初頭

既にその存在が知られていた下り林遺跡に加え、膳棚B・中島Aの各遺跡で資料が得られた。特に膳棚B遺跡は竪穴住居址ほかの遺構が発見されて集落の一端が捉えられた。石器及び土器の様相も鮮明に把握でき、特に土器は下り林遺跡において分類・検討が加えられた。当埋文センターが塩尻市内で調査した諸遺跡からも同時期の資料が得られており、それらも踏まえ、今後体系化を図るための分類・検討であることは言うまでもない。

4. 縄文時代前期末葉～中期初頭

大洞遺跡を筆頭に、膳棚B(白山)、下り林、西林Aの各遺跡から資料が発見された。それらの遺跡の多くはこの前後につながる時期の資料を欠き、いずれも山麓斜面に立地する等、これまで指摘されてきた時的な特徴は今回の調査でも再確認された。大洞遺跡からは住居址・土壇・黒曜石のブロック等が発見され、遺跡の構成が明らかにされた。石器の組成も把握され、今後基準資料として用いることができるだろう。さらに各遺跡出土の土器を総合的に検討し、近年の編年研究の成果の上に立った資料提示を行った。岡谷市内では扇平遺跡や梨久保遺跡等充実した資料が蓄積されている。本格的に編年観を世に問い、遺跡や遺跡群の性格を論ずる日も近いだろう。

5. 縄文時代晩期末葉前後～弥生時代中期初頭

中島A遺跡をはじめ、西林A、大洞、膳棚B、中島B、柳海途の各遺跡から資料が発見された。この時期特有の低湿地の遺物廃棄場を中心に、これらの遺跡がまとまる可能性が示された。中島A遺跡出土遺物の検討から、稲作受容寸前の石器組成が捉えられ、土器の組成と編年観も提示された。また、同遺跡の祭祀遺構等、今後問題となる資料も得られた。

6. 奈良時代～平安時代

大久保B、大洞、膳棚B(白山)の3遺跡から墳墓や石組墓が発見されたが、これらは岡谷市内、諏訪地方はもとより、長野県内でもあまり類例を聞かない遺構であった。それぞれの検討結果を大久保B遺跡で総括し、この時期の葬例の一端を復元したが、より広い視野に立った研究の必要性も明らかになった。また、大久保B遺跡の2号墳墓に副葬された瑞雲双鸞八花鏡も貴重な発見であった。

中島A遺跡からは平安時代の泥炭層から多数の植物遺体や若干の木製品・土器などが発見された。自然

科学の力を借りた分析の結果、平安時代の開発を示す資料であることが推定された。

このような成果を報告してきたわけだが、引きつづいて取り組まねばならない課題がいくつかある。第一には、良好な資料の位置づけや意味をより鮮明にし、それをもとに地域の歴史を再構成することである。とりわけ、本書各節の中で検討が及ばなかった問題や新たに浮び上ってきた課題については順次取り組まねばならない。第二には、現地説明会や展示会等を折にふれては実施し、調査の成果が市民に還元され理解を深める機会にできるよう配慮してきたわけだが、調査結果が提出された後は、また角度を変えた普及及び公開活動が必要となる。研究活動をも踏まえ、より豊かで咀嚼された資料を提示できるよう取り組まねばなるまい。第三には、遺跡の記録や遺物等資料の保管である。利用しやすく、また損なわぬよう、そして長く県民の財産として活用できるよう配慮しなくてはならない。第四には、今回の調査の中で残されたいくつかの問題点を克服してゆくことである。これまでも、講師招聘や各種の研修等により調査の充実を図ってきたが、より一層の向上をめざしてゆかねばならない。

当埋蔵文化財センターは県内の埋蔵文化財の調査・研究、保護思想の普及等の推進のため発足したが、当面、県の大規模開発プロジェクトの一環である中央自動車道長野線関連の発掘調査に対応してきた。各方面から期待される所は大きいだが、組織・設備等様々な面でも課題が残されている。所期の目的達成の為、一層の努力を傾注しなくてはならない。

ともあれ、本書の刊行によって、岡谷地区の調査のすべてを完了することができた。御協力、御援助いただいた関係各位、諸団体に深い感謝の意を表わし、結語としたい。

発掘調査及び執筆等の分担一覧

1. 発掘調査担当者 ()は年度 ○は責任者

大久保B遺跡	小林至 (57)、百瀬久雄 (57)、和田博秋 (57)
下り林遺跡	神村透 (57)、小菅敏男 (58)、小柳義男 (58)、原明芳 (58)
西林A遺跡	井口慶久 (57)、小菅敏男 (58)、小柳義男 (57、58)、原明芳 (58)
大洞遺跡	市沢英利 (59)、春日雅博 (59)、小林俊一 (59)
膳棚A遺跡	関賢司 (57)、百瀬久雄 (57)、和田博秋 (57)
膳棚B(白山)遺跡	小口徹 (59)、関賢司 (59)、三上徹也 (59)
膳棚B遺跡	市沢英利 (58)、鈴木道穂 (58)、百瀬久雄 (58)
中島A遺跡	井口慶久 (57)、小林至 (57)、小松宏昭 (58、59)、小柳義男 (57)、関賢司 (57、58)、三上徹也 (58、59)、百瀬長秀 (57、58)、百瀬久雄 (57)、和田博秋 (57)
中島B遺跡	小口徹 (59)、小林至 (57)、小柳義男 (57)、関賢司 (57、59)、三上徹也 (59)、百瀬長秀 (57)、百瀬久雄 (57)、和田博秋 (57)
柳海途遺跡	井口慶久 (58)、唐木孝雄 (58)、田中正治郎 (58)、百瀬長秀 (57)

2. 執筆担当者(本文中記名者を除く)

市沢英利	第3章第4節のうち三上担当分以外、第7節のうち百瀬(忠)担当分以外
大竹憲昭	第3章第9節4-(3)及び5
小松宏昭	第2章第1節
近藤尚義	第3章第2節4-(3)-②-ア及びイ
関賢司	第3章第5節、第6節4-(4)
原明芳	第3章第2節のうち近藤・三上・百瀬(忠)分担分以外、第3節のうち三上及び百瀬(長)分担分以外、第8節4-(8)-②及び(9)、第9節4-(5)
樋口昇一	第1章第1節～第3節
三上徹也	第3章第2節4-(3)-②-エ、第3節4-(3)-③-ア、第4節4-(3)-①-カ-①、同②-イ-(7)～(7)・(7)及び5-(1)、第6節のうち関分担分以外
百瀬忠幸	第3章第2節1及び4-(3)-②-ウ、第7節4-(3)-①-エ-(7)及び5-(1)、第8節4-(4)-④と同(5)の縄文時代早期土器部分
百瀬長秀	第1章第4節、第2章第2節、第3章第1節のうち百瀬(久)分担分以外、第2節4-(3)-②-オ、第3節4-(3)-③-イ及び(4)-②、第8節のうち百瀬(忠)分担分以外、第9節のうち大竹分担分以外、第10節、第4章
百瀬久雄	第3章第1節4-(4)及び5

3. その他

図版作成	井口慶久、唐木孝雄、小柳義男、平林彰、和田博秋、及び各執筆担当者
写真図版作成	春日文彦、西山克己、木下平八郎(写真家)
石質鑑定	小口徹、小松宏昭、関全寿
編集	百瀬長秀

(助)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 1

中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 1

—岡谷市内—

大久保 B、下り林、西林 A、大洞、膳棚 A、
膳棚 B(白山)、膳棚 B、中島 A、中島 B、柳海途、

本文編

昭和62年3月31日発行

発行 日本道路公団名古屋建設局
長野県教育委員会
(助)長野県埋蔵文化財センター

印刷 第一法規出版株式会社

